

語研資料15

言 語 研 究 III

1 9 9 3

東京外国語大学 語学研究所

「格」の問題、別の用語では「統辞機能」の問題は、あらゆる言語の根本にかかわる問題です。人間の言語は必ず文の中に述部をもち、そしてその述部の周りで様々な参加者との関係を区別する必要に迫られています。この課題にそれぞれの言語がどういう対応を見せているか、大変興味深いところです。と同時にこれは関係のパラダイムにもからむ問題で、深く研究してみる価値のある、奥深い、困難な領域を形成しています。更に統辞関係は文の中での話題の整理にも関連しており、様々な言語で〈態〉の応援を得て多くの種類の参加者がいわゆる主辞の座に坐ろうと待ち構えています。

言語の根本にかかわるしくみであるだけに、この問題は研究の歴史も古く、我々の肩には、まさに深海に潜った潜水夫なみの圧力がかかってきます。

それだけに、これは決して一回の挑戦で形の付く問題ではありません。恐らくこの『言語研究』でもこれを最初のころみとして、これから、角度を変え、何度かこの問題の投げかける意味を問うことになると思います。実をいえば、我々が『言語研究Ⅰ』で〈態〉の問題を考えたとき、既に今回のこの大問題には〈態〉の角度から触れていたはずですから、今回のころみそのものが、既に僅かながら先行の経験をもっていたことになります。

我々の『言語研究』も三年目を迎え、ますます多くの方々の参加が得られるようになりました。また、この号に執筆される予定で途中まで論を進められた何人かの方も、次号に是非、それまでの成果を発表下さるようお願い致します。これからも皆さんのご協力を得て、我々の議論の輪を広げていきたいと願っています。この機会に多くの方々のご協力を心から願う次第です。

1993. 1

執筆者を代表して

渡 瀬 嘉 朗

目 次

統辞関係と選択	渡瀬 嘉朗	1
LE DATIF ET LE TRAIT SEMANTIQUE “HUMAIN”	Yoichiro TSURUGA ...	22
ドイツ語の「格」の表示形態と統語的機能	在間 進	45
ポーランド語名詞における格形態の 文体的変異体について	石井哲士朗	56
中国語の格	望月 圭子	68
現代朝鮮語の対格と動詞の統辞論	野間 秀樹	77
マレーシア語の格と移動変形	正保 勇	169

統辞関係と選択

渡 瀬 嘉 朗

- I. 統辞関係とは何か
- II. 言語操作としての統辞関係：統辞機能と表示
- III. 現実認識としての統辞関係

I. 統辞関係とは何か

I-1. ことばのの継ぎ目：

I-1-1. 人間の言語には必ず統辞関係、統辞機能が備わっている。

本論で解きあかそうとするのは人間の言語における統辞関係、統辞機能の仕組み、更に人間の言語にとって統辞関係、統辞機能がもつ必然性である。

総ての統辞関係、統辞機能は統辞結合において《結合の周辺にある項から結合の中心へと向かう関係》から成り立っている。厳密には更にこれらの関係は常に、項の重複が生み出す関係（等位関係）を含み得る。だが重複は《結合の周辺にある項から結合の中心へと向かう関係》の中でしか生じない。だからここでは、それらの重複を含める形で、このような重複を成立させている関係の全体を考えよう。＜統辞関係＞は、このような関係そのものを指す。それに対して＜統辞機能＞は、話者が選択できる統辞関係である。統辞関係、統辞機能はこのように、その働きから見ると部分的に重なり合うものであるから、私たちは統辞関係という概念を、これらの両者をとらえるための一般的な受け皿として用いることにする。

I-1-2. 統辞関係が何故人間の言語にとって必要なのだろう？私たちの用いる文に、必ず継ぎ目が要るからである。継ぎ目を実際に使っていない文もあるが（「行く」「行け！」 Va!）、私たちの使う文には原則として必ず継ぎ目が要る。今は使わなくても、いつかは継ぎ目が使えるようになっていなくてはならない（潜在的な継ぎ目）。人間の言語に継ぎ目がなく、もし総ての文が単一の要素でできていたら、一見、そのような言語は扱いも単純で使いやすいであろうと思えるかもしれない。けれどもそれは大きな勘違いであろう。もし総ての文が一つ一つ全く新しい要素で作られているとしたら、健忘症の老人は単

語ではなく文を、次々に片端から忘れて行くことになる。文の切れ端を思い出してもそれには何の役にも立たない。それは丁度、「でたらめな」という単語の中の「たらめ」という部分だけでは何の意味も伝えないのと同様である。片言で話す、という表現があるが、片言でも意味が通じるのは、文の中の、ある単語が使える場合に限られる。「たらめ」では片言にすらならない。一方、言葉を習得中の子供は、一つ一つの事態を全く新しい文でいちいち表現することを覚えなくてはならない。それに較べて現実の私たちの言語操作は、多くの共通部分をもった文を絶えず使用することの上に成立しているから、文の中のしばしば使う部分は楽に覚えるし、また忘れることがない。

I-1-3. だから子供は、例えばそれぞれ異なった部分からなる10個の文に慣れ、それを楽に使いこなすようになったとき、それぞれの異なった部分を必要に応じて自由に組み合わせる用いることが出来る。仮にそれぞれの文が異なった10の部分で出来ているとすると、出発点は僅か10個の文でも、そこに含まれる計100個の部分を組み合わせで作れる文は信じられないくらい大きな数になる。膨大な組み合わせの可能性を前にして人は目の眩む思いにとらわれるだろう。誰も実際にその数を計算しようとはしないだろうが、しかし誰でも経験的に、これが簡単には使い切れない位の数の文を含んでいることは感じ取ることが出来る。余程の偶然が重なるのでない限りその総ての潜在的な可能性を使い切ることにはないが、実は私たちは毎日、そういった潜在的な可能性の＜豊かさ＞に囲まれて生きている。そのような、到底使い切れない、思いがけないふくらみがあるからこそ安心なのである。私たちの言語経験はいわばそのような潜在的な豊かさ＞に囲まれて過ぎていく。これが私たちの言語操作の世界である。私たちの生きている世界 — 観念的世界と言おうか — の本当の豊かさ、潜在的な豊かさは、実はそんなところで保証されている。

要約するなら、私たちの日常使う文には、原則として必ず潜在的な継ぎ目がある。継ぎ目があればそこに統辞関係がある。何故なら統辞関係とは統辞結合において、《結合の周辺にある項から結合の中心へと向かう関係》だからである。つまり統辞関係は、私たちの言語が本質的に《分節的》だから私たちの言語にあるのだということになる。

I-2. 様々な統辞関係のあいだの対立：

I-2-1. これまでのところで統辞関係が、人間の言語のもつ継ぎ目との関連で必然的なものであることがわかった。分節言語であることが、つまり人間の言語の分節性が、人間の言語に統辞関係を必然的に含意する仕組みなのである。だがしかし人間の言語では文が、幾つか並ぶ継ぎ目で単に次々に新しい要素をつないでいくだけでなく、しばしば、一つの結節点のまわりに多くの関係を集めている。その結節点は、そうなると都市の交通網の大きな星型のロータリーのような具合に働くことになり、様々な方向からの関係を区別することが必要になる。一つ一つの関係がその結節点にとって異なった意味をもつから外な

らない。

I-2-2. 例えば、「火曜、朝早く、6時半に」人に会うことになったとしよう。この事態でも結節点（「会う」）にはたしかに多くのこと（情報）が集まって来ている。一つの「会う」の周りに、「火曜に会う」「朝早くに会う」「6時半に会う」というわけである。だがここでは、辞項と結節点の間にいわば＜一つの関係＞＜種類の関係＞を繰り返し使用しているだけである。その意味ではこの結節点の周りの情報は、そこで用いられている関係の点から見るなら見かけ程複雑な構造をもっているわけではない。いわばここでは、一つの局面の細目（異なった辞項）が繰り返し問題になっているだけで、異なった統辞関係を使い分けないと事態の把握が不可能になるわけではない。

I-2-3. だが、それに反して「太郎が⇒／大きな木の上で⇒／鋸で⇒／枝を⇒切る」場合は、誰が切るのか、何処で切るのか、何できるのか、何を切るのか、といったことが事態の異なった局面を構成している。ここではただ一つの結節点（「切る」）の周りで多くの統辞関係が区別されなくてはならない。この事態で局面を取り違えるということは、先刻の「火曜、朝早く、6時半に」人に会う場合のように一つの局面に関する細目を取り違えるというのとは、やや、異なった意味をもつことになる。

I-2-4. このように、人間の言語のもつ統辞関係の仕組みにはもう一つの大きな特徴がある。それは文が、ただ単に一つ一つの継ぎ目で要素をつないでいるだけでなく、重要な結節点となる継ぎ目では、多くの統辞関係の間に話者が選択をし、様々な関係を区別しているということである。これはそこで様々な統辞関係の間に対立が生じているということにはかならない。このようにして一つの結節点で多くの統辞関係を使い分け、話者が様々な関係を区別することによって、人間が一度にとらえることのできる事態は急速に複雑になる。単純な事態は単純にとらえておけばよいが、複雑な事態を一時に、一つの結節点の周りの複数の統辞関係を用いて把握するには、もともと人間の側にそれなりの道具が要る。選択できる統辞関係はそのような道具を人間に提供している。このように選択できる統辞関係には単なる統辞関係には果たせない大きな役割がある。

I-3. 見えない関係から見える関係へ：

I-3-1. 統辞関係は、人間の言語に是非とも＜必要＞な仕組みである。だが統辞関係が、更に、一つの結節点で同時に使い分けられる＜様々な＞統辞関係に＜区別され＞るためには、いうまでもなくそれらの統辞《関係》が統辞《機能》の形に変えられている必要がある。つまり二つの辞項の間に潜む、かたちのない関係から、かたちのある言語事実が変わらざるを得ない。ここで統辞関係が、目には見えない（触れられない）関係を内容として含む言語形式（統辞機能）として登場することになる。言語操作の観点からいえば、それ

まで二つの辞項の間に潜み、手で触れることなど全く出来なかったプラトニックな統辞関係が、実際に話者の手で操作できる言語形式となる瞬間は、一寸した大きな変わり目であるといってよい。

このように区別され選び分けられる統辞関係（すなわち《統辞機能》）が、通常の呼び名で《格》と呼ばれているものに外ならない。統辞関係は人間の言語の中で単に＜必要＞であるというだけでなく、更にこのように＜様々な＞統辞機能という形で＜区別され＞なくてはならないが、それは一つの結節点、結合の中心（核）の周りで、様々な関係を区別することが事態を早く、深くとらえることに役立つからである。

I-3-2. 一つの結合の中心（核）の周りで区別され、選ばれる統辞関係（統辞機能）の全体が統辞関係のパラディグムを構成する。（その中には形容詞や副詞のような、限定辞と限定関係の内容が一つに融合されているようなものは入らない。限定関係の内容が表現の上に現れないからである。）その言語の総ての種類の核（結合の中心）の周りで区別される統辞関係の全体が、その言語の統辞関係のパラディグムのパラディグムを構成する。

多くの言語が、統辞関係のパラディグムを持ち、パラディグムのパラディグムを持っている。このように様々な統辞関係を区別しない言語が、果して可能であるかどうか疑わしい。

だがまた逆に、当然、統辞関係のパラディグムの中にも経済法則が働く。そうすることでパラディグムの成員が必要以上に増えるのを防いでいると考えられる。

I-3-3. 事実、よく用いられる統辞機能（選ばれる統辞関係）の数は決して多くない。話者は結節点で、結合の中心（核）が抱え込む複雑な事態を、なるべく少数の使い慣れた統辞機能によって区別しようとする。とりわけ様々な言語で、述辞の第一話題（印欧語でいえば主辞）や第二話題（印欧語でいえば目的辞）を区別する統辞機能は事態に応じて多義的である。Il mange le poisson 「彼はその魚を食べる」では「彼」は魚に《働きかける》者であるが、Il souffre le manque de ressources 「彼は資金の欠乏に苦しむ」では《働きかけられる》者であり、Il a une douleur atroce 「彼は恐ろしい苦痛を味わう」では《事態（苦痛）の生ずる場を提供する》者である。一つの統辞機能の多義性は動詞述辞があらわすものの違いに対応している。

I-3-4. 述辞が抱え込む複雑な事態を述辞は幾つかの特性に分けており、統辞機能はしばしばその違いの中身を示すためではなく、特性の＜枠組み＞のみを区別して指し示すために用いられる。述辞が抱え込む事態の多様さを考えればこのような単純化が生じるのは当然であろう。話者は与えられたパラディグムの中から統辞機能を選び、あの要素（参加者）、この要素（参加者）にそれをはりつけ、要素（参加者）どうしの相対的な役割が紛れないようにする。一回、一回の伝達で登場する要素（参加者）は自由に変化するのだから

ら、この役割のはりつけがなければ要素と事態の関係は不明になる。

I-3-5. 結節点(述辞)の周りに現れる統辞機能のパラディグムは態によっても変わり、統辞機能の引き受ける内容にも変化があらわれる。先刻の「太郎が⇒/ 大きな木の上で⇒ / 鋸で⇒/ 枝を⇒切る」をもう一度考えてみよう。この事態では絶えず太郎が行為者であるが、この文ではその太郎が「ガ」機能によって第一話題の役割を与えられている。受動態では(「切られる」)、事態の中で結果を引き受けている枝に第一話題の役割を与えられることになる(「枝が⇒大きな木の上で⇒/ 鋸で⇒切られている」)。受動態では、行為者が特別な統辞機能(作用主のマーク「によって」)により導入されることがある。しかしパラディグムの中で一般にこの統辞機能の頻度はそれほど高くなく、従ってもっている重要性もそれほどではない。

フランス語では受動態のほか代名態もあって、それを用いると事態の分析はほぼ次のようになる:「枝が⇒/ 鋸で(鋸の刃の下で sous l'effet d'une scie)⇒切れる(se coupe)」(La branche se coupe sous l'effet d'une scie)。この代名態では第一話題は受動態と同じく「枝が」であるが、何よりも大きな変化はこの枝があくまでも表現の上では、作用主の動きによって切られるのではなく、<切れる>という結果のみを背負いこむ役割を与えられる。だからこの態では受動態のように、《作用主》機能を伴うことが、全くない。

II. 言語操作としての統辞関係: 統辞機能と表示

II-1. 格、または統辞機能:

II-1-1. 話者によって選ばれる統辞関係、つまり一般に「格」と呼ばれているもの、つまり私たちの「統辞機能」を、ここではもっぱら問題にしよう。

選ばれる統辞関係は必然的に何らかの形態特徴を介して選ばれる。いや何らかの形態手段を介してでなくては選ばれない。仮にそれが homonymique な形態手段であろうと。しかもその形態手段は、ときに位置関係に頼る場合もあるが、多く、辞項の形を取る。統辞関係は辞項と辞項の間の関係であると思われるのに、そこにもう一度、辞項が姿を現すのは矛盾ではないか。いや、少しも矛盾ではない。多様な内容の表現は(それがどんなレベルのものであろうと)多様な形の変化を許す形式、つまり辞項(forme segmentale)に依らざるを得ない。仮にその内容が統辞関係に係わるものであろうとである。

II-1-2. しかし統辞関係という内容から出てくる、特殊性はないのか? いや、それはある:

— 項と項の間をつなぐ、あるいは項と項の間を取り持つ内容であると言う点は、仮に

それを経験（経験特性）に戻せば何ら特別のものではないとしても言語内容のレベルでは、やはり特別なものである。意味の特殊性とは常に、このように経験のレベルでなく、それが言語形式としてもつ操作面での特殊性に関連して生ずる。言語形式としてどのような文脈でどのように選択されるか、という選択の条件に左右されつつ、その様な特殊性はつくられるのであるから。

— また、内容の抽象性が避けられない (cf. 1-3-3)。そもそも総ての意味は抽象性が避けられないと言えよう。その理由は、表現の対象となるものの実際の多様性に較べて、言語形式は相対的にごく限られた数の単位しか自由にならず、それによって多くの内容を処理しなくてはならないからである。統辞関係を内容として処理する統辞機能の場合も事情は本質的に変わらない。

II-1-3. それにしても例えば前置詞の *de* や *à* についてしばしば *incolore* な性格が取り沙汰されるのは、内容が具体的でないのに、— いや内容が具体的でないのに反比例してと言おうか、— これらの前置詞が多様なケースを活動の場として大活躍するからであろう。とすれば、ここには興味ある問題が顔を覗かせているといわねばならない。周知のようにフランス語の場所をあらわす前置詞には *à*, *dans*, *sur*, *sous*, *devant*, *derrière* 等があるが、その中で最も頻度の高いのが（つまり最も活躍するのが）*à* である。その理由は *à* が最も具体的な場所の限定（「中の」、とか「上の」とかいった）から遠いからであろう。言い換えると *à* が具体的に最もよくお目に掛かる場所をあらわしているからではなく、*à* が場所に関して最も抽象的な視点をあらわしているからである。このことは総ての関係概念に関して多かれ少なかれ当てはまることであろう。

II-2. 言語操作としての統辞関係：

II-2-1. 言語操作の中では統辞関係は統辞機能として操作されるか、統辞関係を含んだ様々な限定辞として操作されるか、そのいずれかである。操作の観点からすると、統辞関係が独自のものとして扱えるのは、問題の統辞関係だけを文脈から切り離して選べる場合に限られる。その問題の統辞関係を他の要素とは別個に選ぶことができるためには、その問題の統辞関係に何らかの独自の形態特徴が具わっている必要がある。（その形態と隣接する他の形態との間にアマルガムが生じていても少しも構わない。）

II-2-2. 話者が統辞関係だけをその文脈から引き離して独自に選べない場合としては、形容詞を名詞につなぐ場合、副詞を動詞につなぐ場合などがある。形容詞や副詞は、どの単位をとって見ても、その単位固有のやりかたで限定情報を結節点にもたらず。限定情報の核を結節点に結び付けるのに、幾つかのつながりの間で話者が選択する自由は残されていない。いわば限定情報の核がそれなりの固有のやりかたで結節点に結びついていくことに

なり、いろいろな結びつき方の間で話者が選択をすることは出来ない。

それ故この場合は一つの結節点（例えば名詞）に対し数多くの限定辞をつないでも統辞関係の対立は生じない（「高価な⇒/美しい⇒花」「優しく⇒/おおらかな⇒人柄」）。同じことはたしかに、選択される統辞関係〔統辞機能〕の場合も生じる：「駅で、ホームの上で、キオスクの脇で待つ」（cf. 1-2-2. 「火曜、朝はやく、6時半に会う」）。しかし選択のない統辞関係の場合にはこの型しか生じないのが特徴である。

II-2-3. 一つの結節点の周りで様々な統辞機能が選ばれる場合（「太郎が⇒/ 大きな木の上で⇒/ 鋸で⇒/ 枝を⇒切る」）、その結節点の周りでの統辞機能のパラダイグムは決まっており、また与えられた事態の中で様々な参加者と事態との関係も決まっている。話者は実は与えられた枠組みの中で、言語が許す範囲で統辞機能を選ぶ外はない。つまり上の例でいえば「切る」の行為者に太郎が選ばれ、行為の対象に枝が選ばれれば、「太郎」に「ガ」、「枝」に「ヲ」を当てがうことになる。ただ、そういう状況の中でも、話者の行為には選択の意味がある。話者は相手に、「太郎」や「枝」の果たす役割をこの行為によって示しているのである。総体はきまっている。事態との関係も決まっている。そこで話者は選ぶ。これは表示の問題である。表示のレベルで、話者は自分の意思を相手に示さねばならない。

だが上の例で話者は、実はなお、「ガ」というか「ハ」というかゼロにするか、この点に関しては更に自由を残している。「太郎が切る」とするか、「太郎は切る」とするか、「太郎、切る」とするか。ここで話者は、言語が三つの道を許容するので、その範囲で選択をし、自分の意向を相手に示さなくてはならないことになる。「枝」に関しても多かれ少なかれ同じことが言えよう。

事態の中での太郎の役割は決まっているから、もしもこれがフランス語で話者が行為者に太郎を選び、行為に *couper* 「切る」を選び、そして態ゼロ（能動態）を選んだなら、話者は「太郎」という要素のために主辞機能を選ぶことを余儀なくされる。何故ならフランス語のような印欧語の場合、「太郎」+主辞機能を省く自由は話者には与えられていないからである。先程、話者は与えられた枠組みの中で、言語が許す範囲で統辞機能を選ぶ外はないといったが、この場合、話者が、他の選択をいま述べた形で行えば、後はもう主辞機能を選ぶ外はないのである。

しかし日本語では、話者にはなお「太郎が切る」とするか、「太郎は切る」とするか、「太郎、切る」とするか自由が残されている。これは同じことではない。この三つの表現は決して同じではない。

II-2-4. 今もし、[...] ハ〜スルが、[...]の部分が既知情報である場合は [...]ガ〜スルに代わると言えば、それなりにこの日本語の状況を説明しているように見える。だがこの説明はややマユツバであらう。たしかに、「太郎が切る」といえば、「太郎」は新

しい情報を提供することになる。「太郎は切る」といえば、「太郎」が既に話題になっており、この文は太郎に関してではなく太郎の「すること」に関して新しい情報を提供しようとする文であろう。だがそれは「ハ」の説明に終わっている。「ハ」は既知情報のニュアンスを伴っていると言えるかもしれないが、「ハ」が現れると「ガ」や「ヲ」は姿を消す。「ニ」さえ姿を消すことがある。一方、統辞関係に関する「ハ」の価値は未決定だから、決して「ハ」は「ガ」にも「ヲ」にも「ニ」にも代わることが出来ない。一時「ハ」に関して言われた「代行」の概念は、それ程厳密なものではないのではないのか。

「私ハ食べる」では「ハ」は一見「ガ」に代わっているが、しかしそういう言い方をすれば「お弁当ハ食べる」では「ヲ」に代わっていることになる。「ハ」が、「ガ」とも「ヲ」とも＜代っているように見える＞ことそのものが、「ガ」と「ヲ」の対立を自ら先に立って解消しているということであり、「ハ」の中に「ガ」を見るべきか「ヲ」を見るべきか、わからなくしているということである。そのことを思い出して置くために、念のため「ハする」が「ヲする」「ニする」に対応する場合を、簡単に思いつく範囲で挙げてみよう：「手紙？手紙ハ書いた（ヲ）」「通知はした（ヲ）」「料理はつくった（ヲ）」「掃除はした（ヲ）」「ストーヴは消した（ヲ）」「電話はかけた（ヲ）」「あのお豆腐（ケーキ）は食べた（ヲ）」「お酒は買った（ヲ）」「お金はもった（ヲ）」「手袋はした（ヲ）」「靴は磨いた（ヲ）」「鉛筆は削った（ヲ）」「レポートは書いた（出した）（ヲ）」「砂糖は入れた（ヲ）」「電気は消した（ヲ）」「傘は（時計は）見つけた（ヲ）」「定期は（切符は）買った（ヲ）」「あの映画は見た（ヲ）」「髭は剃った（ヲ）」「味噌汁は飲んだ（ヲ）」「靴下ははいた（ヲ）」「頭はといた（ヲ）」「雨戸はあけた（ヲ）」「（風呂に）水は入れた（ヲ）」「野菜は切った（ヲ）」「靴下は洗った（ヲ）」「お風呂（に）は入った（ニ）」「学校（に）は行った」「花子（に）は会った（ニ）」…

II-3. ゼロに置き換えられる統辞機能：

ここに一つ他動詞があり（tuer「殺す」）、他動詞の第一話題（主辞）の統辞特性に結びつく要素、第二話題（目的辞）の統辞特性に結びつく要素（参加者）がそれぞれX（花子）、Y（太郎）と決まったとしても、フランス語では更にX（花子）の側に主辞機能、Y（太郎）の側に目的辞機能を選ばなくては第一話題（主辞）、第二話題（目的辞）の区別が完成しない。日本語の場合、「ガ」機能、「ヲ」機能の表現をゼロで置き換えることが許されているから、「花子、太郎殺す」が許されるが、結果はやはり曖昧である（この文が、「花子を、太郎が殺す」という意味に解釈される可能性はたえずある）。曖昧であるにもかかわらず許されるのは、結果が曖昧になるかならないかは別の問題として日本語が「ガ」機能、「ヲ」機能のゼロでの置き換えを許しているからである。事実「私、昼御飯たべる」は表現としてもおかしくないし、幸い、内容もまた曖昧ではない。だがこのように言語が統辞機能の表現をゼロで置き換えることを許している場合の外は、第一話

題、第二話題が選ばれた時、更に、それぞれを区別する統辞機能（フランス語の場合だと主辞機能、目的辞機能である）を話者は選択しなくてはならない。

さき程の「ハ」の問題に戻るなら、「花子ハ殺す（ヲ）」は「花子ハ殺す（ガ）」と共に十分に可能である。だから、ここで忘れてはならない重要な問題は、「ハ」が統辞関係を区別しないという意味で統辞関係ゼロに匹敵する、という点を明確にすることであろう。

II-4. 統辞関係の重心：

II-4-1. 統辞関係のパラディグムにも経済法則が働いていることが想定できるが、そのことと関連してよく観察されるのがパラディグムの成員の間の頻度の差である。統辞関係のパラディグムには<重心>があるのが普通である。ここでいうパラディグムの<重心>とは、そのパラディグムの中で圧倒的によく用いられる統辞関係である。多くの結合の中心（核）がその周りに存在を許容する統辞関係を考えてみよう。日本語の《ガ》機能は、「が行く」「が苦しむ」「が食べる」「が美しい」「が立派だ」「が好きだ」のように様々なタイプの述辞と共存出来る。だが勿論「ガ」に導かれる要素は同じ述辞の周りで姿を消すことが許されるし、またこの要素は、その述辞と共存している場合も、しばしば「ガ」に代わって「ハ」やゼロに導かれる。「ハ」は、先立つ要素に統辞関係の別なく選別された要素として脚光を当てるのみで、統辞機能としてその要素を他の要素から区別する事はしない。だから「ハ」は統辞機能「ガ」に代わるが、よくいわれるように、統辞機能として「ガ」の「代行をする」わけでは全くないのである。だから「ガ」機能は二重の意味で述辞にとり欠落が許される統辞機能である。まず、「ガ」もろとも、「ガ」の導入する要素自身が省略できる（「太郎が行く」→「行く」）。また、要素は残しておいても、統辞機能の表現を落とすことができる（「私が食べる」→「私、食べる」）。このことは、「ガ」機能が表現として姿を消すことで、それに特有の *signifié* の<重さ>を文の内容から軽減することができる事を意味する。

その点で「ガ」機能は、一定の結合の中心（核）の周りでは常にその存在が想定されている統辞関係、例えば印欧語の主辞機能とは性格を異にする。

さて、「私、食べる」では、機能辞「ガ」は落ちても限定情報の核である「私」が選ばれている。「食べる」では限定情報の核すらも落ちている。「私、食べる」のような例を見ると、「ガ」が表現として落ちて「ガ」機能は残ると言えそうである。勿論、顕在的な表現のレベルから見ると「ガ」が落ちた後の「ガ」機能は、潜在性のレベルにしかないといえよう。「ガ」が表現として落ちれば常に、当然、紛らわしさが生じるのも事実である（cf. 「花子ハ殺す（ヲ）」は「花子ハ殺す（ガ）」）。だが、紛らわしさを覚悟で「ガ」機能は軽量化を進めてきた。そしてこの軽量化のお陰で、「ガ」機能は、顕在と潜在の両面を使って、パラディグムの重心の位置を確保し続けている。

II-4-2. 私たちが知っている印欧語の主辞機能は（例えばフランス語を例にとってみ

よう)、総ての<動詞>述部が必ずその存在を想定しているものである。勿論、<動詞>述部はフランス語で可能な総ての述部ではないし(フランス語では名詞述部も可能である)、ましてや、フランス語で可能な統辞結合の核は動詞述部、名詞述部以外にも多々ある。だから、<動詞>述部といえば統辞結合の中心(核)としては、数ある種類の中の一つということになろう。しかしその重要性ははるかに他を圧している。<動詞>述部の周囲の統辞関係のパラディグムはフランス語を代表する統辞関係のパラディグムであるといつてよかろう。主辞機能はそのようなパラディグムの重心をなしている。

パラディグムの重心という概念は《態》をもつ言語の場合(日本語も例外ではない)、殊の外、重要なものとなる。何故なら態とは、結合の中心(核)に新しい情報(たとえば受動態の情報)を加えることによって、パラディグムの重心を他の統辞関係に移す事であると理解されるからである。一つの態の情報、例えば受動態の情報が述部核に加えられることにより、具体的にはかつての目的辞機能が主辞機能に代わる。パラディグムの重心の位置になかった統辞関係(目的辞機能)がマークとしては消え、目的辞機能のマークをもっていた要素が主辞機能のマークをもつことになる。この仕組みをみて興味深いのは、パラディグムの重心である主辞機能が《態》によって回りもちになる点である。この場合主辞機能は、総ての動詞述部がその存在を想定しているのだから、結果的に極めて小さな情報量しか持っていないだろう。どの動詞述部にとっても当然の存在であるからである。述部の周りの話題として、主辞機能を持たされた話題が最も安定しており、話者にとってこの話題を操作することが、最もたやすい。これをいま、このような統辞関係のパラディグムにける<第一話題>と考えておこう。そうすれば態は、新しい<第一話題>を作り出す仕組みである、といつてよい。一つの動詞述部の周りで様々な要素が異なった統辞関係で区別されているが、この区別は、当然、それぞれの動詞述部のあらかず事態との関連で、様々な異なった参加者をあらかず。そこでは統辞関係は事態とのことになった関係を示している。いま、新しい《態》情報が動詞述部に加わり、事態と別の関係にあった参加者をあらかず言語要素が、主辞機能をもつことになる。すぐ理解されるように、《態》が加われれば主辞は事態とそれまでとは異なった関係をつくる。もっと別の言い方をすれば、主辞機能は総ての《態》との接触を通じて、事態との関係を相対化される。そして常に<第一話題>をあらかず。

統辞関係はまず、事態と参加者の関係を区別するために活躍するが、次いでこのように《態》との協同作業を通じて、一種の話題の整理を行うことになる。この二つの領域が、統辞関係の最も注目すべき活躍の舞台であろう。

III. 現実認識としての統辞関係：

III-1. 経験のどの部分が統辞関係に対応するか？

III-1-1. 第二章では主として言語操作としての統辞関係を見た。話者の言語操作のレベルで見ると統辞関係は、もっぱら選択を通して扱われる統辞関係、即ち「格」または統辞機能が中心になる。この第三章では最後に、統辞関係をもっとも深いところで支えている非明示的な、含意の、萌芽的な仕組みを見たい。また、日本語のガ機能やヲ機能のように、明示的な統辞機能でありながら、しばしば *signifiant zéro* と交替するケースについても簡単な考察を試みたい。その他、統辞関係が人間の行う経験の切り取りという作業の中で、どういう役割を果たしているのか、関係概念は経験そのもののものの中にあるのか、それとも言語が生み出すものなのか、といったことを考えて見たい。

III-1-2. 統辞関係は辞項₁ と辞項₂ の間にあり、辞項₂（限定項）が＜含意＞しているか、あるいは辞項₁ と辞項₂ の間の（あるいはいずれかに隣接した）項₃（機能辞）が＜明示＞しているか、である。いずれの場合も項₁ と項₂ が示す経験特性の間の《関係》と理解されるものである。

だがこの関係は当然、初めから経験の中に関係としてあったものではない。対象の中の一つの経験特性を表現の上で二つに切り分ける時、必然的に一方でつながりが姿を現し、他方で《関係》が姿を現すのである。このつながりを私たちは統辞関係と呼んでいる。

統辞関係は、して見ると長い間の言語操作の結果として出てくるものである。言語によって切り取られて出てくるものである。言語による切り取りが行われる前から永遠の関係的なものとしてあった訳ではない。

統辞関係に助けられて結合を果たす両端の辞項についても、言語が辞項としてすくい取ることによって、その言語においては辞項となり、辞項として姿を現す。そのような項と項を結ぶものとしてこういった言語が決めた関係的な特性はあるが、経験のどの部分がそれに当たっているかは言語の切り取り作業との関連で決まったことである。従って経験のどの部分がそれにあたるかは、項（fonctif）となる特性を決めてみないとわからないことである。

この関係的な特性の部分が、項に対する付属形式であるという考え方が根強く存在するが、しかし逆に＜文＞の全体の構造の方から考えれば、むしろ《関係》が枠組みをなす。その場合は《関係》が、いわば世界の構造の本体である。項はつながりに過ぎないことになる。どちらが主でどちらが従かは、結局わからない。ニワトリが先か、タマゴが先かの話はここにもあるということが出来る。

III-1-3. 統辞関係が発話の中でどこに、どんなかたちであらわされているかを問うて見ると、たしかにそれは様々だし、答えるのが容易ではないが、一般的には辞項の間だと

いってよい。勿論、場合によるとそれは文字通り辞項の間にある〔jolie⇔fleur 「美しい⇔花」〕。しかし場合によると、二つの辞項を、ある第三の項を越えて結んでいることもある〔fleur⇔d'(une) beauté (merveilleuse) 「(素晴らしい) 美しさ+の⇔花」〕。

どうしてそんなことが起きるかを考えてみよう。現実、あるいは私たちの経験を、例えば二つに切り分ける分析があるとしたとき、しばしばその二つの部分の間のつながりを、第三の言語要素で表さなくてはならないからである。そこからいえることは、言語形式が引き受ける内容にもともと著しくむらがあるということであろう。一つの大きな理由としてその様な点があるので、統辞関係の認定は、もはや形態を出発点として始めるわけにはいかないことになる。

事実の分析の前に、辞項の結合モデルをつくって見よう。

(A) 先ず、辞項と辞項の間には、手を加えなくてもどちらの側からか結合力が働くものと仮定する。これが最も基本的な仮定である。何故、こういう仮定ができるか。二つのものの結合は最も単純な形式をとる場合、自らの力で行われなくてはならない。自らの力で結合出来ない切片を準備しておいて、二つの切片の間がくっつかないからといって第三の切片を持ち出しても、この第三の切片にも自分でくっついて行く力がないとすれば何の足しにもならない。

(B) 次に、話者が要素と要素の間の関係を、必要とあれば自分で選ぶことができるようにしておかなくてはならない。そうでないと一つの結節の周りで多くの関係を対立させることが出来ない。この仕組みを欠いたシステムはのっぺらぼうの情報の流れにしかならない。一次元の流れしか持たない言語においても、このような仕組みをもつことによって最大限の速さと広がりをもった分析が可能になる。

III-2. 統辞関係の基礎、統辞関係の認定：

III-2-1. ここでは、通常の《統辞切片》と《萌芽的な統辞関係》を見よう。

人間の言語は必然的にきわめて規則的な分節性をもつ。その理由は、人間に与えられた知力に対して、人間が企むかなり広範囲な情報伝達が、相当の負担であるからであろう。恐らく、きわめて規則的な分節性を離れて情報伝達を行うだけの余力が人間に残されていないのである。その結果、僅か二種類の切片だけがこの必然的で規則的な分節性に対する例外をなしている。一つは、どの言語にも見られる「一語文」で、間投詞と呼ばれている（「ありがとう！」「しめた！」「すみません！」「畜生！」「おたんこなす！」 etc.）。もう一つは、いわゆる語形成の成分（cf. 「接辞」）や合成語をつくっている成分であり、これらの成分は通常の統辞規則には従わない。

規則的な分節性の例外をなすこの二種類の成分を除外するなら、残りは通常の《統辞切片》である。ここでいう通常の《統辞切片》は必ず、他の統辞切片と結合するための《萌芽的な統辞関係》 *fonction en germe* をもつと考えてよい（cf. III-1-3 の (A)）。この《萌芽的な統辞関係》は、総ての実際の統辞関係を準備する潜在的な属性である。人間

の言語が理論的に、必然的に＜分節性＞をもつことを認めるなら、その＜分節性＞を保証するために存在する通常の《統辞切片》は、その当然の帰結として必ず《萌芽的な統辞関係》を含んでいなくてはならないだろう。これは論理的な含意である。実際の統辞関係ではなく、いわば実際の統辞関係の基礎である。

III-2-2. 私たちの分析は、話者の選択するものに焦点をあわせなくてはならない。何故なら話者の間で言語価値（話者の意図の表現）を生み出すのは、話者の選択に裏付けられた行為に限られるからである。とすると、今、二つのものが、問題となる。一つは《含意された統辞関係》〔jolie⇒fleur 「美しい⇒花」の⇒〕である。これは辞項と同時に選択され、そしてその結果は、従属項が結合の核に対してもつ従属関係そのもののの中に生きている。しかし話者はこの含意された関係を伝達のために利用する事は出来ない。なぜならこの関係は、どの限定辞をみてもものべらばうだからである。話者が意図の表明のために利用しようしても全く手掛かりがない。

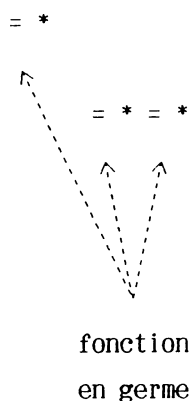
もう一つは、《萌芽的な統辞関係》である。だが《萌芽的な統辞関係》について何か言う前に、《萌芽的な統辞関係》そのものを概観しておこう。

総ての統辞論は根源的にはこの《萌芽的な統辞関係》をその出発点としているが、明示的な統辞関係は統辞機能とそれを担う機能辞として独立し、含意された統辞関係は限定辞として働く辞項の中に吸収されている。その外に、いわば《萌芽的な統辞関係》のまま留まっているものもある。これらの《萌芽的な統辞関係》は名詞⇄形容詞や、動詞⇄副詞などだけでなく、⇄前置詞+名詞（あるいは：⇄前置詞→名詞）のような規則的結合の基礎をなしている。もしもこういった《萌芽的な統辞関係》が言語の規則的な分節要素に備わっていないとするなら dans la maison (⇄dans+/ la⇄maison) のような結合が何を根拠に可能になっているのか説明がつかない。そう考えられる以上、最終的に、どのようにそれがどのような結合価につくりあげられるかは、しばらく、別の問題として、=dans=/ la=maison のそれぞれの接点(=) には、基本的に必ず《萌芽的な統辞関係》が宿されていると考えなくてはならない。

= vite /	formule :	= * /
=dans= Paris /	formule :	= * = * /

この定式の中ではアスタリスクが選択を、等号が《萌芽的な統辞関係》 fonction en germeをあらわす。こうして定式化すると、vite は一回の選択と一つの継ぎ目から成っている。つまりこの要素は、この一つの継ぎ目で、何処か（何らかの結合の核）に付属するのである。では dans Paris は どうか。これも定式化すると、全体が何処かに付属するために一つの継ぎ目をもち、二つの選択を形態の上でつなぐためにもう一つの継ぎ目をもち、計二つの継ぎ目と二つの選択から成っている。vite と dans Paris の右側の斜線（/）はこれらの要素が左右のどちらかにしか継ぎ目をもっていないこと（核につながら

ないこと)を示している。それに対して、dans は両方に fonction en germe (継ぎ目)をもっている。



《萌芽的な統辞関係》

私たちの分析はこの《萌芽的な統辞関係》も、話者の意図を反映することができない素材として、言語価値の外におかなくてはならない。

III-2-3. いくらか繰り返しになるが、もう一度《含意された統辞関係》を見てみよう。述辞がそのまわりに複数の要素を従える場合、述辞と一つ一つの要素の間の関係を区別しなくてはならなくなる。述辞のまわりにある要素が複合的で、辞項と、辞項と述辞をつなぐ機能辞の両方を含む場合をまず考えて見よう。様々な名詞概念は、このような辞項として使用されるためにある。機能辞とは別個に選択できるから、述辞との統辞関係を越えて名詞概念は存在する。話者は名詞概念を選び、別個に述辞との関係を選ぶことができる。そこには理想的な分析性が確保されている。

述辞のまわりの要素の中にはその外に、その<語義によって>述辞との関係 (rapport) を示すとマルティネによって説明されたものもある。Il court vite 「彼は早く走る」の vite が、例えばそのような要素の一つである (A. Martinet, *Éléments de linguistique générale*)。ここで<語義によって (par le sens)>述辞との関係が示されているというのは、ここで意味論と統辞論の違いがなくなる (無視される) というのではない。核と要素の関係 (従属関係) は勿論、統辞論の問題である。統辞関係には、既に見たように<含意>されるものと<明示>されるものがあるが、含意されるものでは従属関係が、その要素の本来の性格として含まれることになる。問題は、この従属関係を示すのにあらためて何一つ言語的選択がなされない (言語要素が選ばれない) というところにある。要素が、結合の核に対してもつ従属性は明らかであり、あらためて核との関係が何らかの要素の存在によって示されることがない。この従属関係は、言語的には、問題の要素から独

立しておらず、問題の要素の内部の問題に留まっている。これは否定することのできない統辞論的事実である。そのことを、先ず、再確認しよう。

次の問題はこの事実を、どう、理論化の作業の中に組み入れるかである。私たちの前には、一方では統辞的な従属関係があり、他方ではこの統辞的従属関係が話者によって自由に選ばれないという事実がある。その時、この従属関係と、それを示す事項とを切り離して扱うのでは、話者の行動を正確に再構成できない恨みがある。話者の動きから見て、統辞的従属関係は問題の要素の選択に含まれたものと結論すべきものだからである。この従属関係とそれを示す事項とを切り離して、従属関係も一つの事実、事項の存在も一つの事実ととらえるのは、どちらかという、観察者の立場に事実を引きつけて、観察者の目に入るものを総て並列的にとらえようとした結果ではないかと思われる。観察者はあくまで対象を捉えることに主力を注ぐべきであり、この場合は、話者の行動を再構成することに心血を注ぐべきであろう。そうなるとこの統辞的従属関係は、話者が辞項そのものの選択と切り離して選択できるものではないので、問題の辞項の選択に含まれたものと結論すべきであろう。話者はその辞項を一つの言語記号として、つまり外形と内容をもったものとして扱う。具体的にはその記号の外形（文脈的に規定された外形）を操作しながら、間接的に内容を操作することになる。これは情報伝達の宿命的な枠組みである。この枠組みの中で考えるとすれば、この辞項の統辞的な動きは従属要素としての動きであり、統辞論的には、この辞項は一定の核に従属する従属要素として扱われることになり、統辞的従属関係は内容に含まれることになる。

III-3. 発話の理論モデル：

これまでの所でよくわかったように、統辞関係の理解は、結局、人間の発話の仕組みをどう理解しているかということに全面的に依拠する。それ故、まとめとして私たちがどんな理論モデルを人間の発話に関してもっているか、なるべく簡単に、そして具体的に示しておこう。

(1) 発話はよく記憶され、よく使い慣れた要素を合成したものでなくてはならない。

発話、または文は、理論的には、人間が必要の度に伝達場に出せるカードのようなものである。このカードは、理論的には人間が会う無限の必要に応じるものでなくてはならないから、当然、無限の種類のカードが必要である。だが、無限の種類のカードを私たちは確実に記憶し、確実に操作し、また相手にも確実な理解を求めることはできないから、このカードは必然的に、よく記憶され、よく使い慣れた要素の結合として合成していく外はない。私たちの用いる発話、または文は、このように、よく記憶され、よく使い慣れた要素の結合として合成された一種のカードである。

(2) 発話を構成する要素はその場で創造されたユニークなものであってはならない。

一方、カードの受渡しが確実であるためには、一枚一枚のカードがその場で＜創造＞され完璧にユニークなものであってはならない。理論的には、カードは必ず何らかの意味で＜繰り返し＞でなくてはならない。そうでなくてはカードの受渡しの確実を期することは到底できない。それ故、カードを構成する要素については、言語があらかじめ準備し、話者が習得の過程で確実に形態を学習し、個々の話者の言語操作の過程で多少とも社会化された内容をもつものでなくてはならない。

(3) 私たちは一回の発話である量の経験を切り取ってそれを分節する。

私たちがまとまった経験と考えるのは、一回の発話がその許すかたちで、私たちの経験の総体から切り取ったものである。

話者が切り取るひとまとまりの経験は、以上述べたようなかたちで社会構成員が周知の言語要素に分節される。勿論、発話は、実際には一つの言語切片でできている場合もある。しかし一般的に発話の理論的な成立条件を考えてみよう。一般的には、発話は上で比喩的に述べた一枚のカードに当たり、一枚のカードは潜在的には、不特定の数の基本切片に分節されたものでなくてはならない。これが、いわば私たちの発話というカードの理論モデルである。

カードを構成する言語切片が想定するのは、必ず他の言語切片と、一定の条件を満たす結合をするということ、それだけである。この条件を満たす言語切片を、私たちは《通常の統辞切片》と考えてよい。どの言語も、必ずこのような性質をおびた多数の統辞切片からなる。これは人間の言語が逃れることのできない理論的要請である。

実際の統辞関係の認定は、次の原則に基づいて行われる：

(1) コンスタントなものと付加されるもの：付加されるものからコンスタントなものの方へ限定関係〔 $\Leftarrow$ または $\Rightarrow$ 〕が生じる（*courir* $\Leftarrow$ *vite*「速く走る」、*jolie* $\Rightarrow$ *fleur*「かわいい花」、*fleur* $\Leftarrow$ *rouge*「赤い花」、etc.）。(コンスタントという概念の理解は、ほぼ、Louis Hjelmslev, *Prolegomena to a Theory of Language*, 1961 に従う。)

(2) 統辞機能を付与する要素（機能辞）と付与される要素（限定情報の核）の間には特定の限定関係（価値）は生じない（太郎+が、花子+を、*dans*+/*(la)* $\Rightarrow$ *maison*「家...で〔内部〕」etc.）。特定の限定関係（言語価値）に対応しない《萌芽的な統辞関係》〔+〕は言語的価値の観点からは無視されることになる*）。

*）この点を含めて、ここで問題にしている統辞関係の認定はその根本において A. マルティネが今から 30 年前に示したことを、根源にある原理に遡ってやり直したにすぎない。Cf. A. MARTINET, *Éléments de linguistique générale*, 1960; Yoshiro WATASE, *Introduction, dans Recherches Linguistiques en hommage à Andre Martinet*, 1990, pp. 1-9.

(3) 統辞機能を付与する要素(機能辞)と、付与される要素(限定情報の核)とは、一つの結合体を形成して、第三のコンスタントな要素(結合の核)の方へ統辞関係〔⇐または⇒〕をもつ(⇐dans / ... maison, 太郎+が⇒、花子+を⇒)。この統辞関係の<価値>は当然、統辞機能を付与する要素(dans, ガ, ヲ)が決定し、受け持つ。

(4) 様々な統辞機能を区別する要素(「ガ」、「ヲ」、etc.)に、ゼロまたは、統辞機能の区別には全く関与しない要素(「ハ」)が替わり得る体系(例えば日本語のような)では、そのような要素が現れる限り、統辞関係は明示されない(「太郎⇐は／(⇒)行く」)。

III-4. 明示されない統辞機能:

日本語の場合ががその一つの典型であるが、設定されている統辞機能が時にゼロに代わることが、その言語のシステムの中で認められている場合がある。一つの統辞機能ゼロの場合と考えてよい。

「太郎⇐は／(⇒)行く」や「お弁当⇐は／(⇒)食べる」では「ハ」があるお陰で統辞関係の表示は阻止されている。しかし、もともと、日本語のある種の統辞機能はゼロに代わることが許されている。そのしくみがあるので、ここで「ハ」がこういったかたちで現れることができたのであろう。また、ここで「ハ」による<阻止>がなければ、「太郎⇐は／(⇒)行く」では「ガ」が、「お弁当⇐は／(⇒)食べる」では「ヲ」が現れていたことだろう。

「太郎⇐は／(⇒)行く」では殊の外、表示を阻止されている統辞関係が発話の結果から見やすい状態になっている。最大の理由は「行く」が自動詞であるので、「ヲ」の可能性を最初からもっていないことにある。「ハ」が出現を阻止する機能辞「ガ」「ヲ」の内、もし「ヲ」の可能性が初めからなければ、この発話の中に潜在している統辞関係は「ガ」であろう。自動詞文「太郎⇐は／(⇒)行く」はそれ故、潜在している統辞関係「ガ」と、「ハ」の加える既知情報の重なりあった価値を示している。「お弁当⇐は／(⇒)食べる」では、発話は他動詞文であるが、「お弁当」と「食べる」が想定させる関係は「ヲ」であって決して「ガ」ではない。それ故、ここでも、この文は潜在している統辞関係「ヲ」と、「ハ」の加える既知情報の重なりあった価値を示している。

理論的に言えばここには、潜在している統辞関係の表示が阻止されているのであるから、先ず *signifiant zéro* がある。と同時に価値としての統辞関係 (*signifié*) も、潜在しながら発話の結果から読み取れる状態になっている。

signifiant zéro については何が言えるだろうか。統辞関係以外の領域ではもう少し異なったアプローチが必要になるが、統辞関係を考える時には、これは本論の冒頭から既に問題にしてきたことであるが、常に、文中の辞項の継ぎ目にはある種の関係の存在を仮定

できる。そのある種の《関係》をここでは《萌芽的統辞関係》(fonction en germe)と呼んでおくことにする。《萌芽的統辞関係》が具体的に二項間の限定関係となっているのか、それとも機能辞となっているかは発話を見ただけでわかるから、「太郎⇔は／(⇔)行く」や「お弁当⇔は／(⇔)食べる」を与えられたとき、「ハ」が「ガ」、「ヲ」の signifiant zéro を隠していることはすぐに読み取ることができる。そのことは完全に両義的な「花子⇔は／(⇔)殺す」(「花子ガ殺す」?「花子ヲ殺す」?)の場合でも全く同じである。一般に統辞関係の領域では機能辞の signifiant zéro があるべきところは確実に指摘できると考えておいてよい。いずれにせよ「ハ」が現れることで間違いなくそこに signifiant zéro が予告され、残る問題は価値としての統辞関係 (signifié) をどう読み取るかの問題だけになる、と考えておいてよいだろう。

III-5. 《含意された統辞関係》を話者が扱う場合に典型的にそのことがいえるが、統辞関係とそれで結ばれる事項とは、そこでは切っても切れない関係にある。(ここでは話者は統辞関係を辞項と別の選択によって選びわけることが出来ないのであるから、以上のことは当然である。)

だがそのことは、話者が改めて統辞関係を選ぶ場合にも、つまり統辞機能の選択に際してもいえる。(《含意された統辞関係》とは違って話者が統辞関係を辞項と別の選択によって選びわけますすらも、辞項の選択、統辞関係の選択は、より大きな全体の選択の中で一つになっている。) 辞項の選択は決してそれ自身が目的ではなく、より大きな全体をつくっていくための一過程である。いわばその辞項の選択によって一步、具体的に、その過程が進行するという性質のものであるから、当然、話者は全体を睨みながら辞項を選択せざるを得ない。ということはその辞項の選択が、辞項と全体との結びつきに反映し、またそこに《含意された統辞関係》やそこで改めて行われる統辞機能の選択が、その辞項の選択に反映せざるを得ないということである (cf. III-1-2)。

たしかに具体的な話者の操作において、辞項の部分をカラにした統辞関係の操作はあり得ないわけだが (cf. 「統辞的切り取り」『論集』46号)、統辞関係の操作は何時の場合も、最後に文の骨格として見えてくる全体の構造を構造を形作る。辞項は《含意された統辞関係》によって全体に結びつくかそれとも話者が別個にせんとくする統辞機能によって全体に結びつくかは別として、全体に結びつくことによって初めて事態 (文として切り取られる経験) の一部となる。辞項として切り取る部分も統辞関係として切り取る部分も共に事態をなしている。対象となる経験の一部であることに変わりはない。辞項となるか統辞関係となるか、辞項の側に組み入れられるか統辞関係の側に組み入れられるかは、一寸考えて見れば明らかなように経験の側の問題では全くない。経験は常に、沈黙した塊りなのである。言わずとしたことだが経験を<辞項>として切り取るか<統辞関係>として切り取るかは、経験を最初の分析にかける、言語の側の問題である。

お汁粉の汁もだんごも、経験をあらわす媒体だとすれば、何で汁をつくるか何でだんご

をつくるかにより、経験の一つ一つの特性は、（もともとそれは姿、かたちのない情報なのであるから）時にはお汁粉の汁になり、時にはお汁粉のだんごになる。経験の特性がもともと姿、かたちのない情報であることはここで是非、確認しておいた方がよい。あるのはお汁粉の汁に見たてた経験特性と、だんごに見たてた経験特性だけである。

一般に人間文化の分析は学問のレベルで、結局は様々な言語がやっているような人間文化（いのちと生活）の情報化をやることになるのだが、その場合、人間文化にとって幸いなことは、誰にとっても、これは分析、これは対象となった人間の文化、とよく見分けがついており、分析に用いた媒体で人間の文化を汚してまわるようなことはしない。

だが、言語の使用者の場合は、もともと自己中心的で閉鎖的な脳味噌をもった人間のやることだから、自分の言語で — 自分のお汁粉で — 無意識に経験を分類し、お汁粉の汁の側と、だんごの側に、経験を引き寄せて当然だという顔をすることになる。ここで言語学が果たすべき役割は歴然としている。言語は言語、経験は経験という原則をまず確認することから始めなくてはならない。言語の使用者の観点からいえば辞項の側と統辞関係の側にそれぞれの言語の言語要素が大きく分類されるとはいえ、この分類もそれぞれの言語が勝手勝手にやっているものであって、ソシュールの *arbitraire linguistique*（言語の恣意性）の原則はここでも当てはまるのである。この場合、言語学が果たすべき本質的な役割は、ある意味では、《modestie culturelle》（文化的謙虚さ）とでもいえるようなもの、つまり異文化、異言語にたいする《謙虚さ》を教えることに、尽きるであろう。

III-5. 結び

以上で見てきた事を通じて最終的に何がいえようか？

私たちは人間の言語において文を構成する通常の切片に対して、それらが素材としては基本的に結合力を持っていることを仮定した（cf. III-1-3）。そのレベルでは辞項と辞項の間には、手を加えなくてもどちらの側からか結合力が働くものと考えなくてはならない。個々の言語はその基本的な結合力を利用してその言語の統辞要素に対して特有の《統辞形式》（*forme syntaxique*）を与えるのである。いわば、特有の《統辞形式》が個々の言語の統辞要素を造りだす素材、《統辞実質》（*substance syntaxique*）はそうようにして、基本的な結合力をもっていなければならない。この基本的な結合力はいわば、個々の言語が特有の《統辞形式》を造りだす前の、《統辞実質》に想定されなくてはならないものである。

私たちが様々な言語に見ている統辞的なつながり、つまり種々の格（語尾）、統辞的位置、前置詞、後置詞（助詞）といったものは、話者に統辞関係の選択の機会を与えるために存在する。話者が統辞関係の中で〈あれ〉と〈これ〉を対立させ使い分けることが出来るために存在するのである。しかしこうして、話者に選択されるものとして統辞機能が文脈から独立することによって、文脈の中の限定情報の核（名詞）は、その文脈では逆に、上で

見た基本的な結合力を失う。私たちが様々な言語に見ている統辞的なつながり、つまり種々の格（語尾）、統辞的位置、前置詞、後置詞（助詞）といったものは、それが現れることによって名詞を生み出し、同時にその文脈にある名詞から、《統辞実質》に備わった総ての基本的な結合力を取り去る。ここにも大変顕著な素材の《形式化》が見られる。名詞とは、そのような道具に囲まれて、総ての関係情報を他に委ねる形で安定することになった統辞素材である。

だから同じ名詞が、稀に、いわゆる限定辞の現れる文脈に現れるとたちまち素朴な結合力を回復する（chapeau marron「栗色の帽子」）。これは名詞が、それから基本的な結合力を取り去る文脈から離れると、統辞素材としては保持していた基本的な結合力を回復するよい例である。

私たちは以上で見たような典型的な名詞の現れる文脈を想定しながら＜名詞には結合能力がない、それを補うのは前置詞（etc.）である＞と説明する。勿論この説明は、名詞が以上見たような文脈に納まっている限りにおいて正しい。ということは、名詞がそのような文脈を離れれば、そのような説明は当然もはや通用しないということでもある。

だから、本論の検討を通じて、一つのことが明らかであろう。それは、格、前置詞、後置詞といったもの、つまり話者によって選ばれる統辞関係である《統辞機能》が、一方ではたしかに名詞に統辞的な結合能力を与えることは事実であるが、実はそういう《統辞機能》の役割は一つの結果であって、《統辞機能》の果たすべき役割はむしろ、一つの結節点の周りで、話者に多くの統辞関係を区別する事を可能にする点にあるということである（cf. I-2, III-1-3 (B)）。《統辞機能》の第一の役割は統辞関係を話者の選択の上に基礎づけることにある。それが名詞に与えるように見える結合能力は、それらが文脈から独立するとき素材から奪った基本的な結合力を回復したものにすぎないといえるだろう。

さて、《統辞機能》は主要な統辞結合の核（その最たるものは動詞述部であろう）の周りで働く。当然、予想されなくてはならないことだが、主要な《統辞機能》は様々な統辞結合の核、様々な異なった統辞結合の核と結びつかなくてはならない。例えば印欧語の主辞機能はすべての動詞述部の第一話題を引き受ける。動詞述部の第一話題とは、きわめて相対的な規定であり、その実質のひろがりには殆ど限りがない。ということは当然、主辞機能が、それ自身はきわめて広い、一般化された内容の範囲を引き受けざるを得ないということである。逆にいえば使用者は絶えずその一般的な意味の向こうに、統辞結合の核の意義構造を透かし見ながら主辞機能を使わざるを得ないということである。このように主要な《統辞機能》は、統辞結合の核の意義構造に助けられながら様々な統辞関係の区別に貢献する。そのことは主辞機能に限らず、目的辞機能、主要な前置詞、そして日本語の「ガ」「ヲ」「ニ」等についても多少ともいえる（cf. I-3-3, II-1-2, II-1-3, II-4-1）。また、動詞述部の周りにそのことは限られない。周知のように名詞を核とする統辞結合の場合を考えてみても、フランス語の *de* や日本語の「の」はきわめて広い内容の範

囲を引き受ける。フランス語の *de* や日本語の「の」はそのようなきわめて広い内容の範囲を自分自身でもっているというよりも、むしろ自分の内容を透かして、彼方に結合の核の意義構造を見る事を許す、一定の抽象性を持っていると考えるべきであろう。

このように主要な統辞機能の働きを考える場合は、その向こうに、統辞機能に協力する結合の核の意義構造を考えない訳にはいかない。結合の核とのこのような協力関係があって初めて、使用範囲の広い統辞機能はその意味を満たしているのである。

Bibliographie

HJELMSLEV, L., *Prolegomena to a Theory of Language*, The University of Wisconsin Press, 1961.

MARTINET, A., *Eléments de Linguistique générale*, Armand Collin, 1960, Nouvelle édition remaniée et mise à jour 1980.

——— *Syntaxe générale*, Armand Collin, 1985.

——— *Fonction et dynamique des langues*, Armand Collin, 1989.

渡瀬 嘉朗, 《Mode de signalisation et mode de choix》, *La Linguistique*, vol. 11. fasc. 2, 1975.

——— 《Introduction》, *Recherches Linguistiques en hommage à André MARTINET (1990)*, 1990, Tokyo.

——— 《「態」の選択》, 『言語研究 I』, 東京外国語大学語学研究所, 1991.

——— 『ことばと現実(言語学概論)』, 1992.

——— 《統辞的切り取り》, 東京外国語大学論集 46, (印刷中) .

1. Introduction

Les expansions primaires sont directement organisées autour du prédicat. Et les expansions secondaires déterminent les primaires. Une phrase peut ainsi se concevoir comme une hiérarchie des relations de détermination avec le prédicat au sommet. Ces relations de détermination sont justement ce qu'on appelle fonctions syntaxiques. On recourt souvent au terme cas pour indiquer cette relation syntaxique. Mais le cas représente plutôt le côté morphologique de la relation en question, surtout quand il s'agit des langues casuelles, comme le hongrois, le latin, etc. Pour distinguer le côté syntaxique du côté morphologique, on utilise donc quelquefois l'expression cas sémantique. Mais puisqu'il est question des relations syntaxiques et non pas sémantiques, il est en général de loin préférable d'utiliser l'expression fonction syntaxique.

D'autre part, une expansion qui fait partie d'une phrase a son signifié, et ce signifié a le côté relationnel et celui qui est non relationnel. On peut donc dire que c'est au signifié relationnel de l'expansion que correspond sa fonction syntaxique.

Parmi les fonctions syntaxiques, il y en a qui apparaissent en principe dans toutes les phrases, tandis qu'il y en a aussi qui ne déterminent qu'une sous-classe de prédicats qui, eux, organisent une sous-classe de constructions spécifiques. Pour bien délimiter les fonctions spécifiques, il importe donc de relever d'abord les principaux types de constructions qu'elles caractérisent. Le datif qui fera l'objet de notre discussion dans cet article est une de ces fonctions spécifiques et n'apparaît que dans une sous-classe de constructions. Une expansion dative a son signifié relationnel et elle est aussi dotée d'un signifié non-relationnel. Il faut remarquer que le trait "humain" qui se trouve dans le titre du présent article et qui est souvent mentionné pour caractériser la fonction dative est un trait manifestement non-relationnel. Nous nous proposons d'éclaircir ci-dessous les liens qu'il peut y avoir entre la fonction spécifique dative qui n'est que relationnelle et le trait "humain" qui ne peut être que non-relationnel.

2. La compatibilité et le système des fonctions

Les expansions qui sont organisées sans relation de coordination autour d'un prédicat peuvent être qualifiées de compatibles. Elles sont en effet ainsi compatibles parce qu'elles sont fonctionnellement distinctes. Leur distinction fonctionnelle permet la compatibilité. Dans M.Kissinger n'avait certes donné aucun chiffre au sénateur Jackson, (...) (le 20.12.1974, l'édition du journal Le Monde; la date seule sera donnée ci-dessous), par exemple, M.Kissinger, aucun chiffre et au sénateur Jackson sont compatibles sans coordination autour de avait... donné, parce qu'ils ont des fonctions distinctes: sujet, objet et datif. Le prédicat verbal donner a la combinabilité qui organise ces trois fonctions distinctes. Ces trois fonctions sont ainsi compatibles autour d'une sous-classe de prédicats dont donner. Dans l'exemple, ci-dessus, les trois expansions sont compatibles dans l'axe syntagmatique. Et c'est dans cet axe que la distinction fonctionnelle peut être vérifiée. La compatibilité est ainsi un des critères fondamentaux pour l'identification des fonctions syntaxiques.

Or quand on parle de système des fonctions, comme c'est le cas du système des phonèmes en phonologie, c'est plutôt l'axe paradigmatique et l'opposition (et non la compatibilité) entre les éléments qui sont en question. Mais le lien entre la compatibilité et le système est évident puisqu'il s'agit en syntaxe des relations entre non pas les éléments individuels mais leurs classes. Dans l'exemple donné ci-dessus, il semble qu'il soit question de la compatibilité entre les trois éléments individuels autour d'un élément verbal qui est aussi individuel. Mais ce n'est pas le cas. L'exemple n'est donné que comme représentant un type de construction bien délimité: Sujet - Prédicat - Objet - Datif. En syntaxe, l'exemple individuel n'est suffisamment significatif que dans la mesure où il représente une construction sous-jacente.

En général, une fonction syntaxique peut être délimitée par les trois facteurs suivants: 1. la classe des éléments auxquels la relation (=fonction) est établie, 2. la classe des éléments dont la relation est établie, 3. la classe des relations qui s'opposent à la relation en question (cf. F.François, 1970, p.6). Concernant le datif de l'exemple donné ci-dessus, on peut dire qu'il s'agit de la classe des éléments qui s'opposent à donner, de celle des éléments qui remplacent sénateur et de celle des relations qui s'opposent à la relation indiquée par à. Il s'agira donc tout d'abord de la classe de prédicats verbaux à trois participants, Ensuite il s'agira de la classe des éléments nominaux ou autres liée par le fonctionnel à à la classe

des verbes. Ici déjà on voit qu'on ne peut pas négliger les classes des éléments assumant les fonctions sujet et objet. Ensuite il s'agira des indicateurs fonctionnels possibles autres que à. Mais comme on l'a indiqué ci-dessus, les trois fonctions sont compatibles parce qu'elles sont distinctes. Elles sont là compatibles mais elles ne sont pas opposées. S'il y a d'autres prépositions possibles dans l'exemples donné, alors on devra supposer que les syntagmes avec ces prépositions sont compatibles avec au sénateur, parce que des prépositions distinctes peuvent indiquer tout naturellement différentes relations. (On exclut bien sûr les cas de variantes prépositionnelles. Dans ces cas, il n'y a pas d'opposition, la relation de variantes étant en question.) Dans l'exemple en question, pour peut être utilisé au lieu de à. Mais ces prépositions indiquent deux relations distinctes et les syntagmes avec ces prépositions sont bien compatibles: Il faut donner de l'argent aux parents pour les enfants. Cf. Voilà le cigare que tu m'avais donné pour papa (exemple de M.Herslund, 1983, p.101). Donc la relation d'opposition qu'on peut reconnaître entre à et pour dans Il faut donner de l'argent (à/pour) les parents est en fait celle qui permet la compatibilité dans l'axe syntagmatique. En principe, les différentes relations qui semblent s'opposer dans l'axe paradigmatique devraient, en syntaxe, pouvoir apparaître, compatibles, dans l'axe syntagmatique. (Même dans ce sens précis, peut-il y avoir d'autres relations qui s'opposent à la fonction sujet ou à la fonction objet direct?)

Ci-dessous, nous essayons de délimiter le datif en nous limitant à la construction: Sujet - Prédicat - Objet - Datif et à celle: Sujet - Prédicat - Datif. Mais quand on parle d'opposition paradigmatique, il n'y aucune raison pour nous limiter à ces types de construction. On peut, par exemple, penser à une opposition entre Datif et Attribut, si l'on compare la construction à trois arguments donnée ci-dessus avec celle: Sujet - Prédicat - Objet - Attribut. Ces constructions ont trois participants, mais il y a aussi des constructions à un participant, à deux participants, etc. On devra aussi tenir compte des oppositions, des choix entre différentes constructions, ce qui se situe bien sûr à un niveau autre que celui des oppositions entre différentes fonctions syntaxiques. D'ailleurs, il ne faut pas oublier, même si on se limite rigoureusement à l'identification de la fonction dative, qu'elle apparaît dans des constructions à un nombre varié de participants. En tout cas, on ne peut pas se passer d'examiner les correspondances qu'il peut y avoir entre les constructions. Et finalement, il faut tenir compte de l'ensemble des constructions. Cet ensemble représente

le cadre où une fonction syntaxique donnée peut se délimiter. Puisque ce sont les fonctions spécifiques qui caractérisent les différents types de constructions, on peut trouver toutes les fonctions spécifiques dans l'ensemble des constructions. Cet ensemble représente donc presque le système des fonctions syntaxiques (mises à part celles qui sont non-spécifiques et qui ainsi peuvent apparaître avec toutes les constructions), et cela, en respectant les oppositions paradigmatiques et les compatibilités fonctionnelles.

Les différentes fonctions caractérisent les différents types de constructions. Si donc on relève les différentes fonctions dans l'ensemble des constructions, on aura proprement l'ensemble des fonctions, à savoir le système des fonctions syntaxiques. A l'intérieur du tableau ainsi dégagé, comment les fonctions peuvent-elles être classées? C'est une question très intéressante mais elle dépasse nettement le cadre du présent article.

L'ensemble des constructions est caractérisé par les fonctions syntaxiques. Du point de vue du signifié, on peut dire que ce sont les signifiés relationnels qui caractérisent les types de constructions, voire le système des fonctions syntaxiques. Mais les fonctions sont assumées par les classes d'éléments variés. Et ce sont ces classes qui peuvent comporter des traits de signifiés non-relationnels. Donc les fonctions syntaxiques et les traits dits sémantiques (non-relationnels) ne sont pas sans rapport, mais leur lien est indirect, et c'est à travers les classes d'éléments qui assument les fonctions que les traits non-relationnels peuvent effectuer, si c'est bien le cas, des influences sur les caractéristiques fonctionnelles. Ce problème sera traité en détail ci-dessous, mais avant cela jetons un coup d'œil aux constructions où apparaît la fonction dative.

3. Les constructions caractérisées par le datif

Les constructions phrastiques simples en français seront d'abord divisées en deux: 1. les constructions verbales, 2. celles qui sont non-verbales. Ensuite 1. sera divisé en 1.1. celles avec la fonction sujet et 1.2. celles sans sujet. 1.1. sera divisé toujours en deux: 1.1.1. celles avec la fonction sujet personnel et 1.1.2. celles avec le sujet impersonnel. 1.1.1. sera divisé en 1.1.1.1. celles avec le prédicat simple et 1.1.1.2. celles avec le prédicat complexe attributif. 1.1.1.1 sera divisé, par exemple, en 1.1.1.1.1. celles avec la fonction objet direct, 1.1.1.1.2. celles qui sont passives, 1.1.1.1.3. celles des verbes pronominaux, 1.1.1.1.4. celles avec une fonction spécifique autonomisée. Jetons un coup d'œil aux exemples

dans l'ordre.

1. Constructions verbales

2. Constructions non-verbales

(1) "Et au miracle." (le 3.7.1975)

(2) "Enfin un gouvernement à Rome ..." (le 21.11.1974)

(3) "Allusion aussi aux mille et un moyens employés dans les pays socialistes pour (...)." (le 27.12.1975)

(4) "Tout le pouvoir au peuple: (...)." (le 11.7.1975)

1.1. Constructions avec sujet

1.2. Constructions sans sujet

(5) "Reste pour Madrid à veiller sur l'indépendance internationale que Franco avait su maintenir." (les 2-3.11.1975)

1.1.1. Constructions avec sujet personnel

1.1.2. Constructions avec sujet impersonnel

(6) "(...); il importe aux Sud-Africains que l'Angola ne devienne pas à son tour une terre d'asile pour maquisards namibiens." (le 3.1.1976)

1.1.1.1. Constructions avec prédicat simple

1.1.1.2. Constructions avec prédicat complexe attributif

(7) "(...), et le genre de l'idylle lui reste à jamais étranger." (le 29.11.1974)

(8) "Ce qui est à nous est à nous, (...)." (le 30.12.1975)

1.1.1.1.1. Constructions avec fonction objet direct

(9) "Il reprochait à différents ministres leurs tergiversations en face de problèmes économiques urgents." (le 31.5.1975)

1.1.1.1.2. Constructions passives

(10) "Aux autres partis qui entendent explorer une voie nationale vers le socialisme, le droit d'avoir des divergences d'opinions est reconnu." (le 31.5.1975)

1.1.1.1.3. Constructions avec verbes pronominaux

(11) "Pays asiatique, elle s'adresse en 'frère' à ses voisins - et au président Marcos comme au maréchal Kim Il Sung, sinon tout à fait avec la même chaleur - (...)." (le 11.6.1975)

1.1.1.1.4. Constructions avec une fonction spécifique autonomisée

(12) "A ce défi, le gouvernement a répondu par une demi-mesure: (...)." (le 9.1.1976)

(13) "Le Zaïre, secondé par l'Afrique du Sud, sert de relais à cette aide et (...)." (le 6.11.1975)

Les exemples donnés ci-dessus représentent à peu près tous les types de constructions caractérisées par la fonction spécifique en à, surtout le datif.

Bien qu'il faille reconnaître l'importance des constructions du type 2., elles restent nettement marginales en français. Le type 1.2. est très rare où il y a un élément verbal fini mais sans sujet (on exclut bien sûr les cas d'impératif). La phrase N'importe appartient aussi à ce genre. Les phrases comme Voici Pierre appartiennent aussi à ce type de phrases, si on peut reconnaître un élément verbal dans Voici. Dans l'exemple (5), c'est pour Madrid qui est directement comparable avec le datif, mais à veiller n'est pas sans rapport avec cette fonction-ci. Le groupe 1.1.2. a des correspondances avec 1.1.1.1.4., etc. Bien sûr, il y a des constructions impersonnelles qui n'ont aucune correspondance avec celles qui sont personnelles (par exemple, il me faut du courage). Il y a aussi des correspondances variées entre 1.1.1.1.1. et 1.1.1.1.3. Et les liens assez étroits entre les constructions actives et celles qui sont passives sont bien connus. (Les relations sont aussi importantes entre les constructions passives et celles avec être.) Dans les constructions attributives de 1.1.1.2., c'est l'exemple comme (8), avec un adjectif, qui est important surtout du point de vue du datif. Il s'agit là plutôt du datif lié à l'adjectif. En nous limitant aux constructions surtout verbales, on pense pouvoir se justifier même si nous choisissons seulement les deux constructions 1.1.1.1.1. et 1.1.1.1.4. pour examiner les liens qu'il y a, si c'est le cas, entre la fonction dative et le trait "humain" du signifié non-relationnel.

4. Sujet - Prédicat - Objet direct - à-N.

Parmi les exemples des éditoriaux du journal Le Monde, il y a 139 occurrences de cette construction avec une expansion spécifique à-N qui n'est pas nécessairement dative. On peut maintenant essayer d'examiner la distribution des traits "humain" et "non-humain" dans N_0 , N_1 et N_2 de: N_0 - Prédicat - N_1 - à- N_2 . Les nombres d'occurrence sont, selon les distributions des traits, comme suit:

	Occurrences	N_0	N_1	N_2
A	1	+h	+h	+h
B	2	+h	+h	-h
C	23	+h	-h	+h
D	0	-h	+h	+h
E	32	+h	-h	-h
F	7	-h	+h	-h

	Occurrences	N ₀	N ₁	N ₂
G	12	-h	-h	+h
H	62	-h	-h	-h
	139			

Examinons d'abord les occurrences qui ont un N₂(+h): A, C, D et G.

4.1. A-N₂

4.1.1. N₀(+h) - Pr - N₁(+h) - a-N₂(+h).

- (1) "Elle préfère l'ennemi au traître, sans se montrer le moins du monde difficile sur le choix de ses interlocuteurs." (le 24.2.1976)

Au traître ci-dessus peut être remplacé par lui, ce qui donne Elle lui préfère l'ennemi. Ici N₂ est bien "humain", mais ce trait n'est pas une condition indispensable à la pronominalisation par lui: J'aime bien le café, mais je lui préfère le chocolat (exemple de B.K.Barnes, 1979, p.46).

4.1.2. N₀(+h) - Pr - N₁(-h) - a-N₂(+h).

Cette construction avec N₁(-h) est nettement plus fréquente que celle de 4.1.1.: 23 vs. 1. La fréquence même ne semble pas avoir une valeur absolue mais l'objet direct "non-humain" semble être un des facteurs de cette différence, surtout parce que les deux constructions ont N₀ et N₂ "humains".

- (2) "Aux adversaires de M.Moro et de lui-même au sein du parti, M.Zaccagnini a tenu le langage suivant: 'Notre parti a le plus de voix, donc le plus de responsabilités. (...).'" (le 13.2.1976)
- (3) "Il reprochait à différents ministres leurs tergiversations en face de problèmes économiques urgents." (le 31.5.1975)
- (4) "(...) et il promet une riposte 'résolue' à ses adversaires de droite et de gauche." (le 26.2.1976)
- (5) "Dans les discours qu'il avait prononcés après son élection à la présidence de la Chambre haute, M.Luder avait également lancé un appel remarqué à la jeunesse." (le 16.9.1975)
- (6) "Par la 'révolution blanche', le chah avait (...) distribué les terres aux paysans." (le 4.2.1976)
- (7) "Les libéraux du régime demandaient compréhension et patience aux dirigeants des organisations démocratiques." (le 10.3.1976)
- (8) "Chacun, pour commencer, a 'tiré la couverture' à lui en choisissant dans l'acte final les dispositions qui lui convenaient le mieux." (le 2.8.1975)

- (9) "On ne ferait pas ce procès à Mme Gandhi si, chamboulant tout juri-disme, elle proposait à ses concitoyens les réformes profondes seules capables de donner, pour l'immense majorité des Indiens, un sens concret au mot 'liberté'." (le 28.6.1975)

La fonction sujet est, par sa position même, fortement "thématique", et elle est le premier participant du procès exprimé par le prédicat verbal. Et le sujet et le prédicat sont les deux constituants indispensables à l'énoncé minimal. La fonction objet direct, bien que fortement spécifique en ce qu'elle caractérise bien une construction, n'est pourtant pas un constituant de l'énoncé minimal. L'objet peut s'effacer de temps en temps, et du point de vue des facteurs indispensables à l'existence d'une phrase, on peut dire que la fonction objet fait partie de la construction verbale. Elle est en quelque sorte dans la sphère du verbe. Le datif est aussi une fonction spécifique mais il est nettement moins lié au verbe que l'objet (cf. les datifs étendu et éthique). Il est ainsi plus indépendant du verbe et c'est cela, pensons-nous, qui aide à donner au datif une caractéristique comparable à celle de la fonction sujet. Cela signifie que sémantiquement parlant, le procès du verbe s'établit entre le sujet et le datif, et non entre le sujet et l'objet. C'est le procès du verbe comprenant l'objet qui est établi entre le sujet et le datif. Rappelons bien que le datif joue souvent le rôle du sujet sémantique (cf. Il me faut chanter — Il faut que je chante). Bien que le terme ne semble pas approprié, on peut dire dans ce sens que le datif est fortement "thématique" comme le sujet. Du point de vue syntaxique, le datif est manifestement le troisième participant dans les constructions à trois arguments. Mais du point de vue sémantique, le datif joue le second rôle, et ce qui est important, c'est que ce fait n'est pas sans rapport avec les faits de constructions syntaxiques.

Nous posons hypothétiquement comme fondamental la distribution des traits "humain" et "non-humains" de 4.1.2.: $N_0(+h) - Pr - N_1(-h) - \underline{a} - N_2(+h)$. Très sémantiquement parlant, on peut dire qu'un humain effectue un acte par rapport à un autre humain et que l'acte est exercé sur un non-humain. C'est justement le prototype sémantique qu'on peut hypothétiquement poser à la base de la construction à trois arguments (dont l'un est le datif). Bien sûr, en partant de cette base, les traits "humain" et "non-humain" peuvent se remplacer dans chaque fonction, mais il y aura des tendances préférentielles dans la combinaison des traits des trois fonctions, ce qui fait varier les occurrences. Concernant la relation entre le "humain" et la fonction "thématique" au niveau du discours, on peut dire qu'il est

normal que les fonctions supposées fondamentalement "humaines" sont essentiellement "thématiques".

En partant du prototype indiqué ci-dessus, on peut dire que si le nombre d'occurrences de 4.1.1. n'est pas élevée, c'est que la fonction objet, faiblement "thématique" est assumée par un humain. Mais il faut remarquer que dans 4.1.1., les deux autres fonctions fortement "thématiques" sont bien sssumées par des humains. Les caractéristiques du corpus doivent aussi être prises en compte.

4.1.3. $N_0(-h) - Pr - N_1(+h) - \underline{a}-N_2(+h)$.

On peut comprendre l'absence d'occurrences de cette construction. La distribution des traits en question est doublement opposée à celle de 4.1.2. Dans 4.1.3., le sujet fortement "thématique" est assumé par un non-humain et l'objet faiblement "thématique" est un humain. Mais cette distribution des traits sémantiques ne pourra pas conclure à l'impossibilité de cette construction. Ne peut-on pas accepter l'énoncé La guerre leur a donné une fille?

4.1.4. $N_0(-h) - Pr - N_1(-h) - \underline{a}-N_2(+h)$.

Le sujet est un non-humain, mais les deux autres constituants correspondent bien à ceux de 4.1.2. Le sujet est fortement "thématique" mais il est aussi indispensable à l'énoncé. Il est bien compréhensible que les non-humains aussi soient souvent "thématiques". Si donc l'objet "non-humain" et le datif "humain" sont maintenus, la différence entre les traits "humain" et "non-humain" du sujet n'est pas importante.

- (10) "A plus long terme, la conjoncture politique ne lui laisse qu'une marge de manœuvre très étroite." (les 2-3.11.1975)
- (11) "Elle(=la décision) évite à MM.Giscard d'Estaing et Fourcade la pénible tâche de devoir annoncer, un soir d'élections cantonales qui n'a pas été favorable à la majorité, une dévaluation à visage découvert." (le 16.3.1976)
- (12) "Néanmoins ce 'message' traditionnel, quel que puisse en être le contenu, offrait à M.Ford l'occasion d'affirmer une autorité, de développer une vision d'ensemble de la société et de la vie internationale, d'introduire un accent personnel dans le débat." (le 21.1.1976)
- (13) "De l'autre, la présence d'arsenaux nucléaires immensément destructeurs impose à tous, et notamment à la puissance 'assise' qu'est devenue l'Etat soviétique, un comportement modéré, tandis que (...)." (le 5.12.1974)
- (14) "Aucune république de notre continent n'accorde à son président un droit de grâce aussi étendu et irrévocable que celui que M.Ford vient d'exercer au bénéfice de M.Richard Nixon." (le 10.9.1974)

- (15) "Le Proche-Orient a inspiré à Paul VI des remarques particulière-ment précises." (le 24.12.1975)
- (16) "Pendant ce temps, une quarantaine de pays en voie de développement parmi les plus pauvres n'assurent à leur population qu'une ration permettant à peine la survie." (le 22.10.1975)
- (17) "Le pardon d'hier sauve la mise à M. Richard Nixon; (...)." (le 10. 9.1974)
- (18) "Moscou achètera les céréales aux négociants américains (...)." (le 22.10.1975)
- (19) "Une relance brutale du terrorisme donnerait des arguments aux ultras et aux conservateurs, nombreux dans l'armée et dans l'appareil d'Etat, pour stopper toute tentative de libéralisation." (le 17.1.1976)

Dans les exemples ci-dessus, les sujets "non-humains" peuvent facilement se remplacer par ceux qui sont "humains". L'idée de "personnification" peut en partie expliquer le sujet "non-humain" de ces exemples, du point de vue du type supposé à la bse. Mais c'est plutôt la "thématisation" qui l'explique mieux, puisque dans les énoncés réels il n'y aucune nécessité des sujets "humains".

4.2. $\underline{A-N_2(-h)}$

4.2.1. $N_0(+h) - Pr - N_1(+h) - \underline{\hat{a}-N_2(-h)}$.

- (20) "(...), et s'ils ne participent plus directement aux combats, les militaires fournissent à l'armée tchadienne des conseillers, des instructeurs et des moyens logistiques." (le 20.11.1974)
- (21) "De leur côté, les voisins de la Rhodésie - Botswana, Zambie, Mozambique et Tanzanie - invitent les nationalistes à la prudence."

4.2.1. s'oppose à 4.1.2. en ce que l'objet faiblement "thématique" est un humain et le datif fortement "thématique", un non-humain. Dans (20), armée, en tant qu'un ensemble d'"humains", est proche d'un humain comme nation, France, Paris, etc. Ce qui est à remarquer, c'est que dans la fonction objet conseillers, instructeurs, qui sont "humains" sont coordonnés à moyens "non-humain". Ici, les humains conseillers et instructeurs ne peuvent pas être "thématiques" comme ils sont supposés l'être dans la construction de bae de 4.1.2. Ces humains sont ainsi très près des non-humains. Sémantiquement parlant, ils sont pour ainsi dire "dépersonnifiés". L'exemple (21) n'est pas donné ici comme ayant un datif mais comme comportant une fonction spécifique en à. Dans (21), à la prudence ne peut être pronominalisé que par y et non par lui: les voisins y invitent les nationalistes. Inviter, non seulement n'accepte pas le datif

mais accepte difficilement $\hat{a}\text{-}N_2(+h)$. Dans le cas où c'est possible, N_2 devra être complètement "déshumanisé" et le syntagme en $\hat{a}$ sera considéré comme un locatif directionnel: cf. Elle va à Pierre, où à Pierre n'est pas pronominalisable par lui.

4.2.2. $N_0(+h)$ - Pr - $N_1(-h)$ - $\hat{a}\text{-}N_2(-h)$.

Cette construction s'oppose à 4.1.2. en ce que N_2 est un non-humain. Le reste est le même. S'il s'agit d'un datif, le N_2 est fortement "thématique" et c'est plutôt un humain qui y correspond bien. Mais N_2 en $\hat{a}$ n'est pas nécessairement un datif. Si c'est un locatif directionnel, sa "thématicité" est nettement moins élevée que celle d'un datif. (En fait, ceci n'est que supposé comme hypothèse.)

- (22) "(...), M.Kissinger fournit à l'opinion un bouc émissaire providentiel." (le 14.2.1976)
- (23) "Ainsi, le président de la République a délibérément donné à sa décision une dimension internationale." (le 26.11.1975)
- (24) "(...): même si cet objectif ne peut être considéré qu'à long terme, un Portugal 'ami' apporterait à la marine soviétique la plate-forme vers le 'grand océan' qui lui manque jusqu'ici." (le 15.8.1975)
- (25) "Si les futurs condamnés échappent à la peine de mort, on le devra à la situation impossible dans laquelle les protestations ont placé la diplomatie espagnole, plutôt qu'aux discrets 'conseils d'amis'." (le 30.9.1975)
- (26) "(...) et le ministre de la défense assurera aux obsèques de Franco une représentation qu'on aurait souhaitée plus discrète encore." (le 22.11.1975)
- (27) "Il y a quelques jours, au cours de sa visite en Grèce, M.Giscard d'Estaing lançait un avertissement à la Turquie dans l'affaire de Chypre, en affirmant qu'on ne saurait créer le droit avec des faits accomplis." (le 25.9.1975)
- (28) "Au cours de leur entretien, il fit une allusion explicite à 'la juste reconnaissance des aspirations' du peuple palestinien, alors que (...)." (le 24.12.1975)
- (29) "Le général Amin, qui éprouve, dit-il, le plus grand respect pour le souvenir d'Adolf Hitler, consacre la moitié de son budget à l'achat d'armements, (...)." (le 25.6.1975)
- (30) "Un certain nombre de députés du Salut national (...) mêlèrent leurs voix à celles des amis de M.Demirel, faisant échec dans un premier temps au projet du gouvernement, (...)." (le 18.9.1974)
- (31) "(...); elle a 'renvoyé l'examen de la question angolaise au bureau de l'Organisation'." (le 14.1.1976)
- (32) "(...); il a mis son prestige au service de ces Khmers rouges dont il avait souvent, avant 1970, dénoncé l'idéologie et l'action." (le 10.9.1975)

- (33) "Mais que de fois les dirigeants n'ont-ils pas, non sans arrogance ni chauvinisme, opposé l'exemple de leur 'démocratie' aux modèles communistes!" (le 28.6.1975)
- (34) "On la compare volontier et superficiellement au Congrès de Vienne." (le 16.7.1975)
- (35) "Proclamant à la fin de la conférence l'indépendance du Cabinda, le président du Front de libération de l'enclave a ajouté une in-
con-
séquence à la confusion générale." (les 3-4.8.1975)
- (36) "Aussi associent-ils certaines pressions discrètes en faveur d'une libéralisation au maintien d'un minimum d'assistance à la junte: (...)." (le 5.12.1975)
- (37) "Cinquante-neuf intellectuels adressent alors une lettre ouverte au Parlement." (le 23.3.1976)
- (38) "De son côté, le chef de l'Etat guinéen attacha toujours une telle importance aux agissements qu'il prêtait à M.Jacques Foccart, (...)." (le 3.3.1976)
- (39) " (...) on les évalue à trois cents au cours des trois dernières années (...)." (le 4.2.1976)

La plupart des verbes donnés ci-dessus acceptent un $N_2(+h)$ aussi. Et selon divers facteurs (dont le trait "humain"), à $-N_2$ se pronominalise par lui ou par y. Examinons, par exemple, le cas typique de donner. Dans (...), et la plupart d'entre eux donnent à certains de leurs membres au moins la couverture commode et anonyme d'un passeport diplomatique (le 21.1.1976), à certains de ... peut être pronominalisé par leur. Le facteur trait "humain" y fonctionne dans une certaine mesure. Mais dans Il lui a donné une couche de peinture, à ce banc et *Il y a donné une couche de peinture, à ce banc (B.K.Barnes, 1979, p.45), on voit clairement que ce n'est pas le trait "humain" du N_2 isolé qui est indispensable à la dativité exprimée par la pronominalisation de lui. Il faut comparer les exemples donnés ci-dessus de donner avec ceux qui suivent: Ce roman pourrait avoir du succès; tu de-
vrais (? lui/ y) donner tous tes soins, A son tour Robinson donna un léger
coup de pied dans la coque, ou Quelque chose qui m'a pris dans les jambes.
J'y ai donné des coups de talon (M.Herslund, 1988, p.119). Le N_2 en dans, ci-dessus, qui sera pronominalisé par y n'est pas un datif mais un locatif. Et même si l'on considère comme locatifs les syntagmes en à qui sont pronominalisables par y, il ne peut pas y avoir une séparation absolue entre le datif lui et le locatif y qui appartiennent à un même paradigme (cf. Y.Tsuruga, 1984, 1991, 1992).

Le cas un différent est celui de mêler de (30). Il y a un ensemble de verbes qui organisent un objet et un N_2 en à qui ne peut jamais être

pronominalisé par lui mais par y seul. A celles des amis ... de (30) ne sera donc pronominalisable que par y: Un certain nombre de députés ... y mêlèrent leurs voix ...

Le troisième participant en à de mettre a souvent un sens locatif concret ou abstrait et il est pronominalisable par y. C'est le cas de (32): il a mis son prestige au service devient donc il y a mis son prestige, Mais il y a des exemples: comme Le roi s'est fort mal présenté, et l'on a dû lui mettre les fers (M.Herslund, 1988, p.122). Et il faut bien voir que autour de mettre, le locatif directionnel et le datif sont tous deux deuxième participants et ainsi appartiennent au même paradigme.

Le cas de devoir de (25) est l'inverse de celui de mêler. Le troisième participant en à de devoir n'est pronominalisable que par lui, et non pas par y. C'est aussi le cas de assurer de (26).

Le cas de évaluer de (39) est comparable à celui de mêler. Mais la catégorie de N_2 du troisième participant en à de évaluer est très limitée.

Par rapport à la construction de 4.1.2., c'est seulement $\hat{a}-N_2(-h)$ qui reste à expliquer dans 4.2.2. Si $\hat{a}-N_2$ est un locatif directionnel, la distribution des traits "humain" et "non-humain" de 4.2.2. est justement la plus standard. Et la possibilité du $\hat{a}-N_2(-h)$ datif n'est pas exclue, non plus. Tout cela explique la fréquence relativement élevée de 4.2.2.

4.2.3. $N_0(-h) - Pr - N_1(+h) - \hat{a}-N_2(-h)$.

- (40) "De récents sondages les (=Gerald Ford et Ronald Reagan) mettent à égalité dans les bonnes grâces de l'élément conservateur du pays, (...)." (le 21.1.1976)
- (41) "Le seul débat véritable, mais il est de taille, a mis aux prises communistes de l'Est et communistes de l'Ouest." (le 2.3.1976)
- (42) "Son intransigeance en ce domaine, celle qu'il manifeste aussi vis-à-vis de son voisin égyptien, la position qu'il a prise lors de la guerre d'octobre, l'ont conduit à un isolement diplomatique presque complet." (le 17.5.1975) (l' = Kadhafi)
- (43) "(...) ou plutôt elles (=ces proclamations) nous ramène loin en arrière aux années 50, à l'époque des croisades de Foster Dulles et de son chantage à la 'révision déchirante'." (le 25.2.1976)
- (44) "La Confédération générale du travail, le puissant syndicat unique péroniste, a aussitôt appelé ses trois millions et demi d'adhérents à une grève générale illimitée pour protester contre l'éviction d'Isabelita." (le 25.3.1976)
- (45) "Mais le tempérament ombrageux et parfois imprévisible de M.Sekou Touré obligera les coopérants, investisseurs et négociateurs français à une prudence qui n'exclura pas tous les risques." (le 25.11.1975)

- (46) "A Moscou, la 'Pravda' prend à partie M.Kissinger pour avoir osé insinuer que le Kremlin poursuit des visées 'expansionnistes' en Angola (...)." (le 3.2.1976)

La distribution des traits "humain" et "non-humain" de 4.2.3. est tout à fait l'inverse de celle de 4.1.2., supposée fondamentale. Dans ce sens, on peut espérer une très basse fréquence ou même l'occurrence zéro. En effet, la fréquence est très basse, mais il y a quelques occurrences.

On peut dire que $\hat{a}-N_2$, ci-dessus, est locatif et difficilement datif. La distribution du trait "humain" dans N_1 et du trait "non-humain" dans N_2 semble empêcher, déjà, de considérer $\hat{a}-N_2$ comme datif (mais cf. (20) de 4.2.1.). Le trait "non-humain" de N_0 empêche encore plus cette interprétation.

4.2.4. $N_0(-h) - Pr - N_1(-h) - \hat{a}-N_2(-h)$.

Dans cette construction, tous les participants ont le trait "non-humain". Avec 4.1.2. $N_0(+h) - Pr - N_1(-h) - \hat{a}-N_2(+h)$, supposé comme fondamental, on peut d'abord espérer une fréquence plus ou moins faible de 4.2.4. Mais en fait, c'est la construction la plus fréquente dans notre corpus. Dans 4.2.4., le trait "non-humain" de N_1 est bien conforme à la construction fondamentale. C'est donc $N_0(-h)$ et $N_2(-h)$ qui s'opposent à $N_0(+h)$ et à $N_2(+h)$ de 4.1.2.

Quand N_2 est "non-humain", la fréquence de la construction est assez élevée si N_1 est aussi "non-humain". On peut facilement comprendre la basse fréquence de la distribution de $N_1(+h) - \hat{a}-N_2(-h)$. En général, on peut reconnaître que la fréquence est basse si N_1 est "humain", et cela quel que soit le trait de N_2 , au moins dans notre corpus. Si la fréquence de 4.2.4. $N_0(-h) - Pr - N_1(-h) - \hat{a}-N_2(-h)$ est plus élevée que celle de 4.2.2. $N_0(+h) - Pr - N_1(-h) - \hat{a}-N_2(-h)$, c'est que le trait "non-humain" de N_0 sert en partie à mettre en relief la possibilité de "thématicité" ou de "saillie" de $\hat{a}-N_2(-h)$ (en parlant, bien sûr, seulement des $\hat{a}-N_2(-h)$ datifs). Si l'on suppose que N_0 est le premier "thème" et N_2 , le second, il vaut mieux que N_0 et N_2 se situent au même niveau, du point de vue du trait sémantique, ce qui est le cas dans la construction fondamentale avec $N_0(+h)$ et $N_2(+h)$.

- (47) "A cette dernière question, qui est sur toutes lèvres, le bureau politique du parti phalangiste a donné une réponse pour le moins équivoque." (le 10.12.1975)

- (48) "La position 'avancée' prise par le général de Gaulle (...) a valu à la France un très grand prestige dans l'opinion et les milieux gouvernementaux irakiens, au point que (...)." (le 4.12.1974)
- (49) "Au dernier 'sommet' de l'OTAN, la France n'a nullement contesté à l'Espagne le rôle qu'a voulu - vraiment - lui reconnaître le président Ford dans la stratégie alliée." (les 26-27.6.1975)
- (50) "En outre, le fait que l'existence même d'Israël soit contestée par une partie de ses voisins, donnait à la décision soviétique une portée qu'elle n'avait pas, en entraînant l'U.R.S.S. aux côtés des pays arabes (...)." (les 7-8.9.1975)
- (51) "Les nouvelles batailles pour (...), assignent à la diplomatie des tâches relevant parfois exclusivement du 'démarchage commercial'." (le 12.2.1976)
- (52) "Aujourd'hui, des compagnies pétrolières (...) demandent à Washington le droit de prendre langue avec Hanoï." (le 25.12.1975)
- (53) "A n'en pas douter, la réconciliation saoudo-yéménite ouvre la voie à un nouveau regroupement dans la péninsule Arabique et, au-delà, dans le golfe Persique." (le 12.3.1976)
- (54) "Le fait que le voyage en France de M.Teng Hsiao-ping ait d'abord été souhaité à Paris (...) n'ôte rien à l'importance du geste." (le 13.5.1975)
- (55) "Le fait que cette démonstration intervienne à un moment (...) ajoute la vraisemblance d'une pression étrangère à toutes les certitudes accablantes qu'il faut mettre au passif de la démocratie italienne." (le 5.10.1974)
- (56) "En même temps, la presse soviétique (...) ne ménage ses critiques ni au parti de M.Souares ni au major Melo Antunes." (le 15.8.1975)
- (57) "L'ONU prête le flanc à la critique." (les 8-9.2.1976)
- (58) "Traditionnellement hostile au centralisme castillan, ayant (...), la Catalogne a depuis quarante ans posé de redoutables problèmes d'ordre au pouvoir franquiste." (le 10.2.1976)
- (59) "La grève des travailleurs du métro de Madrid soumet le gouvernement du roi Juan Carlos à sa première épreuve véritable." (le 9.1.1976)
- (60) "Le pouvoir (...) n'avait pas eu recours à la 'grande muette' lors des (...)." (le 12.9.1975)
- (61) "(...): Jérusalem ne restituera pas le Golan à Damas, ni l'ensemble de la Cisjordanie au roi Hussein ou, encore moins, à l'O.L.P." (le 28.2.1976)
- (62) "La plus vive a trait à la balance commerciale, largement excédentaire en faveur de la France." (le 20.3.1976)
- (63) "(...): le conflit le plus sérieux (...) n'oppose pas l'Est à l'Ouest; (...)." (le 2.8.1975)
- (64) "De même, le texte n'associe pas l'O.L.P. au souhait pressant de Moscou de voir (...)." (le 3.12.1974)
- (65) "(...), car 'la bataille entre les deux conceptions du monde ne laisse pas de place au neutralisme'." (le 26.2.1976)

- (66) "L'économie du pays, en revanche, ne gagnera rien à l'ascension de M.Lopez Rega, qui a bien besoin, pour (...)." (le 15.5.1975)
- (67) "Traditionnellement, elle (=la France) attache pourtant une importance égale à ses relations avec les pays frères ennemis que sont l'Inde et le Pakistan." (le 21.10.1975)
- (68) "L'Assemblée nationale turque a refusé la confiance, le vendredi 29 novembre, à l'étrange gouvernement minoritaire forme il y a douze jours par M.Sadi Irmak." (les 1er-2.12.1974)
- (69) "L'expansion vers l'Est ne constitue pas encore le remède absolu à la crise de l'Occident." (les 8-9.12.1975)
- (70) "Elle (=la France) vend même de 'la poudre et des balles' à un pays dont l'armement était (...)." (le 18.9.1975)
- (71) "(...); la compétition a fait, pour un temps, place à la coopération et (...)." (le 12.7.1975)

Dans la plupart des cas donnés ci-dessus, le datif est bien acceptable.

Comme on l'a vu dans l'examen des constructions de 4.1.1. à 4.2.4., c'est d'abord la combinabilité du prédicat verbal qui est le plus décisif pour la dativité de $\underline{a}\text{-}N_2$. Il y a des verbes qui acceptent comme troisième participant le datif ou le locatif directionnel qui appartiennent au même paradigme. Il y en a aussi qui n'acceptent que le datif, et aussi qui n'acceptent que le locatif directionnel. Si le trait "humain" peut fonctionner pour l'identification de la dativité, c'est dans le cas où le datif et le locatif directionnel sont en concurrence. Et même dans ce cas, le trait "humain" n'est qu'un des facteurs.

5. Sujet - Prédicat - $\underline{a}\text{-}N$.

Dans notre corpus, il y a 100 occurrences de cette construction. $\underline{A}\text{-}N$ en question est une expansion spécifique et non pas nécessairement un datif. Les distributions des traits "humain" et "non-humain" dans les nominaux sont comme suit:

	Occurrences	N_0	N_1
A	3	+h	+h
B	33	+h	-h
C	2	-h	+h
D	62	-h	-h
	100		

Dans N_0 - Pr - $\underline{a}\text{-}N_1$, la tendance de la distribution des traits "humain" et

"non-humain" semble claire. C'est le trait "humain" de N_1 qui est évité. Le trait "humain" ou non de N_0 ne semble donner aucune influence sur l'occurrence des constructions.

5.1. $N_0(+h) - Pr - \hat{a}-N_1(+h)$.

- (1) "Forts des résultats du référendum de décembre, (...), les cinq membres de (...) ont, dès dimanche, télégraphié à M.Giscard d'Estaing pour confirmer leur point de vue." (le 9.7.1975)
- (2) "Mais ne pense-t-il pas à ses prédécesseurs quand il dit qu'on ne bâtit pas une politique (...)?" (le 13.11.1975)
- (3) "M.Ceausescu, maître d'œuvre d'un régime intransigeant, ne ressemble en rien à M.Berlinguer, qui prône les plus larges alliances." (le 30.12.1975)

Dans (3), ressemble prend le datif, ce qui donne M.Ceausescu ne lui ressemble en rien Mais ressembler peut aussi accepter un locatif directionnel y: Cela y ressemble, non? (exemple emprunté à M.Herslund, 1988, p.208). C'est aussi le cas de télégraphier de (1). Le cas de penser est bien connu: penser ne peut prendre que $\hat{a}-N_1/ y$. (2) donne donc ... ne pense-t-il pas à eux ... ?, ce qui donne ensuite ... n'y pense-t-il pas ...? Ce genre de second participant peut être considéré comme un locatif directionnel, bien qu'il soit abstrait.

5.2. $N_0(+h) - Pr - \hat{a}-N_1(-h)$.

- (4) "A ce défi, le gouvernement a répondu par une demi-mesure: (...)." (le 9.1.1976)
- (5) "En 1978, M.Kekkonen arrivera au bout de son mandat." (le 31.5.1975)
- (6) "(...) mais elle a elle-même cédé à la peur." (le 28.6.1975)
- (7) "Les militaires du M.F.A., (...), n'échappent pas à l'emphase, aux outrances et à la naïveté pétrie de bonnes intentions." (les 20-21.7.1975)
- (8) "(...), mais M.Giscard d'Estaing, avec son approche 'mondialiste', est allé au-devant des désirs de M.Kissinger." (le 25.2.1976)
- (9) "Les uns participent au gouvernement, (...)." (le 2.12.1975)
- (10) "(...) et ils ne restent à Macao que parce que Pékin les y tolère." (le 2.1.1976)
- (11) "Après vingt et une heures de discussion, les ministres de l'agriculture des Neuf, (...), en sont revenus au point de départ (...)." (le 8.1.1976)

- (12) "Les militaires, (...), ont largement contribué à cette victoire du F.S." (les 21-22.9.1975)
- (13) "M.Arias Navarro ne manque pas à la tradition des hésitations, (...)." (les 26-27.6.1975)
- (14) "Mais les chefs des partis nationalistes ont certainement renoncé à leur exigence première." (le 13.12.1974)
- (15) "On a, tout d'abord, assisté à un retour en force, dans les corps de troupe et plus encore dans (...)." (les 4-5.1.1976)
- (16) "Par la 'révolution blanche', le chah avait procédé à une réforme agraire (...)." (le 4.2.1976)
- (17) "Répondant à une question ultérieure, le président de la République réplique vivement aux accusations d'atlantisme dont l'abreuve le parti communiste: 'C'est une sottise.'" (le 13.11.1975)
- (18) "(...), M.Teng Hsiao-ping, (...) résiste apparemment aux attaques dirigées contre lui." (le 19.2.1976)
- (19) "Convaincus qu'ils ont construit le meilleur Etat (...), trop d'Allemands réagissent, en perdant toute sérénité, au défi insensé d'une poignée de 'despaerados' (...)." (le 14.6.1975)
- (20) "Il tenait plus à la personnalité de M.Abdallah qu'au patriotisme francophone (...)." (le 5.8.1975)
- (21) "Viendra-t-on à la table d'une conférence dont le président (...) a déjà abandonné l'un des points (...)?" (le 26.10.1974)

La plupart des exemples ci-dessus n'acceptent que le locatif directionnel y. Mais les verbes mêmes acceptent, la plupart, le datif aussi dans d'autres contextes. Dans (4), par exemple, A ce défi sera pronominalisé par y, ce qui donnera le gouvernement y a répondu par une demi-mesure. Le verbe répondre accepte aussi un datif: Répondez-lui tout de suite. Pour ce qui concerne les verbes qui acceptent le datif et le locatif directionnel, on peut dire que le trait "humain" peut en partie contribuer au choix entre ces deux fonctions. Mais le trait "humain" seul ne peut plus expliquer la différence qu'il y a entre les phrases suivantes: Cette équipe de football, Paul lui a appartenu assez longtemps et Cette équipe de football, Paul y a appartenu assez longtemps (exemple de M.Herslund, 1988, p. 202). Ici, comme on le voit bien, il ne s'agit plus du trait "humain" ou non de équipe isolé du contexte.

Il y a aussi des cas qui n'acceptent que le locatif directionnel y. C'est, par exemple, le cas de participer de (9): Les uns participent au gouvernement - Les uns y participent. Dans les exemples donnés ci-dessus, il n'y a pas de verbes qui n'acceptent que le datif lui et jamais le locatif y.

5.3. N₀(-h) - Pr - à-N₁(+h).

- (22) "(...): l'initiative en revient aux Chinois." (le 24.2.1976)
- (23) "Si pourtant la 'normalisation' va moins vite à l'extérieur qu'à l'intérieur, la faute revient pour une très large part aux dirigeants de Prague, qui, sept ans après les 'événements', continuent de donner (...)." (le 14.11.1975)

Il s'agit du datif dans tous les deux cas ci-dessus, mais le verbe revenir accepte aussi le locatif directionnel y.

5.4. N₀(-h) - Pr - à-N₁(-h).

- (24) "Au soulagement d'avoir évité la guerre civile succède déjà une sourde inquiétude." (le 30.11- le 1er 12.1975)
- (25) "Sa faiblesse est apparue à l'évidence lorsqu'il a fallu, (...)." (les 1er-2.2.1975)
- (26) "Aucun élément nouveau, aucune circonstance atténuante ignorée (...) n'est dans l'intervalle remonté à la surface pour inciter à la révision." (le 9.8.1975)
- (27) "Cela correspond aux vœux des Japonais." (le 22.11.1974)
- (28) "Les réserves étaient tombées à 900 millions de dollars (...)." (le 12.11.1974)
- (29) "Mais une 'société nationale' veillera à une juste répartition des profits de (...)." (le 26.10.1974)
- (30) "L'appui donné par celle-ci au M.P.L.A. (...) ajoute aux difficultés actuelles de la 'détente'." (le 19.12.1975)
- (31) "La rencontre entre Portugais et Indonésiens organisée en novembre à Rome n'aura donc servi à rien, (...)." (le 9.12.1975)
- (32) "(...), mais l'image qu'offrait le premier ministre n'incitait pas à l'optimisme." (le 18.3.1976)
- (33) "Apparemment, l'islam intégriste voleau secours d'un marxisme intransigeant que (...)." (le 12.3.1976)
- (34) "Le sort qui sera réservé au parti communiste (...) demeure au centre du début." (le 13.12.1975)
- (35) "Sous cet aspect, la mesure prise par (...) prêtera à controverses, d'autant plus qu'elle est assortie (...)." (le 10.9.1974)
- (36) "Les arrestations toutes récentes (...) inclinent, il est vrai, à la circonspection." (les 2-3.11.1975)
- (37) "(...): selon le Pentagone, ces missiles soviétiques portent respectivement à 70 kilomètres et moins de 300 kilomètres, (...)." (le 23.9.1975)
- (38) "Ces preuves qui (...), ces révélations successives (...) aboutissent indirectement à un résultat qu'on aurait tort de sous-estimer." (le 12.2.1976)

- (39) "Il (=un chapitre nouveau) ne conduira pas nécessairement à une entrée prochaine des communistes (...)." (le 22. 7.1975)
- (40) "La menace consiste surtout, comme l'indique la mise au point (...), en une diminution des engagements américains, voire à un retrait de la protection accordée aux alliés." (le 25.2.1976)
- (41) "Le gouvernement de Mme Gandhi a passé outre également aux mises en garde de l'opposition d'extrême gauche (...)." (le 6.9.1974)

Dans les constructions à deux arguments de 5.1. à 5.4., on peut supposer 5.1. $N_0(+h) - Pr - \underline{a}-N_1(+h)$, comme fondamental, en ce qui concerne celles qui sont datives. Mais la fréquence de 5.1. est très peu élevée. Et c'est plutôt 5.4. $N_0(-h) - Pr - \underline{a}-N_1(-h)$, complètement l'inverse de 5.1. du point de vue de la "thématicité", qui est la construction la plus fréquente. Mais il faut bien voir qu'il y a beaucoup de verbes acceptant un datif dans les exemples de 5.1. et de 5.4. qui sont les constructions avec $\underline{a}-N_1(-h)$. Cela peut indiquer qu'il peut s'agir d'une certaine spécificité du corpus choisi. Du point de vue de la seconde "thématicité", on peut dire que les objets "non-humains" sont souvent choisis comme second "thème". Et du point de vue du locatif directionnel concret ou abstrait, il n'y a là aucune contradiction: le locatif sera préférentiellement "non-humain". Du point de vue de la "thématicité", on peut en effet espérer une fréquence plus élevée de 5.1. Mais en fait, 5.1. est très peu fréquent. 5.1. $N_0(+h) - Pr - \underline{a}-N_1(+h)$ est à comparer avec 4.1.2. $N_0(+h) - Pr - N_1(+h) - \underline{a}-N_2(+h)$. 4.1.2. est relativement fréquent, à la différence de 5.1. La différence qu'il y a entre les deux constructions est que dans 4.1.2., N_1 est l'objet direct tandis que dans 5.1., N_1 est en $\underline{a}$. Sémantiquement parlant, N_1 est l'élément sur lequel sera exercé directement l'acte exprimé par le prédicat verbal. A cause du manque de l'objet direct dans 5.1., c'est $\underline{a}-N_1$, qui est un objet indirect (locatif ou datif), qui assume ce rôle. En observant les fréquences de toutes les constructions à trois ou deux arguments données ci-dessus, il faut bien reconnaître que c'est le $N_1(+h)$, qu'il soit un objet direct ou une expansion spécifique en $\underline{a}$ (datif ou locatif), qui baisse la fréquence. Il semble que ce soit plutôt le trait "humain" ou "non-humain" de N_1 , qu'il soit un objet direct ou en $\underline{a}$, — et non la "thématicité" de $\underline{a}-N_1$ — qui explique grosso modo les fréquences de 5.1. à 5.4.

6. Conclusion

Ci-dessus, nous avons examiné les constructions à trois arguments dans 4. et celles qui ont deux arguments dans 5. L'existence d'un objet direct

rend bien plus complexes les constructions de 4. que celles de 5. Et comme on l'a déjà vu, la présence de l'objet direct semble constituer une des clefs qui expliquent les fréquences variées des constructions classées ci-dessus.

Tout d'abord, ce qu'il faut remarquer à travers toutes les constructions, c'est que celles avec N_1 "humain", qu'il soit un objet direct ou indirect en $\underline{\text{à}}$ (datif ou locatif directionnel), sont relativement peu fréquentes. Ce fait même en tant que tel peut refléter une des caractéristiques du corpus choisi. Sémantiquement parlant, on peut dire que N_1 (qui est l'élément sur lequel sera directement exercé l'acte exprimé par le prédicat) est préférentiellement "non-humain" dans notre corpus.

Ensuite, pour les constructions de 4. qui ont trois arguments, nous avons proposé comme construction fondamentale hypothétique celle de 4.1.2. $N_0(+h) - \text{Pr} - N_1(-h) - \underline{\text{à}} - N_2(+h)$. Le schéma sémantique fondamental est celui où un acte qui sera exercé sur un "non-humain" s'établit entre un "humain" qui exerce l'acte et un autre "humain" par rapport auquel l'acte est exercé. il ne faut pas oublier que c'est le schéma fondamental supposé pour la construction avec un datif. Cette hypothèse est valide seulement pour les verbes qui acceptent un datif. Pour les verbes qui n'acceptent jamais de datif comme habituer, par exemple, $\underline{\text{à}} - N_2$ sera toujours un locatif directionnel, que N_2 soit "humain" ou non. Mais il y en a beaucoup qui acceptent un datif parmi les verbes à trois arguments. Et pour les constructions de ces verbes, le trait "humain" ou non peut exercer une certaine influence sur le choix entre datif et locatif directionnel de $\underline{\text{à}} - N_2$. Mais comme on l'a souvent vu, ce n'est pas le trait "humain" ou "non-humain" de N_2 isolé qui est décisif. Et c'est là qu'intervient le facteur de "thématicité" de $\underline{\text{à}} - N_2$. Cette "thématicité" ne s'établit bien sûr qu'étroitement en relation avec le prédicat. Et pour que $\underline{\text{à}} - N_2$ soit reconnu comme le second "thème" (après le premier "thème" de N_0), il est possible que le trait "humain" ou non de N_0 et/ou de N_1 exerce une certaine influence. $\underline{\text{à}} - N_2$ peut être pronominalisé par lui, et dans ce cas il sera considéré comme un datif. Et dans le cas où il est pronominalisable par y, il sera considéré comme un locatif directionnel. La distinction entre lui et y constitue un critère formel et dans cette mesure cette distinction est importante. Et les facteurs qui soutiennent cette distinction pourront servir à expliquer d'autres emplois de lui et de y dans d'autres constructions (cf. L.M.Hyman et K.E.Zimmer, 1976, J.Bailard, 1982, R.S.Kayne, 1983, M.Herslund, 1983, Y.Tsuruga, 1992). Mais ce sur lequel nous voudrions insister ici, c'est que le datif et le locatif

directionnel en question, qui peuvent se distinguer par lui et y, appartiennent au même paradigme et ne sont pas compatibles sans coordination autour d'un seul noyau et que dans cette mesure ils doivent être considérés comme représentant une même fonction syntaxique, au moins à un certain niveau d'abstraction.

Enfin, pour ce qui concerne les constructions de 5. qui ont deux arguments, on a vu que le facteur de "thématicité" ne peut pas expliquer grand chose, parce qu'il y manque un objet direct. N_1 existe bien, mais c'est en tant qu'une expansion spécifique autonomisée par à. Ce à- N_1 peut être un datif ou un objet indirect locatif directionnel. Comme on l'a déjà vu, à cause du manque de l'objet direct, c'est sur ce à- N_1 même que sera directement exécuté l'acte exprimé par le prédicat. Dans les constructions à trois arguments, l'objet direct N_1 est l'élément sur lequel sera exercé l'acte en question. Et c'est ce qui convient bien au schéma supposé comme fondamental. L'objet direct N_1 est là préférentiellement "non-humain". Mais dans les constructions à deux arguments, c'est en quelque sorte, à- N_1 , forme indirecte, qui correspond à N_1 , forme direct, de constructions à trois arguments. C'est ainsi que dans les constructions de 5., N_1 de à- N_1 , que à- N_1 soit datif ou locatif, est préférentiellement "non-humain". Bien sûr cela peut refléter une des caractéristiques de notre corpus. A cause de ce fait, pensons-nous, il n'y a pas grand chose à dire du point de vue de la "thématicité" de à- N_1 pour les différentes fréquences des constructions à deux arguments. Pour ces constructions aussi, il ne faut pas oublier que à- N_1 , qu'il soit datif ou locatif directionnel, constitue bien un seul et même paradigme et que dans cette mesure il représente une même fonction syntaxique.

Bibliographie

- BAILLARD, Joëlle : "The Interaction of Semantic and Syntactic Functions and French Clitic Case Marking in Causative Sentences", dans Paul J.Hopper et Sandra A.Thompson (éd.), Syntax and Semantics, Studies in Transitivity, vol.15, New York, Academic Press, 1982, pp.49-69.

- BARNES, Betsy K. : The Notion of 'Dative' in Linguistic Theory and the Grammar of French, these de PhD, Indiana University Press, 1979 (polycopiée).
- BLANCHE-BENVENISTE, Claire : Recherches en vue d'une théorie de la grammaire française, Essai d'application à la syntaxe des pronoms, Paris, H.Champion, 1975.
- BUSSE, Winfried et DUBOST, Jean-Pierre : Französisches Verblexicon, Stuttgart, Ernst Klett, 1983.
- COUQUAUX, Daniel : "Sur une incompatibilité de pronoms clitiques en français", Lingvisticae Investigationes II, 1978, pp.211-214.
- FRANÇOIS, Frédéric : "De l'autonomie fonctionnelle", La Linguistique, 6-1, 1970, pp.5-21.
- HERSLUND, Michael : "Le datif de la possession inaliénable en français", Analyses grammaticales en français, Revue romane, numéro spécial, 24, 1983, pp.99-115.
- : Le Datif en français, Louvain-Paris, Ed.Peeters, 1988.
- HUFFMAN, Alan : "Government of the Dative in French", Lingua 60, 1983, pp.283-309.
- HYMAN, Larry M. et ZIMMER, Karl E. : "Embedded Topic in French", dans Charles N. LI (éd.), Subject and Topic, New York, Academic Press, 1976, pp.189-211.
- KAYNE, Richard S. : "Le datif en français et en anglais", Analyses grammaticales en français, Revue romane, numéro spécial, 24, 1983, pp.86-98.
- MARTINET, André(dir.):Grammaire fonctionnelle du français, Paris, Crédif-Di-dier, 1979.
- POSTAL, Paul M. : "Un cas de non-cliticisation", Lingvisticae Investigationes IV-1, 1980, pp.213-215.
- SEELBACH, Dieter : "A propos d'un à-datif en français", dans Sylvianne Rémi-Giraud et Michel Le Guern (dir.), Sur le verbe, Lyon, PUL, 1986, pp.133-167.
- TSURUGA, Yoichiro : "Le paradigme du second complément du verbe mettre", Studies in Humanities 65, Université de Niigata, 1984, pp.27-60.
- : "Le datif et le locatif directionnel", Area and Culture Studies 43, Université des Langues Etrangères de Tokyo, 1991, pp.143-154.
- : "La compatibilité fonctionnelle du datif", Area and Culture Studies 44, Université des Langues Etrangères de Tokyo, 1992, pp.177-188.
- : "Quelques remarques sur les positions relatives des pronoms atones en français", Gengo Kenkyu (Etudes linguistiques) II, Université des Langues Etrangères de Tokyo, 1992, pp.26-41.
- VOGT, Hans : "L'étude des systèmes de cas", TCLC V, 1949, pp.112-122.

I. 「格」の表示形態

ドイツ語の「格」は、1格、2格、3格、4格の4種類からなり、文中の名詞はかならずいずれかの格を持つ。格に応じて名詞句の構成素（冠詞、付加語、名詞）の形態（語尾）の変わることを格変化と呼ぶ。以下、ドイツ語の格表示に関するいくつかの問題点を述べる（注1）。

1. 一覧表

格は、次に示すように、男性単数、女性単数、中性単数および複数に応じて異なる形態を示す。格表示そのものは、名詞の語尾変化よりも、冠詞類（あるいは付加語形容詞）によって主に表示される。名詞自身は、男性・中性2格および複数3格で語尾が付与されるだけである。

	男性	女性	中性	複数
1 格	der Vater	die Frau	das Buch	die Bücher
2 格	des Vaters	der Frau	des Buches	der Bücher
3 格	dem Vater	der Frau	dem Buch	den Büchern
4 格	den Vater	die Frau	das Buch	die Bücher

2. 格表示の、名詞からの移行

ドイツ語の格表示は名詞句の「核」である名詞によってよりも、冠詞類（あるいは付加語形容詞）によって担われているわけであるが、この移行の前提条件になる現象として3つの要因が挙げられる。第1の要因は、「自由アクセント」から「固定アクセント」への移行である。ドイツ語では2、3世紀の頃にこの移行が行われたと言われる。第2の要因は、「総合的言語」から「分析的言語」への移行である。この現象は格表示のみならず、前置詞の出現、能動態、完了形の助動詞構造化などにも見られる。第3の要因は、「格表示1箇所（Monoflexion）主義」の流れである。「格表示1箇所主義」とは、名詞であろうが、冠詞類であ

ろうが、付加語であろうが、とにかく名詞句のどれか一構成素によって格表示がなされればよいとするものである。これは「言語経済性」に基づくものと言えよう。

3. 格表示における曖昧性と示唆性

格表示は、形態的に一義的に区別されることもあれば、区別されないこともある。たとえば（男性単数を除き）1格と4格の表示形態は同一である。他方、3格と4格、および（女性単数を除き）2格と他の格は明示的に区別されている。

3. 1. 問題提起

以上の現象に関して、次のような問題提起が可能である。格表示上、

（イ）1格と4格は形態が同一でも支障がないのか。

（ロ）次の両者はなぜ区別される必要があるのか。

（a）3格と4格

（b）2格と他の格

3. 2. 解釈の試み

（イ）1格と4格が形態的に同一であっても格表示にとって支障がない理由として次の点が挙げられる。

その一つは「文肢配列」の問題である。たしかに1格と4格が並列することもあるが、ふつう1格と4格は、動詞を中心として主語分野と述語分野に分かれる（W. Schmidt: Grundfragen der deutschen Grammatik 1966 を参照）。

（1）Die Frau liebt das Kind.

その女性は子供を愛する。

もう一つは「テーマレーマ」構造の問題である。1格はふつう情報構造の「テーマ」を担うものであり、したがって文頭に置かれるかあるいは代名詞によって表示されるのである。

D. Zubin (Discourse Function of Morphology: The focus system in German 1979) は、次のように述べている：

Hypothese III：

The more frequently an entity is mentioned in discourse, the more frequently (in percentages) it will appear in the nominative case as opposed to an oblique case.

Hypothese IV：

In describing the content of a stretch of discourse, a speaker will tend to place in the nominative case the entity that is mentioned

most often.

(ロ) 格表示上、3格と4格および2格と他の格はかならず区別されると述べたが、3格と4格の形態的区別に関して言うならば、3格と4格は共に述語分野に現れ、順序は自由であるという点が挙げられよう。両者は分野的に同一であり、語順に関しても自由であるため、形態的に区別される必要があるのである。

(2) Ich schenke dem Freund eine Blume.

私は友人に花を贈る。

(3) Ich schenkte die Blume einem Freund.

私は花を友人に贈った。

なお、3格と1格は形態的に区別されるのみならず、1格と4格の関係に準じ、現れる統語分野においても相違する。

2格と他の格との形態的区別に関して言うならば、2格は付加語として他の格の語句と結び付くという点が挙げられある。2格付加語は、他の語句と並列的に用いられるため、形態的な区別が不可避なのである。

(4) Der Hut des Vaters liegt auf dem Tisch.

父親の帽子はテーブルの上にある。

(5) Der Hut liegt auf dem Tisch des Vaters.

帽子は父親のテーブルの上にある。

なお、女性単数においては、2格と3格が形態的に同一であるが、この結合に関して実際の不便はないのであるが、その点を説明するために、付加語的2格の用法を少し概観してみる必要がある。4つのテキストにおける付加語的2格がどの格形と共に用いられるかを統計的に調べた調査結果によると(注2)、次のような結果が出ている。なお、上段のA B C Dはそれぞれ調査したテキストの種類を、数字は事例数を表している。

	A	B	C	D	合計
1 格	46 (29.5%)	12 (25.0%)	9 (50.0%)	14 (42.4%)	: 81
2 格	11 (2.0%)	1 (2.1%)	0 (0.0%)	1 (3.0%)	: 14
3 格	59 (37.9%)	14 (29.2%)	4 (22.0%)	7 (21.2%)	: 84
4 格	40 (25.6%)	24 (43.8%)	5 (27.8%)	11 (33.3%)	: 70
合計	156	48	18	33	

以上の結果は、2格が他の2格に付加語として用いられることがあまりないことと共に、3格にはかなり頻繁に付加語として用いられていることを示している。このことは2格と3格の形態的区別の必要性を示しているのであるが、ここで視点を少し変え、自立格としての3格（すなわち前置詞を伴わない3格）と前置詞格としての3格（すなわち前置詞を伴う3格）に分けて数値を調査すると、次のような結果になる。

	A	B	C	D	合計
自立格	3	0	0	0	3
前置詞格	56	14	4	7	81

この表からすぐ分かるように、2格が付加語として用いられる3格はほとんどすべてと言ってよいほど前置詞格としての3格であり、両者の区別にとって形態的相違は決して不可欠とは言えないのである。

II. 「格」の統語的機能

「格」の統語的機能は、文肢としてのもの、付加語としてのもの、前置詞に支配されるものの3つに大別できる。次に、前2者の統語的機能を述べることにする。

1. 一覧表

1. 1. 【1格】

(a) 主語

Der Mann drückt auf den Knopf.

その男はボタンを押す。

(b) 主語述語

Er ist ein Lügner.

彼は嘘つきだ。

(c) 呼びかけおよび名詞を脈絡なく挙げる形式

Komm, Vater !

来て、お父さん！

ein schöner Tag

よき日

1. 2. 【2格】

(a) 目的語（文語的）

Man klagt ihn des Massenmordes an.

彼は大量殺人の罪で起訴される。

Er ist aller Sorgen ledig.

彼は何の心配もない。

(b) 述語

Der Lehrer ist guter Laune.

先生は機嫌がよい。

(c) 副詞類

Er reist zweiter Klasse.

彼は二等で旅行する。

Eines Tages lief er von zu Hause fort.

ある日彼は家から出て行った。

(d) 付加語（注3）

Sie besuchen die Unviersität der Hauptstadt.

彼らは首都にある大学を訪れる。

1. 3. 【3格】

(a) 目的語

Das Publikum lauschte dem Redner.

聴衆は講演者の話に耳を傾けた。

Der Sohn ist seinem Vater ähnlich.

息子は父親に似ている。

(b) 副詞類

利害の3格（主語の行為、出来事と利害関係にある人物を表すのに用いられるもので、多くの場合、für 前置詞句によって置き換えることができる。）

Er öffnet der Frau die Tür.

彼は婦人のためにドアを開ける。

Mir ist die Kanne heruntergefallen.

私はボットを落してしまった。

所有の3格（主語の行為、出来事が及ぶ対象物と所有関係にある人物を表すのに用いられる。）

Wir waschen uns die Hände.

私たちは手を洗う。

Meinem Vater schmerzt der Kopf.

私の父は頭を痛がる。

Er sieht dem Kind in die Augen.

彼は子供の目を見る。

関心の3格（主語の行為、出来事に対する話し手の関心、あるいは聞き手の関心を引くためのもので、命令文などに用いられる。1人称か2人称の代名詞に限定されている。）

Grüß mir die Eltern !

両親によろしく。

Das war dir eine Lust !

それは実におもしろかったよ。

判断の3格（当該の事柄の判断基準になる人を表すのに用いられる。）

Die Aufgabe ist dem Schüler zu schwer.

課題はその生徒には難しすぎる。

Dieses Problem ist meinem Freund wichtig.

この問題は私の友人には重要だ。

1. 4. 【4格】

（a）目的語（注4）

Er schreibt dem Freund einen Brief.

彼は友人に手紙を書く。

Dieser Versuch ist die Mühe wert.

この試みは努力するだけの価値がある。

（b）目的語述語

Er schilt das Mädchen eine Lügnerin.

彼はその少女を嘘つきだとののしる。

（c）副詞類

Es hat den ganzen Tag geregnet.

一日中雨が降っていた。

Sie ist letzte Nacht gestorben.

彼女は昨夜死んだ。

（d）不定詞の意味上の主語

Er hört den Arzt kommen.

彼は医者が来るのを聞く。

Er sieht den Lehrer das Buch lesen.

彼は先生が本を読むのを見る。

2. 3格と4格の統語的機能の比較

3格と4格は、他動詞の目的語としていくつかの対立する統語的機能を示す。

次に、それらについていくつかの問題点を述べる。

2. 1. 単独で目的語として用いられる場合、4格は他動的行為の全面的な受け手を表すのに対して（例文6）、3格は他動的行為の、4格の場合よりも弱い受け手を表す（例文7）。

（6）a. Der Hund beißt den Briefträger.

犬は郵便配達人を噛む。

b. Der Schüler schlägt den Lehrer.

生徒は先生を殴る。

（7）a. Er hat ihr freundlich geantwortet.

彼は彼女に親しく応えた。

b. Er hat dem Kellner mit der Hand gewinkt.

彼はボーイに手で合図した。

したがって、次の例の場合、4格を持つ bedrohen は武器（たとえばピストルなど）による直接的な威嚇行為を表すのに対して、3格を持つ drohen は言動などによる間接的な威嚇行為を表す。

（8）a. Er droht mir mit dem Finger.

b. *Er bedroht mir mit dem Finger.

（9）a. Er bedroht sie mit einer Pistole.

b. *Er bedroht sie mit einer Pistole.

また、3格目的語は、上例のように、行為の到達点を表すだけでなく、移動の出発点を表す（例文10）。したがって、方向を表す接頭辞 bei-, ent-, entgegen-, nach-, vor-, wider-, zu- などを持つ分離動詞の目的語としてもよく用いられる（例文11）。

（10）a. Der Gefangene konnte den Wächtern entfliehen.

その囚人は看守たちから逃亡することができた。

b. Die Polizei hat ihm den Führerschein entzogen.

警察は彼から運転免許証を取りあげた。

（11）a. Viele wohnten dem Fest bei.

多くの人が祝祭の催しに列席した。

b. Das entspricht nicht der Wahrheit.

それは真実に対応しない。

c. Sie kam mir auf der Treppe entgegen.

彼女は階段のところで私の方に向かって来た。

d. Er geht der Spur eines Tieres nach.

彼は動物の足跡を追う。

- e. Er beugte dadurch einer Ansteckung vor.

彼はそれによって感染を予防した。

- f. Er widersprach dem Redner heftig.

彼は弁者に激しく反論した。

- g. Er hörte meinen Worten aufmerksam zu.

彼は私の言葉に注意ぶかく耳を傾けた。

2. 2. 目的語として並列的に用いられる場合、4格は行為の直接的受け手（あるいは引き起こされた移動の担い手）を、3格は行為の間接的受け手（あるいは移動の着点ないし起点）を表す。

- (12) Er empfahl seinem Freund seinen Hausarzt.

間接的 直接的

彼は私に彼のかかりつけの医者を勧めた。

- (13) Er bietet dem Freund eine Zigarette an.

着点 移動物

彼は友人にタバコを一本あげる。

- (14) Er raubte der alten Frau einen Koffer.

起点 移動物

彼は老女からトランクを盗んだ。

2. 3. 同一の表現パターンで対立的に用いられる場合、4格は直接的に働きかけられる相手・事柄の担い手を、3格は関連する項を表す。

- (15) a. Er hat mich dazu bewogen, die Anzeige zurückzuziehen.

彼は私の心を動かし、告訴を取り下げさせた。

- b. Er hat mich dazu gezwungen, die Wahrheit zu sagen.

彼は私に無理に真実を言わせた。

- (16) a. Er hat mir befohlen, mit ihm zu kommen.

彼は私に彼と行くように命じた。

- b. Er hat mir empfohlen, meinen Urlaub im Süden zu verbringen.

彼は私に休暇を南で過ごすのがよいと勧めた。

この両者の相違は、日本語の「ヲ」と「ニ」の対立の中にも見ることができる。

- (17) a. 父親は娘に町に行かせた。

- b. 父親は娘を町に行かせた。

2. 4. 以上のような事例が示すように、主語の他者への行為を表す表現におい

て、3格と4格の間には一定の相違が認められる。すなわち、4格は、主語の行為の直接的対象物という側面と、それによって引き起こされる事柄における担い手という側面とを持つものに対して、3格は、主語の行為の間接的対象物（あるいは関連項）という側面を持つ。

〔項的〕 〔事柄〕

4格：直接的対象物 ・ 事柄の担い手

3格： 間接的対象物（関連項）

2. 5. 以上のような仮説を裏付ける言語事象として、次のような点を挙げることができるであろう。

2. 5. 1. 【4格】

（イ）結果挙述の形容詞の構文で変化の担い手を表す項として用いられる。

（18）Er schleift das Messer scharf.

彼はナイフを研いで鋭くする。

（19）Er ißt die Teller leer.

彼は皿を平らげる。

（ロ）派生表現で変化の担い手を表す項として用いられる。

（20）Er schüttelt die Äpfel vom Baum.

彼はリンゴを揺すり落とす。

← Er schüttelt den Baum.

彼は木を揺する。

（21）Er klopft den Schnee von den Schuhen.

彼は雪を靴から叩き落とす。

← Er klopft ihr auf die Schulter.

彼は彼女の肩を叩く）

参照：a. Er schlägt den Mann.

b. Er schlägt den Mann tot.

c. Er schlägt den Hut vom Kopf.

（ハ）事柄的变化を表す動詞語義で変化の担い手を表す項として用いられる。

（22）Er tötet den Mann.

彼はその男を殺す。

(23) Er lädt die Pistole.

彼はピストルに弾丸をつめる。

2. 5. 2. 【3格】

(イ) 利害の3格、所有の3格、関心の3格、判断の3格などとして事柄に対する話者の心的関連を表すのに用いられる。

(24) a. Er trägt der Mutter den Koffer.

彼は母親のためにトランクを持ってやる。

b. Er wäscht ihr die Hände.

彼は彼女の手を洗う。

c. Falle mir nicht !

転ばないで !

d. Die Aufgabe ist dem Schüler zu schwer.

課題はその生徒には難しすぎる。

(ロ) 4格は述語的付加語を伴い事柄を構成することがあるが、3格は述語的付加語を伴い事柄を構成することがない。

(25) a. Wir treffen ihn in einem schwarzen Anzug.

b. Wir begegnen ihm in einem schwarzen Anzug.

【注】 -----

1 : ドイツ語の名詞句の形態は4つ以上あるが(冠詞に限って見ても der -, des -, dem -, den -, die -, das - の6種類がある)、文中での統語的機能に基づく場合、4つのグループに分かれる。たとえば den Mann/die Frau/das Kind という三つの異なった形態は共に動詞 besuchen の4格目的語として用いられるのである。

	den Mann.		その男性	
Wir besuchen	die Frau.	私たちは	その女性	を訪れる。
	das Kind.		その子供	

名詞句の形態の、このような統語的機能に基づく4つの範疇をそれぞれ1格、2格、3格、4格と呼ぶ。格は名詞(代名詞)の、文中での働きを示す形態範疇である。

2 : A、B、C、Dはそれぞれ I. Dal: Sytemerhaltende Tendenz in der deutschen Kasusmorphologie、H. Böll: Der Mann mit dem Messern 1948、M. Frisch: Herr Biedermann und die Brandstifter 1952、Gespräch in "Der

Spiegel" Nr.23 1982 である。

3：意味的に見た場合、2格付加語は色々な意味関係が認められる。たとえば、次例では2格付加語は名詞に対して主語の関係にある：

die Kollision eines Schiffes mit einem Eisberg
船と冰山との衝突

Er lauschte dem Rieseln des Baches.

彼は小川のせせらぎに耳を傾けた。

また、次例では2格付加語は名詞に対して目的語の関係にある。

Der Verkauf des Grundstücks war notwendig.

この土地は売らざるをえなかった。

Der Kommissar leitete die Untersuchung des Mordfalls.

警部は殺人事件の捜査の指揮をとった。

注4：動詞に支配される4格目的語ではあるが、目的語としての自立性が弱く、副詞的性格が強いものとして、次の2つがある。

(a) 前つづりの4格名詞

Er fährt Auto.

彼は自動車を運転する。

Sie schreibt Maschine.

彼女はタイプを打つ。

Er steht Wache.

彼は見張りについている。

(b) 同族目的語（内在目的語とも呼ばれ、付加語を必ず伴う）

Er starb einen Heldentod.

彼は英雄的な死を遂げた。

Er lebt ein glückliches Leben.

彼は幸せな生活を送る。

Er hat einen herrlichen Traum geträumt.

彼は素晴らしい夢を見た。

Ich habe einen aussichtslosen Kampf gekämpft.

私は勝算のない戦いをした。

石井哲士朗

はじめに

名詞がある特定の格において複数の形態をもつ場合、それらの形態間の関係にはいくつかのタイプが存在する。男性名詞の単数主格を例に検討してみよう。

まず最初に、1つの形態だけが文語的規範として認められ、他の形態は誤りとされるケースがある。たとえば、話し言葉で聞かれる *swetr, kiossek, wiater, łabadź, zręb, kłęb, mól, kołowrot* などは、規範辞典によればいずれも誤りで、それぞれ *sweter* (セーター), *kiosk* (売店), *wiatr* (風), *łabędź* (白鳥), *zrąb* (骨組み), *kłęb* (もつれ), *mól* (シミ), *kołowrót* (ウインチ) の形態だけが正しいとされる。従ってこのケースにおける形態間の関係は、一方が規範で、他方は規範からの逸脱ということになる。

次に、形態間に意味上の区別がある場合がある。たとえば、*krag* と *kręg* を見てみよう。両者はこの単数主格こそ語幹母音を異にするが (a/ę), 単数生格以下は *kręgu, kręgowi...* と同一のパラダイムをもつ。しかし、*krag* は「円, 輪, サークル」の意味であり、*kręg* は「椎骨, 脊椎」の意味であるから、この両形は別の語彙素の単数主格形として扱い、単数生格以下の形態間にはホモニミーが生じている、と解釈しなければならない。

ところが、同じように語幹母音を異にしても *zaprząg* と *zaprzęg* の場合は別の語彙素の単数主格と見なすわけにはいかない。というのも、どちらも「乗馬につなぐ馬; 馬をつけた乗り物」の意味だからで、この両形は、言語使用者の慣用ないし好みの問題を別にすれば、まったく平等に扱われる。しかも、単数生格以下には形態的なバリエーションは存在しない。従ってこのケースにおける単数主格の2つの形態は、互いに自由な任意的変異体になっている。

さらに、語彙的意味は同じでも、文体的ニュアンスを異にする場合がある。たとえば、*doktor* と *doktór* は語幹末の母音が違うが (o/ó), 「博士

；医者」という意味は共通している。しかしながら，このケースは前のタイプに含めることはできない。なぜなら，doktorが文体的にニュートラルな形態であるのに対し，doktórの方はもっぱら話し言葉で用いられ，口語体に特有のやや精確さを欠く形態であると，一般に見なされているからである。従ってこの場合は，基本変異体 doktor に対し文体的変異体 doktór が存在する，と説明するべきであろう。

以上，男性名詞の単数主格を例に，複数の格形態の間に見られる関係として4つのタイプを指摘したが，本稿では最後のタイプ，すなわち基本的変異体のほかに文体的変異体が存在するケースを取り上げ，現代ポーランド語の名詞の屈折体系における文体的変異体の分布状況を概観する。

1. 男性名詞の場合

1-1. 単数主格

男性名詞単数主格における文体的変異体の例は少なく，文献6は前述の doktor/doktór のほかには fosfor/fosfór (隣) だけを挙げ，どちらの場合も母音óを伴う形態の方を，話し言葉に特有の精確さを欠く俗語的形態と説明している。文献2によれば，doktórは主として「医者」の意味で用いられる俗語であり，fosfórは方言，つまり地方的変異体である。

単数主格の語幹にóを伴う形態は，このほかの dyrektor, profesor など，規範辞典が誤りと判断しているケースも含めて，一部の男性名詞の単数主格とその他の格の間に見られる母音交替ó/oからの類推に因ると思われる。cf. stół (テーブル), 単生 stołu; pokój (平和), 単生 pokoju; ozór (タン), 単生 ozora.

1-2. 単数生格

周知の通り，男性名詞の単数生格には -a と -u の2種類の語尾が見られる。通常，いわゆる活動体名詞はすべて -a 語尾をとるが（例外は -u 語尾をとる wół (雄牛) と bawół (水牛) の2語），不活動体名詞はその語の形態論的ないし意味論的特徴によつて，-a または -u どちらかの語尾をとる。ところが若干の不活動体名詞は -a, -u 両方の語尾をとる。

たとえば，dwór (屋敷), wóz (荷車), dąb (オーク) などにはふつう -u 語尾をと

るが、俗語的な慣用句の中では-a語尾が現われる。例：fora ze dwora (とつと失せろ), przyszła koza do woza (今頃のこのこ助けを求めてきたぞ), stawać dęba ((馬が)後足で立つ; 反抗する)。

文献6は-a語尾の俗語性を示す根拠として、skok (跳躍) が-u語尾しかもたないのに、その類義語で俗語的語彙に属す szus (滑降) は-a, -u両方の語尾をとる、という事実を挙げている。さらに、両方の格語尾を許容する場合でも、-a語尾は書き言葉より話し言葉で多用され、しかも表現力に富み、かつ情動的特徴を帯びた形態と見なされる。例：Nigdy nie było żadnego szwindla! (インチキなんぞあったためしがない)

結論として、男性不活動体名詞の単数生格がバリエーションをもつ場合、-u語尾は基本的変異体、-a語尾は情動的ニュアンスを含んだ文体的変異体であると言えることができる。

1-3. 単数与格

現代ポーランド語ではほとんどすべての男性名詞が単数与格で-owi語尾をとり、伝統的な-u語尾をとるのは、pan (男性), ojciec (父), chłopiec (少年), pies (犬), kot (猫) など、ごく少数の卑近な、従って使用頻度の高い語に限られる。文献8は両方の語尾をとりうる語として kat (死刑執行人) と osioł (ロバ) の2語を挙げているが、これはおそらく任意的変異体として扱うべき例であろう。

文体的変異体になると思われるのは、文献6が指摘している次のような興味深いケースである。

すなわち、-ówに終わる都市名を示す語は、前置詞 ku (. . . の方へ) とともに用いられる場合に限って、-owiと-uの両方の語尾をとる。たとえば、Kraków (クラクフ) : ku Krakowowi / ku Krakowu, Tarnów (タルヌフ) : ku Tarnowowi / ku Tarnowu。この現象は文献2の該当項目によって外国の都市名についても確認できる。例：Kijów (キエフ) : ku Kijowowi / ku Kijowu。前置詞 ku そのものが書き言葉に属する語彙であり、話し言葉ではめったに使われないことから、ここでは-u語尾の方を文体的変異体と呼ぶことになる。

1-4. 単数呼格

ここでは2つの興味深い現象がみられる。ひとつは、「呼びかけ機能を

引き継いだ主格による呼格追い落とし³⁾の現象で、これは後述するように女性名詞の場合にも観察される。男性名詞の場合、この追い落としを免れているのは pan (…さん、様), obywatel (…さん、殿), towarzysz (同志), kolega (同僚) など、呼びかけの基礎となり、指標となる少数の敬称に限られる。

文献 6 はこのほかに、cham (がさつ者), łotr (恥知らず), łajdak (悪党) などの悪態語を、主格の拡張が著しい話し言葉に現われるにもかかわらず、本来の呼格形を保持している語のグループに加えている。これに対し文献 8 は、悪態語が本来の呼格形で用いられるのは、主として人称代名詞 ty に先行される場合であって (ty chamie!, ty łotrze!, ty łajdaku!), 街中の俗語では主格形が頻繁に聞かれるとしている。これ以外の語彙においては、一般的傾向として、本来の呼格に代わる主格の進出が確認できる。

まず、姓 (ここで問題になるのは子音で終わるタイプ) が単独で用いられるケースでは、本来の呼格は詩や演説のような、書き言葉的性格をもった文体に限られる。例: Mickiewiczu, gdybyś dożył naszych dni! (ミツキエヴィチよ、君が現代まで生きながらえてくれたなら!) これに対し俗語では主格の使用が一般的である。もっとも、呼びかけに姓だけを用いるのは、主として学校や職場内で聞かれる呼びかけで、通常の社交では優雅さに欠けると見なされる。従ってこの主格形のバリエーションは、話し言葉の社会的変種に属すると考えられる。

これに対し、名前 (ファーストネーム) が単独で呼びかけに使われる場合は、文語では本来の呼格形の使用が規範とされる (słuchaj, Andrzej! (あのね、アンジェイ))。俗語では主格の交替形も許されるが、精確さに欠けるくだけた調子というニュアンスが伴う (słuchaj, Andrzej! (同上))。なお、語幹が軟子音に終わる愛称語だけは例外で、もっぱら呼格が用いられ、主格の交替形をもたない (zaczekaj, Jasiu! (待て、ヤシ))。

次に、姓や名が pan, obywatel などの敬称とともに用いられる場合を見てみよう。この場合も、姓と名のとる形態には違いがある。

敬称の後に姓が続く場合、敬称は呼格で使われるが、姓そのものはふつう主格のまま呼格にはならない (panie Nowak! (ノヴァクさん), obywatelu Kozakiewicz! (コザキエヴィチさん))。ただ文献 8 によれば、《敬称+姓》の形式は俗語に限られ、時として丁寧すぎる嫌いがある。

一方、《敬称+名前》や《敬称+役職名》の場合はどちらも呼格形になる (panie Andrzej! (アンジェイさん), panie dyrektorze! (所長さん))。形容詞の定語が先行する場合も同様である (drogi Andrzej! (親愛なるアンジェイ))。このケースで名前の方を主格にする言い方 (たとえば panie Andrzej!) は、文献 6 によれば社会的変種、文献 8 によれば都市方言に属

す形式で、いずれにしても標準文語では許容されない。

さらに、親族名称の場合も呼格の優位が認められる (tatusiu!(パパ), wujku!(おじちゃん))。主格の出現はきわめてくだけた俗語体に限られる。

男性名詞単数呼格にみられるもうひとつの興味深い現象は、-ecに終わる人間名詞に観察される、伝統的語尾-eと新しい語尾-uの競合である。伝統的語尾が定着し、従って文体的にニュートラルと言えるのは, ojciec(父), chłopiec(少年)などごく少数の語にすぎない。głupiec(愚か者), kupiec(商人), wisielec(首吊り死体)などでは、新しい語尾との競合が生じており (kupcze!/kupcu!, głupcze!/głupcu!, wisielcze!/wisielcu!), その古い伝統的な語尾を伴う形態は、古めかしさが感じられる文体的変異体になっている。ところが, stocznowiec(造船労働者), metalowiec(金属労働者), sportowiec(スポーツ選手)など比較的新しい語彙の場合は、伝統的な語尾のもつ荘厳さとこれらの語の意味に備わった日常性がちぐはぐになるので, stocznowcze! metalowcze! sportowcze! などの形態は滑稽に聞こえることになる。この競合は未だ規範的解決を見ていないが、屈折体系の無用の錯綜を排除しようとする俗語の傾向(すなわち新しい)が、早晚、勝利を収めるものと予想される。⁴⁾

1-5. 複数主格

ここではいわゆる男性人間名詞に2つの興味深い現象が観察できる。

まず、男性人間カテゴリーの一義的な指標である-owie語尾をもつ形態と、他の語尾をもつ男性人間形が交替で出現する語の存在が注目される。たとえば, profesorowie/profesorzy(教授), wirtuozowie/wirtuozi(巨匠), biologowie/biolodzy(生物学者)。この場合、-owie語尾を伴う形態には厳粛さや優雅さが感じられるのに対し、-i/-y語尾の方には俗語的なニュアンスが含まれる。従って、たとえばスピーチなどでは前者が好んで用いられる。文献6によれば、一部の語ではすでに、-owie語尾の優位が決定的で、-i/-y語尾の使用頻度が減っている。cf. oficerowie/oficerzy(将校), majsterowie/majsterzy(親方)。

次に、男性人間名詞の複数主格が、非男性人間名詞に特有の語尾をとるケースが挙げられる。たとえば, chłop(農民)が複数主格で、男性人間形としての規範形である chłopieではなく、 chłopyという形態をとる場合である。文献6によれば、この場合の文体的効果としては、肯定的なニュアンスを獲得する場合と、逆に否定的色合いを帯びる場合の2通りがある。たとえば dzielne chłopy(有能な農夫たち)と言えば前者の例だが, nieprzytomne,

pijane chłopcy(人事不省の、飲んだくれの百姓ども)は後者の例になる。

肯定的な意味合いで用いられる非男性人間形は、テキストの擬古化の手段として、叙事詩のような文学ジャンルしばしばで用いられる。⁵⁾

ところが俗語では、男性人間名詞における非男性人間形の使用には、軽蔑のニュアンスを伴うことの方が多い。とりわけ、本来否定的意味内容をもつ語に非男性人間形の語尾が適用されると、軽蔑的ニュアンスはいつそう強められる。cf. żebracy/żebraki(乞食), próżniacy/próżniaki(ぐうたら)

ところで、男性人間名詞の中には、複数主格に非男性人間形しかもたないグループが存在するが、面白いことに、そのほとんどは語彙的意味そのものに否定的意味合いを含んでいる。たとえば、nieroby(のらくら者), darmozjazy(居候), gagatki(悪太郎)など。上述の否定的ニュアンスを帯びた文体的変異体の存在がこうした語群を背景にしていることは、容易に想像できる。

複数主格で男性人間形と非男性人間形が両用されるもうひとつのグループに、擬人化された存在や死者を表す一連の語がある。例: diabli/diabły(悪魔), biesi/biesy(鬼), aniołowie/anieli/anioły(天使), nieboszczycy/nieboszczyki(故人)

最後に、男性人間名詞以外の男性名詞に見られる交替形に触れておく。

ひとつは romanse/romansy(ロマンス)のような -e/y の交替で、書き言葉では伝統的な -e 語尾が優位を保っているが、話し言葉ではどちらの形態も許される。類例: szanse/szansy(チャンス), pasjanse/pasjansy(ペーシェンス), fajanse/fajansy(ファエンツァ焼き)

もうひとつは grunta/grunty(土壌)のような -a/-y の交替である。このケースの場合、古い -a 語尾は精確さに欠ける形態と見なされ、次第に使われなくなっている。類例: koszta/koszty(費用), pakta/pakty(条約)

1-6. 複数生格

単数主格が軟子音(いわゆる歴史的軟子音、あるいは硬化子音も含む)に終わる男性名詞の中には、複数生格で -i/-y 語尾の形態のほかに、-ów 語尾の交替形をもつ語がかなりある。pokoi/pokojów(部屋), turniei/turniejów(トーナメント), pisarzy/pisarzyów(作家), bagaży/bagażów(手荷物), dreszczy/dreszczów(震え), działaczy/działaczów(活動家), koszy/kosków(バスケット)など。この場合 -ów 語尾の方が書き言葉的で、かつ古めかしい響きをもった文体的変異体とされる。

1-7. 複数対格

ポーランド語の複数対格は、男性人間名詞だけが複数生格と同じ形をとり、それ以外の名詞はすべて複数主格に等しい形をとるのが原則である。

ところが、擬人化された存在を表す語彙の中には、両方の形態（つまり複数主格と複数生格）を作るものがある。たとえば, *widziałem anioły/ aniołów, diabły/diabłów, krasnoludki/krasnoludków* (僕は天使たちを, 悪魔どもをを, 小人たちを見た)。この場合、男性人間形（つまり複数生格に等しい形態）は話し言葉に現われる。

転義で用いられる語にも交替形が現われる。たとえば, *znam tych typów* (あの連中を知っている) と *znam takie typy spod ciemnej gwiazdy* (ああした最低の奴らを知っている) を比べると、対象に対する話し手の感情がより強く表出されているのは、後者（主格に等しい形態）である。

一方、荘重な文体や擬古的なテクストでは、男性人間名詞の複数対格に複数主格形が使われることがあるが、興味深いことに、その場合の複数主格はつねに非男性人間形である。例: *szanować sąsiady* (隣人を王を敬う), *pokonać wrogi* (敵を撃ち破る)

1-8. 複数造格

ここでは紛れもなく文体的意味をもった変異体として、古い *-y/-i* 語尾をもつ形態が挙げられる。この形態は文章に厳肅さを与えて擬古化するためにしばしば用いられる。例: *ociężałymi krokami starców zgrzybiałych* (おいさらばえた老人の鈍重な足取りで)⁶⁾

2. 女性名詞の場合

2-1. 単数呼格

男性名詞の場合と同様、しばしば主格形の交替形をもつ。例: *powiedz mi, Anno! / powiedz mi, Anna!* (言いたまえ, アンナ) この場合、前者: すなわち本来の呼格形は文語的な文体に、後者の主格に等しい形態は俗語的な文体に現われる。ただし文献6によれば、敬称の *pani* ないし形容詞の

定語がつく場合は，文語・俗語の区別なく，呼格だけが用いられる。cf. pani Anno!(アンナさん) droga Anno!(親愛なるアンナ)

愛称語の場合は通常，呼格が使われるが，接尾辞-kaを伴う愛称語だけはやはり主格に等しい交替形を作る。例：słuchaj, Hanko! / słuchaj, Hanka!(あのね，ハンカ) この場合も，概して文語では本来の呼格が，俗語では主格に等しい形が用いられる。

親族名称の中では mama(ママ)と babcia(おばあちゃん)が交替形をもつが，主格の使用は日常会話に限られる (mamo!/mama!, babciu!/babcia!)

2-2. 複数生格

軟変化型の女性名詞の一部は，複数生格で-i語尾のほかに，伝統的なゼロ語尾の交替形をもつ。たとえば，kawiarni/kawiarn(喫茶店), kopalni/kopal(鉱山), kropli/ kropel(滴)など。しかし，文献8によれば，このケースは文体的変異体と言うよりは任意的変異体で，選択は言語使用者の好みと慣用による。

3. 中性名詞の場合

3-1. 複数造格

男性名詞の場合と同様，一部の中性名詞には複数造格で，-ami語尾の基本的変異体とならんで，-y/-i語尾の文体的変異体が使われる。たとえば，zacząć tymi słowami(このことばで始める) / zacząć tymi słowy(このことばをもって始める)。この場合，新しい-ami語尾より，古い-y/-i語尾の方が格調が高いとされる。しかし，話し言葉では若干の慣用表現をのぞけば，ほとんど使われない。cf. innymi słowami(換言すれば), dawnymi laty(昔に)

むすび

以上，現代ポーランド語の名詞の屈折体系に見られる文体的変異体を概観したが，その特徴をまとめれば次のようになる。

1) 特定の語尾をもつ格形態が文体的変異体になっているケースは比較的少ない。これは名詞の語尾というものが性・数・格の文法的意味を総合的に示すことを基本的機能としていることを考慮するなら、ある程度予想できたことではある。

2) 文体的変異体の存在は歴史的要因によるものが多い。すなわち、言語の変化のプロセスと密接に関係している。その場合、交替形の一方は新しい形態で文体的にはニュートラル、他方は伝統的な、従って優雅さや莊重さを伴う、時には古めかしさの感じられる形態という組合せが多い。

3) ポーランド語の名詞における格形態の文体的変異体の分布には、かなりの偏りが見られる。すなわち、文体的変異体の例は男性名詞に多く、女性名詞と中性名詞にはきわめて少ない。これはある程度まで、ポーランド語の文法性のカテゴリーにおける偏りを反映していると思われる。換言すれば、男性名詞に文体的変異体が豊富なのは、活動体・不活動体、人間・非人間の区別が男性名詞に限られていることと関係がある。

注

- 1)たとえば文献2, 4, 5のそれぞれの項目参照。
- 2)文献1も *doktór* を主として「医者」の意味で用いられる俗語としている。興味深いことに, *doktor*の複数主格には*doktorowie*と*doktorzy* という2つの交替形を挙げているのに, *doktór* の複数主格には*doktorzyl* か挙げていない(本文1-5参照)。なお, 文献6と文献8については, 煩雑をさけるため該当ページの指示を原則として省略する。
- 3)文献6 p.181.
- 4)文献6 p.155, 文献8 p.79.
- 5)文献7 p.36. さらに文献9は *chłopy* 型の複数主格の起源と, 文語への浸透過程を明らかにしている。
- 6)文献7 p.37.

参考文献

1. Słownik języka polskiego tt.I-III PWN Warszawa 1978-1981
2. Słownik poprawnej polszczyzny PWN Warszawa 1977
3. Mały słownik języka polskiego PWN Warszawa 1969
4. Witold Doroszewski: O kulturę słowa PIW Warszawa 1964
5. Witold Doroszewski: O kulturę słowa t.II PIW Warszawa 1968
6. Danuta Buttler, Halina Kurkowska, Halina Satkiewicz: Kultura języka polskiego PWN Warszawa 1976 pp.131-226
7. Halina Kurkowska, Stanisław Skorupka: Stylistyka polska PWN 1968
8. Barbara Klebanowska, Witold Kochański, Andrzej Markowski: O dobrej i złej polszczyźnie Wiedza Powszechna Warszawa 1985 pp.73-95
9. Halina Turska: Mianownik l.mn. typu "chłopy, draby" w języku ogólnopolskim "Język Polski" XXXIII (1953) pp.129-155

СТИЛИСТИЧЕСКИЕ ВАРИАНТЫ-СЛОВОФОРМЫ
В ИМЕНАХ СУЩЕСТВИТЕЛЬНЫХ ПОЛЬСКОГО ЯЗЫКА

Тэцусиро ИСИИ

Цель настоящей статьи состоит в том, чтобы показать, какие стилистические варианты-словоформы имеются в словоизменительной системе имен существительных современного польского языка.

Бывают случаи, когда вместе с новой, стилистически нейтральной формой, употребляется старая форма, отличающаяся определенной стилистической окраской.

Такие варианты-словоформы чаще всего можно найти среди имен существительных мужского рода. Это, по мнению автора статьи, тесно связано с тем фактом, что в польском языке категория одушевленности-неодушевленности, а также категория личности-неличности относятся именно к именам существительных мужского рода.

中国語の格

望月圭子

0. はじめに

1. 二種類の‘格’

1. 1 文法関係の表示

1. 2 意味役割の表示 (1)

1. 3 意味役割の表示 (2)

2. 「由」は文法関係表示か、意味役割表示か？

0. はじめに

中国語学界では、‘格’に対する関心が希薄であるか、あったとしても極めて不十分である。例えば、中国語学の分野で最も新しく最も権威をもつ辞典『中国大百科全書：語言・文字』(1988)や『中国語言学大辞典』(1991)にも‘格’という見出し項目がない。ただ、王鋼・等編『簡明語言学辞典』(1985)には‘格’の項目があるが、「中国語は‘語順’によって‘格’を表示する」という簡単な説明があるだけである。また、網羅的かつ代表的な文法学習書である『實用現代漢語語法』にも‘格’という範疇がなく、従ってその日訳本に付された「文法用語小辞典」の「事項索引」にも‘格’という項目がない。以上の事実は、次のような認識の上に立っているからと思われる。

中国語は所謂‘孤立語’であって、単語にラテン語やロシア語のような形態変化がない。

しかし現在の言語学界では、屈折によって表示される格のみを‘格’として認めるという伝統的な格規定に種々の批判的見解が提示され、屈折によるものに限らず、もっと広い視野に立つて格の規定をするのが主流となっている。本稿では、後者の広い視野から中国語を見た場合、中国語に‘格’という範疇を導入するべきかどうか、設定するとしたら、どのように設定すればよいかを述べていきたい。なお生成文法の立場に立った‘格’（内在格(inherent case)、構造格(structural case)）については、湯(1992)が中・日・英語を対照しながら詳述しているので、参照していただきたい。

1. 二種類の格

屈折のみによらない広義の‘格’を論ずる場合、‘格’を次の二種類に分けて論ずるのが一般的である（例えば、柴谷他(1982, 231-232)）。

a. 統語的機能の表示

b. 意味役割(θ -role)の表示

井上(1978, 252-253)に示されている‘関係節化の可能性’‘主題化の可能性’のハイアラーキの表を見ると、三位までは‘主格’‘直接目的語’‘間接目的語’という文法関係と対応する名称が使われており、四位以下は‘位置格’‘目標格’‘起点格’……のように意味役割を示す名称が使われているが、これはaとbを分けて論ずるひとつの例である。

1. 1 文法関係の表示

主語・直接目的語・間接目的語は完全な文を構成するのに、動詞が要求する最低限の名詞句あるいは前置詞句である。例えば、

自動詞：主語

他動詞：主語、直接目的語

授受動詞：主語、直接目的語、間接目的語

これらの名詞句と動詞の関係を一般に‘文法関係’というが、これらの名詞句自身をも‘文法関係’ということがある。文法関係とそれを示す格の関係は、一般的には次のようになっている。

< 文法関係 >	< 格 >
主 語	主 格
直接目的語	対 格
間接目的語	与格・奪格

次に中国語の文法関係の表示について、例を挙げて見てみよう。参考のため、対応する日本語、英語も付しておく。ただここでお断りしておきたいのは、中国語に主語、直接目的語、間接目的語という範疇を設定すべきかどうか、設定すべきとすれば、これらはどのような文法機能を担っているのかなどについては、本稿では論議せず、常識的・伝統的解釈に従って議論をすすめる（以下、‘直目’は直接目的語の、‘間目’は間接目的語の略称である）。

(1) a 張三 ϕ 死 了。

ϕ 格

主 語

b 太郎 が 死んだ。

主 格

主 語

c J h o n g d i e d. (cf. H e d i e d.)

ϕ 格

主格

主 語

主語

(2) a 張三 ϕ 打了 李四 ϕ 。

ϕ 格

ϕ 格

主 語

直 目

b 太郎 が 次郎 を 殴った。

主 格

対 格

主 語

直 目

c J h o n g h i t M a r y ϕ . (cf. H e h i t h e r.)

ϕ 格

ϕ 格

主格

対 格

主 語

直 目

主語

直 目

- (3) a 張三 ϕ 給 李四 ϕ 一本 書 ϕ .
 ϕ 格 ϕ 格 ϕ 格
 主 語 間 目 (数量詞) 直 目
- a' 張三 ϕ 送 一本 書 ϕ 給 李四.
 ϕ 格 ϕ 格 与 格
 主 語 (数量詞) 直 目 間 目
- b 太郎が 次郎に 本 を 一冊 あげた.
 主 格 与 格 対 格
 主 語 間 目 直 目
- c J h o n ϕ g a v e M a r y ϕ a b o o k ϕ .
 ϕ 格 ϕ 格 ϕ 格
 主 格 間 目 直 目
- c' J h o n ϕ g a v e a b o o k ϕ t o M a r y .
 ϕ 格 ϕ 格 与 格
 主 語 直 目 間 目
- (4) a 張三 ϕ 借 他 ϕ 一万塊 錢 ϕ .
 ϕ 格 ϕ 格 ϕ 格
 主 語 間 目 (数量詞) 直 目
- a' 張三 ϕ 跟 他 借 一万塊 錢 ϕ .
 ϕ 格 奪 格 (数量詞) ϕ 格
 主 語 間 目 直 目
- b 太郎が 次郎から／に お金を 一万円 借りる.
 主 格 奪 格 対 格
 主 語 間 目 直 目
- c J h o n ϕ b o r r o w ¥10,000 ϕ f r o m M a r y .
 ϕ 格 ϕ 格 奪 格
 主 語 直 目 間 目

以上の (1) - (4) を観察することによって次のことがわかる。

① 中国語は、(1) (2) では、語順のみが文法関係を決定するが、(3) (4) では、aは語順で、bは語順と前置詞（中国語では‘介詞’という）が文法関係を決定している。(3) aの「給」は動詞か介詞かその境界線が明確でなく、この点を考慮すると、(3) は語順のみによって文法関係を決定する(1) (2)に近い。

② 日本語は、すべて格助詞によって文法関係を決定している。

③ 英語は、代名詞に屈折があるのを除けば、(1) (2) では語順のみが、(3) では語順のみと‘語順+前置詞’が、(4) では‘語順+前置詞’のみが文法関係を決定している。

④ 中国語は、主語から間接目的語（与格と奪格の名詞句を含む）まで、すべて ϕ 格でカバーできるから、経済性が最も高いといえる。また上記の事実から、中国語は‘中立型言語’と言われることがある。（ちなみに、日本語は‘主格・対格言語’略して、‘対格言語’と言われることがある一方、英語も‘対格言語’と呼ばれる。上の例の対比からわかるように、

日本語と英語の文法関係の表示方法はかなり異なっているのだから、このような一括した呼称には問題がある。）

- ⑤ ‘奪格’は実は文法関係と次の1. 2で述べる意味役割の境界線上にあると考えられなくもない、つまり文法関係と意味役割は明確には区別できないのかもしれない。

1. 2 意味役割の表示(1)

1. 1では、文法関係について見てきたが、中国語では、主語・目的語はφ格で、すなわち格標識なしで表される(間接目的語の場合には格標識を使う場合もある)、φ格でも主語・目的語のいずれであるかは語順で識別できる、ところが次の例(5)では、「大阪」が起点であるのか終点であるのか識別できない。

(5) *張三 大阪 来。(無理に訳せば<*張三が大阪やってくる>)

‘起点’や‘終点’という概念は、原則として、1. 1で述べた文法関係外の概念であって、前置詞を使わなければ、動詞に対してどのような意味的役割を担っているのかわからない、例えば、

(6) 張三 從大阪 来、<張三は大阪からやってくる>

(7) 張三 到大阪 来、<張三は大阪に／へやってくる>

注意しなければならないのは、文法関係と意味役割は次のように異なる概念だということである、

(8) 敵人 用毒藥 污染了 井水、<敵は毒薬で井戸水を汚染した>

(9) 毒藥 污染了 井水、<毒薬が井戸水を汚染した>

(10) 井水 污染了、<井戸水が汚染した>

(8) - (10)に出てくる三種類の名詞「敵人」「毒薬」「井水」の各文における文法関係と意味役割は、各々次の表のようになる。

名 詞	例文	文 法 関 係	意 味 役 割
敵 人	(8)	主 語	動 作 主
毒 薬	(8)	連 用 修 飾 語	道 具
	(9)	主 語	道 具
井 水	(8)	直 接 目 的 語	客 体
	(9)	直 接 目 的 語	客 体
	(10)	主 語	客 体

この表を見れば分かるように、(8) - (10) で、それぞれの名詞が担う意味役割は一貫して変わらないのに、文法関係は異なる場合がある。つまり文法関係と意味役割はレベルを異にした概念である。なお、ここで序でながら述べておきたいのは、次の(11)のように、(9)の文頭に、道具という意味役割を表す介詞「用」を付けると、主語が省略された文と分析されるという点である。

(11) 用毒藥 汚染了 井水, <毒藥で 井戸水を汚染した>

この事実は、「中国語では、特別な条件下でなければ、主語には前置詞をつけてはならない」という制約を示している。この特別な条件については、2節で後述する。

1. 3 意味役割の表示(2)

中国語の意味役割の表示は、前置詞を用いるのが、無標の場合であり、その例は、上挙の(6)(7)(8)の「從、到、用」などである。しかし、有標の場合もあり、ここでは以下、有標の場合を検討してみる。

中国語はよく‘SVO言語’と言われるが、この‘O’には目的語であることを示す標識も意味役割を示す標識もつかない(もし有ればその前置詞句は、伝統的に‘補語’と呼ばれる)。そして、この‘O’を表す意味役割の数は非常に多い。日本語の格助詞は、益岡・田窪(1992, 49)によれば、「が・を・に・から・と・で・へ・まで・より」の9種類であるが、ひとつの格助詞が複数の意味役割を表すことがあるから、意味役割の数はさらに多くなる。一方、中国語の介詞は、全部動詞に由来するといわれ(商務印書館・小学館共編『中日辞典』(pp. 706-707)の囲み記事「介詞」の項参照)、その数も、それぞれの表す意味役割の数も定かではない。本稿では、とりあえず、孟等(1987)を参考にして、‘O’の意味役割を暫定的に次のように設定してみよう(下線が‘O’を示す)

- 1 動作主格：来了 一個人, <ひとりの人(=誰か)が来た>(この場合は、動作主性の低い動作主と考えられる)
- 2 被動者格：打 他, <彼を殴る>
- 3 受益者格：給 他, <彼にあげる>
- 4 対象者格：感謝 老師, <先生に感謝する>
- 5 客体格：掛着 一層土, <ほこりがかかっている>
- 6 結果物格：包 餃子, <餃子を包む>
- 7 道具格：洗 熱水, <お湯であらう>
- 8 数量格：少 五塊錢, <5円φ少ない>
- 9 場所格：睡 小床, <小さなベッドに寝る>
- 10 起点格：離開 北京, <北京を／から離れる>
- 11 終点格：到 北京, <北京に着く>
- 12 通過点格：走 這條路, <この道を通っていく>
- 13 原因格：愁 經費問題, <經費問題を心配する>
- 14 目的格：考 研究生, <大学院生になる為に試験をうける>
- 15 共動者格：打勝 南朝鮮隊, <韓国チームに勝つ>

16 職務格 : 当 工会主席, <労働組合の委員長になる／している>

17 同族格 : 唱 歌, <歌を歌う>

中国語において, ‘O’ が担う意味役割はこの他にも考えられるかもしれないが, 上記の 1~17 の例だけから考えても, ϕ 格のまま動詞の目的語になるケースは, 英語よりも多い, 1~17 のように, 複雑多岐にわたる意味役割を担うすべての名詞句をはたして目的語と一括して呼んでよいものかどうか, 筆者は大きな疑問を抱いている。

2. 「由」は文法関係表示か, 意味役割表示か?

ここ 5・6 年の間に, ‘語法研究的三個平面’ (文法研究の三つのレベル) という主張が中国で盛んになってきた, その内容を見ると, おおむね次のような構成になっている。

I 句法 (統語論)

II 語意 (意味役割)

III 語用 (情報構造その他)

筆者の見たかぎりでは, この主張では, 1. 1 で述べた文法関係 (= 主格, 対格, 与格, 奪格) については論じられていない, 文法関係という概念を論じるならば, I の統語論のレベルで論じなければならないのであるが, それが全く無視されている, なぜなら, 次のような認識が根強いからである。

中国語の文法関係は語順で表されるのであるから, わざわざ ϕ 格のみで表される格標識などは考慮しなくてもよい,

このような認識の代表例として, 次の二つを引用したい, まず, 範・胡 (1992, 274) は, 「名詞の‘格’」という小節で, 次のように述べている,

‘格’とは, 名詞が動詞と組み合わさって意味構造を作ったとき, 名詞が担う意味役割で, 例えば, ‘動作主・被動者・受益者・道具・場所・時間’ などである,

また, 徐・等 (1992, p. 12) で, 範開泰は, 次のように述べている (中略と下線は筆者による),

意味役割構造には, 標識がある, 中国語の前置詞は常に意味役割の標識役を務める, 例えば, ‘把’は被動者を表し, ‘被’は動作主を表し, ‘給’は受益者を表し, ‘用’は道具を表すなどである, …<中略>…意味役割構造は, 時には省略することができる, 意味役割が隠れるか現われるかには, 統語的条件があり, 例えば, 主語と目的語の位置にある名詞 (句) には, 意味役割標識は一切現われない,

このように, 中国語学界では, 文法関係を表す‘格’の概念がない, しかし, 中国語において, 文法関係を表す‘格’の概念は本当に不要なのであろうか, 以下, ‘由’をめぐる, この問題を

考えてみたい。

まず、「由」について、呂 (1980, p. 555) は次のように説明している (引用は、本稿に関連する部分のみ、例文番号は引用者による)。

[動詞] 従う、勝手にさせる。

(12) 信不信～你, <信じるか信じないかは君の勝手だ>

[介詞] 動作主を導入する, 被動者を示す名詞は、前にあって主語となるか、あるいは動詞の後ろにあって目的語となる。

(13) 運輸問題 ～他們 解決, <運輸問題は彼らが解決する>

(14) 現在 ～老張 介紹 詳細經過, <これから張さんが、詳しい経過の説明をします>

上の引用からわかるように、「由」は‘動詞’と‘介詞’を兼類していることが分かる。次に、先に引用した徐・等からの引用の下線部分、即ち、「主語と目的語の位置にある名詞句には意味役割標識が一切現われない」という主張が(13) (14) にあてはまるかを検討してみよう。

まず、(13) は、次の(13') の基底文から主題化を経て派生した文である。

(13') 他們 解決 運輸問題, <彼らが運輸問題を解決する> (「他們」が主語であることに注意)

次に、(14) は、次の(14') の括弧内の要素が主題化された後、更に省略された結果できた文である。

(14') 現在 老張 介紹 (關於這個問題的) 詳細經過。
<これから張さんが、(この問題についての) 詳しい経過の説明をします>

つまり、(13) (14) において、「由」の後に出現する「他們」「老張」は、所謂‘主題文’の評言の部分に現われた‘有標の主語’なのである。よって、「主語と目的語の位置にある名詞句には役割標識が一切現われない」のではなく、「有標の主語 (例えば(13) (14) の「由他們」「由老張」) には「由」がついてもつかなくても構わないが、無標の主語 (例えば(13') (14') の「他們」「老張」) には意味役割標識「由」をつけることができない」のである。

さて、主題文以外の文において、「由」がつく場合について更に考察してみよう。

(15) 由五人組成的日本教育代表团 訪問 我国, <五人組から成る日本教育代表团が我国を訪問する>

(15) の下線部分は、関係節、つまり一種の‘埋め込み文’であって、「五人」は主文の主語ではない。「由」は、関係節の主語にもつきうるのである。

この他、強調構文「＜前提＞是＜焦点＞的」文の焦点を担う部分の主語にも「由」は出現する。

- (16) 天皇陛下講什麼 是 由日方 決定的, <天皇陛下がどのようなお話をなさるか、日本側が決めることである>

もっとも、(16)を、文末にあるべき「問題」などが省略された文と考えるならば、「由日方決定的」は省略された「問題」等の中心語にかかる関係節ということになる、つまり、次の(17)と同じタイプの文ということになる。

- (17) 『語言文字応用』 是 由語言文字応用研究所 創辦的 學術刊行物。
<『語言文字応用』は、 語言文字応用研究所が創刊した學術刊行物である>

以上みてきたのは、主題文、関係節、強調構文中に現われる、「由」がついた有標の主語である。ここで問題となるのは、「由」は、動作主格を始めとするさまざまな意味役割を示す標識であると同時に、「有標の主語」という文法関係をも示す標識でもある点である。もし、「由」を「有標の主語」標識と認めるならば、中国語において、文法関係を示す「格」が無視されるというのでは、十分な文法記述ができないということになる。

また、「由」が、二種類の格のどちらの標識でもあるという事実は、1. 1の末尾で述べた、「文法関係と意味役割は明確には区別できないのかもしれない」ことを示唆する例のひとつであるように思われる。また、同じことを示唆する日本語の例では、「が」「を」は「は」と共起しないが、「に」は共起しても、しなくてもどちらでも可能であること、すなわち、「に」が文法関係を表す格と意味役割を表す格の境界線上にあることがあげられる。中国語では、1. 1の末尾でも述べたように、奪格が ϕ 格（すなわち所謂目的語）でも意味役割標識付きでもよいという点で、二種類の格の境界線上にある。これも、二種類の格が明確に区別できないことの一例であろう。

本稿は、中国語の「格」についての初歩的かつ部分的分析であるが、今後本稿の立場から、議論を深めてゆきたい。

参考文献

- Comrie, Bernard (松本克己・山本秀樹訳) (1992) 『言語普遍性と言語類型論』, ひつじ書房.
- 範曉・胡裕樹 (1992) 「有関語法研究三個平面的幾個問題」, 『中国語文』第4期, 273-278.
- 井上和子 (1978) 『日本語の文法規則』, 大修館書店.
- 呂 叔湘 (1980) 『現代漢語八百詞』, 商務印書館.
- 益岡隆志・田窪行則 (1987) 『格助詞—セルフ・マスターシリーズ3』, くろしお出版.
- (1992) 『基礎日本語文法—改訂版』, くろしお出版.
- 孟琮・等編 (1987) 『動詞用法辞典』, 上海辞書出版社.
- 施閔淦 (1991) 「關於語法研究的三個平面」, 『中国語文』第6期, 411-416.
- 柴谷方良・外 (1982) 『言語の構造—理論と分析—意味・統語編』, くろしお出版.
- 湯 廷池 (1978・a) 「主語的句法与語意功能」, 『国語語法論集』, 65-72, 台湾学生書局.
- (1978・b) 「賓語的句法与語意功能」, 『国語語法論集』, 81-97, 台湾学生書局.
- (1978・c) 「直接賓語与間接賓語」, 『国語語法論集』, 99-112, 台湾学生書局.
- (1992) 「原則参数語法、対比分析与機械翻訳」, 『漢語詞法句法四集』, 251-328, 台湾学生書局.
- 角田太作 (1991) 『世界の言語と日本語』, くろしお出版.
- 王鋼・等編 (1985) 『簡明語言学辞典』, 内蒙古人民出版社.
- 徐樞・等 (1992) 「三個平面：語法研究的多維視野」, 『語言教学与研究』第1期, 4-27.
- 許余龍・編著 (1992) 『対比語言学概論』, 上海外語教育出版社.
- 中国大百科全書出版社編輯部編 (1988) 『中国大百科全書・語言文字』, 中国大百科全書出版社, 北京.
- 中国語言学大辞典編委会 (1991) 『中国語言学大辞典』, 江西教育出版社, 南昌.

東京外国語大学語学研究所『言語研究Ⅲ』（1993）原稿

現代朝鮮語の対格と動詞の統辞論



野間秀樹

1993年1月21日提出

現代朝鮮語の對格と動詞の統辭論

野間 秀樹 (노마 · 히데키)

현대한국어의 對格과 동사의 통사론 <요지>

본고는 -를/-을格을 가진 문장의 統辭論的=連語論的인 연구를 목적으로 한다. 본연구의 방법론적 입장은 언어자료에 立脚한 철저한 <言語事實主義>라고 할 수 있다. 분석에 있어서는 자료의 출현빈도와 共起確率 등, <量>이나 繼起의 <順序>에도 착목하였다. 이런 점에 관해서는 한국어의 문법연구에 있어서는 아직 그 중요성이 거의 인식되지 않고 있으나 이러한 <量的인 分布>의 중요성도 본고가 提起하고 싶은 또 하나의 과제이다.

구체적으로는 1980년대 이후에 출판된 소설과 수기에서 -를格이 쓰여진 용례를 수집, 분석·검토하는 방법을 택하였다. 수집된 용례수는 3044개이다.

수집된 용례 하나하나에 대하여 다음과 같은 관점에서 解析을 가하였다.

1)主體와 主語의 문제. 즉, 주어의 위치, 주어의 명사가 活動體이나 不活動體이나, 주어의 語尾는 <-가/-이>이나 <-는/-은>이나, 등등.

2)-를格의 體言의 문제. 체언의 出現頻度, 체언분류의 範疇, 체언을 수식하는 連體修飾成分의 有無등. 체언분류범주는 野間秀樹(1990b)에 依據하였다.

3)-를格을 가진 用言의 문제. 특히 용언과 체언범주의 분포. 용언이 없는 문장의 문제.

4)-를格과 용언 사이에 나타나는 요소의 문제. 이 요소 중에서 가장 빈도가 높은 副詞類와 體言類別의 構文의 검토.

5)다른 格과의 共起의 문제. 格과 體言範疇의 관계.

6)다른 格과 共起하지 않는 문장의 문제. 共起하기 쉬운 動詞과 共起하기 어려운 動詞의 문제.

이상의 분석을 통하여 본고 제7장에서 -를格의 가진 문장의 통사론적=언어론적인 類型을 定式化하며 동시에 動詞의 單語結合(連語)를 기초로 한 動詞分類를 시도하였다. 他動詞結合의 範疇는 -를格등의 名詞範疇와 밀접한 관계를 유지하면서 他動性이 강한 것부터 약한 것까지 각각 서로 이어져 있고 조건지어져 있음을 밝혔다.

0 はじめに

- 0-1 先行研究について
- 0-2 本研究の目的と方法

1 動作の主体と主語

- 1-1 主語の前置と後置
- 1-2 活動体主語と不活動体主語
- 1-3 前置の主語-가/-이
- 1-4 前置の主語-는/-은や-도など

2 -를格の体言

- 2-1 -를格の体言
- 2-2 -를格の体言分類
- 2-3 -를格にかかる連体修飾成分

3 用言

- 3-1 -를格を持つ用言
- 3-2 用言から見た-를格の体言とのかかわり
- 3-3 用言のない例
- 3-4 -를格の体言範疇の多様性と動詞

4 -를格と用言の間に立つ要素の問題

- 4-1 副詞類が<間の要素>に立つ構文
 - 4-1-1 間の要素が一般の副詞類である構文
 - 4-1-2 間の要素が擬声擬態語である構文
 - 4-1-3 間の要素が-이を持つ副詞である構文
 - 4-1-4 間の要素が動詞の-게副詞形である構文
 - 4-1-5 間の要素が形容詞の-게副詞形である構文
 - 4-1-6 間の要素が形容詞の-히副詞形である構文
- 4-2 体言類が<間の要素>に立つ構文
- 4-3 間の要素の量的な分布

5 主語以外の他の格語尾との共起

- 5-1 前置の-에格と共起する-를格
 - 5-1-1 -에格と抽象名詞+-를格の共起
 - 5-1-2 -에格と活動名詞+-를格の共起
 - 5-1-3 -에格と具体名詞+-를格の共起
 - 5-1-4 -에格と身体名詞+-를格の共起
 - 5-1-5 -에格と人間名詞+-를格の共起
 - 5-1-6 -에と共起した-를格の機能
- 5-2 前置の-로/-으ろ格と共起する-를格
- 5-3 前置の-에서格と共起する-를格
- 5-4 前置の-에게と共起する-를格
- 5-5 前置の-한테と共起する-를格

- 5-6 前置の-한테서と共起する-를格
 - 6 他の前置斜格・後置斜格と共起していない-를格
 - 6-1 斜格と共起しない例とする例
 - 6-2 斜格と共起しやすい動詞
 - 6-3 斜格と共起しにくい動詞
 - 7 -를格を持つ文の統辞論的＝連語論な型と動詞分類
 - 7-1 客体的対象への作用
 - 7-2 客体的対象への主体内的な作用
 - 7-3 主体への再帰的な作用
 - 7-4 客体的対象からの主体への作用
 - 7-5 状況的な対象へのかかわり
 - 7-6 機能動詞
 - 7-7 無意志動詞
 - 7-8 動名詞他動詞
 - 8 おわりに
-

○ はじめに

現代朝鮮語の体言語尾-을/-을は主として対格の格語尾として論じられてきたもので、日本語の語尾-ヲと似た機能を持つものである。本稿はこの-을/-을格を持つ文の統辞論的＝連語論的研究を目的とする。-을/-을格の研究は同時に他動詞の統辞論的研究でもあり、また-을格と動詞の単語結合（連語）を考察する連語論的研究でもある。なお、これ以降-을/-을を単に-을と表記することにする。

0-1 先行研究について

-을については奥田一廣(1976)・李琬鎬(1988)など、これまでもいくつかの示唆的な論考がある。前者は意義素論的な立場からの考察で、-을が名詞相当語句に後続する場合は対格指標であり、それ以外に後続する場合には強調表現であるとした。後者は作例を用いた、生成文法論の影響下にある研究であり、特に-을の「主題化」について執拗に論じている。いずれの論考も-을をめぐる多くの問題を提起しつつも、現代朝鮮語におけるテキストの中で-을が現実にはどのように用いられているかという課題についての考察はまだほんの端緒に留まっているといえる。故に語尾-을をとる体言にはどのような語彙があるのか、また-을と共起する用言にはどのような語彙があるのか、また-을の観点から用言を分類するとどうなるのか、-을と共起する他の格語尾や状況語との関わりはどのようになっているのか、-을をめぐる語順はどのようになっているか、総じて、-을が一体どのような単語とどのような関わりの中でどのような意味を実現しているのかという核心的な問題については未だほとんど明らかにされていないというのが実情であった。

0-2 本研究の目的と方法

研究のこうした現状にかんがみて、本稿は言語事実の徹底した観察と分析に研究の基礎を置く。約言すれば、本研究の方法論的な立場は、言語資料に立脚した＜言語事実主義＞だと言することができる。また、分析にあたっては用例の出現頻度や共起確率を始めとして、＜量＞や継起の＜順序＞にも着目する。この＜量的な分布＞という点について、朝鮮語の文法研究においてはまだほとんどその重要性が認識されていないが、この点もまた本稿が提起したい課題の一つである。こうした方法論に基づき、-을が一体どのような単語とどのような関わりの中でどのような意味を実現しているのかという問題について考察してゆくことにする。考察に際しては、朝鮮語の名詞分類を試みた野間秀樹(1990b)に依拠しながら、名詞の下位範疇にも着目することにする。なお、名詞分類・動詞分類以外の基本的な文法用語は菅野裕臣(1981)による。

研究の基礎となる言語資料としては、1980年以降、現在までに韓国で出版された短編小説と手記を選び、-을の用例を収集した。必要に応じてこの基本資料以外の用例に言及することもあるが、計量的な作業はすべてこの言語資料に基づいた。資料の年代を限ったのは、朝鮮語が特に解放後、様々に変化しつつあるなかで、どこまでも同時代の朝鮮語の様相を明らかにするためであり、また言語史の記述など通時的な観点からの研究にも有用なものとなりうるからである。なお、どれも著しい方言を含むテキストは避け、いわゆる標準語、ないしはソウル方言と認められるテキストを対象にした。資料一覧は本稿末尾に示す。原文のまま引用する場合には略号で出典を<>に入れて頁と共に示す。引用文中の「…」は引用者による省略を意味する。

1 動作の主体と主語の問題

-을が出現する文が表す事態は基本的に＜S가・N을・V하다＞つまり＜Sが・Nを・Vする＞という3つの要素を持っている。このうち＜Sが＞にあたる要素は＜Vする＞という広義の動作の主体であるが、それが言語上に主語という文成分の形で明示的に現れている例は全体の約半数を占めている：

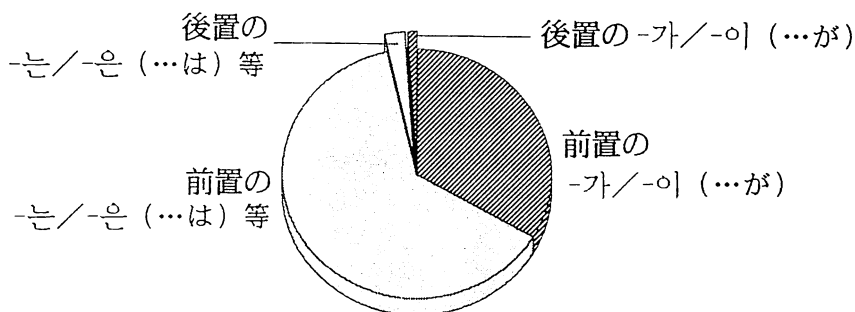
全用例	3044例 100.0%
主体が主語の形で明示的に現れているもの	1534例 50.4%
主体が主語の形で明示的に現れていないもの	1510例 49.6%

1-1 主語の前置と後置

また、-을が出現する文のうち主語が明示的に現れている例には＜Sが・Nを・Vする＞のように主語が-을の前に位置する主語前置型と、＜Nを・Sが・Vする＞という主語後置型の2種類の語順が存在する。これらの分布と主語の語尾の種類を見ると次の通りである。なお、本稿では-가／-이 (…が) の他に-는／-은 (…は) や-도 (…も) なども主語になりうると考えている。主語前置型が圧倒的に多く、また-가／-이 (…が) よりも-는／-은 (…は) の類が相対的に多い：

主語前置型	計	1482例
-가/-이 (...が)		512例
-는/-은 (...は) 等		970例
主語後置型	計	52例
-가/-이 (...が)		15例
-는/-은 (...は) 等		37例

【図】主語の前置と後置



1-2 活動体主語と不活動体主語

次に主語を活動体・不活動体という観点から分類してみると次の如くである。なお上述の如く本稿の名詞の分類は野間秀樹(1990b)によるが、ここでは人称代名詞も活動体に入れて考えている：

主語の形で明示的に現れているもの	1534例	100.0%
主語が活動体	1445例	94.2%
主語が不活動体	89例	5.8%

このように不活動体主語は非常に少ないことがわかるが、おそらく論説文や新聞記事の文体ではより多くの不活動体主語が用いられていると思われる。

1-3 前置の主語-가/-이

512例の-가/-이をとった前置の主語は、単数形と接尾辞-들 (...たち) のついた複数形、および어머니などの非尊敬形と어머님などの尊敬形とを便宜上それぞれ別に扱い、異なり語形の数で189語が認められた。そのうち頻度の高いものを見ると次の通りである：

내가 (私が)	47例	아버지가 (父が)	33例
남편이 (夫が)	20例	고모가 (おばが)	16例

미선이 (ミソンが)	15例	시아버지가 (しゅうとが)	13例
그가 (彼が)	13例	여자가 (女が)	12例
전경이 (戰鬪警察が)	11例	어머니가 (母が)	11例
사람들이 (人々が)	9例	누나가 (姉さんが)	9例
할머니가 (おばあさんが)	8例	영희가 (ヨンヒ가)	8例

このように人称代名詞と人間名詞、およびその下位範疇としての親族名詞が上位を占めている。人称代名詞と人間名詞以外で3例以上あるのは、不完全名詞것이 (ものが) と数量名詞하나가 (ひとつが) のそれぞれ3例のみである。リストに上がった語彙はどれも小説・手記という文体の性格を反映しているといえる。

1-4 前置の主語-는/-은や-도など

970例あった-는/-은や-도などをとる前置の主語は、異なり語形数で見ると205語であった。高頻度のものを見ると次の通りである：

나는 (私は)	160例	아버지는 (父は)	77例
여인은 (女は)	65例	남편은 (夫は)	31例
우리는 (私たちは)	28例	저는 (わたくしは)	27例
그는 (彼は)	26例	할아버지는 (おじいさんは)	24例
어머니는 (母は)	23例	영희는 (ヨンヒは)	22例
고모는 (おばは)	19例	여자는 (女は)	16例
신랑은 (新郎は)	16例	동식은 (トンシクは)	15例
그들은 (彼らは)	15例	그이는 (彼は)	14例

ここでもやはり人称代名詞と人間名詞、およびその下位範疇としての親族名詞が上位を占めている。人称代名詞と人間名詞以外で2例以上あるのは、名数詞명은 (…名は) の10例、不完全名詞것은 (ものは) の3例、場所名詞산은 (山は)、団体名詞마을에서는 (村では)、기차는 (汽車は)、活動名詞공부만은 (勉強だけは)、動物名詞갈매기는 (かもめは) のそれぞれ2例のみである。ただし공부만은については主語と認めるかどうかについて異論のあるところであろうし、次の마을에서는は主語というよりは主体を表す働きを持つ状況語と考えるのが妥当かもしれない：

그것이 고모한테서 흘러나오는 경제력에 힘입은 것임을 알았을 때 마을에서는 시기와 비난을 감추지 못했다. <호박52>

それがおばから流れ出る経済力に負うものだということを知ったとき、村では妬みと非難を隠せなかった。

また、-가/-이の主語は話し手を表すものが相対的に少なかったのに対し、-는/-은の主語は話し手を表すものが多い。上に挙げた나는・우리는・저는だけでも215例、970例の-는/-은の前置主語のうちの23.5%に上る。

2 -를格の体言

2-1 -를格の体言

-를をとる体言にはどのようなものがあるのだろうか。資料中の3044例のうち、体言の異なり語形数は1415語であった。頻度別の分布を見ると次の通り：

【表】-를格の体言の頻度別分布

50以上	2語
40以上	3
30以上	6
20以上	12
10以上	43
5以上	114

具体的な単語別で見ると、最も頻度の高い体言は、前置の主語でも1位であった人称代名詞の나で64例、全3044例中の2.1%である。ここでも小説・手記という文体の特徴が現れている。他の活動体名詞は10位までには여자(女)があるのみで、残りは全て不活動体である。第2位は不完全名詞것(もの・こと)、3位に活動名詞말(ことば・こと)、以下일(こと・仕事)、집(家)、事物代名詞그것(それ)と続き、7位になってようやく여자(女)が現れる。対格を持つ文では《活動体-가 不活動体-를 動詞》という型が最も典型的なわけである。

語形別に高頻度のものを表で見ることにする。その際、-를格のそれぞれの単語と単語結合の頻度が最も高い用言を併記しておく：

【表】-를格の体言の単語別頻度とその体言と共起する高頻度の用言

-를格の体言	頻度	頻度累計	うち高頻度の用言
나를(私を)	64	64	위하다(ためだ)6例、부르다(呼ぶ)3例
것을(ものを)	57	121	알다(知る)10例、보다(見る)8例
말을(ことばを)	45	166	하다(言う)8例、듣다(聞く)6例
일을(ことを)	38	204	하다(する)9例、잊다(忘れる)3例
집을(家を)	34	238	나가다(出る)19例、비우다(空ける)2例
그것을(それを)	31	269	보다(見る)2例、지켜보다(見守る)2例
여자를(女を)	28	297	보다(見る)3例、끌어내다(引っ張り出す)2例
손을(手を)	23	320	잡다(握る)9例、대다(つける)2例
소리를(声を)	23	343	지르다(あげる)5例、내다(出す)4例
생각을(考えを)	22	365	하다(する)14例、떠올리다(浮かべる)3例
문을(ドアを)	22	387	열다(開ける)5例、닫다(閉める)3例
눈을(眼を)	22	409	뜨다(開ける)10例、감다(閉じる)2例

얼굴을 (顔を)	19	428	하다 (する) 4例、보다 (見る) 2例
사람을 (人を)	19	447	만나다 (会う) 2例、보다 (会う) 2例
고모를 (おばを)	19	466	떠올리다 (思い浮かべる) 3例、맞다 (迎える) 3例
아버지를 (父を)	18	484	부르다 (呼ぶ) 3例、돕다 (手伝う) 2例
고개를 (首を)	16	500	끄덕이다 (頷く) 3例、젓다 (振る) 3例
몸을 (体を)	15	515	싣다 (載せる) 2例
머리를 (頭・髪を)	15	530	조아리다 (下げる) 3例、늘어뜨리다 (垂らす) 2例
입을 (口を)	13	543	다물다 (つぐむ) 3例、열다 (開く) 3例
옷을 (服を)	13	556	벗기다 (脱がせる) 4例、입다 (着る) 2例
버스를 (バスを)	13	569	타다 (乗る) 7例、기다리다 (待つ) 2例
남편을 (夫を)	13	582	2例以上の用言はない
하나꼬를 (花子を)	12	594	대하다 (対する) 2例
첫날밤을 (初夜を)	12	606	보내다 (過ごす) 3例、치르다 (終える) 2例
술을 (酒を)	12	618	마시다 (飲む) 9例
사랑을 (愛を)	12	630	고백하다 (告白する) 3例、확인하다 (確認する) 2例
미선을 (ミソンを)	12	642	만나다 (会う) 3例
저를 (わたくしを)	11	653	쳐다보다 (見つめる) 2例
이야기를 (話を)	11	664	하다 (する) 5例、들려주다 (聞かせる) 2例
샤워를 (シャワーを)	11	675	하다 (する) 7例、끝내다 (終える) 3例
물을 (水を)	11	686	마시다 (飲む) 3例
마음을 (心を)	11	697	하다 (させる) 3例、보다 (見る) 2例
담배를 (煙草を)	11	708	사다 (買う) 3例、피우다 (吸う) 2例
그를 (彼を)	11	719	보다 (会う) 2例
결혼을 (結婚を)	11	730	하다 (する) 6例
화를 (怒りを)	10	740	내다 (出す) 10例
자신을 (自分を)	10	750	위하다 (ためだ) 3例、포기하다 (捨てる) 2例
얘기를 (話を)	10	760	하다 (する) 5例、듣다 (聞く) 2例
신발을 (靴を)	10	770	걸다 (掛ける) 2例、내려다보다 (見おろす) 2例
노래를 (歌を)	10	780	부르다 (歌う) 5例、듣다 (聞く) 3例
깜둥이를 (黒人を)	10	790	데리다 (連れる) 3例、만나다 (会う) 2例

体言と用言の組み合わせの確率が最も高いのは、〈화를 내다〉(腹を立てる)で、화를という形が現れたら資料中では100.0%の確率で用言は내다가来ているということになる。そのほかに組み合わせ確率の高い結合では〈술을 마시다〉(酒を飲む)の75.0%、〈생각을 하다〉(思いをする)と〈샤워를 하다〉(シャワーをする)の63.6%が目立つ。

2-2 -을格の体言分類

体言を名詞分類の範疇別に見てみる。それぞれの範疇ごとで最も頻度の高い体言を同時に示しておく。なお、身体名詞は具体名詞の、親族名詞は人間名詞のそれぞれ下位範疇であるが、ここでは別に取り出して扱ってある：

【表】-을格の体言の体言範疇別頻度と各範疇ごとの代表的な体言例

体言範疇	頻度	全体に対する比率：頻度累計		代表例
抽象	585	19.2%	585	화 (怒り) 10例、돈 (お金) 8例
活動	485	15.9%	1070	말 (ことば) 45例、생각 (考え) 22例
具体	449	14.8%	1519	문 (ドア) 21例、옷 (服) 13例、버스 (バス) 13例
人間	243	8.0%	1762	여자 (女) 28例、사람 (人) 19例
身体	233	7.7%	1995	손 (手) 23例、눈 (眼) 22例
場所	183	6.0%	2178	집 (家) 34例、마을 (村) 8例
人称代名詞	112	3.7%	2290	나 (私) 64例、저 (わたくし) 11例
親族	105	3.4%	2395	고모 (おば) 19例、아버지 (父) 18例
事柄	91	3.0%	2486	일 (こと) 38例、소식 (便り) 7例
現象	87	2.9%	2573	소리 (声・音) 23例、한숨 (ため息) 9例
不完全	79	2.6%	2652	것 (もの) 57例、줄 (こと) 5例
物質	73	2.4%	2725	술 (酒) 12例、물 (水) 11例
体言形	57	1.9%	2782	것임 (ものであること) 6例、울음 (泣き) 4例
数量	49	1.6%	2831	하나 (1つ) 5例、원 (ウォン) 4例
時間	46	1.5%	2877	첫날밤 (初夜) 12例、밤 (夜) 8例
事物代名詞	44	1.5%	2921	그것 (それ) 31例、그것들 (それら) 5例
位置	38	1.2%	2959	속 (中・奥) 7例、앞 (前) 6例
文	32	1.1%	2991	
団体	18	0.6%	3009	학교 (学校) 4例、나라 (国) 3例
性質	14	0.5%	3023	행복 (幸福) 5例、고독 (孤独) 1例
営為	14	0.5%	3037	구경 (見物) 4例、낚시질 (釣り) 2例
場所代名詞	4	0.1%	3041	이곳 (ここ) 1例、(あっち) 1例
動物	3	0.1%	3044	말 (馬) 1例、맹수 (猛獣) 1例

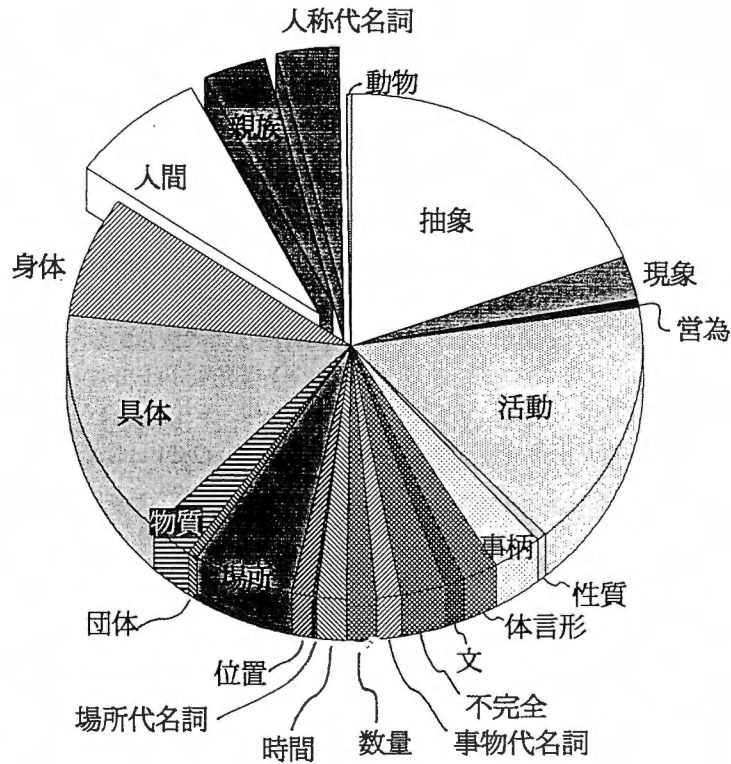
抽象名詞・活動名詞・具体名詞の上位3種で全体の50.0%を占める。なお活動名詞とは不可算名詞のうち、-하다をつけて動詞になり、かつ<-를/-을 가다>をとらない名詞である。また人間名詞とその下位範疇である親族名詞を合計すると348例11.4%、さらに人称代名詞まで加えて人間を表す体言を総計すると460例で15.1%となる。代名詞の小計は160例で5.3%である。

「体言形」としたのは用言のⅡ-口、Ⅰ-기などの体言形である。また「文」とした

のは<어떻게 하고들 있는지를> (みんなのようにしているのかを) や<「아무도 나를 위해 울지 마라」를> (「誰も私のために泣くな」を) などの類である。李珣鎬(1988)などで論じられた<마음이 든든을 하다> や<그는 동생을 미워를 한다> のような例は資料中には見いだせなかった。

体言範疇の割合を図で確認することにする：

【図】-를格の体言範疇の割合



2-3 -를格体言にかかる連体修飾成分

-를格の体言には<그 여자를> (その女を) のように短い連体修飾語がかかっているものがあり、また次の例のように長い連体修飾成分がかかっているものもある：

민수가 실망과 분노와 연민과 선망으로 뒤범벅된 복잡한 표정_을 지을 것이다. <호박31>

minsuga 失望と怒りと憐憫と羨望でごっちゃになった複雑な 表情_을 作る こと だろう。

このような連体修飾成分がついている例がどのぐらいあるかを見ると次の如く、連

体修飾成分のある方がやや少ない：

連体修飾成分のある例	1243例	40.8%
連体修飾成分のない例	1801例	59.2%
計	3044例	100.0%

もちろん것（もの・の）など不完全名詞には全て連体修飾成分がかかっているが、それ以外でも、後にたびたび触れるように、この連体修飾成分の問題はしばしば-를格の体言をめぐる問題に関わってくることになる。

3 用言

3-1 -를格を持つ用言

<Sが・Nを・Vする>の<Vする>にあたる用言の検討に移ろう。用言の異なり語数は925語で、1415語であった体言に比べ少ない。頻度別の分布を見ると次の通りである：

【表】-를格を持つ用言の頻度別分布

31(10%) 以上の用言	7語	569例	18.7%
30 以上の用言	8	599	19.7%
20 以上の用言	19	859	28.2%
10 以上の用言	56	1361	44.7%
5 以上の用言	122	1811	59.5%
4 以上の用言	156	1939	63.7%
3 以上の用言	251	2224	73.1%
2 以上の用言	397	2516	82.7%
1 以上の用言	925	3044	100.0%

単語別では하다が286例、全3044例中の9.4%と飛び抜けた頻度を示している。第2位は보다の92例、3.0%である。また高頻度の上位8語で全体の19.7%を占める。以下に、頻度が10例以上の用言を見てみることにする。なお、この表では「쓰다（使う＋書く）」のように同音異義語はまとめて扱っている：

【表】-를格を持つ用言の単語別頻度

用言	頻度：頻度累計
하다（する・言う・させる）	286：286
보다（見る・会う）	92：378

타다 (乗る+もらう)	41 : 419
받다 (受ける・得る)	40 : 459
알다 (知る・わかる)	39 : 498
위하다 (ためだ)	37 : 535
내다 (出す)	34 : 569
듣다 (聞く)	30 : 599
사다 (買う)	28 : 627
쓰다 (使う+書く)	28 : 655
잡다 (握る・掴む)	27 : 682
들다 (挙げる+入る)	26 : 708
만나다 (会う)	25 : 733
나가다 (出る)	23 : 756
치다 (打つ)	21 : 777
먹다 (食べる)	21 : 798
가지다 (持つ)	21 : 819
향하다 (向かう)	20 : 839
만들다 (作る)	20 : 859
쳐다보다 (見つめる)	19 : 878
부르다 (呼ぶ・歌う)	19 : 897
用言なし	19 : 916
찾다 (探す・見つける)	18 : 934
마시다 (飲む)	18 : 952
주다 (与える・くれる)	17 : 969
보내다 (送る)	17 : 986
생각하다 (考える)	16 : 1002
열다 (開く)	15 : 1017
던지다 (投げる)	15 : 1032
느끼다 (感じる)	15 : 1047
바라다 (望む)	14 : 1061
믿다 (信じる)	14 : 1075
뜨다 (開ける)	14 : 1089
두다 (置く)	14 : 1103
놓다 (置く)	14 : 1117
꺼내다 (取り出す)	14 : 1131
기다리다 (待つ)	14 : 1145
떠나다 (発つ)	13 : 1158
내리다 (下ろす・下げる)	13 : 1171
끝내다 (終える)	13 : 1184
풀다 (解く)	12 : 1196
포기하다 (放棄する)	12 : 1208

잊다 (忘れる)	12 : 1220
잃다 (失う・なくす)	12 : 1232
부리다 (使う)	12 : 1244
벗다 (脱ぐ)	12 : 1256
지르다 (声を上げる)	11 : 1267
시키다 (させる)	11 : 1278
떠올리다 (思い浮かべる)	11 : 1289
따르다 (従う)	11 : 1300
가다 (行く)	11 : 1311
좋아하다 (好む・好きだ)	10 : 1321
얻다 (得る)	10 : 1331
벗기다 (脱がせる)	10 : 1341
걸다 (掛ける)	10 : 1351
갖다 (持つ)	10 : 1361

3-2 用言から見た-를格の体言とのかかわり

更に頻度の高い用言について、用言と-를格の体言範疇とのかかわりなどを中心に
 見てみることにする。

3-2-1 하다

用言別の出現頻度の上からは286例あり、全3044例中でも9.4%を占め、この하다
 (する)が群を抜いている。体言分類の観点からは、3044例中の-를格に出現した全2
 3種のうち20種の範疇が出ていて、用言中最も体言範疇が多岐にわたっている。하다
 の-를格として現れていないのは時間名詞・動物名詞と場所代名詞だけであるが、こ
 のうち動物名詞が最も現れにくいかもしれない。하다の-를格の体言はカテゴリーが
 多様ではあるが、量的には活動名詞が209例と、286例中の73.1%を占め、著しい片寄
 りを見せている。野間秀樹(1990b)では、不可算名詞のうち、-하다をつけて動詞にな
 り、かつ<-를/-을 가다>をとらない名詞を活動名詞と呼び、かつ<活動名詞+-하
 다>の形式の動詞を活動動詞と名づけたが、それに従えば<-를 하다>の多く例は活
 動動詞の名詞部分が分離したものである可能性が高いわけである。活動名詞以外では
 구경(見物)のように<구경을 하다>(見物をする)と<구경을 가다>(見物に行
 く)の両方を取りうる営為名詞、および可算名詞である事柄名詞일(こと・仕事)や
 <싫은 얼굴을 하다>(嫌な顔をする)の얼굴などの身体名詞が目立つが、それ以外
 の可算名詞類が立つと多くは使役動詞的な用法の하다となっている。

하다のとる-를格の名詞中の第1位は생각(考え)で14例あった。それらを見ると<
 그런 생각을>(そういう考えを)のような短い連体修飾語に始まって、<오늘 학교
 가는 걸 포기하겠다는 생각을>(今日学校に行くのをあきらめようという考えを)
 のような長いものに至るまで、全ての생각に連体修飾成分がかかっているところから、
 この名詞생각は資料中では事実上不完全名詞的に用いられていることがわかる。同様

に第2位の일(こと・仕事)も9例中8例が、3位の말(ことば・こと)も8例中7例が、また얼굴(顔)も4例全てが連体修飾成分を伴っている。このように明らかに連体修飾成分を伴い易い単語や単語結合が存在するわけで、今後こうした方面の研究も必要であろう。

なお、하다とは別に생각하다(考える)という形の用言は16例あった。菅野裕臣(1981)は생각하다: 생각을 하다というこの種の用言を分離用言と呼んでいる。-를格を持つ하다にはこの分離用言が非常に多い。活動動詞・営為動詞はその定義上、基本的に分離用言である。また<생각을 하다>(思いをする・考える)の하다のように、語彙的な意味の大部分を体言に預けて、自らは専ら文法的な機能だけを受け持つ動詞を機能動詞と呼ぶが、この하다は典型的な機能動詞としての用法が非常に多い。<活動名詞+-를 하다>と<営為名詞+-를 하다>における하다は基本的に機能動詞である。機能動詞の問題については、ドイツ語に関してはHelbig/Buscha(1977)、日本語に関しては村木新次郎(1991)参照。分離用言と機能動詞はそれぞれ異なった観点からの名づけであるが、共通する問題も多く、更なる研究が必要である。

3-2-2 보다

用言中第2位の보다(見る・会う)は92例であった。하다とは異なって-를格の体言の頻度分布のばらつきが大きい。最も多い名詞것을(ものを)でも8例で、次に多い体言でも3例になってしまう。なお하다には것을は1例も出ていなかった。抽象名詞16例、人間名詞14例、具体名詞12例、不完全名詞9例、人称代名詞8例、活動名詞・親族名詞が各6例といったように、体言範疇別でも16種類が出ている。いわば보다は人間でも事物でも多種多様なものを보다することができ、かつ頻度的にも多様なカテゴリーのものを보다するのである。ただし知覚動詞として物理的に対象を「見る」という意味では体言に人間名詞や具体名詞などの可算名詞が立つことがほとんどで、抽象名詞や活動名詞との結合では基本的に知覚動詞以外の用法になる。<결정을 보다>(決定を見る)は経験動詞、<시험을 보다>(試験を受ける)は処理動詞、<선을 보다>(見合いをする)は共同動詞といった具合である。なお、それら動詞の範疇については7章において詳述する。最後の例のように、보다も機能動詞的用法・分離動詞的用法が多い動詞である。

3-2-3 타다

타다는著しい多義語であって、どこまでが同じ単語か簡単には峻別しがたいのでまず便宜上全てここに入れて見てみる。このうち、日本語の「乗る」で訳せる例では-를格は버스(バス)7例・택시(タクシー)4例・그네(ブランコ)など具体名詞がほとんどで1例のみ動物名詞말(馬)がある。現象名詞붐(ブーム)では「乗ずる」、場所名詞비탈(坂)では「伝わる」の意である。また-를格に抽象名詞월급(月給)・퇴직금(退職金)が来ると「もらう」で訳出できるが、この「もらう」の意のグループだけは明らかに同音異義語であろう。また抽象名詞との結合では<부정을 타다>(不浄に崇る)の例もある。このように-를格の体言範疇によってある程度同音異義語の区別が可能な動詞があることに注目しておきたい。体言分類では計7種の範疇

があった。

3-2-4 받다

第4位받다(受け取る)はvoiceにも関わる動詞で、40例あった。-를格の体言は감동(感動)・조사(調査)など活動名詞が17語19例、도움(助け)や벌(罰)など抽象名詞が6語11例、편지(手紙)など具体名詞が7語7例、人間名詞・現象名詞・事物代名詞が各1例と、받다自体は頻度が高いにも拘らず名詞範疇分布の片寄りが激しい。받다のうち人間名詞+-에게や人間名詞+-한테と共起するものは活動名詞と抽象名詞を-를格にとるもののみで、5例ある。後述の用言範疇別では、受身動詞・享受動詞・受容動詞等に用いられる。

3-2-5 알다

第5位알다(知る・わかる)39例は他の他動詞と趣を異にしている、不完全名詞것을(ものを)が10例、것인가를(ものであるのかを)など文相当のものが5例、것임을(ものであることを)など体言形が7例と、これも片寄りが目立つ。抽象名詞も9語10例と多いが、活動名詞は1例のみである。사실(事実)など事柄名詞は4例、人間名詞は1例、人称代名詞1例であった。

なお、対義語의 모르다(知らない・わからない)は9例あり、うち7例までが不完全名詞줄・것・바をとるものであった。カテゴリー別では他に人称代名詞と文相当のもの、計3種である。모르다それ自体は非常に頻度の高い動詞であるが-를格を伴った모르다の頻度はそう高くないことがわかる。

ところで、알다と모르다は将然判断の接尾辞I-겠-を伴って現れる頻度が非常に高い動詞で、基本資料中でも알겠-6例、모르겠-19例が出現する。ところが-를格を伴う알다と모르다の場合には모르다にわずか1例あるのみである。つまり-를格を伴う알다・모르다にはI-겠-がつくものが少ないわけである。これは資料中でも4例が1語文であったことからわかるようにI-겠-を終止形に持つ文は1語文や2語文といった短い発話の文の占める割合が多いこと、またそれらは書きことばより話しことばに多く現れるということ、および<-는지/-는지/-근지 모르겠다>の頻度が高いということと説明できよう。野間秀樹(1988)p.68および野間秀樹(1990a)pp.14-15参照。

3-2-6 위하다

37例あった위하다は위해18例、위해서13例、위한と위하여がそれぞれ2例で、「…のために・…のための」の意の後置詞的な用法が35例と圧倒的である。-를と위하다の間に他の単語が入り込んだ例も1例もない。2例だけは「산 자가 죽은 자를 위하지 못하고」(生きている者が死んだ者を思いやれず)という他動詞的な用法であった。体言を見ると나(私)など人称代名詞10例、남(他人)など人間名詞8例、아빠(パパ)など親族名詞5例、更に不完全名詞자(者)4例まで入ると人間を表す名詞が27例、全<-를 위하다>の73.0%を占める。これ以外は마련(準備)など活動名詞が4例、性質名詞행복(幸福)が2例などである。なお、不完全名詞以外の通常の名詞が-를格であるものは23例あって、うち60.9%に連体修飾成分がついているのに対し、代

名詞が-를格である11例には1つも連体修飾成分がついていない。

3-2-7 내다

第7位の내다(出す) 34例中では抽象名詞が20例と圧倒的である。このうち10例は<화를 내다>(腹を立てる)という単語結合である。<짜증을 내다>(かんしゃくをおこす)の結合も2例あった。この体言화や짜증には連体修飾成分のついた例は1つもなく、また-를と내다の間に他の単語が入り込んだ例もない。どちらも分離用言でかつ機能動詞結合的である。現象名詞はどれも連体修飾成分がついていて소리(声) 4例と목소리(声) 1例があった。また사직서(辞表)など具体名詞も5例ある。

3-2-8 듣다

第8位の듣다(聞く)は全部で30例、말(ことば) 6例・얘기(話)・부탁(頼み)などの活動名詞が11例、소리(音) 4例など現象名詞が8例、소식(消息)など抽象名詞が5例、等々計7種の体言範疇がある。なお、듣다の-를格体言の26例、86.7%に連体修飾成分がついていることが注目される。

3-2-9 사다

第9位사다(買う)は28例。담배(煙草) 3例など、具体名詞が10語15例、안약(目薬)など物質名詞が4例、집(家)など場所名詞が4例、その他<저녁을 사다>(夕食をおごる)や<호감을 사다>(好感を買う)など5例がある。なお、与格の-에게; -한테; -께(…に)と共起しているのは<저녁을 사다>の1例のみで、「買う」の意味の사다で共起しているものは1例もなかった。この28例の他に사주다(買ってやる)の形式で出ているものが2例あるが、そちらの方は2例とも与格と共起している。

3-2-10 잡다

잡다(掴む・握る)は27例で11位。손(手) 9例など身体名詞が11例、허리띠(ベルト)など具体名詞が4例、<갈피를 잡다>(要領を得る)・<생트집을 잡다>(言いがかりをつける)・<포즈를 잡다>(ポーズをとる)・<군기를 잡다>(軍規を正す)といった抽象名詞との単語結合が4例、その他7例。なお손には9例中6例までが人間名詞+-의(…の)の形式の連体修飾成分がついている。잡다のうちの19例、70.4%の文に主語が明示されているが、全3044例中での50.4%という数値に比べ高く、やや特異である：

「고생 많았지?」／<남편이> 여인의 손을 잡았다. 그 순간 여인은 그 전경아이를 떠올렸다. <신발309>

「苦勞したろう?」／<夫が>女の手を握った。その瞬間、女はあの戦闘警察の少年のことを思い浮かべた。

잡다、特に<손을 잡다>などは、他人の身体へのかかわりを表す動作であること、またこの単語結合が現れるテキスト内の位置を見ると、上の例のように直前の文から

は予測できない、全く新しい突然の事態を描く位置になっていることが多いので、主語を明示し、登場人物間の関係を明確にする必要があるのであろう。

3-2-11 쓰다

第9位쓰다는「使う」「書く」の同音異義語で、合わせて28例である。「使う」の意の쓰다가用いられた14例では<신경을 쓰다>（気を使う）や<악을 쓰다>（わめく）など抽象名詞との結合がほとんどで、わずかに존댓말（丁寧な言葉遣い）などの活動名詞と場所名詞골방（小部屋）があるのに対し、「書く」の意の13例では、ほとんど가답장（返事）・대본（台本）などの具体名詞という対比を見せている。なお<모자를 쓰다>（帽子をかぶる）の結合が1例あった。どちらの쓰다も連体修飾成分のあるものは少ないが、とりわけ「使う」の쓰다には1例、7.1%しかなく、連体修飾成分のついた体言と結合する確率が最も低い用言の1つとなっている。

3-2-12 들다

들다는26例あるが、うち団体名詞학교（学校）と結合した例のみ「入る」の意の同音異義語で、残り25例は全て「挙げる・持つ」の意。-를格の体言としては술잔（杯）などの具体名詞が15例、60%を占める。この15例のうち連体修飾成分のあるものは3例、20.0%しかない。そのほか상황（状況）など抽象名詞5例が例などを「挙げる」意で使われている。身体名詞は3例とも<고개를 들다>（顔を上げる）の単語結合であった。残りは문제（問題）など事柄名詞2例である。

3-2-13 만나다

만나다（会う）25例の内訳は、18例が人間名詞、3例が人称代名詞、1例が親族名詞で、計22例88.0%が人間を表す体言と結合している。その他は버스（バス）、전부（全部）および数量名詞3주（3週間の間）である。最後の例は期間を表す-를の用例である。

3-2-14 나가다

나가다（出る）23例のうち20例は場所名詞집（家）19例と대문（門）1例との結合である。これは「…を出て行く」あるいは「…から出て行く」の意で-를格の体言は主体が元来存在した場を示す。残りの3例は「…しに出かける」の意であるが、こちらは営為名詞오징어잡이를（いか釣りに）と事柄名詞일을（仕事に）2例との結合で、-를格の体言は主体が出かけていって行かう営みを表しており、-를格の体言のカテゴリによって見事な対比をなしている。後述するように、前者は離脱動詞結合、後者は外出動詞結合である。

連体修飾成分のついた例は2例しかない。なお、집との結合は全て同じテキストから採取されたものであるのでテキストが多様になれば나가다自体の出現順位はより落ちるものと考えられる。

3-2-15 치다

치다も同音異義語の多い動詞であり、どこまでを同じ動詞とするかは辞書によっても相当な差がみられるほどであるが、その多くは語彙的な意味の大部分を-를格の名詞に負っており、치다それ自体は機能動詞的な色彩が強い。全21例のうち-를格の名詞は10種類のカテゴリーに及んでおり、とりわけ頻度の高い名詞群はない。〈줄행랑을 치다〉(高飛びする)など抽象名詞との単語結合が5例で最も多かった。連体修飾成分があるものは3例のみで、非常に少ない。

3-2-16 먹다

먹다(食べる・食う)も21例。〈겉을 먹다〉(おじける)や〈나이를 먹다〉(年を取る)・〈쇼크를 먹다〉(ショックを受ける)・〈더위를 먹다〉(暑さに負ける)など抽象名詞との結合が8例、아침밥(朝飯)や저녁(夕食)など活動名詞が6例、약(薬)など物質名詞が4例、その他3例であった。なお他動性という観点から見ると、物質名詞との結合では一般の他動詞と似た性質を示すが、抽象名詞と먹다との結合は語彙的な意味の上では他動性が非常に弱く、ある意味では主体にとっては受動的でさえある。連体修飾成分は4例にのみついている。

3-2-17 가지다

가지다(持つ・所有する)もやはり21例あった。미련(未練)・여유(余裕)・배짱(度胸)など抽象名詞が9例、사진(写真)・재떨이(灰皿)など具体名詞が4例、눈(眼)・치아(歯)という身体名詞が2例、봉우리(峰)・직장(職場)の場所名詞が2例、その他人間名詞아이(子供)と時間名詞시간(時間)があった。カテゴリーは7種に及んでいるがどれも所有の意味から大きく逸脱するものはない。連体修飾成分は13例、61.9%についている。

他に갖다の形で10例出ている。やはり관심(関心)など抽象名詞が6例で最も多い。

3-2-18 향하다

향하다(向かう)20例も先の위하다同様、他動詞というよりは後置詞的である。人間名詞7例をはじめ人間を表す体言が計11例を占める。場所名詞・位置名詞・場所代名詞で4例、具体名詞2例、身体名詞1例であった。

3-2-19 만들다

만들다(つくる・させる)20例も-를格の体言範疇が12種と多岐にわたっている。うち8例は用言の副詞形語尾-게を持つ単語が-를格と用言の間の位置に現われ、「…させる」の意の使役動詞として働いている。その場合の-를格の体言は6例が人間を表すものとなっている。またそれらとは別に2例は-로/-으로格が-를格と用言の間の位置に来ている。

3-2-20 쳐다보다

쳐다보다(見つめる)19例を見ると、보다(見る)の体言のカテゴリーが16種類に及んでいたのに比して6種と、はるかに少なくなっている。その上、人間名詞8例を始

めとする人間を表す名詞が16例、84.2%に達しており、この点でも보다とは大きく異なっている。보다が知覚動詞以外でも用いられたのとは異なり、쳐다보다の方は基本的に知覚動詞として用いられているわけである。なお4例に눈으로（眼で）・얼굴로（顔で）など-로/-으로格が現れている。

3-2-21 부르다

부르다（呼ぶ・歌う）も19例あった。노래（歌）5例、이름（名前）1例など事柄名詞が計7例、人称代名詞4例、親族名詞3例、抽象名詞2例など。1例は<덧니를 꽃나라고 부르다>（八重歯を花齒と呼ぶ）、つまり<A를 B라고 부르다>（AをBと呼ぶ）という、後述の認定動詞構造で現れている。連体修飾成分は4例のみ。

3-2-22 찾다

찾다（探す・見つける）は18例。담뱃가게（煙草屋）・자리（場所）など場所名詞が6例、안경（眼鏡）など具体名詞が3例、활기（活気）など抽象名詞が3例、사람（人）など人間名詞が2例、具体名詞문제（問題）が2例などである。12例、66.7%に連体修飾成分がついている。

3-2-23 마시다

마시다も18例。体言範疇の片寄りが非常に激しいのが特徴である。16例、88.9%가 술（酒）や물（水）などの物質名詞である。1例は<소주 한 병을>（焼酎1本を）の形での数量名詞との結合、いま1例は<가짜를 마시다>（偽物を飲む）という抽象名詞との結合であった。連体修飾成分は4例のみ。

3-2-24 주다

주다（与える・くれる・やる）は17例。영향（影響）・안도감（安堵感）・편안（けんつく）など抽象名詞が9例、감동（感動）・사랑（愛）など活動名詞が4例、삼천원（三千ウォン）など数量名詞が3例あった。連体修飾は5例のみ。

3-2-25 보내다

보내다（送る）は17例。날（日）・하루（一日）・여름（夏）など時間名詞が7例もある点が際だっている。他には미소（微笑）など抽象名詞が4例、具体名詞편지（手紙）が2例など。1位の하다からこの보내다の次に続く생각하다（考える）・열다（開く）くらいまでで頻度上は全用例の約3分の1を占めている。

3-3 用言のない例

用言が現れていない例も19例ある。うち5例は次のように体言+-를の後に-로/-으로（…に）を持つ単語が現れるものである：

이것을 기점으로 동식은 안절부절 못 하기 시작했다. <군것질43>

これを起点に トンシクは居ても立ってもいられなくなってきた。

하나씨의 죽음을 계기로 할아버지도 생각이 달라지셨는지...〈호박65〉
花子の死を契機におじいさんも考えが変わったのか...

...한 학부형이 마침 닥친 주석을 기회로 가윗돈을 한 봉투 주었을 때는...〈병어회175〉

ある父兄がちょうど迫ってきた秋夕を機会に余分な金を封筒に一袋くれた時は...

他にも<곰팡내가 나는 것을 이유로>(かびの匂いがするのを理由に)や<집을 나간 것을 계기로>(家を出たのを契機に:2例)が現れており、出現頻度の上からも-를格の用法の1つのタイプと認めることができる。

これらは発生論的にはともかくとして、いずれも-로/-으로の後ろに하다などの用言が省略されていると見るよりは、そうした用言がなくとも、資格や契機を表す語尾-로/-으로自体が-를をとりえていると考えるべきであろう。機能的にはこの<-를-로>全体で状況語的な成分の役割を果たしている。この用法は小説より新聞記事や論説文に多く現れる。日本語における同様の型については村木新次郎(1991)が詳しい。

用言が現れない型にはまた次のような例がある:

...다시 집착하기를 몇번. 〈바구니58〉
またも執着すること数度。

자네의 과감한 결단에 다시 한번 존경을. 〈군것질33〉
君の果敢なる決断に今一度尊敬を。

この他にも、<선생님께서 말씀하시기를>(先生がおっしゃることには)のようなものも考えられるが資料には現れていない。これら以外で用言のない例のほとんどは聞き返しの発話に現れたものである:

「그런데 친구들이 옆에다 방을 또 준비했대.」

「아니, 방을 왜요?」〈신혼24〉

「ところで友達が隣に部屋をまた用意したってさ。」

「えっ、部屋を、どうして?」

「함께 일하자고 온 거야.」

「무슨 일을요?」〈모독20〉

「一緒に仕事しようとして来たんだ。」

「どんな仕事をですか?」

3-4 -을格の体言範疇の多様性と動詞

以上見てきたように多くの種類の体言範疇をとる動詞と体言の種類が限られている動詞があることがわかる。全3044例中、10例以上出現した用言について、それぞれの用言の頻度を縦軸にとり、また-을格にそれぞれ何種類の体言範疇をとるかを横軸にとって、それらの相関関係を図式化すると次頁のごとくである。

4 -을格と用言の間に立つ要素の問題

<N을・V하다>つまり<Nを・Vする>という2つの要素NとVの間に他の要素が現れる文が、全3044例の18.9%、575例ある。このNとVの間に立つ要素を<間の要素>と呼ぶことにする：

体言 + -를	間の要素	動詞
꽃다발을 花束を	다 みんな	사다 買う

この<間の要素>を観察すると、副詞類(341例)と体言類(220例)がほとんどである。以下、副詞類と体言類に分けて見てみることにする。その際に、典型的な文構造の型を《》に入れて示すことにする。またしばしば使用する動詞範疇の名称は7章で詳述する。

4-1 副詞類が<間の要素>に立つ構文

4-1-1 間の要素が一般の副詞類である構文

擬声擬態語以外の一般の副詞類が<間の要素>に立つ例は117例あり、間の要素に立つものとしては最も多い。この117例中には不活動体主語は2例しかない。副詞を程度副詞・頻度副詞・時間副詞・様態副詞・陳述副詞・否定副詞(안と못)に分類して検討してみることにする。なお副詞の分類の問題、特にそのカテゴリーの連続性については徐尚揆(1991)参照。

程度副詞다(皆・全部)と더(もっと・より)、頻度副詞다시(再び)の頻度が高い。様態副詞잘(よく)も目立つ。

-을格の体言は117例中20例、17.1%が人間を表す体言である。

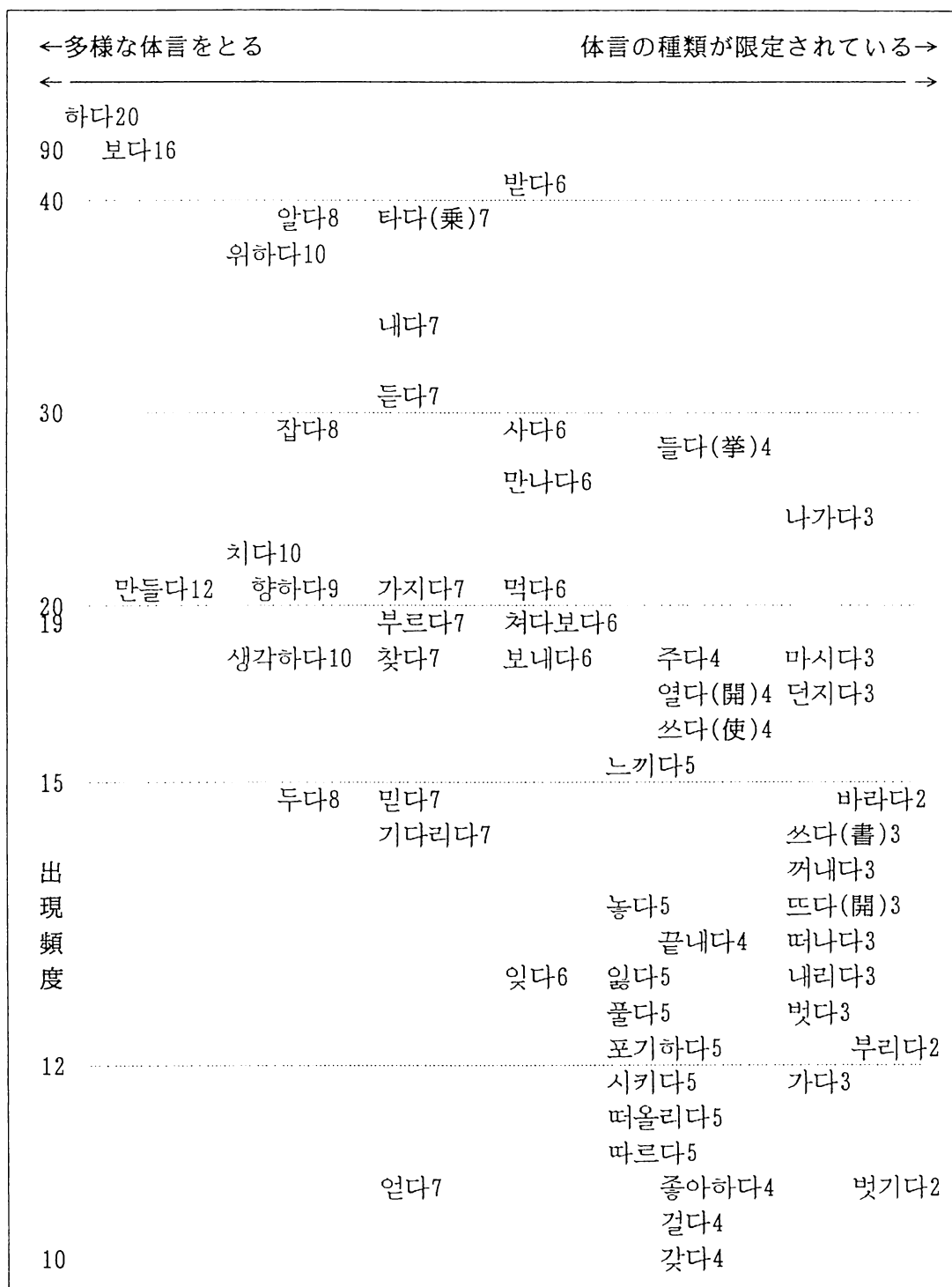
-을格の68例、58.1%に連体修飾成分がついているが、全3044例中で40.8%に比してやや高めの数値である。

この型は次のようにまとめることができる：

《連体修飾成分58.1% + 体言 + -를 副詞 動詞》

これをさらに副詞別に代表的な例を挙げて観察してみることにする。

【図】用言の出現頻度と-를格の体言範疇の多様性による用言の分布
(語彙の横の数字は体言分類の種類数を示す)



《体言+-를 程度副詞 授受動詞など》

<物や事を ある量や程度だけ Vする>

この型が最も量的には多い。-를格には様々な体言が立つ。

시장을	몽땅	사다	(市場を	まるごと	買う)
꽃다발을	다	사다	(花束を	みんな	買う)
힘을	다	빼앗기다	(力を	みんな	奪われる)
공부를	더	하다	(勉強を	もっと	する)
회를	무척	즐거하다	(刺身を	とても	好む)
말을	너무	믿다	(ことばを	あまりにも	信ずる)
물건을	전부	꺼내다	(品物を	全部	取り出す)
절차를	모두	마치다	(手続きを	皆	済ます)
밖을	좀	보다	(外を	ちょっと	見る)

この型のうち特に次のタイプが目立つ。

《数量名詞+-를 程度副詞 더 動詞》

운전수에게	돈 천원을	더 주다	(運転士に	千ウオンを	余計に やる)
이틀을	더	살다	(2日を	余計に	生きる)

《体言+-를 様態副詞 動詞》

옷을	그대로	입다	(服を	そのまま	着る)
미션을	따로	만나다	(ミソンに	別の機会に	会う)
몸을	그냥	던지다	(身を	そのまま	投げる)
일을	빨리	끝내다	(仕事を	早く	終える)
아이들을	잘	보살피다	(子供たちを	よく	面倒見る)

《体言+-를 時間副詞 動詞》

집을	오래	비우다	(家を	長く	空ける)
남편을	평생	떠받들다	(夫を	一生	崇める)
사람들을	계속	위협하다	(人々を	ずっと	脅す)
손을	잠깐	멈추다	(手を	しばらく	止める)

《体言+-를 頻度副詞 動詞》

백을	또	사다	(バッグを	また	買う)
협박을	다시	듣다	(脅迫を	再び	聞く)
시아버지를	처음	보다	(義理の父を	初めて	見る)

《体言+-를 陳述副詞 動詞》

117例中、陳述副詞が間の要素になった例は과연(果たして)を用いた次の1例のみであった：

… 2박 3일의 시간을 과연 배낼 수 있을까, 어렵없는 일이었다. <군것질34>

…二泊三日の時間を果たして出せるか、とんでもないことであった。

4-1-2 間の要素が擬声擬態語である構文

間の要素が擬声擬態語の副詞である型は計57例であった。擬声擬態語の高頻度の単語は少なく、最も頻度の高いㅍ(ぎゅっと)でも4例しかない。なお、朝鮮語では一般に擬声擬態語は語層としては頻度が高いにも拘らず個々の単語で高頻度のものはほとんどないのであるがここでもその傾向は踏襲されている。野間秀樹(1991)参照。副詞の種類からみると様態副詞がほとんどである。不活動体主語は5例であった。前置の共起格のある例は5例のみ。

-를格につく連体修飾成分は27例、47.4%。体言の範疇別では13種類と多岐にわたっているが、身体名詞が17例29.8%と非常に多い。以下具体名詞7例12.3%、抽象名詞6例10.5%、場所名詞5例8.8%と続く。

用言は人間の動作を表す動作動詞が非常に多い。中でも身体名詞・具体名詞ではほとんどが動作動詞である。

《身体名詞29.3%・具体名詞12.3%+-를 擬声擬態語の様態副詞 動作動詞》

입술을	꼭	깨물다	(唇を	ぎゅっと	かむ)
머리를	꽂	움켜잡다	(髪を	ぎゅっと	つかむ)
손을	씩씩	비비다	(手を	ごしごし	こする)
뺨을	철썩	갈기다	(頬を	ぴしゃりと	打つ)
어깨를	툭툭	치다	(肩を	とんとん	打つ)
철망을	광광	치다	(金網を	がんがん	叩く)
교복을	털털	털어내다	(制服を	ぱたぱた	はたく)

《その他の名詞+-를 擬声擬態語の様態副詞 動詞》

앞을	뚜벅뚜벅	걸어다니다	(前を	すたすた	歩き回る)
뒤를	줄줄	따라다니다	(後ろを	ぞろぞろ	ついて回る)
결정을	딱	내리다	(決定を	すぱっと	下す)
삽질을	푹푹	하다	(シャベルで	ざくざく	すくう)
침을	질질	흘리다	(唾を	たらたら	垂らす)
냄새를	확	퐁기다	(匂いを	ふんと	匂わす)
숨을	훅	들이키다	(息を	すっと	飲み込む)
큰숨을	호호호호	들이마시다	(大きな息を	ふうふう	吸う)

《時間名詞・抽象名詞等+-를 擬声擬態語 動詞》

첫날밤을	잔뜩	기대하다	(初夜に	めいっぱい	期待する)
마음을	꼭	참다	(気持ちを	ぐっと	押さえる)
악을	버럭버럭	쓰다	(声を	ぎゃあぎゃあ	張り上げる)
걸기를	바짝	세우다	(頑固に怒る)		
눈치를	슬금슬금	살피다	(顔色を	それとなく	伺う)

4-1-3 間の要素が-이を持つ副詞

-이を持つ副詞は計24例。副詞分類上では様態副詞が多く、程度副詞や頻度副詞がこれに次ぐ。使役の意味になっている例はない。また不活動体主語は1例もない。主語が明示的に現れている6例のうち-가/-이の比率は16.7%。-를格の体言は12種にわたっており、とりわけ多い範疇はないが、人間を表すものが極端に少なく、わずかさ나매를(四人兄妹を)の1例、4.2%しかないことが特徴である。ただしこれとて分類上は数量名詞になる。

16例、66.7%と、-를格に連体修飾成分がついている例が多い。

《連体修飾成分66.7%+体言(人間4.2%/事物95.9%)+-를 -이の副詞 動詞》

발바닥을 사정없이 갈겨대다 (足の裏を 情け容赦なく ひっぱたく)
술잔을 높이 들다 (杯を 高く 上げる)
술을 많이 마시다 (酒を たくさん 飲む)
행동을 같이 하다 (行動を 共に する)
월부금을 다달이 물다 (月賦を 毎月 払う)
어머니로서 가정을 끊임없이 훈도하다 (母として 家庭を 絶えず 訓導する)

4-1-4 間の要素が動詞の-게副詞形である構文

動詞の-게副詞形は計24例。このうち不活動体主語は9例もあり、動詞の-게副詞形24例中の35.5%、主語が明示的に現れている15例のうちでは60.0%にのぼる。一般的な朝鮮語の文における不活動体主語の少なさからみても、また-를格を持つ文において不活動体主語は5.8%しかないことに照らしても、動詞の-게副詞形を持つ文におけるこの不活動体主語の多さは注目に値する。なお、主語がある文のうち、-가/-이の比率は66.6%である。

-를格の体言は10種あるが、うち人間を表すものが12例50.0%を占め、非常に多い。用言は2例を除いて하다19例と만들다3例で、この22例は全て使役の意を表すものとなっている。

使役の意味となっている22例のうち、主語が明示的に現れているのは15例68.1%、現れていないものは7例31.8%と、全体の50.4%に比べると使役の場合には主語が明示的に現れる傾向があることがわかる。＜AがBにCをさせる＞という使役の関係を曖昧にしないためには主語を明示化する必要があるし、とりわけ不活動体主語の場合にはレトリック上の点でもこれを明示することに意義があるからである。

連体修飾成分のついた-를格は少なく、8例、33.3%である。このうち人間を表す体言についたものは1例しかない。

《体言(活動体40.0%/不活動体60.0%)이 体言(人間50%/事物50%)을 動詞の-게副詞形 使役動詞하다/만들다91.7%》

-게副詞形全体でみるとこうなるが、さらに主語別に見ると次のような型を抽出できる：

《体言(不活動体9例)이 体言(人間3例33.3%/事物6例66.7%)을 動詞の-게副詞形 使役動詞하다/만들다》

한마디가 나를 놀라게 하다 (一言が 私を 驚かせる)
 비애가 가슴을 메이게 하다 (悲哀が 胸を つまらせる)
 물음이 생각을 낳게 하다 (問いが 考えを 産ませる)
 광경이 입을 딱 벌리게 하다 (光景が 口を あんぐり 開けさせる)
 착각은 저를 스물여섯이 아닌 서른 여섯으로 여기게 만들다 (錯覚は 私を 26
 歳ならぬ36歳であるように 感じさせる)
 얼굴빛이 고모를 피곤한 중년의 모습으로 보이게 하다 (顔色が おばを 疲れた中
 年の姿に見せる)

《体言(活動体6例)이 体言(人間3例50.0%/事物3例50.0%)을 動詞の-게副詞形 使役
 動詞하다/만들다》

시아버지는 식구들을 놀라게 하다 (義理の父は 家族を 驚かす)
 내가 5 만원을 타게 하다 (私が5万ウォンを貰うようにする)
 미선은 나를 당황하게 만들다 (ミソンは 私を 慌てさせる)

《主語なし7例 体言(人間4例57.1%/事物3例42.9%)을 動詞の-게副詞形 使役動詞하
 다/만들다》

저희를 고민하게 만들다 (私たちを 悩ませる)
 아이를 갖게 하다 (子供を はらませる)
 과장을 만나게 하다 (課長に 会わせる)
 시부모를 긴장케 하다 (義理の父母を 緊張させる)
 말로를 예측케 하다 (末路を 予測させる)

《主語なし2例 体言(人間50%/事物50%)을 動詞の-게副詞形 非使役動詞》

以下の2例のみ。

물을 알맞게 넣다 (水を ちょうどよく 入れる)
 저를 흔들리지 않게 지키다 (私を ぐらつかないよう 守る)

4-1-5 間の要素が形容詞の-게副詞形である構文

形容詞の-게副詞形は63例あった。うち不活動体主語は7例、11.1%。主語が明示的
 に現れているのは31例なのでそのうち22.6%が不活動体主語ということになる。動詞
 の-게副詞形に比べ不活動体主語がはるかに少ないことがわかる。なお主語のうち-가
 /-이の比率は22.6%と、これも動詞の-게副詞形と逆転している。

使役的な意味になっているものは<마음을 너무 아프게 하다> (心をあまりにも
 痛ませる) など8例しかなく、形容詞の-게副詞形の多くは動作の様態を表すものであ
 った。動詞の-게副詞形にはなかった-시키다の形式の動詞がこの他に2例現れている。
 非使役的な例は53例である。

また-를格の体言には人間を表すものが19例で30.2%、事物を表すものが44例69.8
 %と、こちらも動詞の-게副詞形に比べると人間を表す体言が少ない。人間名詞は11
 例、具体名詞8例、抽象名詞8例、不完全名詞6例、活動名詞6例、親族名詞5例など。

-를格に連体修飾成分がついた例は34例、54.0%であるが、人間を表す名詞には31.6%しかついておらず、抽象名詞・活動名詞計14例中の11例、78.6%についている。不完全名詞にはもちろんついてる。

《体言(主語ありのうち活動体77.4%/不活動体22.6%)이 連体修飾成分54.0% + 体言(人間30.2%/事物69.8%)을 形容詞の-게副詞形 非使役動詞》

全体として平均化するとこうだが、さらに細分化すると：

《体言(活動体24例45.3%/不活動体3例5.7%/なし26例49.1%)이 連体修飾成分31例58.5% + 体言(人間14例7.5%/事物39例76.5%)을 形容詞の-게副詞形 非使役動詞》

말을 그렇게 하다 (ことばを そのように 言う)
아버지는 이야기를 이렇게 들려주다 (父は 話を このように 聞かせてくれる)
마누라를 점잖게 말리다 (妻を おとなしく 制する)
할아버지를 쉽게 이해하다 (おじいさんを 容易に 理解する)
저는 머리를 길게 늘어뜨리다 (私は 髪を 長く 垂らす)
대문을 거칠게 밀다 (門を 手荒に 押す)
사람은 소리를 크게 내다 (人は 声を 大きく 発する)
결과를 확실하게 얻다 (結果を 確実に 得る)
이 노릇을 어떻게 수습하다 (このことを どう 収拾する)
나는 머릿속까지 물렁거리는 것을 기이하게 여기며 위장계를 만져 보았다. <막차69>

私は頭の中までくらくらするのを奇異に感じながら胃腸のあたりをさわってみた。

《体言(活動体12.5%/不活動体50.0%/なし37.5%)이 連体修飾成分37.5% + 体言(人間4例50.0%/事物4例50.0%)을 形容詞の-게副詞形 使役動詞만들다/하다》

고모의 귀국이 우리 집안을 그토록 우울하게 만들다 (おばの帰国がうちの身内をそれほどまでに憂鬱にさせる)

나선 것이 아버지를 더 난처하게 만들다 (でしゃばったのが父を一層困らせる)

그것이 아버지를 숙연하게 만들다 (それが父を肅然とさせる)

결정됐던 점이 무엇보다 마음을 상하게 하다 (決定された点が何よりも心を痛ましめる)

그는 마누라를 더욱 방실방실하게 만들다 (彼は女房を一層にこにこさせる)

어머니를 몹시도 기쁘게 해 드리다 (母をひどく喜ばせてさしあげる)

그이의 마음을 너무 아프게 하다 (彼の心をあまりにも傷つける)

내 기분을 막막하게 만들다 (私の気分を漠々とさせる)

《体言(活動体1例/不活動体1例)이 体言(人間1例50.0%/身体1例50.0%)을 形容詞の-게副詞形 시키다動詞》

욕망이 궁극적으로 인간을 어떻게 파멸시키다 (欲望が窮極的に人間をどう破滅させる)

공장장은 눈을 시뵘겅게 충혈시키다 (工場長は目を真っ赤に充血させる)

ここで間の要素が動詞の-게副詞形である構文と形容詞の-게副詞形である構文の互いの特徴を対照して整理してみることにする：

	動詞の-게副詞形	形容詞の-게副詞形
用例数	24例	63例
明示主語のうち不活動体主語	多い(60.0%)	少ない(22.6%)
明示主語のうち-가/-이	多い(66.6%)	少ない(22.6%)
-를格体言のうち人間を表すもの	特に多い(50.0%)	やや多い(30.2%)
連体修飾成分	少ない(33.3%)	多い(54.0%)
機能	使役が多い	動作の様態が多い

4-1-6 間の要素が形容詞の-히副詞形である構文

形容詞の-히副詞形は25例。副詞分類ではおおむね様態副詞である。不活動体主語は1例のみ。主語がある例13例のうち-가/-이の比率は23.1%。形容詞の-게副詞形では使役が10例ほどあったのに対し、この-히副詞形では使役の意味になっているものは1例もない。-히は-ㄷ의異形態であるから納得できる結果である。

-를格の体言は人間が3例、12.0%しかない。連体修飾成分は17例、68.0%のついている。これも-이と並行的な数値である。

《体言(活動体92.3%/不活動体7.7%)이 連体修飾成分68.0% 体言(人間12.0%/事物88.0%)을 形容詞の-히副詞形の様態副詞 動詞》

시동생들은 대학을 무난히 졸업하다 (義理の弟たちは 大学を 無難に 卒業する)

아버지는 속을 뻔히 들여다보다 (父は 腹の中を すっかり 覗き見る)

위치를 굳건히 하다 (位置を 強固に する)

소식을 자세히 전하다 (消息を 詳しく 伝える)

가장임을 충분히 자인하다 (家長であることを 十分に 自任する)

副詞的なものには、この他に-듯・-듯이・-처럼・-대로などの語尾をもつものが10例あった。

4-2 体言類が<間の要素>に立つ構文

4-2-1 間の要素が数量名詞である構文

量を表す数量名詞の類が<間の要素>に立つ構文である。ほとんど가번(…回) 8例や차례(…回)のように主として動作動詞と共に用言で表される行為の回数を示すものと、-를格の体言の数量を示す数量名詞と授受関係を表す動詞との組み合わせである。わずかに<학교를 한 해만 다니다>(学校に一年間だけ通う)のように時間名詞で期間を表す例がある。計38例。

15例、39.5%の-를格に連体修飾成分がついているが、全体のほぼ平均値である。

《名詞+-를 数量名詞 動作動詞など》

<対象を 回数分だけ 行為する>

동식씨를	한번	만나뵈다	(トンシクさんに	1度	お目にかかる)
손금고를	열두 번	열다	(手提げ金庫を	12回	開ける)
며느리를	한 방	때리다	(嫁を	1発	叩く)
뺨을	한 대	올려붙이다	(頬を	1発	ひっぱたく)
편지를	몇 차례	보내다	(手紙を	何度か	出す)
심호흡을	몇 번이나	하다	(深呼吸を	何度も	する)
고통을	단 한번이라도	생각하다	(苦痛を	ただ1度だけでも	考える)
동식을	서너 걸음	앞서다	(トンシクに	3・4歩	先んじる)

《名詞+-를 数量名詞 授受動詞など》

<対象を その量だけ 操作する>

백을	꼭 하나	사주다	(バッグを	必ず1つ	買ってやる)
보리쌀을	석 되나	주다	(麦を	3升も	くれる)
가윗돈을	한 봉투	주다	(余分な金を	1袋	くれる)
월급을	70퍼센트	80퍼센트 받다	(月給を	70%80%	貰う)
핑계거리를	하나	만들다	(口実を	1つ	作る)
이파리를	하나씩	따다	(葉っぱを	1枚ずつ	摘む)
가족을	하나 더	늘리다	(家族を	もう1人	増やす)

《名詞+-를 혼자等 動詞》

<対象を 対象一人で・主体一人で 行為する>

결정을	혼자	내리다	(決定を	1人で	下す)
신부를	혼자	되두다	(新婦を	1人	おいておく)

4-2-2 間の要素が主語である構文

主語となる間の要素は1例(波が打ち寄せる)を除いて全て活動体であった。計52例。なお、-를格の体言に連体修飾成分がついているものの比率が46例88.5%と著しく高いことが特徴となっている。全3044例でみると連体修飾成分のあるものは1243例、40.8%なので、間の要素があるもの、とりわけ間の要素が後置の主語である場合は-를格の体言に連体修飾成分がついている場合が非常に多いことがわかる。

《連体修飾成分88.5%+名詞+-를 体言(活動体98.1%/不活動体1.9%)-이 動詞》

-가/-이	15例	うち13例86.7%に連体修飾語あり
-는/-은	36例	うち32例88.9%に連体修飾語あり
その他	1例	うち1例100.0%に連体修飾語あり

なお体言形Ⅱ-口을の場合は-는/-은による主語は後置となりやすい。体言形でく

くる文が長くなりやすく、体言形となった用言の主語と紛れ易いためだと思われる：

연극은 어떤 상업적인 효과보다도, 연습을 시작할 때부터 끝날 때까지 내가 극중의 인물 속으로 빠져 들어가는 그 엑스타지가 좋아서 하는 것임을 우리는 잘 알고 있다. <호박26·7>

演劇はある商業的な効果よりも、練習を始めるときから終わるときまで私が劇中の人物の中にはいりこむ、そのエクスタシーが好きだからするのだということを我々はよく知っている。

4-2-3 間の要素が-로/-으로である構文

間の要素に語尾-로/-으로(…で・…に)を持つ名詞類が来るものである。前置の-로/-으로は108例あったのに対し、こちらはその55.6%の60例があった。格的な要素のうちでは間の要素に最も立ちやすいのがこの-로/-으로である。

前置の-로/-으로の場合には-를格の体言に連体修飾成分がかかっているものが28例25.9%しかなかったのに、この後置の場合となると35例、58.3%に達する。ただし-를格の体言が名詞でなく代名詞である場合には連体修飾成分のあるものは1例もない。代名詞には連体修飾成分がつきにくい傾向がはっきりと現れている。

前置の主語-는/-은は21例35.0%に出現している。前置の主語-가/-이は10.0%である。前置の-로/-으로の場合はそれぞれ42.6%、21.3%であったから、相対的に-로/-으로が-를の前にあった方が前置の主語の出現率が高いわけである。なお不活動体主語は1例のみ。

-를格の体言の種類は多岐にわたっている。抽象名詞8例・人間名詞8例で共に13.3%、具体名詞・活動名詞・身体名詞が共に7例11.7%、人称代名詞が6例10.0%、 그것など事物代名詞が5例8.3%、等々である。6.5%であった前置の-로/-으로に比べて代名詞の比率が20.0%と高い。これは特に事物代名詞の多さによるものである。

《連体修飾成分58.3%+体言1+-을 体言2+-로 動詞》

4-2-4 間の要素が-에である構文

間の要素が-에(…に)を持つ名詞となっているものを見ると、-에そのものには場所名詞と位置名詞が多く、身体名詞・現象名詞・時間名詞などがわずかに見られる。前置の-에126例に対し後置の-에はその28.6%の36例であった。

うち21例60.0%の-를格に連体修飾成分がついている。前置の-에では20.6%にしかついていないのでここでも-를格の体言に連体修飾成分がつくと共起格が-를格の後ろに追いやられるという統辞論上の傾向を見てとることができる。なおここでも代名詞3例にはやはり連体修飾成分がついていない。

-를格の体言の範疇では具体名詞が11例31.4%と群を抜いて多い。そして人間名詞6例17.1%、親族名詞4例11.4%、抽象名詞3例8.6%と続く。前置の-에では抽象名詞が22.2%で1位、活動名詞が19.8%で2位であったから体言範疇の比率は随分と様変わりしていることになる。1つには活動名詞の場合は<대답을 하다>(答えをする)・<기겁을 하다>(仰天をする)・<연애를 하다>(恋をする)・<실수를 하다>

(しくじる)等、分離用言が基本であって、これらは体言と用言하다との間に他の要素が入り込みにくいからだと考えることができる。抽象名詞の方にも<기를 쓰다>(氣張る)・<앙심을 품다>(恨みを抱く)・<잠을 자다>(眠る)・<욕심을 내다>(欲を出す)など分離用言的なものが多く、やはり間の要素が入り込みにくい傾向にあるのだと思われる。

《連体修飾成分60.0%+体言을 場所名詞・位置名詞等+-에 動詞》

4-2-5 間の要素が-에게・-한테・-게である構文

人間を表す名詞に-에게・-한테・-게(…に)の語尾がついたもの。前置では56例であったが後置では11例。63.6%に連体修飾成分がついているが、標本数が少なく、充分なことは言えない。

《連体修飾成分63.6%+体言+-을 人間名詞等+-에게 動詞》

4-2-6 間の要素が-에서である構文

間の要素が-에서(…で)を持つ名詞である例は、前置の-에서が59例あるのに比べ非常に少ない。場所名詞と位置名詞がほとんどで、団体名詞が1例、具体名詞が1例、計9例。これもあれこれ論じるには標本数が少ない。

《連体修飾成分66.7%+体言+-을 場所名詞・位置名詞等+-에서 動詞》

4-2-7 間の要素が否定の副詞である構文

否定を表す副詞안7例と不可能を表す副詞못11例、計18例。ただしこの型は<否定の副詞+用言>全体で用言と見ることができるので、間の要素がない例だと考えた方がよい。その傍証として-를/-을格にかかる連体修飾成分のある例が3例、16.7%と非常に少ないことを挙げることができる。体言は活動名詞4例、抽象名詞4例など。

《名詞+-를 안・못 動詞》

4-2-8 その他の間の要素を持つ構文

この他に格語尾としては-에다・-다(…に)が2例、-한테서(…から)が1例あり、-를が重なって出てくる、いわゆる二重対格の例が2例あった。1例は用言が시키다(させる)である：

… 아니,무엇보다 팔자직을 대학 공부를 시킬 수 있었던 집안에서 자란 내가 …
<병어회174>

…いや、何よりも、娘に(対格)大学の勉強を(対格)させることができた家で育った私が…

いま1例は誤植の可能性が高い。

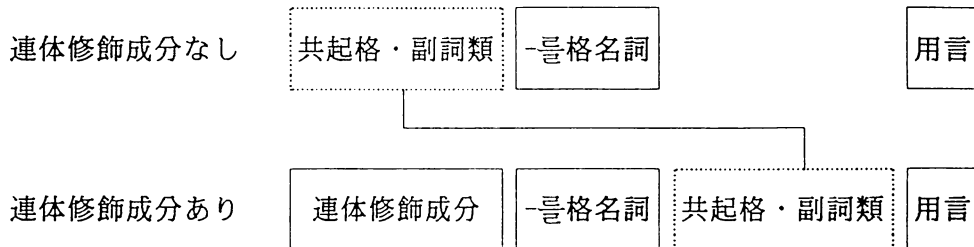
4-3 間の要素の量的な分布

以上の<間の要素>を整理すると次の如くである：

【表】-를格と用言との間に出現する要素の分類別頻度

副詞	小計 341例
一般の副詞	117例
形容詞の-게副詞形	63例
擬声擬態語	57例
形容詞の-히副詞形	25例
動詞の-게副詞形	24例
-이副詞	24例
안・못	18例
-처럼・-듯이等	10例
その他の副詞類	3例
体言類	小計 220例
-로／-으로	60例
主語	52例
数量名詞	38例
-에	36例
その他の体言類	12例
-에게・-한테・-께	11例
-에서	9例
-를	2例
その他	14例
間の要素	計 575例

間の要素のある例は総じて-를格に連体修飾成分がついているものが多い。全575例中330例、57.4%を占めるが、これは全3044例中では40.8%に比べ高い数値である。これまでにもたびたび見たように、-를格に連体修飾成分がつくことによって共起格や副詞類などが-를格の後ろに追いやられるという語順の傾向を見て取ることができよう。ただし-를格が代名詞の場合はもともと連体修飾成分がつきにくい：



5 主語以外の他の格語尾との共起

<Nを・Vする>の構造の-를格の前に格語尾を伴った体言類が立つ<N1に/で/から等・N2を・Vする>という構造の文も資料にはしばしば現れる。これを<前置の共起格>と呼ぶことにする。先にみた<Nを>と<Vする>との<間に立つ要素>に出現した共起格はいわば<後置の共起格>ということになる。なお、主語については前述の通りである。

前置の共起格の類には次のようなものがあつた：

【表】-를格の前の位置に出現する共起格の類（=前置の共起格）の頻度

-에	126例
-로／-으로	108例
-에서	59例
-에게	30例
-한테	26例
-께	4例
-한테서	3例
-에다가	2例
-로서	3例
-로써	3例
-과／-와	1例
その他	
前置の共起格 計	126例

なお、-에는や-에도は-에で計量する方法を採った。

これら前置の共起格をもつものは、一般的に言って-를格の体言に連体修飾成分がないものが多い。前置の共起格があると連体修飾成分と競合するため、避けられる傾向にあるのであろう。

前置の共起格の主要なものを更に-를格の体言分類による分布の観点から調べてみることにする：

5-1 前置の-에格と共起する-를格

【表】前置の-에格と共起する-를格の体言の分類別頻度 計126例中

抽象	: 28	: 22.2%	事柄	: 4	: 3.2%
活動	: 25	: 19.8%	時間	: 2	: 1.6%
具体	: 21	: 16.7%	不完全	: 1	: 0.8%
身体	: 16	: 12.7%	動物	: 1	: 0.8%
人間	: 5	: 4.0%	体言形	: 1	: 0.8%
場所	: 5	: 4.0%	性質	: 1	: 0.8%
現象	: 5	: 4.0%	事物代名詞	: 1	: 0.8%
物質	: 4	: 3.2%	營為	: 1	: 0.8%
数量	: 4	: 3.2%	位置	: 1	: 0.8%
			計	: 126	: 100.0%

この-에格と共起する-를格の体言は人間名詞の比率が相対的に低い。全3044例中では人間名詞は8.0%であったから2分の1ということになる。代わりに身体名詞が全体比7.7%から12.7%と上がっている。-에格に来る体言はさまざまであるが場所名詞・位置名詞・時間名詞が相対的に多い。また後に例を挙げるように<…を契機に>の意を表す-에が散見される。

5-1-1 -에格と抽象名詞+-를格の共起

《場所名詞+-에 抽象名詞+-를 動詞》

<対象を与える目標・相手に 抽象的な事柄を 与える・及ぼす>

가계	에	보탬	을	주다	(家計の 足しに する)
가슴	에	자포자기	를	불어넣다	(胸に 自暴自棄を 吹き込む)
길바닥	에	자유	를	쏟다	(道端に 自由を ぶちまける)
프론트	에	사정	을	얘기하다	(フロントに 事情を 話す)
무엇	에	책임	을	전가하다	(何に 責任を 転嫁する)
문제로	친정	에	누를	끼치다	(問題で 実家に 累を 及ぼす)

《位置名詞・活動名詞・抽象名詞等+-에 抽象名詞+-를 動詞》

<限定された範囲で・ことに 抽象的なことを 行う>

집안	에	생기	를	불러일으키다	(家に 生気を 呼び起こす)
----	---	----	---	--------	----------------

무대 위에	다른 꿈을	꾸다	(舞台の上に 別の夢を 夢見る)
내심에는	앙심을	품다	(内心では 恨みを 抱く)
아동복지에	관심을	갖다	(児童福祉に 関心を 持つ)
주장에	일치를	보다	(主張に 一致を 見る)
일에	목숨을	걸다	(仕事に 命を 掛ける)
뒷바라지에	기를	쓰다	(世話に 力を 入れる)
매사에	정격만을	인정하다	(万事に 正式なものだけを 認める)
연습에	의욕을	잃다	(練習に 意欲を 失う)
경기도 송탄시에	혼례를	올리다	(京畿道松炭市にて 婚礼を 上げる)

《時間名詞等+-에 抽象名詞+-를 動詞》

<限定された時に 抽象的なことを 行う>

일조점호 뒤에	애국가를	부르다	(朝の点呼の後に 愛国歌を 歌う)
다음달에	전역을	앞두다	(来月 転役を ひかえる)
동시에	욕심을	내다	(同時に 欲を 出す)
나중엔	전부를	떠맡다	(しまいには 全部を 引き受ける)
기간내에	일정한 물량을	판매하다	(期間内に 一定の物量を 販売する)
첫 만남에	부정을	타다	(最初の出会いから 崇る)

《連体修飾成分+事柄名詞・不完全名詞+-에 抽象名詞+-를 動詞》

<契機・原因で 抽象的なことを 受ける・被る>

벌어졌던 일에	쇼크를	먹다	(繰り広げられていたことに ショックを 受ける)
바르는 바람에	속설을	믿다	(塗るので 俗説を 信じる)
도마뱀 때문에	잠을	잘 수 없다	(とかげのために 眠れない)

5-1-2 -에格と活動名詞+-를格の共起

《場所名詞・具体名詞+-에 活動名詞+-를 하다・하다動詞》

<ある場に対して 活動을 行う>

가계부에	기재를	하다	(家計簿に 記載을 する)
파출소에	신고를	하다	(派出所に 申告을 する)
대학에	진학을	하다	(大学に 進学을 する)
데에	연락을	취하다	(お宅に 連絡을 とる)

《活動名詞+-에 活動名詞+-를 動詞》

<あることに対して 活動을 行う>

남편 선택에	인생의 승부를	걸다	(夫の選択に 人生の勝負을 かける)
--------	---------	----	--------------------

《場所名詞・位置名詞+-에 活動名詞+-를 動詞》

<限定された場のうちで 活動을 行う>

감시 속에 결혼식을 올리다 (監視の中で 結婚式を あげる)
 본정통에 살림을 꾸리다 (本町通りに 居を構える)

《時間名詞+-에 活動名詞+-를 하다等》

<限定された時に 活動을 行う>

피리어드를 찍기도 전에 승락을 하다 (終止符も打つ前に 承諾을 する)
 첫날밤에 실수를 하다 (初夜に 험을 する)
 졸업 후에는 진학을 하다 (卒業後には 進學을 する)
 오후에 연습을 하다 (午後に 練習을 する)
 옛날에 연애를 하다 (昔 戀愛을 する)
 오래간만에 화장을 하다 (久しぶりに 化粧을 する)
 침묵 뒤에 말을 내어놓다 (沈黙の後に ことば를 吐く)
 엄동설한에 구류를 살리다 (嚴冬に 拘留을 させる)
 결혼 다섯달만에 실직을 계획하다 (結婚5カ月で 失職을 計画する)

《活動名詞+-에 活動名詞+-를 하다》

<것에加えて 活動을 行う>

5시 기상에 마루방 청소를 하다 (5時起床に 板の間の清掃을 する)

《抽象名詞+-에 活動名詞+-를 하다等》

<契機・原因にして 活動을 行う>

이번 기회에 방향전환을 하다 (この機会に 方向轉換을 する)
 묻는 말에 대답을 하다 (聞くことに 答える)
 파티에서 거나해진 김에 폭로 발언을 하다 (パーティで酔ったついでに暴露發言을 する)

《抽象名詞等+-에 活動名詞+-를 하다等》

<契機・原因で 無意志的な活動等を 行う>

애정에 감동을 받다 (愛情に 感動을 する)
 추접스러움에 기겁을 하다 (汚らしさに 仰天을 する)
 얼굴빛에 기겁을 하다 (顔色に 仰天을 する)
 모습에 기겁을 하다 (姿に 仰天을 する)
 신랑의 말에 샤워를 끝내다 (新郎のことばに シャワー를 終える)

5-1-3 -에格と具体名詞+-를格の共起

《身体名詞・具体名詞・場所名詞+-에 具体名詞+-를 付与動詞・操作動詞》

<目標に 対象을 付与する・与える>

등에 물통을 걸머지다 (背中に 水桶을 背負う)
 머리에 모자를 쓰다 (頭に 帽子를 かぶる)
 입술에 꽃잎을 그리다 (唇に 花びらを 描く)

각서에 도장을 찍다 (覺書に 判を 押す)
 생애에 옹이를 박다 (生涯に 節を つける)
 팍팍잡힌 체구에 검은 제복을 입다 (横太りした体に 黒い制服を 着る)
 뜰에 잔디를 깔다 (庭に 芝生を 植える)
 물가에 낚시대를 드리우다 (水辺に 釣竿を 垂らす)
 학교에 사직서를 내다 (学校に 辞表を 出す)
 병정들 앞에 돌맹이를 던지다 (兵隊たちの前に 石を 投げる)
 잠옷 위에 한복을 걸치다 (寢間着の上に 民族服を ひっかける)
 쳐들어오는 바닷물에 손전등을 휘젓다 (押し寄せる海の水に 懐中電灯を 照らす)

《身体名詞+-에 具体名詞+-를 動詞》

손에 손에 태극기를 흔들다 (手に手に 太極旗を 振る)

《抽象名詞+-에 具体名詞+-를 授受動詞》

<基準とする値で ものを 授受・取引する>

이 값에 좋은 물건을 사다 (こんな値で いい品を 買う)

<基準とする時に ものを 操作する>

그 나이에 등짐을 붙이다 (あの歳で 荷を 背負う)

《時間名詞等+-에 具体名詞+-를 動詞》

<時に ものを 操作する・心的活動を行う>

생전에 송편을 좋아하다 (生前に 餅を 好む)

일년여만에 고깃배를 타다 (1年余ぶりに 漁船に 乗る)

몇분만에 식칼을 갈다 (数分で 包丁を 研ぐ)

입은 다음에야 문을 열다 (着た後にようやく ドアを 開ける)

《不完全名詞+-에 具体名詞-를 動詞》

<契機・原因で ものを 授受する>

무슨 날이기 때문에 꽃을 사다 (何の日だから 花を 買う)

5-1-4 -에格と身体名詞+-를格の共起

《具体名詞・位置名詞等+-에 身体名詞+-를 動作動詞》

<目標・場に 身体を 任せる・与える・動かす>

고속버스에 몸을 싣다 (長距離バスに 身を 載せる)

손잡이에 전신을 매달다 (吊革に 全身を ぶらさげる)

칼날에 손끝을 누르다 (刃に 指先を 押しつける)

장사에 손을 대다 (商売に 手を そめる)

과외라는 것에 손을 대다 (課外というものに 手を つける)

책상 모서리에 이마를 찡다 (机の角に 額を ぶつける)

자기 배 위에 두 손을 올리다 (自分の腹の上に 両手を のせる)

연극반에 발을 들이다 (演劇部に 足を 踏み入れる)
 거기에 얼굴을 비추어보다 (そこに 顔を 写して見る)
 어머니 앞에 두 무릎을 꿇다 (母の前に 両膝を つく)

《抽象名詞・不完全名詞+-에 身体名詞+-를 動作動詞》

<契機・原因で 身体を 動かす>

심상치 않은 안색에 입을 다물다 (ただならぬ顔色に 口を つぐむ)
 아픔 때문에 다리를 놓다 (痛さのために 足を おく)
 가려움 때문에 몸을 뒤틀다 (かゆみのために 身を よじる)

《時間名詞等+-에 身体名詞+-를 動詞》

<時に 身体を 動かす>

아침에 눈을 뜨다 (朝 目を 開ける)

5-1-5 -에格と人間名詞の+-를格の共起

《位置名詞+-에 人間名詞+-를 動作動詞》

<場に 人を 動かす>

그 안에 미션을 끌어들이다 (その中に ミッションを 引き入れる)

《時間名詞等+-에 人間名詞+-를 動詞》

<時に 人を・人に対して 動作する>

밤중에 민수를 찾아가다 (夜中に ミンスを 訪ねる)
 오년만에야 아기를 낳다 (5年たって 子を 産む)

《不完全名詞+-에 人間名詞+-를 動作動詞》

<契機・原因で 人に対して 動作する>

그것 때문에 그 여자를 깔보다 (そのために その女を 見下す)

以上、-에と共起した-를格のうち代表的なものを見てみた。このように文が実現する意味には-에と-를に來る体言の範疇、およびそれら体言と用言との組み合わせによっていくつかの型があることがわかる。つまりどのような体言と用言が組み合わせられるかという統辭論的な条件によって文が實現する意味も条件づけられるのである。

5-1-6 -를格と共起した-에格の機能

これまでの例では-를格と共起する-에、つまり他動詞と共起する-에の方に着目するとおおよそ次のような機能がある：

- 1)事物が付与される目標・対象
- 2)活動の場・環境
- 3)時

4)基準となる値

5)契機・原因

これらのうち、事物が付与される目標・対象の働きを持つ-에は、<가계에 보탬을 주다>（家計の足しにする）や<고속버스에 몸을 싣다>（高速バスに身を載せる）でもわかるように、補語的であり、基本的な格としての性格の強いものであって、他動詞が主体と-를格の2項のみではなく、さらにもう1項、-에格の項も要求する性格の濃い一群である。つまり動詞が3項他動詞的な性格が濃いのである。活動の場・環境を表す-에はそれより状況語の性格が強くなり、時を表す-에ではほとんどといっていいほど状況語であって、用言にとって必須の成分ではなく、任意の成分となっている。

それぞれ-에にとる名詞の範疇さえ定まればどの意味の-에になるかの大枠は決まるが、それらに後続する-를格や用言が出現して-에の意味が厳密に確定される。なお、これらの-에の用法は機械的に分類できるものというよりは1)から5)までのように互いに連続的に連なっているものだと見るべきであろう。

また契機・原因の-에と共起する場合の動詞には受け身の動詞や他動性の弱い用言が出現しやすいことが1つの特徴となっている。<애정에 감동을 받다>（愛情に感動を受ける）や<벌어졌던 일에 쇼크를 먹다>（繰り広げられていたことにショックを受ける）・<추접스러움에 기겁을 하다>（汚らしさに仰天する）などがその例である。

5-2 前置の-로/-으ろ格と共起する-를格

【表】前置の-로/-으ろ格と共起する-를格の体言の分類別頻度 計108例中

具体	: 18	: 16.7%	物質	: 3	: 2.8%
活動	: 15	: 13.9%	事柄	: 3	: 2.8%
身体	: 14	: 13.0%	時間	: 2	: 1.9%
抽象	: 13	: 12.0%	営為	: 2	: 1.9%
人間	: 12	: 11.1%	位置	: 2	: 1.9%
人称代名詞	: 7	: 6.5%	不完全	: 1	: 0.9%
親族	: 7	: 6.5%	体言形	: 1	: 0.9%
場所	: 7	: 6.5%	数量	: 1	: 0.9%
			計	: 108	: 100.0%

この-로/-으ろ格と共起する-를格の体言では、具体名詞の進出と、全3044例中では19.2%で第1位であった抽象名詞の順位の相対的下落が認められる。また人間名詞・人称代名詞・親族名詞の計26例24.1%は人間を表す名詞の比率が相対的に高いことを物語っている。また、前置の主語-는/-은をとるものが46例42.6%と、かなりの高率になっているのが特徴的である。

-로/-으ろ格に来る体言を見ると身体名詞が26例24.1%の高率を占めているのが特

徴的である。特に-를格に身体名詞が来る14例のうち8例57.1%で-로/-으로格にも身体名詞が来ている。これに対し-를格に活動名詞や営為名詞が立つものには-로/-으로格に身体名詞が来るものは1例もない。具体名詞や人間名詞が-를格に来る場合も-로/-으로格に身体名詞が来るものが目立つ。-로/-으로格に来る場所名詞と位置名詞は計14例あった。

-로/-으로格に場所名詞系統の体言が来ると移動を表す動詞が目立つ：

《場所名詞+-로/-으로 営為名詞・場所名詞+-를 外出動詞》

<ある場所に ことを しに行く・しに来る>

서울로 신혼여행을 오다 (ソウルに 新婚旅行に 来る)

제주도로 신혼여행을 가다 (濟州島に 新婚旅行に 行く)

방으로 도망을 가다 (部屋に 逃げて 行く)

시아버지가 인천으로 어시장을 다녀오다 (義理の父が 仁川へと 魚市場に 行ってくる)

아버지가 읍내로 농업학교를 다니다 (父が村へと 農業学校に通う)

《쪽+-으로 身体名詞+-를 動作動詞》

<ある方向に 身体を 動かす>

유치장 쪽으로 손을 이끌다 (留置場の方に 手を 引っ張る)

나는 앞마당 쪽으로 고개를 내밀다 (私は 前庭の方へ 顔を 出す)

《位置名詞・場所名詞+-로/-으로 名詞+-를 動詞》

<ある場へと 対象を 導く>

영희는 밖으로 이어진 선을 뽑아놓다 (ヨンヒは 外へと 連なった線を 引っ張る)

대청으로 그를 맞아들이다 (板の間へ 彼を 招き入れる)

《位置名詞・場所名詞+-로/-으로 名詞+-를 知覚動詞》

<空間を通して 対象を 知覚する>

사람들이 울타리 사이로 우리 집을 엿보다 (人々が 垣根の間から うちを 覗き見る)

신랑은 열려진 문으로 각시를 쳐다보다 (新郎は 開かれたドア越しに 新婦を 見つめる)

この型から次のような例へと連なっている：

《속으로 名詞+-를 動詞》

나는 속으로 어머니를 욕하다 (私は 腹の中で 母を 罵倒する)

この속으로(腹の中で)は位置名詞でもあり身体名詞でもある両義的な性格を持っている。この-로/-으로がはっきりと身体名詞になると次のように-로/-으로は方向的な意味がすっかり薄れてしまう：

《身体名詞+-로/-으로 身体名詞+-를 動作動詞》

<身体を使って 対象となる身体に対して 動作する>

신부는 손으로 입을 꼭 막다 (新婦は 手で 口を しっかりと 塞ぐ)
 여인이 한손으로 손을 만지다 (女人が 片手で 手を さわる)
 손으로 얼굴을 싸다 (手で 顔を おおう)
 혀끝으로 입을 열다 (舌先で 口を 開く)
 손으로 손을 잡다 (手で 手をつかむ)
 손가락으로 무릎을 누르다 (指で 膝を 押す)

この延長上に次のような型がある：

《身体名詞+-로/-으로 具体名詞+-를 動作動詞》

<身体を使って 対象に対して 動作する>

손으로 봉투를 받아들다 (手で 封筒を 受け取る)
 손으로 대본을 쓰다 (手で 台本を 書く)
 여인은 손바닥으로 신발을 닦다 (女人は 掌で 靴を 磨く)

これらの型はさらに次のように展開する：

《身体名詞얼굴·눈+-로/-으로 具体名詞+-를 知覚動詞等》

<表情をもって 対象を 動作する>

동식은 비감한 얼굴로 자신의 가슴을 쳤다. <군것질46>
 トンシクは悲しそうな顔で自分の胸を叩いた。

아내가 동정적인 눈으로 뒷모습을 지켜보다 (妻が 同情的な目で 後ろ姿を 見守る)
 나는 눈부신 얼굴로 마당을 둘러보다 (私は まぶしい顔で 庭を 見回す)
 여인은 당혹한 눈으로 사나이를 주시하다 (女人は 当惑した目で 男を 注視する)
 느긋한 얼굴로 여유를 보이다 (満足げな顔で 余裕を 見せる)
 사람들은 우중충한 얼굴로 버스를 기다리다 (人々は 冴えない顔で バスを 待つ)
 초췌해진 얼굴로 깡소주를 들이키다 (憔悴しきった顔で 缶焼酎を あおる)

-로/-으로格의 身体名詞가 身体に関わる 抽象名詞に代わると次のようになる：

《抽象名詞+-로/-으로 具体名詞等+-를 動作動詞等》

<表情·気持ちを持って 対象を 動作する>

진지한 표정으로 답장을 쓰다 (真摯な表情で 返事を 書く)
 그는 무서운 기세로 문을 열다 (彼は恐ろしい勢いで ドアを 開ける)
 나는 이를 악문 기분으로 넥타이를 착착 잡아매다 (私は齒をくいしばる気持ちでネクタイをぎゅぎゅっと結ぶ)

협박조로 위협을 하다 (脅迫調で 脅す)
 그런 생각으로 글을 쓰다 (そういう考えで 文を 書く)

-적 (的) のついた形容名詞が来ると-로/-으로格は様態を表している：

《形容名詞적+-로/-으로 名詞+-를 動詞》
 <ある様態で ことを する>
 ...인간의 욕망이 궁극적으로 인간을 어떻게 파멸시키는가를 따진다면...<호박28>
 ...人間の欲望が窮極的に人間をどのように破滅させるかを問うならば...

사람은 감격적으로 악수를 하다 (人は 感激して 握手を する)
 결사적으로 대가리를 쑤셔박다 (決死の覚悟で 頭を 突っ込む)
 주기적으로 집안식구들을 꾸짖다 (周期的に 家のみんなを 叱る)
 노골적으로 하나꼬를 욕하다 (露骨に 花子を 罵倒する)

これらからいわゆる手段・方法の-로/-으로へと連なっている：

《活動名詞+-로/-으로 名詞+-를 動詞》
 <手段・方法で ことを する>
 내가 농담으로 호감을 사다 (私が 冗談で 好感を 買う)
 시동생들은 아르바이트로 용돈을 최소한 조달하다 (義理の弟たちは アルバイトで 小遣いを 最小限 調達する)
 내가 전화로 귀가를 알리다 (私が 電話で 帰宅を 知らせる)

《具体名詞等+-로/-으로 名詞+-를 動作動詞等》
 <手段・方法で ことを する>
 허리띠로 발바닥을 사정없이 갈겨대다 (ベルトで 足の裏を 情け容赦なく 打ちまくる)
 내가 낫으로 호박덩굴을 토막내다 (私が 鎌で かぼちゃのつるを ぶつ切りにする)
 물로 약을 먹다 (水で 薬を 飲む)
 남자들은 우렁찬 목소리로 자기 번호를 외치다 (男たちは とどろきわたる声で 自分の番号を 叫ぶ)
 저는 거부감으로 밤을 세우다 (私は 拒否感で 夜を 明かす)

こうして他動詞構造の中にある-로/-으로는それがとる名詞の範疇を代えることによって少しづつその働きを変えていること、そしてそれらの用法は互いに孤立して存在するのではなく、互いに連なったものであることがわかる。

5-3 前置の-에서格と共起する-를格

【表】前置の-에서格と共起する-를格の体言の分類別頻度 計59例中

抽象	: 14	: 23.7%	体言形	: 1	: 1.7%
具体	: 9	: 15.3%	性質	: 1	: 1.7%
活動	: 8	: 13.6%	数量	: 1	: 1.7%
物質	: 7	: 11.9%	親族	: 1	: 1.7%
身体	: 5	: 8.5%	場所	: 1	: 1.7%
人称代名詞	: 2	: 3.4%	時間	: 1	: 1.7%
人間	: 2	: 3.4%	事柄	: 1	: 1.7%
現象	: 2	: 3.4%	事物代名詞	: 1	: 1.7%
動物	: 1	: 1.7%	位置	: 1	: 1.7%
			計	: 59	: 100.0%

前置の-에서と共起する例は59例であった。後置の-에서는9例なので-에서의86.8%は-를格の前に来ていることになる。-에서는基本的に-를の前に来るのである。不活動体主語は2例、3.4%しかない。連体修飾成分のある例は13例、22.0%である。なお間の要素もある例が6例あるがうち5例は副詞である。

この-에서格と共起する-를格の体言では、抽象名詞の多さもさることながら、第4位物質名詞の11.9%が目立つ。全用例3044例中では物質名詞は2.4%しかなかったことに照らして大きな特徴である：

카페에서 술을 마시다 (カフェで 酒を 飲む)

누나가 집에서 보리쌀을 석 되나 주다 (姉さんが 家で 麦を 3升も くれる)

나는 앞에서 기름을 짜다 (私は 前で 油を 搾る)

-에서格に立つ名詞が場所名詞・位置名詞の場合は-에서格は状況語的な性格が濃く、随意成分的である。日本語では「…で」「…において」に対応することが多い。次に来る<-를格+動詞>で表される行為が-에서で指定された場のうちで行われることを示す：

《場所名詞・位置名詞+-에서 活動名詞+-를 動詞》

<ある場において 活動を 行う>

남편은 일본에서 공부를 하다 (夫は 日本で 勉強を する)

내가 시골에서 준비를 하다 (私が 田舎で 準備を する)

《場所名詞・位置名詞+-에서 具体名詞・人間名詞等+-를 動詞》

<ある場において 対象に対して ことを行う>

겉에서 잡초를 뽑다 (脇で 雑草を 抜く)

그가 가게에서 개를 사다 (彼が 店で 犬を 買う)

길거리에서 동창을 만나다 (道で 同窓生に 会う)

옷집 앞에서 녀를 잃다 (洋服屋の前で 我を 忘れる)

침대에서 잠을 자다 (ベッドで 眠る)
 침대에서 신부를 안다 (ベッドで 新婦を 抱く)
 여기서 조사를 받다 (ここで 調査を 受ける)
 사나이가 복도 끝 쪽에서 방문을 열다 (男が 廊下の端の方で ドアを 開ける)
 뒤에서 그것을 보다 (後ろから それを 見る)
 다른 점에서 역사를 극복하다 (別の点で 歴史を 克服する)

上の場所名詞の部分により抽象化されると次のようにも展開される：

검사과정에서 철저를 기하다 (検査過程で 徹底を 期す)
 책임기에서 날짜를 끝다 (本読みで 日を かせぐ)

次のように、-에で数多くみられた契機的な意味を持つ-에서도あるが、これも「…において」の-에서に連なるものである：

《事柄名詞+-에서 名詞+-를 알다》

<契機にして ことを 知る>

그리고 그날 밥상을 박차고 나가는 시동생의 모습에서 그의 뜻 또한 마찬가지였음
 을 알았다. <병어회193>

そしてその日食膳を蹴って出ていく義理の弟の姿から彼の意志もまた同様であつたこ
とを知った。

ところが-에서가場所名詞・位置名詞ではなく具体名詞・身体名詞になったとたんに-에서는補語的な性格・必須的な性格が強くなり、動詞は、主体と対象語の他に更にもう1項を必要とする3項動詞的な性格を帯びる。日本語では「…から」がおおむね対応する。動詞は離脱や取り出し、奪取の意味を持ったものが多くなる。これらのうち事物から事物を離脱させる動詞を<奪取動詞>と呼ぶことにする。-에서는なんらかの事物が離脱する以前に所属していた場を示す。-에게서；-한테서を奪格と呼ぶなら、この用法の-에서는<離格>とでも呼ぶべき機能を持った格である。頻度は相対的に低くなる：

《具体名詞・身体名詞等+-에서 名詞+-를 奪取動詞》

<もの・身体から 対象を 離脱させる>

모자에서 흙을 털어내다 (帽子から 土を はたき落とす)
 손에서 원고뭉치를 여지없이 나꿔채다 (手から 原稿の束を 有無を言わず ひ
 ったくる)
 내가 냉장고에서 아이스크림을 꺼내다 (私が 冷蔵庫から アイスクリームを 取
 り出す)

《抽象名詞・事柄名詞・活動名詞+-에서 名詞+-를 動詞》

<ことから 対象を 離脱させる>

따분함에서 나를 해방시키다 (退屈さから 私を 解放する)
나는 과외지도에서 손을 떼다 (私は 課外指導から 手を ひく)

【図】-에서의名詞の種類と-를格を持つ動詞の性格

-에서의名詞가	
場所名詞・位置名詞	具体名詞・身体名詞
←	→
狀況語的	補語的
随意成分的	必須成分的
…において・…で (処格的)	…から (離格的)
2項動詞的	3項動詞的
非奪取動詞	奪取動詞など
頻度は相対的に低い	頻度は相対的に高い

次の例は離格であろうが、-에서格の名詞が場所名詞的でもあるので処格的な色彩もあり、中間的な例となっている：

학교에서 자취를 감추다 (学校から 姿を 消す)
창문에서 밖을 내다보다 (窓から 外を 見おろす)

5-4 前置の-에게と共起する-를格

【表】前置の-에게と共起する-를格の体言の分類別頻度 計30例中

活動	: 15	: 50.0%
抽象	: 6	: 20.0%
数量	: 4	: 13.3%
具体	: 4	: 13.3%
場所	: 1	: 3.3%

-에게格との共起では、標本数は少ないが、人を表す名詞が1例もないことが特徴である。このように、-에게格と共起しない-를格には人も事物も現れるのに対し、-에게格と共起する-를格には人を表す体言が来にくいという傾向がある。他には活動名詞の比率の高さと、全体比では1.6%であった数量名詞の多さが目立っている：

시아버지는 내게 한마디를 던지다 (義理の父は 私に 一言を 投げかける)
아주머니 운전수에게 돈 천 원을 더 주다 (おばさんは 運転手に 千ウオンを 上乗せして やる)

5-5 前置の-한테と共起する-를格

【表】前置の-한테と共起する-를格の体言の分類別頻度 計26例中

抽象	: 10	: 38.5%	人間	: 1	: 3.8%
活動	: 6	: 23.1%	身体	: 1	: 3.8%
具体	: 2	: 7.7%	親族	: 1	: 3.8%
文	: 1	: 3.8%	場所	: 1	: 3.8%
物質	: 1	: 3.8%	事物代名詞	: 1	: 3.8%
不完全	: 1	: 3.8%	計	: 26	: 100.0%

-한테と共起する-를格の体言では抽象名詞・活動名詞の圧倒的な優位が確認できる。

5-6 前置の-한테서と共起する-를格

-한테서의例は非常に少ない。

【表】前置の-한테서と共起する-를格の体言の分類別頻度 計3例中

抽象	: 2 : 66.7%
事柄	: 1 : 33.3%

6 他の前置斜格・後置斜格と共起していない-를格

6-1 斜格と共起しない例とする例

前置の共起格のある例、後置の共起格のある例を見たので最後に他の斜格と共起していない例について検討することにする。

前置・後置を問わず斜格と共起している例、間の要素に裸の格の名詞や数量名詞がある例を除いたものをとりあえず<斜格と共起していない例>と考えると、全3044例のうち2486例81.7%がこれに該当する。

斜格のあるグループとないグループを比較すると、主語の比率はほぼ同じで、不活動体主語が斜格のないグループの方が多く、また次のように-를格の体言にかかる連体修飾成分のあるなしにやや違いが出る：

	-를格体言に対する連体修飾成分	
	あり	なし
斜格あり	34.2%	65.8%
斜格なし	42.3%	57.7%

用言がない例は、斜格のあるグループ中には1例もないのに対し、斜格のないグループには19例が認められる。

-를格の名詞の範疇を比較すると、おおむね似た傾向を示すが、団体名詞だけは斜格なしのグループにのみ18例出現する。

動詞の出現頻度を比較するといずれも1位は하다で比率もそう差はないが、2位に来る動詞で違いが出てくる。斜格が共起しないグループでは보다（見る）が2位であるのに対し、斜格が共起するグループでは사다（買う）となっている。〈나한테 술을 사다〉（私に酒をおごる）や〈돈으로 생선을 사다〉（お金で魚を買う）、〈이 값에 물건을 사다〉（この値段で品物を買う）などのように、授受動詞사다가-를格の他に更にもう1項要求するという3項動詞的な性格が濃厚であることを物語っている。斜格が共起しないグループ中では사다는18位に転落する。同様のことが授受動詞주다にも言える。

ただし、-를格の他に常にもう1項を要求するというわけではないこと、および授受動詞だからといって-를格以外のもう1項は常に「…に」に該当する-에게格（-한테格）だというわけではないことも併せて押さえておく必要がある。具体的な言語事実の検討を経ると朝鮮語ではValenzという考え方だけで、動詞ごとに1価動詞・2価動詞などと割り切って考えることは難しいことがわかるのである。

6-2 斜格と共起しやすい動詞

斜格と共起する-를格を持つ例の方が多い動詞には次のようなものがある。共起している代表的な例も添えておく。数字は共起していない例と共起している例をそれぞれ示す：

	共起していない用例数	共起している用例数
	↓	↓
주다（与える）	8例	9例
내게 감동을 주다（私に感動を与える）		
월급으로 가계에 보탬을 주다（月給で家計の足しにする）		
가다（行く）	4	7
제주도로 신혼여행을 가다（済州島に新婚旅行に行く）		
그에게 시집을 가다（彼に嫁に行く）		
걸다（掛ける）	5	5
수경이에게 전화를 걸다（スギョンに電話を掛ける）		
일에 목숨을 걸다（ことに命を掛ける）		

斜格と共起する-를格を持つ例の比率が比較的高い動詞には次のようなものがある：

하다（する）	238	45
보다（見る）	84	11
타다（乗る）	36	5
받다（受ける）	29	10

내다 (出す)	27	7
쓰다 (書く・使う)	21	7
사다 (買う)	17	11
치다 (打つ)	15	5
던지다 (投げる)	8	7

6-3 斜格と共起しにくい動詞

以上の動詞とは対照的に、斜格と全く共起していない高頻度の動詞には次のようなものがある：

共起していない用例数	共起している用例数
↓	↓
위하다 (ためだ)	37 0
들다 (挙げる)	25 0
나가다 (出る)	23 0
떠나다 (発つ)	13 0
풀다 (解く)	12 0
포기하다 (あきらめる)	12 0
잊다 (忘れる)	12 0
用言なし	19 0

このように後置詞的な用法が大部分であった위하다においては、斜格と共起しているものは1例もないことがわかる。향하다も1例を除いて全て斜格と共起していない。また나가다や떠나다のようにもっぱら場所名詞・位置名詞類を-를格にとる動詞も斜格と共起しにくい傾向がある。なお、用言がないものも斜格と共起しない傾向が確認できる。

斜格と共起している例が1例しかない動詞には次のようなものがある。その例外となった例も併せて示す：

만나다 (会う)	24	1
길거리에서 동창을 만나다 (道で同窓生に会う)		
가지다 (持つ)	20	1
미혼시절에 시간을 가지다 (未婚の頃に時間を持つ)		
향하다 (向かう・向ける)	19	1
발길을 형님댁으로 향하다 (足を兄さんの家へと向ける)		
믿다 (信じる)	13	1
바르는 바람에 속설을 믿다 (塗るので俗説を信じる)		
뜨다 (開ける)	12	1
아침에 눈을 뜨다 (朝、眼を開ける)		
끝나다 (終える)	12	1

신랑의 말에 샤워를 끝내다 (新郎のことばにシャワーを終える)

更に斜格と共起している例が2例ないしは3例しかない用言には例えば次のようなものがある：

共起していない用例数	↓	共起している用例数	↓
알다 (知る・わかる)	36	3	
사실을 경험으로 알다 (事実を経験で知る)			
집과 멀어지는 것을 다행으로 알다 (家と離れるのを幸いと思う)			
모습에서 마찬가지로였음을 알다 (姿から同じことだったことを知る)			
듣다 (聞く)	28	2	
어머니한테 소식을 듣다 (母に消息を聞く)			
말을 아버지한테서 듣다 (ことを父から聞く)			
먹다 (食べる)	18	2	その他1
일에 쇼크를 먹다 (ことにショックを受ける)			
물로 약을 먹다 (水で薬を飲む)			
찾다 (探す・訪ねる)	15	3	
이번에는 문제를 우리가 찾다 (今度は問題を我々が探す)			
들녘을 내 기억 속에서 찾다 (野を私の記憶の中で探す)			
것인가만을 필사적으로 찾다 (なのかだけを必死で探す)			
부르다 (呼ぶ・歌う)	15	3	
목소리로 아버지를 부르다 (声で父を呼ぶ)			
목소리로 번호를 부르다 (声で番号を呼ぶ)			
일조점호 뒤에 애국가를 부르다 (朝の点呼の後に愛国歌を歌う)			
마시다 (飲む)	14	2	
카페에서 술을 마시다 (カフェで酒を飲む)			
음식점에서 고구마주를 마시다 (飲食店で芋酒を飲む)			
느끼다 (感じる)	13	2	
몸에 이상을 느끼다 (体に異常を感じる)			
고통을 우리의 아픔으로 느끼다 (苦痛を我々の痛みとを感じる)			

【表】斜格の共起の有無による用言の頻度順

共起斜格なし	798語	2486例中	共起斜格あり	521例中
238例 : 하다	:	9.6%	45例 : 하다	: 8.6%
84 : 보다	:	3.4%	11 : 사다	: 2.1%
37 : 위하다	:	1.5%	10 : 받다	: 1.9%
36 : 타다	:	1.4%	9 : 주다	: 1.7%
36 : 알다	:	1.4%	8 : 보다	: 1.5%
29 : 받다	:	1.2%	7 : 쓰다	: 1.3%

28	: 듣다	: 1.1%	·	· 7	: 던지다	: 1.3%
27	: 내다	: 1.1%	—	· 7	: 내다	: 1.3%
26	: 들다	: 1.0%	·	· 7	: 가다	: 1.3%
24	: 만나다	: 1.0%	·	· 5	: 타다	: 1.0%
23	: 잡다	: 0.9%	·	· 5	: 치다	: 1.0%
23	: 나가다	: 0.9%	·	· 5	: 쳐다보다	: 1.0%
21	: 쓰다	: 0.8%	·	· 5	: 만들다	: 1.0%
20	: 가지다	: 0.8%	·	· 5	: 걸다	: 1.0%
19	: 향하다	: 0.8%	·	· 4	: 잡다	: 0.8%
19	: O	: 0.8%	·	· 4	: 올리다	: 0.8%
18	: 먹다	: 0.7%	·	· 4	: 열다	: 0.8%
17	: 사다	: 0.7%	·	· 4	: 두다	: 0.8%
15	: 치다	: 0.6%	·	· 4	: 놓다	: 0.8%
15	: 찾다	: 0.6%	·	· 4	: 기다리다	: 0.8%
15	: 부르다	: 0.6%	·			
15	: 만들다	: 0.6%	·			

なお、斜格と共起している例としていない例の-을格の体言分類を調べると次のようになっている：

【表】斜格と共起している例としていない例の体言分類別頻度

共起している例 521例		共起していない例 2486例
102 : 抽象 : 19.6%	—	479 : 抽象 : 19.3%
93 : 活動 : 17.9%	—	387 : 活動 : 15.6%
81 : 具体 : 15.5%	—	362 : 具体 : 14.6%
45 : 身体 : 8.6%	×	198 : 人間 : 8.0%
39 : 人間 : 7.5%	×	185 : 身体 : 7.4%
23 : 場所 : 4.4%	—	155 : 場所 : 6.2%
21 : 人称代名詞 : 4.0%	—	91 : 人称代名詞 : 3.7%
18 : 物質 : 3.5%	×	86 : 親族 : 3.5%
16 : 親族 : 3.1%	×	77 : 事柄 : 3.1%
13 : 事柄 : 2.5%	×	77 : 現象 : 3.1%
12 : 数量 : 2.3%	×	71 : 不完全 : 2.9%
10 : 事物代名詞 : 1.9%	×	53 : 物質 : 2.1%
10 : 現象 : 1.9%	×	51 : 体言形 : 2.1%
8 : 不完全 : 1.5%	×	39 : 時間 : 1.6%
7 : 時間 : 1.3%	×	37 : 数量 : 1.5%
5 : 体言形 : 1.0%	×	34 : 事物代名詞 : 1.4%
4 : 文 : 0.8%	- - -	34 : 位置 : 1.4%

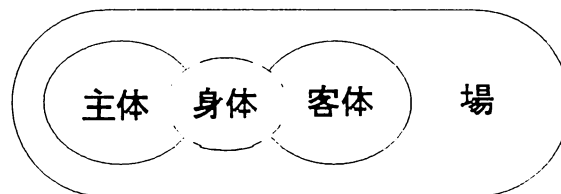
4	: 位置	: 0.8%	28	: 文	: 1.1%
3	: 性質	: 0.6%	18	: 団体	: 0.7%
3	: 営為	: 0.6%	11	: 営為	: 0.4%
2	: 動物	: 0.4%	10	: 性質	: 0.4%
2	: 場所代名詞	: 0.4%	2	: 場所代名詞	: 0.1%
			1	: 動物	: 0.0%

7 -言格を持つ文の

統辞論的＝連語論的な型と動詞分類

最後に、以上見てきたような様々な観点に照らしながら、とりわけ動詞との単語結合および斜格との共起関係を基本的な指標として、-言格を持つ文の統辞論的＝連語論的な型の分類と、それらの型が互いにどのようなはりあいの中にあるか、おのおのの型はどのように連なりあっているかということについての記述を試みることにする。

動作の主体と、その主体に関わる客体、そしてそれら主体客体をとりまく場を考え、それらのうちのどこを-言格に設定するか、そして動詞で表わされた動作の遂行や状態の推移は主はどこで行われるのかを考えると、-言格と動詞の単語結合がもたらす意味にはいくつかの型があり、それら意味論的な範疇と言語形式の上に現れた統辞論・連語論・語彙論的な範疇とは緊密な相関の中にあることがわかる。さらに何を主体に設定し、何を-言格に据えるかという問題は既にテキスト論の領域に踏み込んでみている。



主体と客体とは2項的な対立物としてのみあるのではなく、主体と客体との間には主体の身体という両義的な存在があって主客の間をとりもっている。身体名詞は再帰的な動作を始めとして主体と客体の間を容易に移行するのみならず、時として身体は主体にとっての場ともなりうるという、重要な役割を果たす。主体や客体は人間ではなくものやことである場合もあり、そうした際には主体に属する事物が人間における身体名詞の役割を果たすこともある。

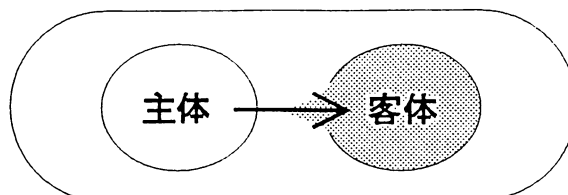
場とはテキストの文脈の中で与えられるところの、主体の存する空間的あるいは時間的な場であり、環境であり状況であるが、これもまた常に客体と区別できるとは限らない。-言格が客体的＝状況的な対象として設定されることはいくらかでもありうるのである。

さらに使役動詞や共起格を必要とする動詞などを典型として、動詞によっては客体

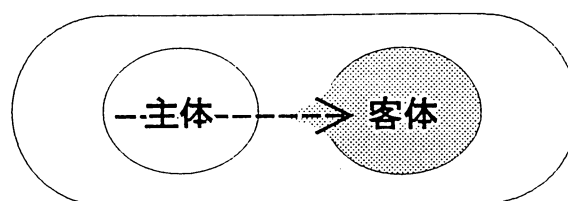
的な項が複数になることもある。

以上の点を踏まえて考えると一語格と動詞の結合には大きく分けて次の5つの型がある：

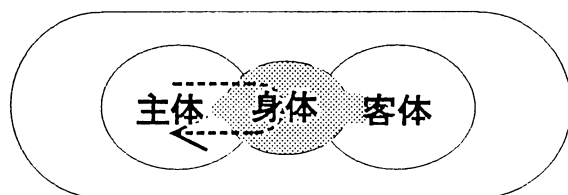
1) 客体的な対象への作用



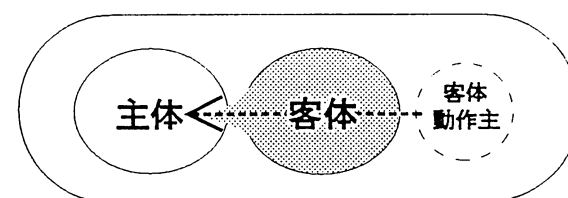
2) 客体的対象への主体内的な作用



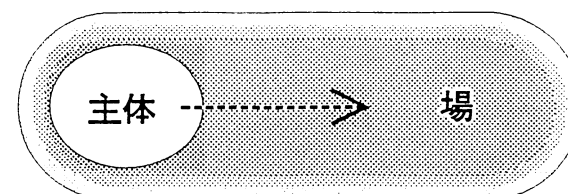
3) 主体への再帰的な作用



4) 客体的な対象からの主体への作用



5) 状況的な対象へのかかわり



● は一語格に設定する対象、→ ---→ は作用・かかわりの強さと方向

以下、順に見て行くことにする。単語結合のそれぞれの型に、例えば<付与動詞>など動詞に対する名づけを与えておいた。それぞれの型に用いられた動詞をその名づけで呼び、それぞれの型を例えば<付与動詞結合>のように呼ぶことを想定したものである。同じ動詞が複数の異なった動詞結合の型に所属することもありうる。基本資料中に現れた主要な型は可能な限り網羅するように努めたけれども、既に見たように例えば不活動体主語が非常に少ないなど、小説という文体に現れにくい型もあると考えられる。他の文体についても更なる調査が必要であろう。

なお、動詞結合の名称のあとの（）内には共起し得る格を示した。資料中に実際に現れたものはそのまま共起した格を例にあげてある。

7-1 客体的な対象への作用

最も他動性が強いグループである。-를格に立つ対象は、主体と対峙するところの明確な輪郭を持った客体として設定される。この型の動詞からはしばしば受身形が作られる。また人に何事かをさせるという使役の構造を持つものもこの型に属する。

-에게; -한테格が共起しうる動詞を<与格他動詞>、そうでないものを<非与格他動詞>と名づけるならば、客体的な対象への作用を表すこのグループ中は与格他動詞と非与格他動詞に大きく2分することができる。同様に-를格と-에格が共起しうる動詞を<向格他動詞>、そうでないものを<非向格他動詞>と呼ぶことにする。

7-1-1 付与動詞 (事物+-에; -에다 もの+-를) <事物に事物を付与する>

事物を向格にとり、主として具体名詞などのものの的な体言を-를格にとる典型的な向格他動詞構造である。菅野裕臣(1987)はこのタイプのうち、-에と-에다の置き換えのきくものを「添加動詞」と呼んでいる。

- 뜰에 잔디를 깔다 (庭に芝を敷く)
- 앞에 돌맹이를 던지다 (前に石を投げる)
- 꽃병에 물을 담다 (花瓶に水を入れる)
- 식칼에 물을 뿌리다 (包丁に水をふりかける)
- 순가락을 놓다 (箸を置く)
- 꽃병에다 꽃을 꽂다 (花瓶に花を差す)
- 핀을 꽂다 (ピンを刺す)
- 도장을 찍다 (判を押す)
- 설탕을 치다 (砂糖をかける)
- 등짐을 지다 (荷物を背負う)
- 신발을 걸다 (履物を掛ける)
- 논바닥에 불을 지르다 (田に火をつける)
- 고속버스에 몸을 싣다 (長距離バスに身を載せる)

7-1-2 従事動詞 (場など+-에 こと+-를) <場などに活動を加える>

向格に場などを表す体言が来て、-를格には主として活動名詞や抽象名詞などこと的な体言が立ち、場などに活動を加えたり、ことに乗り出したり従事する意を表す。<신발을 걸다> (履物を掛ける) が<승부를 걸다> (勝負をかける) になるよ

うに、付加動詞結合の-를格名詞が抽象化するとおおむねこの従事動詞の型に転化する：

선택에 승부를 걸다 (選択に勝負を掛ける)
척도를 어디에다 두다 (尺度をどこに置く)
책임을 무엇에 전가하다 (責任を何かに転嫁する)
택에 연락을 취하다 (お宅に連絡をとる)
가계부에 기재를 하다 (家計簿に記載をする)
파출소에 신고를 하다 (交番に申告をする)
대학에 진학을 하다 (大学に進学をする)
본정통에 살림을 꾸리다 (本町通りに所帯を持つ)

7-1-3 操作動詞 (もの+-를) <事物を操作する>

-를格には主として具体名詞などものを表す体言が立ち、主に身体的な動作を表す動詞が来る結合である。-에格と共に起る場合はその-에格は時や契機の意味を表す状況語的なものとなることが多い：

문을 열다 (ドアを開ける) · 문을 닫다 (ドアを閉める)
손에 손에 태극기를 흔들다 (手に手に太極旗を振る)
벨을 누르다 (ベルを押す)
문을 두드리다 (ドアを叩く)
철망을 치다 (金網をはる)
대문을 밀다 (門の扉を押す)
펜을 들다 (ペンをとる) · 술잔을 들다 (杯を持つ)
책가방을 잡다 (鞆を掴む)
칼을 쥐다 (刀をとる)
열매를 까다 (実を剥く)
펌프를 째다 (ポンプを打ちおろす)
공을 차다 (ボールを蹴る)
주머니를 털다 (財布をはたく)
통장을 펴다 (通帳を開く)
넥타이를 풀다 (ネクタイを解く)
치마를/모자를 내리다 (スカートを/帽子をおろす)
내장을 긁어내다 (内臓をかき出す)
전화통을 붙잡다 (電話機を掴む)
다이얼을 돌리다 (ダイヤルを回す)
차를 몰다 (車を駆る)
고깃배를 타다 (漁船に乗る) · 그네를 타다 (ブランコに乗る)
버스를 타다 (バスに乗る)

<다이얼을 · 돌리다> (ダイヤルを · 回す) のような単語結合はそれ全体が1つの固い結合として<電話する>という活動動詞の意味で用いられると<친구에게 · 다이얼을 돌리다> (友達に · ダイヤルを回す) という-에게格を従えた結合に転化しうる。<펜을 들다> (ペンをとる) も同様である。

7-1-4 対身動詞 (他人の身体+-를) <対他的な身体にかかわる>

上の操作動詞の-를格の対象が客体としての他人の身体になるとこの型となる。

-에게; -한테と共に起しない、典型的な非与格他動詞である：

- 뺨을 갈기다 (頬をひっぱたく)
- 궁둥이를 만지다 (おしりをさわる)
- 옆구리를 찌르다 (脇を突く)
- 손을 잡다 (手を握る)
- 입을 틀어막다 (口を封じる)

7-1-5 加工動詞 (道具・手段+-로 もの+-를) <物を加工して変化させる>

しばしば道具や手段の意の<身体名詞・具体名詞+-로/-으로格>を伴う。基本的には非与格他動詞である：

- 손바닥으로 신발을 닦다 (掌で靴を磨く)
- 눈언저리를 씻다 (眼の縁をぬぐう)
- 불을 끄다 (火を消す)
- 칼을 갈다 (刀を研ぐ)
- 텐트를 접다 (テントを畳む)
- 탁상일기를 찢다 (卓上日記を破る)
- 흙을 파다 (土を掘る)
- 책을 싸다 (本を包む)

7-1-6 変成動詞 (事物+-를) <事物の状態を変化させる>

基本的には非与格他動詞である：

- 그릇을 비우다 (器を空ける)
- 집을 비우다 (家を空ける)
- 대답을 얼버무리다 (答をはぐらかす)

7-1-7 養育動詞 (生物+-를) <生物の状態を変化させる>

- 누에를 치다 (蚕を飼う)
- 육남매를 키우다 (6人兄妹を育てる)
- 여자를 기르다 (女を育てる)

7-1-8 生産動詞 (生産物+-를) <物を作り出す>

動詞が現す行為の後に-를格の名詞が初めてできあがるという結果を表す。希に

-에게; -한테と共に起することがある：

- 대본을 쓰다 (台本を書く)・사표를 쓰다 (辞表を書く)
- 입술에 꽃잎을 그리다 (唇に花びらを描く)
- 밀개떡을 만들다 (餅を作る)
- 사진을 찍다 (写真を撮る)
- 커피를 타다 (コーヒーを入れる)
- 일곱을 만들다 (<友達を>7人作る)
- 기름을 짜다 (油を搾る)

次の例は付加動詞でもあり同時に生産動詞的でもある：

- 불을 붙이다 (火をつける)

7-1-9 転換動詞 (事物+-를 動作後の事物+-로) <ある事物を他のものとする>

この名称は菅野裕臣(1987)による。おおむね-를格が-로格の前に立つ。基本的に非与格他動詞である：

- 백을 자기 것으로 만들다 (バッグを自分のものにする)
- 노력을 생애의 할일로 삼다 (努力を生涯のなすべきこととする)
- 키를 핑계 삼다 (背を口実にする)
- 목적지를 부산으로 정하다 (目的地を釜山に決める)
- 발길을 형님 댁으로 향하다 (足を兄の家へと向ける)

7-1-10 認定動詞 (-를 -라고／-이라고；-게；-처럼 精神動詞) <事物をあるものとして認定する>

動詞に생각하다など、後述の精神動詞が立つ。-라고などは-로／-으로도可能なものもある。-라고などは普通-를格の後ろに立つ：

- 자기를 내 전부라고 생각하다 (自分を私の全てと考える)
- 퇴근시간을 탈출의 디데이처럼 생각하다 (退社時間を脱出のディーデイのように思う)

- 이곳을 아침의 망명처쯤으로 생각하다 (ここを朝の亡命場所ぐらいに思う)
- 가장을 남남이라 여기다 (家長を他人と思う)
- 고모를 못마땅하게 여기다 (叔母を不満に思う)

7-1-11 授与動詞 (人+-에게；-한테 事物+-를) <人へ授与して受け取らせる>

与格の<人+-에게><人+-한테> (…に)を伴い得る3項動詞構造である。
<사람에게 편지를 보내다> (人に手紙を送る) という事態は<사람이 편지를 받다> (人が手紙を受け取る) という事態を導くものであるように、与えられる方の人の動作は基本的に-를格と動詞받다 (受け取る) だけで表せる：

- 운전수에게 돈 천원을 주다 (運転手に千ウォンをあげる)
- 내게 사랑을 주다 (私に愛を与えてくれる)
- 편지를 보내다 (手紙を送る)・박수를 보내다 (拍手を送る)
- 사직서를 내다 (辞表を出す)
- 전보를 치다 (電報を打つ)
- 소식을 전하다 (消息を伝える)
- 열쇠뭉치를 가져오다 (鍵の束を持って来る)
- 나한테 술을 사다 (私に酒をおごる)
- 물건을 팔다 (品物を売る)
- 이자를 물다 (利子を払う)

同じ사다でも<호감을 사다> (好感を買う) となると与格ではなく属格-의 (…の)をとる非与格他動詞であり、後述の受容動詞になってしまう。

7-1-12 提示動詞 (人+-에게；-한테 事物+-를) <人に事物を示す>

与格の<人+-에게><人+-한테> (…に)を伴い得る3項動詞構造であるが、実際のテキストでは文脈上でわからせることが多く、与格はこれといって現れないこ

とが多い。上の授与動詞と違って人に事物を提示することだけをいう動詞なので、与えられる方の人の動作は-를格と動詞받다(受け取る)だけでは表せないのが普通である：

동지들께 화이팅을 외치다(同志たちにファイトのかけ声をかける)
각시에게 사랑을 고백하다(新婦に愛を告白する)
경위를 설명하다(経緯を説明する)
얼굴로 여유를 보이다(顔で余裕を見せる)
제목을 가르치다(題名を教える)
비밀을 털어놓다(秘密を打ち明ける)
타락을 지적하다(墮落を指摘する)
의자를 가리키다(椅子を指さす)
원조를 약속하다(援助を約束する)
결혼을 조르다(結婚をせがむ)
주기를 청하다(くれることを頼む)
떡을 권하다(餅をすすめる)
말을 걸다(ことばをかける)
말을/이야기를 꺼내다(ことばを/話を切り出す)
아무에게나 반말을 쓰다(誰にでもぞんざいなことばを使う)
사람에게 평생을 맡기다(人に一生をゆだねる)
하나꼬한테 투정을 부리다(花子に文句を言う)
데이트를 신청하다(デートを申し込む)
애교를 부리다(愛嬌をふりまく)
키스를 퍼붓다(キスを浴びせる)
신경을 쓰다(氣を使う)・인상을 쓰다(顔をしかめる)
잘못을 인정하다(過ちを認める)
업적을 자랑하다(業績を自慢する)

次の例のように、-에게格が団体名詞になり-에格をとった結合もある。このことは上の授与動詞でも同じことが言える：

프론트에 사정을 얘기하다(フロントに事情を話す)

7-1-13 奪取動詞(事物+-에서 事物+-를) <事物から事物を取り出す・奪取する>

5-3で述べたように、しばしば離格の-에서(…から)を伴う3項動詞構造である：

냉장고에서 아이스크림을 꺼내다(冷蔵庫からアイスクリームを出す)
모자에서 흙을 털어내다(帽子から土をとる)
과외지도에서 손을 떼다(課外指導から手を引く)
손에서 원고뭉치를 나눠채다(手から原稿の束をひったくる)
돈을 훔치다(お金を盗む)
잡초를 뽑다(雑草を抜く)

7-1-14 対人動詞(人+-를。-에게；-한테をとらない) <人にかかわりあう>

>

人に対するかわりあいという単語結合であるが、人を表す与格の-에게 ; -한테と共起しえない、非与格他動詞だという点で授与動詞や提示動詞結合と異なる。主体の動作は単なる身体的な動作というより、心的な営みでもあることが多い：

동창을 만나다 (同窓生に会う)
학생을 맞다 (学生を迎える)
아들딸들을 달래다 (息子娘たちをなだめる)
그이를 재촉하다 (彼を催促する)
아이들을 보살피다 (子供たちを世話する)
아버지를 돕다 (父を手助けする)
나를 죽이다 (私を殺す)
아이들을 가르치다 (子供たちを教える)
친구를 데리다 (友達を連れている)
상인들을 쫓다 (商人たちを追う)
중생을 따르다 (衆生に従う)
기집애들을 사귀다 (女の子たちとつき合う)
부모를 설득하다 (父母を説得する)
여자를 외면하다 (女を相手にしない)
강과장을 찾아가다 (姜課長を訪ねる)
식구들을 찾아나서다 (家族を捜しに出る)
나를 찾아오다 (私を訪ねて来る)
친구를 찾아내다 (友人を捜し当てる)

7-1-15 行為動詞 (人+-를。-에게 ; -한테をとらない) <人を動かす>

上の対人動詞の下位範疇と考えてもよい。主体の動作が単なる身体的動作である点だけが対人動詞と異なっている：

신부를 안다 (新婦を抱く)
신부를 껴안다 (新婦をかき抱く)
전신으로 승객을 밀다 (全身で乗客を押す)

7-1-16 処遇動詞 (人など+-를) <人などに対して態度を取る>

対人動詞に連なる一群である。-를格には主として人間名詞・親族名詞が立つが団体名詞が立つこともある：

목소리로 아버지를 부르다 (声で父を呼ぶ)
속으로 어머니를 욕하다 (心の中で母を罵る)
사람들을 위협하다 (人々を脅す)
사람들을 탓하다 (人のせいにする)
집안식구들을 꾸짖다 (家の者たちを叱る)
민수를 힐난하다 (민スをなじる)
마을을 지키다 (村を守る)
마을을 휩쓸다 (村を襲う)

7-1-17 言語動詞 (人+-에게 ; -한테 ; -더러) <人に言語活動を行う>

의견을 말하다 (意見を述べる)

책임을 묻다 (責任を問う)

용서를 빌다 (許しを乞う) · 잘못을 빌다 (過ちを詫びる)

7-1-18 加減動詞 (事物+-를) <事物の量や値を変化させる>

가치를 높이다 (価値を高める)

키를 낮추다 (背を低くする)

값을 깎다 (値段を値切る)

미장원을 한번 줄이다 (美容院<に行くの>を1度減らす)

물건들을 치우다 (物をかたずける)

나이에 십년을 더 치다 (歳に10年を更に加える)

7-1-19 使役動詞 <人に動作などをさせる>

<主体Aが動作主Bに動作Cをさせる>のごとく、主体が他の人に命じるなどして何らかの動作などをさせる意味的な関係を使役と呼ぶ。統辞論上ではABCの3項のうち、動作主Bが-에게; -한테 (...に) 格をとる構造もあり、また-를格をとる構造もある。また動作Cが他動詞の場合と自動詞の場合とがある。現象的には常に3項が体言の形で揃うとは限らない。使役動詞以外の他動詞は主体と動作主が基本的には一致している点が使役動詞と単純な他動詞の大きな違いではあるがそれらは連続していてその境界は形式上からは判定しがたい。

-를格に人が来るものを<人間使役>と呼び、事物が来るものを<事物使役>と呼ぶことにする。それぞれ形式上では分析的な使役形と総合的な使役形とがある。

7-1-19-1 人間使役動詞 (人+-를)

分析的な使役形としては<-게 하다>と<-게 만들다>の形がある：

시부모를 긴장케 하다 (義理の父母を緊張させる)

아버지를 난처하게 만들다 (父を困らせる)

저희를 고민하게 만들다 (私たちを悩ませる)

総合的な使役形には接尾辞-이-·-히-·-리-·-기-·- | 우-などで形成される動詞がある：

담당은 함께 연행된 일곱 사람들 나란히 세웠다. <신발303>

担当は共に連行された7人を1列に立たせた。

ただし使役動詞は次の束縛動詞との区別が必要である。

7-1-20 束縛動詞 (人+-를 派生動詞。-에게; -한테をとらない。)<動作を強要したり感情を束縛したりする>

次のような앉히다は<意志を持った子供(=動作主)に命じて座らせる>という意の使役動詞ではなく、<無意志的な存在である子供(≠動作主)をブランコに乗せる>という意の他動詞である：

그렇게 걱정하고 나니까 아기를 그네에 앉히고 어찌고 하는 꿈에 젖어 있던 일이 어리석게만 느껴졌다. <병어회197>

そう決心すると、子供をブランコに（抱いて）乗せたりなどという夢にひたっていたことが愚かにばかり感じられた。

上の例のように、能動の意の動詞からの派生動詞で、-를格に活動体体言をとってその活動体で表される人などに直接働きかけ、動作などを強要したり感情などを束縛したりする他動詞を＜束縛動詞＞と呼び、使役動詞とは区別して扱うことにする。束縛動詞は非与格他動詞で-에게；-한테と共起しない。

一方、次の例を見よう：

흥분해서 떠드는 학생들을 우선 자리에 앉히고 나서 (=앉게 하고 나서) 김 선생은 조용히 이야기를 하기 시작했다. <作例>

興奮して騒ぐ学生たちをまず席につかせてから金先生は静かに話しはじめた。

こうした場合の앉히다は＜主体김 선생（金先生）が動作主학생들（学生たち）に 앉다（座る）という意志的な動作をさせる＞という使役動詞である。＜앉게 하고 나서＞と言い替えてもおおむね意味は変わらないこともその傍証となろう。次のような例もまた使役の앉히다である：

그러자 어머니가 나를 불러앉혀 놓고 난생 처음 부드러운 얼굴로 타이르시는 것이었어요. <신혼51>

すると母が私を呼びつけて座らせておいて、生まれて初めてやさしい顔で言い聞かせるのでした。

このように앉히다は自動詞앉다（座る）からいわゆる使役の接尾辞-히-によって作られた派生語ではあるが、片や他動詞、片や使役動詞の振る舞いをするわけである。このように使役かどうかの判断は語形成など、単語それ自体では判断できぬばかりか、単語結合のレベルでも判断できぬことも多く、正確な位置づけには必ず文脈の助けが必要となることを確認しておかねばならない。頻度的には接尾辞-이-・-히-・-리-・-기-・-우-などで形成される他動詞は使役動詞よりも束縛動詞であることが多い：

신郎을 애태우다（新郎に気をもませる）

우리를 괴롭히다（我々を苦しませる）

신부를 울리다（新婦を泣かせる）

7-1-19-2 事物使役動詞（事物+-를）

-를格に事物が来る事物使役動詞の分析的な使役形としては、시키다（…させる）とその合成語を用いた形式が頻度が高い。しばしば-에게；-한테と共起する：

…것을 남편에게 이해시키다（…なことを夫に理解させる）

각 부부별로 노래를 시키다（各夫婦別に歌を歌わせる）

결혼을 시키다（結婚をさせる）

ただし次の시키다は＜注文する＞の意の操作動詞である：

인터폰으로 맥주 두 병을 시키다（インタフォンでビール2本を頼む）

また次のように-를格に事物ではなくて人がたつものは先の束縛動詞であり、-에게; -한테をとらぬ非与格他動詞である：

아버지를 안심시키다 (父を安心させる)

事物使役には<-게 하다>の形もある：

섬을 보게 하다 (島を見させる)

ただしここでは<섬을 보다>が成立するので섬을の用言は보다である。

接尾辞-이-・-히-・-리-・-기-・-|우-などで形成される総合的な使役形はやはり単純な他動詞との区別が難しい。次の例は与格他動詞で、7-1-12で述べた提示動詞に属する：

여자한테 그것을 알리다 (女にそれを知らせる)

귀가를 알리다 (帰宅を知らせる)

7-1-21 強制動詞 (事物+-를 接尾辞-이-・-히-・-리-・-기-・-|우-などで形成される派生動詞) <人に事物を強制する>

입다 (着る) -입히다 (着せる・着させる) のように対応する他動詞形を持つ動詞のうち、-를格に事物が来る動詞のうち使役でないものは強制動詞と呼び、事物使役動詞と区別する：

옷을 입히다 (服を着せる)

수갑을 채우다 (手錠をはめる)

옷을 벗기다 (服を脱がせる)

7-1-22 指令動詞 (人+-를; -에게や-로など) <人に動作などを指図する>

活動体を-를格にとり動作などを強要する点で束縛動詞と似ているが、束縛動詞が<안다-알히다>のような対応する能動形動詞を持つのに対し、この指令動詞は持たない。また人を-를格にとり-에게; -한테をとらぬ非与格他動詞だという点でも7-1-14の対人動詞に連なるものであるが、-에게や-로格と共起しやすい点が対人動詞とやや性格を異にする：

딸을 대학에 보내다 (娘を大学にやる)

대청으로 그를 맞아들이다 (居間に彼を迎え入れる)

7-1-23 比較動詞 (人など+-를) <人と比較対照する>

人間名詞などを-를格にとり、比較対照を表す。非与格他動詞である：

동식을 서너 걸음 앞서다 (トンシクに数歩先んじている)

7-1-24 共同動詞 (人間名詞+-과/-와; -하고。-에게는不可) <人と共にことをする>

単数の主体の場合に共格<人間名詞+-과/-와; -하고> (…と) をとりえ、かつ-에게 (…に) はとりえないものである。例えば最初の例の共格박과장과 (朴課長と) は与格박과장에게 (朴課長に) で言い替えることができない。また共格がない場合は主体が複数となることが多い：

박과장과 행동을 같이하다 (朴課長と行動を共にする)

대화를 나누다 (対話を交わす)

이야기를 주고받다 (話のやりとりをする)

연애를 하다 (恋愛をする)

힘을 합치다 (力を合わせる)

팔짱을 끼다 (腕を組む)

<선을 보다> (見合いをする) や <결혼식을 올리다> (結婚式をあげる) は処理動詞との中間的な例であろう。なお、これら共同動詞結合は、主体への再帰的な作用を表すグループへと連なる一群である。それらについては7-3で見る。

7-1-25 処理動詞 (事物+-를) <ことを処理する>

-를格には主として事物を表す名詞、とりわけ抽象名詞・活動名詞・団体名詞が立つ。<할아버지를 비웃다> (おじいさんをあざ笑う) は先の処遇動詞結合であるが、<수준을 비웃다> (水準をあざ笑う) に見えるように、-를格が人間でなくなるとこの処理動詞結合に転化する。<시험을 보다> (試験を受ける) のように形式動詞との結合がしばしば見られる。なお処理動詞でも <누나하고 얘기를 시작하다> (姉と話を始める) は人間名詞+-하고 (…と) もとりうるが、<누나에게 얘기를 시작하다> (姉に話を始める) の如く、-하고の代わりに-에게 (…に) も可能だという点で共同動詞とは構造が異なっている。また単数主体でも自由に用いられる点が共同動詞と性格がやや異なっている：

얘기를 시작하다 (話を始める)

업무를 계속하다 (業務を続ける)

회사를 그만두다 (会社を辞める)

직장을 관두다 (職場を辞める)

결혼식을 마치다 (結婚式を終える)

식사를 끝내다 (食事を終える)

학교를 파하다 (学校がひける)

일을 망치다 (事を台無しにする)

최선을 다하다 (最善を尽くす)

약속을 어기다 (約束を違える)

약속을 지키다 (約束を守る)

계획을 세우다 (計画を立てる)

전략을 짜다 (戦略を組む)

결론을/결정을 내리다 (結論を/決定を下す)

벌을 내리다 (罰を下す)

쿠데타를 일으키다 (クーデターを起こす)

TKO승을 거두다 (TKO勝ちをおさめる)

노래를 부르다 (歌を歌う)

대학을 졸업하다 (大学を卒業する)

인생을 아름답게 이루다 (人生を美しく成就する)

농사를 짓다 (農業をする)

시험을 보다 (試験を受ける)

말을/뒤를 잇다 (ことばを/あとをつぐ)

울분을 풀다 (鬱憤を晴らす)

この処理動詞は-를格にとる名詞が主体の外にある物理的な物体よりは主体のか

かわっている営みを表していることが多く、次の7-2のグループとの中間的な位置をなす一群だといえる。

7-2 客体的対象への主体内的な作用

対象が主体の外にあっても、動作自体は専ら主体内での作用が主となっているグループである。飲食動詞や知覚動詞・精神動詞のように-를格の対象が明らかに客体的な位置にあるものから、生理動詞のように-를格の対象が息や涙など主体から発せられた事物である一群へと連なる。このグループはほとんどが非与格他動詞である。

7-2-1 飲食動詞 (飲食物+-를 飲食を表す動詞) <飲食物を摂取する>

밥을 먹다 (ご飯を食べる)・약을 먹다 (薬を飲む)

술을 마시다 (酒を飲む)

소주 한 병을 마시다 (焼酎一本を飲む)

가시를 삼키다 (小骨を飲み込む)

담배를 태우다/피우다 (煙草を吸う)

7-2-2 知覚動詞 (事物・人+-를 知覚を表す動詞) <対象を知覚する>

사진을 보다 (写真を見る)・아빠를 쳐다보다 (パパを見つめる)

아래를 내려다보다 (下を見おろす)・동생을 노려보다 (弟を睨む)

얘기를 듣다 (話を聞く)・소리를 듣다 (音を聞く)

말을 알아듣다 (ことばを聞き取る)

작업을 바라다보다 (作業を眺める)

눈치를 살피다 (様子を見る)

뒷모습을 지켜보다 (後ろ姿を見守る)

엄마를 쳐다보다 (お母さんを見つめる)

知覚動詞結合<집을 보다><家を・見る>が1つの固定的な結合として<留守を見る><留守を守る>の意味で用いられるように、知覚動詞結合には処理動詞結合など他の型の動詞結合に発展しているものも多い。

7-2-3 精神動詞 (客体的対象+-를 精神活動を表す動詞) <客体的対象に対して精神活動を行う>

<사진을 보다> (写真を見る)などの知覚動詞から<사건을 이해하다> (事件を理解する)のような精神動詞へと連なっているのであろう：

사실을 알다 (事実を知る)

그것을 깨닫다 (それを悟る)

나를 알아보다 (私をそれとわかる)

나를 모르다 (私を知らない)

사건을/할아버지를 이해하다 (事件を/おじいさんを理解する)

말을/나를/나라를 믿다 (ことばを/私を/国を信じる)

하나꼬를 의심하다 (花子を疑う)

그이를 사랑하다 (彼を愛する)

송편을 좋아하다 (餅を好む)・남편을 좋아하다 (夫が好きだ)

여자를 싫어하다 (女を嫌う)

아버지를 원망하다 (父を恨む)
 아내를 아끼다 (妻を大事にする)
 삶을 꿈꾸다 (暮らしを夢見る)
 미선을／앞날을 기대하다 (ミソンに／将来に期待する)
 북극을 상상하다 (北極を想像する)
 큰오빠를／편지를 생각하다 (長兄のことを／手紙のことを思う)
 결심이 흔들릴 경우를 생각하다 (決心が揺れた場合を考える)
 주제를 택하다 (主題を選ぶ)
 책을 고르다 (本を選ぶ)
 됴됨이를 평가하다 (人となりを評価する)
 요행수를／있기를 바라다 (まぐれ当たりを／あることを願う)
 편지를／남편을／오기를 기다리다 (手紙を／夫を／来るのを待つ)

7-2-4 生理動詞 (身体に関わる現象名詞など+-를 生理作用を表す動詞) <生理的な作用をする>

-를格には主体から発せられた事物など、身体に関わる名詞がくる：

한숨을 쉬다 (ため息をつく)
 숨을 죽이다 (息を殺す)
 소리를／고함을 지르다 (悲鳴を／叫び声を上げる)
 용변을 지리다 (便を洩らす)
 울음을 터뜨리다 (泣き出す)
 실소를 터뜨리다 (失笑をもらす)
 눈물을 흘리다 (涙を流す)
 숨을 거두다 (息を引きとる)
 코를 골다 (いびきをかく)
 잠을 자다 (眠る)
 애를 낳다 (子を産む)
 소리를 내다 (声を出す)
 냄새를 풍기다 (匂いを発する)

이들은-를格の対象が主体の心理の内にあると考えられる次の心理動詞へと連なっている。また<미소를 짓다> (ほほえむ) など、7-3-5 表情動詞に連なるものもある。

7-3 主体への再帰的な作用

7-3-1 心理動詞 (主体内の対象+-를 精神活動を表す動詞) <主体が主体内の心的な対象に対して作用する>

精神動詞と似ているが、-를格で表される対象が主体のうちにある場合がこれで、心的な作用を表す：

정신을／기운을 차리다 (氣をしっかりと持つ)
 의욕을 잃다 (意欲を失う)
 기억을 잃다 (記憶を失う)

욕심을 내다 (欲を出す)
 화를 내다 (怒る)
 쾌감을／고통을 느끼다 (快感を／苦痛を感じる)
 증오를／양심을 품다 (憎惡を／恨みを抱く)
 신경을 곤두세우다 (神經を尖らす)
 고민을 하다 (悩む)
 궁리를 하다 (思案をする)
 생각을 하다 (思いをする)
 생각을 떠올리다 (想いを浮かべる)
 기쁨을 누리다 (喜びを味わう)
 실패를 예감하다 (失敗を予感する)
 겁을 먹다 (怖じ気づく)
 결기를 세우다 (かっとなる)
 마음을 이기다 (心に打ち勝つ)
 인사하고 싶은 마음을 참다 (挨拶したい気持ちをこらえる)
 생각을／꿈을 포기하다 (考えを／夢を諦める)
 마음을 감추다 (気持ちを隠す)
 결심을 굳히다 (決心を固める)

7-3-2 表情動詞 (表情など+-를) <主体が主体の表情を制御する>

心理動詞が心的な作用として主体内に留まるのに対し、こちらはその外的な表現の方に重点がある：

미소를／표정을 짓다 (微笑を／表情を作る)
 포즈를／자세를 취하다 (ポーズを／姿勢を取る)

上の例は生産動詞的でもあるが、次の例はそうではない：

태도를 바꾸다 (態度を変える)
 감정을 폭발시키다 (感情を爆発させる)
 목소리를 가다듬다 (声を落ちつかせる)

7-3-3 着用動詞 (衣服+-를 着用を表す動詞) <主体が主体自身の衣服などを着用する>

操作動詞より連なる一群であるが、動作が再帰的である点で客体的な対象への作用のグループとの境界的な位置にある結合である：

한복을 걸치다 (民族服をまとう)
 넥타이를 잡아매다 (ネクタイを締める)
 머리에 모자를 쓰다 (頭に帽子をかぶる)
 이불을 뒤집어쓰다 (布団をかぶる)
 갑옷을 입다 (鎧をまとう) · 옷을 입다 (服を着る)
 몸을 꾸미다 (身を飾る)
 옷을 갈아입다 (服を着替える)
 화장을 고치다 (化粧を直す)

7-3-4 脱衣動詞 (衣服+-를 取り外しを表す動詞) <衣服などを取り外す>

모자를 벗다 (帽子を脱ぐ)

땀을 닦다 (汗をぬぐい取る)

7-3-5 喪失動詞 (事物+를 喪失を表す動詞) <事物を放棄・喪失する>

所有・具備していたものやするはずのものを主体が失うことを表す:

명예를 버리다 (名誉を捨てる)

손을 뿌리치다 (手をふりほどく)

신발을 잃다 (靴をなくす)

버스를 놓치다 (バスを逃す)

나를/첫사랑을 잊다 (私を/初恋を忘れる)

おなじい 않다でも、<의식을 잃다> (意識を失う) のように-를格が主体内の対象になると心理動詞とまたがることになる。

7-3-6 身体動詞 (主体自身の身体+-를 動作動詞) <主体が主体自身の身体を動かす>

-를格に主体自身の身体を表す名詞が立つ結合で、再帰的動作を表す典型的な一群である:

손으로 입을 막다 (手で口を塞ぐ)

손으로 손을 잡다 (手で手を握る)

고개를 내밀다 (顔をつき出す)

앞에 무릎을 꿇다 (前にひざまずく)

몸을 뒤틀다 (身をよじる)

눈을 뜨다 (眼を開ける)

이를 갈다 (歯ぎしりする)

고개를 돌리다 (振り返る)

고개를 들다 (顔を挙げる)

고개를 숙이다 (頭を垂れる)

고개를 젖다 (首を振る)

몸을 떨다 (身を震わせる)

머리를 말리다 (髪を乾かす)

머리를 조아리다 (頭を下げる)

팔을 벌리다 (腕を広げる)

눈을 비비다 (眼をこする)

눈시울을 적시다 (目頭を熱くする)

코를 풀다 (はなをかむ)

허리를 굽히다 (腰を屈める)

몸을 일으키다 (身を起こす)

입을 열다 (口を開く)

배를 채우다 (腹を満たす)

일손을 멈추다 (仕事の手を休める)

<장사에·손을 대다> (商売に·手をつける) などは身体動詞構造から-에格を必須成分とする構造に転化したものである。

7-3-7 出沒動詞 (主体自身+-를 出沒を表す動詞) <主体が自身を出現させたり消滅させたりする>

학교에서 자취를 감추다 (学校から姿をくらます)

모습을 드러내다 (姿を現す)

모습을 나타내다 (姿を現す)

7-3-8 所有動詞 (事物+-를 所有を表す動詞) <所有・具備する>

힘을/가지다 (力を持つ)

애를 가지다 (子をはらむ)

관심을/기대를 갖다 (関心を/期待を持つ)

준비를 갖추다 (準備を整える)

기차표를 끊다 (汽車の切符を買う)

この所有動詞には-를格に立つ名詞の性格によって他のカテゴリーにまたがってしまう中間的な例が多い。<모임을 가지다> (集まりを持つ) などは処理動詞との中間的な例であろう。また<자리를 찾다> (席を見つける) なども知覚動詞や精神動詞ともまたがっているような例である。また<시간을 가지다> (時間を持つ) のように-를格に時間名詞が立つと7-5の状況的な対象へのかかわりのグループに属する経験動詞へと連なることになるし、<안방을 차지하다> (居間を取る・居間に陣取る) のごとく場所名詞をとってもやはり状況的な対象へのかかわりの性格を帯びることになる。

7-4 客体的対象からの主体への作用

他動詞であっても他動性が非常に弱く、客体的な対象に働きかけるというよりはむしろ受身的である動詞がこれに属する。まずほとんどの動詞が受身形をつくることはできない。受身動詞と、他動詞である享受動詞・受容動詞は区別される。また享受動詞は-에게서; -한테서 (...から) をとりうるもの、受容動詞は主として-에게서; -한테서などの共起格なしで用いられるものである。このグループでは受身動詞が与格をとるほかは、与格他動詞が多いが非与格他動詞も見られる。

7-4-1 受身動詞 (人+-에게; -한테) <行為を受ける>

-를格に事物が来る<事物受身>は多い:

조사를 받다 (調査を受ける)・허락을 받다 (許しを得る)

평가를 받다 (評価を受ける)・소개를 받다 (紹介される)

아가씨에게 오해를 받다 (娘さんに誤解される)

망신을 당하다 (恥をかく)・참패를 당하다 (惨敗を期す)

비웃음을 당하다 (あざ笑われる)

가방을 빼앗기다 (鞆を盗られる)

모자를 짓밟히다 (帽子を踏まれる)

-를格に人間がくる<人間受身>もあるが頻度は少ない:

사람을 소개받다 (人を紹介してもらう)

7-4-2 享受動詞 (人+-에게서; -한테서) <人から事物を受け取る>

享受動詞の多くは「人から」の意を表す奪格-에게서; -한테서 (...から) を与格

-에게; -한테 (...に) で言い替えることができる:

편지를 받다 (手紙をもらう)・도움을 받다 (手助けを受ける)

옷을 빌리다 (服を借りる)

빚을 내다 (借金をする)

월급을 타다 (月給を貰う)

물을 얻다 (水をもらう)

사법을 배우다 (司法を学ぶ)

아르바이트로 용돈을 조달하다 (アルバイトで小遣いを調達する)

次の例は奪格-한테서を与格-한테で言い替えると意味が変わってしまう:

백을/꽃을 사다 (バッグを/花を買う)

7-4-2 受容動詞 (事物+-를) <ことを被る>

動詞そのものは3項動詞的なものが多いが実際にはほとんど2項動詞として用いられる:

시험에 백점을 맞다 (試験で百点をもらう)

안정을 얻다 (安定を得る)

상처를 입다 (傷を受ける)

충격을 받다 (衝撃を受ける)・벌을 받다 (罰を受ける)

호감을 사다 (好感を買う)

この受容動詞は次のような例から生理動詞など他の結合に連なっている:

나이를 먹다 (歳をとる)・더위를 먹다 (暑気あたりする)

7-5 状況的な対象へのかかわり

-를格が場や時、環境といった状況的な対象として設定されているグループがこれである。これらの動詞を自動詞と考える研究者もあるが、ここでは他動詞の下位範疇と考えておく。とりわけ経験動詞の結合では、-를格と結合する用言の位置にどんな自動詞でも立ち得るというわけではないことに注目すべきであろう。もちろん形容詞は立たない。なお、このグループは先のグループより遥かに他動性が弱く、大部分の動詞は受身形を作りえない。このグループは基本的に全て非与格他動詞である。

7-5-1 移動動詞 (場・人+-를 移動を表す動詞) <場や人を訪れる>

場所名詞や人間名詞が-를格に立ち、主体の移動を表す。<학교를 가다> (学校へ行く) が<학교에 가다> (学校に行く) となりうるように、-를格の代わりに-에格や-에게; -한테格を従えた自動詞の移動動詞と相互に転化しうる:

학교를 가다 (学校へ行く)

우리집을 찾아오다 (うちを訪ねて来る)

읍내로 농업학교를 다니다 (村の方へ農業学校に通う)

민수를 찾아가다 (ミンスを訪れる)

7-5-2 外出動詞 (営為名詞+-를 移動を表す動詞) <営みを行いに移動する>

営為名詞を-를格に従え、移動動詞が来る構造である。営為名詞は移動する目的になる。-를格は-에格で言い替えることができない:

구경을 가다 (見物に行く)

서울로 신혼여행을 오다 (ソウルに新婚旅行に来る)

방으로 도망을 가다 (部屋に逃げて行く)

일을 나가다 (仕事に出かける)

구경을 다니다 (見物して回る)

7-5-3 離脱動詞 (場+-를 移動を表す動詞) <場としての対象から離脱する>

-를格は主体がそこから離脱する場としての対象を表す。나오다のような移動動詞のごとく-를格を奪格の-에서で言い替えることができるものもある:

집을 나가다 (家を出る)

다방을 나오다 (喫茶店を出る)

교무실을 나서다 (職員室を出る)

마을을 떠나다 (村を脱つ)

마을을 뜨다 (村を離れる)

소녀티를 벗어나다 (少女らしさから抜けでる)

7-5-4 往来動詞 (場+-를 移動などを表す動詞) <場としての対象のうちを移動する>

-를格には場所名詞・位置名詞が来て、主体は場として捉えた対象の中を移動する:

들길을 걷다 (野道を歩く)

하늘을 날다 (空を飛ぶ)

계단을 오르다・올라가다 (階段を上がる)

소나무밭을 지나다 (松畑を過ぎる)

문턱을 넘다 (敷居をまたぐ)

관문을 거치다 (関門を経る)

호수를 건너다 (湖を渡る)

밀림을 헤치다 (密林をかき分ける)

혼란을 겪다 (混乱を経る)

7-5-5 経験動詞 (体験・環境+-를) <時や環境としての対象を経験する>

<파나마운하를 거치다> (パナマ運河を経る) という往来動詞構造の場所名詞が<연애를 거치다> (恋愛を経る) のように体験や環境を表す名詞に代わるとこの型になる。更に進んで時間名詞を-를格にとって経験した期間を表すことができる:

첫날밤을 맞다 (初夜を迎える)

첫날밤을 치르다／보내다 (初夜を過ごす)

시험을 앞두다 (試験をひかえる)

대단원을 맺다 (大団円を迎える)

결정을 보다 (決定を見る)

기회를 노리다 (機会をうかがう)

밤을 지새우다 (夜を明かす)

거부감으로 밤을 새우다 (拒否感で夜を明かす)

오년간을 사이 좋게／밤을 지내다 (5年間を仲良く／夜を過ごす)

만나절을 헤매다 (半日さまよう)

스물을 넘다 (二十歳を越える)
간격을 두다 (間隔を置く)
시간을 끌다 (時間を長引かせる)

これら経験動詞は、次のような例を紐帯として自動詞のカテゴリーへと連なっていると見ることができる：

몇번을 들랑거리다 (何度も出入りする)
한참을 울다 (しばらくの間泣く)

結局のところ他動詞と自動詞の区別は、個々の動詞に固有不変の属性と考えるのではなく、他の単語との共起関係のなかでのみ最終的に定まると考えるべきであろう。そうであるならば-를格と共起している動詞は他動性の強弱にかかわらず全て他動詞であるとも考えることも可能になってくる。〈한참을 울다〉のような例は、基本的には自動詞結合の中で用いられる울다 (泣く) が時間名詞を対格にとることによって他動詞結合を結びながら他動詞化しているものだと見ることができるのである。

「動詞울다は自動詞である」といった具合に固定的に考えるのではなく、これこれの条件のもとではこの動詞は自動詞であり、同じ動詞がまた別の条件下では他動詞のようにふるまうというように、自動詞と他動詞という複数のカテゴリー間を動き回る言語現象を認める方がより言語事実に近いと考えたい。

〈한참을 울다〉が表す事態は自動詞結合〈한참 울다〉が表す事態と違いはないが、한참という時間を対象化して捉えているという点では、-를格という形式はやはりいくばくかのニュアンスの差を生み出していると見た方がよからう。いずれにせよ、言語形式が表す事態が同一だからといって言語形式のカテゴリーが常に同一である必要はないし、ニュアンスの差がとりたてて記述するほどではないからといって言語形式上の差を不問に付す必要もないのである。言語が形式にのっとったものである以上、カテゴリー設定の基準もまた可能な限り形式に依拠する方が言語学の現段階では妥当であろう。

以上述べてきた、主として他動詞で-를格を受けるもののほかに、3-2-6などで述べた위하여などの後置詞で受けるもののグループ、3-3で述べた〈-를格 -로 / -으로格〉の型を始めとする用言のないグループがあり、それらを合わせれば-를格の基本的な用法としてはおおむね尽くされたことになる。

なお、資料中10例以上出現した高頻度の用言をとりあげ、それぞれの用言について-를格の体言範疇の量的な分布を表したgradation-matrixと、主要な用言의가나다順リスト、および動詞結合の一覧を本稿末尾に付した。

7-6 機能動詞

以上のような単語結合による動詞分類の他に、機能の点から、機能動詞を抽出することができる。-를格に立つ名詞に語彙的な意味のほとんどを負わせて、動詞自体は文法的な機能だけを受け持つ動詞である。中でも하다はその典型的な例といえよう。機能動詞結合全体が更に-를格をとる形式も、極端な例を挙げれば〈그 문제를 한참을 고민을 하다〉(その問題をしばらくの間を苦悶をする)のような形で理論的にはありえそうだが、例えば〈그 문제에 대해서 한참 고민을 하다〉のようにほぐされ

てしまうことがほとんどで、機能動詞の-를格の重出は資料中には出てこない：

일본에서 공부를 하다 (日本で勉強をする)
악수를 하다 (握手をする)・고민을 하다 (悩む)
결혼식을 올리다 (結婚式をあげる)
택에 연락을 취하다 (お宅に連絡をとる)
포즈를/자세를 취하다 (ポーズを/姿勢を取る)
끝장을 내다 (けりをつける)・빚을 내다 (借金をする)
결정을 내리다 (決定を下す)・결론을 내리다 (結論を出す)
다짐을 두다 (念を押す)
고집을 부리다 (我を張る)・애교를 부리다 (愛嬌をふりまく)
살림을 살다 (暮らしをする)
계획을 세우다 (計画を立てる)
악을 쓰다 (わめく)
농사를 짓다 (農業をする)
야단을 치다 (叱る)・소리를 치다 (叫ぶ)
아우성을 치다 (喚声を上げる)・줄행랑을 치다 (高飛びをする)
살림을 꾸리다 (所帯を持つ)

なお前述のように機能動詞結合の中には分離用言が非常に多い。

7-7 無意志動詞

他動詞は一般に命令形・勧誘形・I-고 싶다の願望形を作ることができるので菅野裕臣(1986-7)も言うように基本的には意志動詞であると考えてよいが、専ら不活動体主語で用いられる次のような例は無意志動詞的である：

대단원을 댈다 (大団円を迎える)
결정을 보다 (決定を見る)

不活動体主語が立つと命令形・勧誘形が作りにくいこともあって、次のような例でも不活動体主語の場合は無意志動詞的になる：

그 즐거움이 여자의 신경을 건드리고 경계의 촉각을 세우게 했다. <군것질34>

その楽しみが女の神経にさわり、警戒の触角を立たしめた。

7-8 動名詞他動詞

<있기를 바라다> (あらんことを願う) のように<I-기를 動詞>の形式をとりうる他動詞は極めて限定されているが、このグループを<動名詞対格他動詞>あるいはより簡単に<動名詞他動詞>と呼ぶことができよう。菅野裕臣(1987)は<I-기를

動詞>の形式をとりうる他動詞のうち、願望文を作るものを「願望動詞」と呼んだが、これが動名詞他動詞の典型である。動名詞他動詞構造は바라다(望む)・원하다(願う)・부탁하다(頼む)・조르다(せがむ)・청하다(頼む)・권하다(すすめる)・빌다(乞う)・노리다(ねらう)・꿈꾸다(夢見る)・상상하다(想像する)・기다리다(待つ)・기대하다(期待する)・믿다(信じる)・자청하다(自ら請う)などで作られる。この願望動詞は提示動詞や精神動詞と重なるものが多いことが注目される。좋아하다(好む)や싫어하다(嫌う)・택하다(選ぶ)など、<好悪動詞>とも呼べそうな好悪の感情を表す一群の動詞もまた動名詞他動詞になりうるが、やはり精神動詞である。このほかには알리다(知らせる)や이해시키다(理解させる)など精神動詞が使役になったような意味のもの、시작하다(始める)や계속하다(続ける)などの処理動詞構造に現れるものがある。動名詞他動詞構造では、総じて、既に終わった事態ではなく、まだ起こっていない未発の事態を動名詞で表すことが多いことが特徴である。これと対照的にⅡ-Ⅰの体言形では<외로움을 달래다>(淋しさを慰める)・<외침을 듣다>(叫びを聞く)・<있음을 말하다>(あるということ語る)などのように既然的な事態を表す例が多い。

8 おわりに

以上見てきたように、-을格には他動性が非常に強い用法から弱い用法までさまざまな用法が存在し、それらは他の斜格との共起関係、間の要素の有無や種別、連体修飾成分との関係、主語の種類、名詞の範疇と動詞の範疇との相関といった諸条件と密接に結びつく形で支えられていることがわかる。今後の-을格の研究および他動詞構文の研究では、こうした諸条件をより大規模な言語事実の調査によって解明してゆくことが必要であろう。本稿ではテキストを小説と手記に限って基礎資料としたが、更に戯曲ではどうか、論説文ではどうかといったテキストや文体別の検討も試みられねばならない。野間秀樹(1988)で行ったように文を命題とモダリティとに分けて考えるなら、格は命題そのものを組み立てるところの、モダリティから最も遠い文法範疇の1つだといえる。その格でさえ、本稿でみたように、テキストの性格が例えば名詞の範疇の量的な分布といった点に見事に写し出されるのであった。文はやはりテキスト内存在なのである。今後の格研究は、恣意的に文を羅列して孤立した文のレベルでのみあれこれ述べ立てるのではなく、いかなるテキストのうちで格というものがいかに実現されるかという、テキストのレベルまで射程に入れた視点が必須のものとなろう。いずれにせよ資料の量は非常に大切に、少なくとも本稿で扱った標本数3044例の10倍の規模での調査がなされるなら、朝鮮語の-을格及び他動詞構文については相当の精度をもって明らかになってくるに違いない。

最初に述べたように、本稿は-을格及び他動詞の研究のみならず広く朝鮮語の文法研究一般に対する方法論的な提起でもある。対象とした資料の量的な限界から来る不十分さは多々ありこそすれ、言語事実に立脚しなおかつ量的な分布にも着目しながら解析してゆくというこうした方法は、この方法の行く先に我々の間に対する何らかの解答が待っていることを確信させるのである。朝鮮語研究は主観的な思弁や概念装置

の操作のみに陥ることなく、言語事実に立脚して言語を語る時に来ているといつてよい。ただ、資料の量的な拡大に対する研究者の欲望は既に個人の扱える範囲を越えているかもしれない。その時にこそまたしても重要なのは方法であり、そして我々の経験の蓄積である。

用例を収集した資料 <>は引用の際の略号

강석・김혜영編(1990)『나의 신혼일기』명서원 (手記)<신혼>
宋河春(1987)『호박꽃 여름』고려원 (小説)<호박>
양인자(1988)『선비 꿈트 문학선1 비오는 날의 군것질』선비 (小説)<군것질>
윤정모(1985)「신발」黃皙暎・金正煥編『우리들의 공동체 하나됨을 위하여――80년대 대표 소설선 3』지양사 所収 (小説)<신발>
李筍(1985)「병어회－아들・2」黃皙暎・金正煥 編『일과 사랑과 우리들의 공동체――80년대 대표 소설선 2』지양사 所収 (小説)<병어회>
林菊姬・禹鍾範編(1984)『바구니에 가득찬 행복』文化放送 정예원 (手記)<바구니>
鄭然喜(1988)「막차요, 막차」『뽕』文學思想社 所収 (小説)<막차>
趙世熙(1983;1989)「모독」『趙世熙小説集 시간여행』文學과학性社 所収 (小説)<모독>

参考文献

Akademija nauk SSSR.(1980) "Russkaja grammatika" TOM 1,2, Institut russkogo jazyka, Moskva (菅野裕臣訳(1990-1)『ロシア語文法1,2』東京外国語大学講義資料、未公刊、部分訳)
李玟鎬(1988)『國語格助詞‘을/를’의 研究』답출판사
伊藤英人(1989)「現代朝鮮語動詞の非過去テンス形式の用法について」『朝鮮學報』第131輯 pp.1-44 朝鮮学会
奥田一廣(1976)「朝鮮語の対格助詞「를(을)」について――とくに、その文法機能および意義素を中心に――」『朝鮮學報』第78輯 pp.1-35 朝鮮学会
奥田靖雄(1983)「を格の名詞と動詞とのくみあわせ」言語学研究会編(1983)所収 pp.21-149
奥田靖雄(1983)「を格のかたちをとる名詞と動詞とのくみあわせ」言語学研究会編(1983)所収 pp.151-279
菅野裕臣(1981)『朝鮮語の入門』白水社
菅野裕臣(1986-7)「中級講座」『基礎ハングル』1-12号 三修社
菅野裕臣(1987)「東京外国語大学講義資料」(未公刊)
工藤真由美(1990)「現代日本語の受動文」言語学研究会編『ことばの科学4』むぎ書房 所収 pp.47-102
言語学研究会編(1983)『日本語文法・連語論(資料編)』むぎ書房
柴公也「漢字語+시키다」について――再帰性・他動性・使役性・受動性との関わり

- をめぐって――」『朝鮮学報』第144輯 pp.87-150 朝鮮学会
- SUGAMOTO, Nobuko (1982) "Transitivity and Objecthood in Japanese",
In Paul J. Hopper/Sandra A. Thompson (ed.), *Syntax and Semantics 15: Studies in Transitivity*. Academic Press. pp.423-447
- 徐尚揆(1991)「現代朝鮮語の程度副詞について――副詞<아주>の<程度>と<様態>の意味を中心に――」『朝鮮学報』第140輯 pp.1-62 朝鮮学会
- 千村哲也(1987)「現代朝鮮語の格語尾{-로}について」東京外国語大学卒業論文(未公刊)
- 趙義成(1992)「現代朝鮮語の処格語尾-에서について」第85回朝鮮語研究会発表要旨
- 野間秀樹(1988)「<하겠다>の研究――現代朝鮮語の用言のmood形式をめぐって」
『朝鮮学報』129輯 pp.1-73 朝鮮学会
- 野間秀樹(1990a)「<할 것이다>の研究――再び現代朝鮮語の用言のmood形式をめぐって」
『朝鮮学報』134輯 pp.1-64 朝鮮学会
- 野間秀樹(1990b)「現代朝鮮語の名詞分類――語彙論・文法論のために」『朝鮮学報』
135輯 pp.1-59 朝鮮学会
- 野間秀樹(1991)「朝鮮語のオノマトペ――擬声擬態語と派生・単語結合・シンタックス・テキストについて――」『学習院大学言語共同研究所紀要』第14号 pp.75-88 学習院大学言語共同研究所
- 浜之上幸(1991)「現代朝鮮語動詞のアスペクト的クラス」『朝鮮学報』138輯 pp.1-93 朝鮮学会
- Helbig, G./Buscha, J. (1977) "Deutsche Grammatik, Ein Handbuch für den Ausländerunterricht", Leipzig (在間進訳(1982)『現代ドイツ文法』三修社)
- Xolodovich, A.A. (1954) "Ocherk grammatiki korejskogo jazyka", Moskva
- 村木新次郎(1991)『日本語動詞の諸相』ひつじ書房

*菅野裕臣・権在淑・浜之上幸・高東昊の諸先生方には貴重な助言を頂戴しました。町田和彦先生にはデータ処理について貴重な示唆を頂戴し、また徐尚揆先生には用例収集の資料の点でお世話になりました。記して感謝します。

主要な用言の代表的な用言結合一覧 (가나다順)

가다	外出	구경을 가다 (見物に行く)
가다	外出	방으로 도망을 가다 (部屋に逃げて行く)
가다	移動	학교를 가다 (学校へ行く)
가다듬다	表情	목소리를 가다듬다 (声を落ちつかせる)
가르치다	対人	아이들을 가르치다 (子供たちを教える)
가르치다	提示	제목을 가르치다 (題名を教える)
가리키다	提示	의자를 가리키다 (椅子を指さす)
가져오다	授与	열쇠뭉치를 가져오다 (鍵の束を持って来る)
가지다	所有	애를 가지다 (子をはらむ)
가지다	所有	힘을/시간을 가지다 (力を/時間を持つ)
값다	加減	값을 값다 (値段を値切る)
갈기다	対身	뺨을 갈기다 (頬をひっぱたく)
갈다	身体	이를 갈다 (歯ぎしりする)
갈다	加工	칼을 갈다 (刀を研ぐ)
갈아입다	着用	옷을 갈아입다 (服を着替える)
감추다	出沒	학교에서 자취를 감추다 (学校から姿をくらます)
감추다	心理	마음을 감추다 (気持ちをかくす)
갖다	所有	관심을/기대를 갖다 (関心を/期待を持つ)
갖추다	所有	준비를 갖추다 (準備を整える)
같이하다	共同	박과장과 행동을 같이하다 (朴課長と行動を共にする)
거두다	処理	T K O 승을 거두다 (T K O 勝ちをおさめる)
거두다	生理	숨을 거두다 (息を引きとる)
거치다	往来	관문을 거치다 (関門を経る)
거치다	經驗	약혼을 거치다 (婚約を済ます)
걷다	往来	들길을 걷다 (野道を歩く)
걸다	付与	신발을 걸다 (履き物をかける)
걸다	提示	말을 걸다 (ことばをかける)
걸다	從事	선택에 승부를 걸다 (選択に勝負を掛ける)
걸치다	着用	한복을 걸치다 (民族服をまとう)
겪다	往来	혼란을 겪다 (混乱を経る)
계속하다	処理	업무를 계속하다 (業務を続ける)
고다	生理	코를 골다 (いびきをかく)
고르다	精神	책을 고르다 (本を選ぶ)
고백하다	提示	각시에게 사랑을 고백하다 (新婦に愛を告白する)
고치다	着用	화장을 고치다 (化粧を直す)
관두다	処理	직장을 관두다 (職場を辞める)
괴롭히다	束縛	우리를 괴롭히다 (我々を苦しませる)
굳히다	心理	결심을 굳히다 (決心を固める)
굽히다	身体	허리를 굽히다 (腰を屈める)
권하다	提示	떡을 권하다 (餅をすすめる)
그리다	生産	입술에 꽃잎을 그리다 (唇に花びらを描く)
그만두다	処理	회사를 그만두다 (会社を辞める)
긁어내다	操作	내장을 긁어내다 (内臓をかき出す)
기다리다	精神	버스를/오기를 기다리다 (バスを/来るのを待つ)

기르다	養育	여자를 기르다 (女を育てる)
깔다	付与	뜰에 잔디를 깔다 (庭に芝を敷く)
깨닫다	精神	그것을 깨닫다 (それを悟る)
꺼내다	奪取	냉장고에서 아이스크림을 꺼내다 (冷蔵庫からアイスクリームを出す)
껴안다	行為	신부를껴안다 (新婦をかき抱く)
꽂다	付与	꽃병에다 꽃을 꽂다 (花瓶に花を差す)
꽂다	付与	핀을 꽂다 (ピンを刺す)
꾸리다	従事	본정통에 살림을 꾸리다 (本町通りに所帯を持つ)
꾸미다	着用	몸을 꾸미다 (身を飾る)
꾸짖다	処遇	집안식구들을 꾸짖다 (家の者たちを叱る)
꿇다	身体	앞에 무릎을 꿇다 (前にひざまずく)
꿈꾸다	精神	살을 꿈꾸다 (暮らしを夢見る)
끄다	加工	불을 끄다 (火を消す)
끊다	所有	기차표를 끊다 (汽車の切符を買う)
끌다	經驗	시간을 끌다 (時間を長引かせる)
끝내다	処理	식사를 끝내다 (食事を終える)
끼다	共同	팔짱을 끼다 (腕を組む)
나가다	離脱	집을 나가다 (家を出る)
나가다	外出	일을 나가다 (仕事に出かける)
나누다	共同	대화를 나누다 (對話を交わす)
나서다	離脱	교무실을 나서다 (職員室を出る)
나오다	離脱	다방을 나오다 (喫茶店を出る)
나타내다	出沒	모습을 나타내다 (姿を現す)
낳다	生理	애를 낳다 (子を産む)
내다	授与	사직서를 내다 (辞表を出す)
내다	享受	빚을 내다 (借金をする)
내다	生理	소리를 내다 (声を出す)
내다	心理	욕심을 내다 (欲を出す)
내다	心理	화를 내다 (怒る)
내려다보다	知覚	아래를 내려다보다 (下を見おろす)
내리다	操作	치마를/모자를 내리다 (スカートを/帽子をおろす)
내밀다	身体	고개를 내밀다 (顔をつき出す)
넘다	經驗	스물을 넘다 (二十歳を越える)
노려보다	知覚	동생을 노려보다 (弟を睨む)
노리다	經驗	기회를 노리다 (機会をうかがう)
높이다	加減	가치를 높이다 (価値を高める)
놓다	付与	손가락을 놓다 (箸を置く)
놓치다	喪失	버스를 놓치다 (バスを逃す)
누르다	操作	벨을 누르다 (ベルを押す)
느끼다	心理	쾌감을 느끼다 (快感を感じる)
다니다	移動	읍내로 농업학교를 다니다 (村の農業学校に通う)
다하다	処理	최선을 다하다 (最善を尽くす)
닳다	加工	손바닥으로 신발을 닳다 (掌で靴を磨く)
닫다	操作	문을 닫다 (ドアを閉める)
달래다	対人	아들딸들을 달래다 (息子娘たちをなだめる)

담다	付与	꽃병에 물을 담다 (花瓶に水を入れる)
당하다	受身	망신을 당하다 (恥をかく)
당하다	受身	참패를 당하다 (惨敗を期す)
당하다	受身	비웃음을 당하다 (あざ笑われる)
던지다	付与	앞에 돌맹이를 던지다 (前に石を投げる)
던지다	操作	타올을 던지다 (タオルを投げる)
데리다	对人	친구를 데리다 (友達を連れている)
돌리다	操作	다이얼을 돌리다 (ダイヤルを回す)
돌리다	身体	고개를 돌리다 (振り返る)
돕다	对人	아버지를 돕다 (父を手助けする)
두다	付与	서류를 두다 (書類を置く)
두다	從事	척도를 어디에다 두다 (尺度をどこに置く)
두다	經驗	간격을 두다 (間隔を置く)
두드리다	操作	문을 두드리다 (ドアを叩く)
뒤집어쓰다	着用	이불을 뒤집어쓰다 (布団をかぶる)
뒤틀다	身体	몸을 뒤틀다 (身をよじる)
드러내다	出没	모습을 드러내다 (姿を現す)
듣다	知覚	얘기를 듣다 (話を聞く) · 소리를 듣다 (音を聞く)
들다	身体	고개를 들다 (顔を挙げる)
들다	操作	펜을 들다 (ペンをとる) · 술잔을 들다 (杯を持つ)
들랑거리다	經驗	몇번을 들랑거리다 (何度か出入りする)
따르다	对人	중생을 따르다 (衆生に従う)
떠나다	離脱	마을을 떠나다 (村を発つ)
떠올리다	心理	생각을 떠올리다 (想いを浮かべる)
떨다	身体	몸을 떨다 (身を震わせる)
떼다	奪取	과외지도에서 손을 떼다 (課外指導から手を引く)
뜨다	身体	눈을 뜨다 (眼を開ける)
뜨다	離脱	마을을 뜨다 (村を離れる)
마시다	飲食	소주 한 병을 마시다 (焼酎一本を飲む)
마시다	飲食	술을 마시다 (酒を飲む)
마치다	処理	결혼식을 마치다 (結婚式を終える)
막다	身体	손으로 입을 막다 (手で口を塞ぐ)
만나다	对人	동창을 만나다 (同窓生に会う)
만들다	生産	밀개떡을 만들다 (餅を作る)
만들다	生産	일곱을 만들다 (<友達を>7人作る)
만들다	轉換	백을 자기 것으로 만들다 (鞆を自分のものにする)
만들다	使役	아버지를 난처하게 만들다 (父を困らせる)
만들다	使役	저희를 고민하게 만들다 (私たちを悩ませる)
만지다	对身	궁둥이를 만지다 (おしりをさわる)
말리다	身体	머리를 말리다 (髪を乾かす)
말하다	言語	의견을 말하다 (意見を述べる)
망치다	処理	일을 망치다 (事を台無しにする)
맞다	受容	시험에 백점을 맞다 (試験で百点をとる)
맞다	經驗	첫날밤을 맞다 (初夜を迎える)
맞다	对人	학생을 맞다 (学生を迎える)
맞아들이다	指令	대청으로 그를 맞아들이다 (居間に彼を迎え入れる)

말기다	提示	사람에게 평생을 말기다 (人に一生をゆだねる)
맺다	經驗	대단원을 맺다 (大団円を迎える)
먹다	飲食	밥을 먹다 (ご飯を食べる)
먹다	飲食	약을 먹다 (薬を飲む)
먹다	受容	나이를 먹다 (歳をとる)
먹다	受容	더위를 먹다 (暑氣あたりする)
먹다	心理	겁을 먹다 (怖じ気づく)
멈추다	身体	일손을 멈추다 (仕事の手を休める)
모르다	精神	나를 모르다 (私を知らない)
몰다	操作	차를 몰다 (車を駆る)
묻다	言語	책임을 묻다 (責任を問う)
묻다	授与	이자를 묻다 (利子を払う)
믿다	精神	말을／나를／나라를 믿다 (ことばを／私を／国を信じる)
밀다	操作	대문을 밀다 (門の扉を押す)
밀다	行為	전신으로 승객을 밀다 (全身で乗客を押す)
바꾸다	表情	태도를 바꾸다 (態度を変える)
바라다	精神	요행수를／있기를 바라다 (まぐれ当たりを／あることを願う)
바라다보다	知覚	작업을 바라다보다 (作業を眺める)
받다	受身	아가씨에게 오해를 받다 (娘さんに誤解をされる)
받다	受身	조사를 받다 (調査を受ける)
받다	受身	허락을 받다 (許しを得る)
받다	受身	평가를 받다 (評価を受ける)
받다	受身	소개를 받다 (紹介される)
받다	受容	충격을 받다 (衝撃を受ける)
받다	享受	편지를 받다 (手紙をもらう)
받다	享受	도움을 받다 (手助けを受ける)
배우다	享受	사법을 배우다 (司法を学ぶ)
버리다	喪失	명예를 버리다 (名譽を捨てる)
벌리다	身体	팔을 벌리다 (腕を広げる)
벗기다	強制	옷을 벗기다 (服を脱がせる)
벗다	脱衣	모자를 벗다 (帽子を脱ぐ)
벗어나다	離脱	소녀티를 벗어나다 (少女らしさから抜けでる)
보내다	經驗	여름을 보내다 (夏を過ごす)
보내다	指令	딸을 대학에 보내다 (娘を大学にやる)
보내다	授与	편지를／박수를 보내다 (手紙を／拍手を送る)
보다	知覚	사진을 보다 (写真を見る)
보다	処理	시험을 보다 (試験を受ける)
보다	經驗	결정을 보다 (決定を見る)
보살피다	対人	아이들을 보살피다 (子供たちを世話する)
보이다	提示	얼굴로 여유를 보이다 (顔で余裕を見せる)
부르다	処理	노래를 부르다 (歌を歌う)
부르다	処遇	목소리로 아버지를 부르다 (声で父を呼ぶ)
부리다	提示	애교를 부리다 (愛嬌をふりまく)
부리다	提示	하나꼬한테 투정을 부리다 (花子にあたりちらす)
붙이다	生産	불을 붙이다 (火をつける)
붙잡다	操作	전화통을 붙잡다 (電話機を掴む)

비비다	身体	눈을 비비다 (眼をこする)
비우다	變成	그릇을 비우다 (器を空ける)
비우다	變成	집을 비우다 (家を空ける)
빌다	言語	용서를 빌다 (許しを乞う)
빌다	言語	잘못을 빌다 (過ちを詫びる)
빌리다	享受	옷을 빌리다 (服を借りる)
빼앗기다	受身	가방을 빼앗기다 (鞆を奪われる)
뽑다	奪取	잡초를 뽑다 (雜草を抜く)
뿌리다	付与	식칼에 물을 뿌리다 (包丁に水を振りかける)
뿌리치다	喪失	손을 뿌리치다 (手をふりはらう)
사귀다	対人	기집애들을 사귀다 (女の子たちとつき合う)
사다	授与	나한테 술을 사다 (私に酒をおごる)
사다	享受	담배를 사다 (煙草を買う)
사다	受容	호감을 사다 (好感を買う)
사랑하다	精神	그이를 사랑하다 (彼を愛する)
살피다	知覚	눈치를 살피다 (様子をうかがう)
삼다	轉換	노력을 생애의 할일로 삼다 (努力を生涯のなすべきこととする)
삼다	轉換	키를 핑계 삼다 (背を口実にする)
삼키다	飲食	가시를 삼키다 (小骨を飲み込む)
상상하다	精神	북극을 상상하다 (北極を想像する)
새우다	經驗	거부감으로 밤을 새우다 (拒否感で夜を明かす)
생각하다	精神	큰오빠를／편지를／경우를 생각하다 (長兄のことを／手紙の ことを／場合を考える)
생각하다	認定	이곳을 아침의 망명처쯤으로 생각하다 (ここを朝の亡命場所 ぐらいに思う)
생각하다	認定	자기를 내 전부라고 생각하다 (自分を私の全てと考える)
생각하다	認定	퇴근시간을 탈출의 디데이처럼 생각하다 (退社時間を脱出の ディーデーのように思う)
설득하다	対人	부모를 설득하다 (父母を説得する)
설명하다	提示	경위를 설명하다 (経緯を説明する)
세우다	処理	계획을 세우다 (計画を立てる)
세우다	心理	결기를 세우다 (かっとなる)
세우다	使役	일곱 사람을 나란히 세우다 (7人を一列に立たせる)
소개받다	受身	사람을 소개받다 (人を紹介してもらう)
숙이다	身体	고개를 숙이다 (頭を垂れる)
쉬다	生理	한숨을 쉬다 (ため息をつく)
시작하다	処理	얘기를 시작하다 (話を始める)
시키다	操作	인터폰으로 맥주 두 병을 시키다 (インタフォンでビール2本 を頼む)
시키다	使役	각 부부별로 노래를 시키다 (各夫婦別に歌をやらせる)
시키다	使役	결혼을 시키다 (結婚をさせる)
신청하다	提示	데이트를 신청하다 (デートを申し込む)
싣다	付与	고속버스에 몸을 싣다 (高速バスに身を載せる)
싫어하다	精神	여자를 싫어하다 (女を嫌う)
싸다	加工	책을 싸다 (本を包む)
쓰다	生産	대본을／사표를 쓰다 (台本を／辞表を書く)

쓰다	着用	머리에 모자를 쓰다 (頭に帽子をかぶる)
쓰다	提示	신경을 쓰다 (氣を使う)
쓰다	提示	인상을 쓰다 (顔をしかめる)
쓰다	提示	아무에게나 반말을 쓰다 (誰にでもぞんざいなことばを使う)
씻다	加工	눈언저리를 씻다 (眼のあたりを洗う)
아끼다	精神	아내를 아끼다 (妻を大事にする)
안다	行為	신부를 안다 (新婦を抱く)
안심시키다	束縛	아버지를 안심시키다 (父を安心させる)
앉히다	束縛	아기를 그네에 앉히다 (子供をブランコに乗せる)
앉히다	使役	학생들을 자리에 앉히다 (学生たちを席につかせる)
알다	精神	사실을 알다 (事実を知る)
알리다	提示	귀가를 알리다 (帰宅を知らせる)
알리다	提示	여자한테 그것을 알리다 (女にそれを知らせる)
알아듣다	知覚	말을 알아듣다 (ことばを聞き取る)
알아보다	精神	나를 알아보다 (私をそれとわかる)
앞두다	經驗	시험을 앞두다 (試験をひかえる)
앞서다	比較	동식을 서너 걸음 앞서다 (トンシクに数歩先んじている)
애태우다	束縛	신랑을 애태우다 (新郎に氣をもませる)
약속하다	提示	원조를 약속하다 (援助を約束する)
얘기하다	提示	프론트에 사정을 얘기하다 (フロントに事情を話す)
어기다	処理	약속을 어기다 (約束を違える)
얻다	享受	물을 얻다 (水をもらう)
얻다	受容	안정을 얻다 (安定を得る)
얼버무리다	變成	대답을 얼버무리다 (答をはぐらかす)
여기다	認定	가정을 남남이라 여기다 (家庭を他人同士と思う)
여기다	認定	고모를 못마땅하게 여기다 (叔母を不満に思う)
열다	操作	문을 열다 (ドアを開ける)
열다	身体	입을 열다 (口を開く)
예감하다	心理	실패를 예감하다 (失敗を予感する)
오다	外出	서울로 신혼여행을 오다 (ソウルに新婚旅行に来る)
오르다	往来	계단을 오르다 (階段を上る)
올라가다	往来	계단을 올라가다 (階段を上がる)
외면하다	対人	여자를 외면하다 (女を相手にしない)
외치다	提示	동지들께 화이팅을 외치다 (同志たちにファイトのかけ声をかける)
욕하다	処遇	속으로 어머니를 욕하다 (心の中で母を罵る)
울다	經驗	한참을 울다 (しばらくの間泣く)
울리다	束縛	신부를 울리다 (新婦を泣かせる)
원망하다	精神	아버지를 원망하다 (父を恨む)
위협하다	処遇	사람들을 위협하다 (人々を脅す)
의심하다	精神	하나꼬를 의심하다 (花子を疑う)
이기다	心理	마음을 이기다 (心に打ち勝つ)
이루다	処理	인생을 아름답게 이루다 (人生を美しく成就する)
이해하다	精神	사건을／할아버지를 이해하다 (事件を／おじいさんを理解する)
인정하다	提示	잘못을 인정하다 (過ちを認める)
일으키다	身体	몸을 일으키다 (身を起こす)

일으키다	処理	쿠데타를 일으키다 (クーデターを起こす)
잃다	喪失	신발을 잃다 (靴をなくす)
잃다	心理	의욕을 잃다 (意欲を失う)
입다	着用	옷을 입다 (服を着る)
입다	着用	갑옷을 입다 (鎧をまとう)
입다	受容	상처를 입다 (傷を受ける)
입히다	強制	옷을 입히다 (服を着せる)
잊다	処理	말을／뒤를 잊다 (ことばを／あとをつぐ)
잊다	心理	기억을 잊다 (記憶を失う)
잊다	喪失	나를／첫사랑을 잊다 (私を／初恋を忘れる)
자다	生理	잠을 자다 (眠る)
자랑하다	提示	업적을 자랑하다 (業績を自慢する)
잡다	身体	손으로 손을 잡다 (手で手を握る)
잡다	対身	손을 잡다 (手を握る)
잡다	操作	책가방을 잡다 (鞆を掴む)
잡아매다	着用	넥타이를 잡아매다 (ネクタイを締める)
재촉하다	対人	그이를 재촉하다 (彼を催促する)
적시다	身体	눈시울을 적시다 (目頭を熱くする)
전가하다	従事	책임을 무엇에 전가하다 (責任を何かに転嫁する)
전하다	授与	소식을 전하다 (消息を伝える)
접다	加工	텐트를 접다 (テントを畳む)
젓다	身体	고개를 젓다 (首を振る)
정하다	轉換	목적지를 부산으로 정하다 (目的地を釜山に決める)
조달하다	享受	아르바이트로 용돈을 조달하다 (アルバイトで小遣いを調達する)
조르다	提示	결혼을 조르다 (結婚をせがむ)
조아리다	身体	머리를 조아리다 (頭を下げる)
졸업하다	処理	대학을 졸업하다 (大学を卒業する)
좋아하다	精神	송편을 좋아하다 (餅を好む) · 남편을 좋아하다 (夫が好きだ)
주고받다	共同	이야기를 주고받다 (話をやりとりする)
주다	授与	내게 사랑을 주다 (私に愛を与える)
주다	授与	운전수에게 돈 천원을 주다 (運転手に千ウオンをあげる)
죽이다	対人	나를 죽이다 (私を殺す)
죽이다	生理	숨을 죽이다 (息を殺す)
줄이다	加減	미장원을 한번 줄이다 (美容院<に行くの>を1度減らす)
취다	操作	칼을 취다 (刀をとる)
지나다	往来	소나무밭을 지나다 (松林を通り過ぎる)
지내다	經驗	오년간을 사이 좋게／밤을 지내다 (5年間を仲良く／夜を過ごす)
지다	付与	등짐을 지다 (荷物を背負う)
지르다	生理	소리를／고함을 지르다 (悲鳴を／叫び声を上げる)
지르다	生産	불을 지르다 (放火する)
지리다	生理	용변을 지리다 (便を洩らす)
지새우다	經驗	밤을 지새우다 (夜を明かす)
지적하다	提示	타락을 지적하다 (墮落を指摘する)
지켜보다	知覚	뒷모습을 지켜보다 (後ろ姿を見守る)

지키다	処遇	마을을 지키다 (村を守る)
지키다	処理	약속을 지키다 (約束を守る)
짓다	表情	미소를 / 표정을 짓다 (微笑を / 表情を作る)
짓다	処理	농사를 짓다 (農業をする)
짓밟히다	受身	모자를 짓밟히다 (帽子を踏まれる)
짜다	生産	기름을 짜다 (油を搾る)
짜다	処理	전략을 짜다 (戰略を組む)
쫓다	対人	상인들을 쫓다 (商人たちを追う)
찌르다	対身	옆구리를 찌르다 (脇を突く)
찍다	付与	도장을 찍다 (判を押す)
찍다	生産	사진을 찍다 (写真を撮る)
찢다	加工	탁상일기를 찢다 (卓上日記を破る)
찡다	操作	펌프를 찡다 (ポンプを打ちおろす)
차다	操作	공을 차다 (ボールを蹴る)
차리다	心理	정신을 / 기운을 차리다 (氣をしっかり持つ)
차지하다	所有	안방을 차지하다 (居間に陣取る)
참다	心理	인사하고 싶은 마음을 참다 (挨拶したい気持ちをこらえる)
찾아가다	対人	강과장을 찾아가다 (姜課長を訪ねる)
찾아나서다	対人	식구들을 찾아나서다 (家族を捜しに出る)
찾아내다	対人	친구를 찾아내다 (友人を捜し当てる)
찾아오다	対人	나를 찾아오다 (私を訪ねて来る)
찾아오다	移動	우리집을 찾아오다 (うちを訪ねて来る)
채우다	身体	배를 채우다 (腹を満たす)
채우다	強制	수갑을 채우다 (手錠をはめる)
청하다	提示	주기를 청하다 (くれることを頼む)
쳐다보다	知覚	엄마를 쳐다보다 (お母さんを見つめる)
취하다	從事	연락을 취하다 (連絡を取る)
취하다	表情	포즈를 / 자세를 취하다 (ポーズを / 姿勢を取る)
치다	加減	나이에 십년을 더 치다 (歳に10年を更に上乘せする)
치다	養育	누에를 치다 (蚕を飼う)
치다	付与	설탕을 치다 (砂糖をかける)
치다	授与	전보를 치다 (電報を打つ)
치다	操作	철망을 치다 (金網を張り巡らす)
치르다	経験	첫날밤을 치르다 (初夜を過ごす)
치우다	加減	물건들을 치우다 (物をかたずける)
키우다	養育	육남매를 키우다 (6人兄妹を育てる)
타다	操作	고깃배를 / 그네를 타다 (漁船に / ブランコに乗る)
타다	操作	버스를 타다 (バスに乗る)
타다	享受	월급을 타다 (月給を貰う)
타다	生産	커피를 타다 (コーヒーを入れる)
탓하다	処遇	사람들을 탓하다 (人のせいにする)
태우다	飲食	담배를 태우다 (煙草を吸う)
택하다	精神	주제를 택하다 (主題を選ぶ)
터뜨리다	生理	실소를 터뜨리다 (失笑をもらす)
터뜨리다	生理	울음을 터뜨리다 (泣き出す)
털다	操作	주머니를 털다 (財布をはたく)

털어내다	奪取	모자에서 흙을 털어내다 (帽子から土をはらう)
털어놓다	提示	비밀을 털어놓다 (秘密を打ち明ける)
틀어막다	對身	입을 틀어막다 (口を封じる)
파다	加工	흙을 파다 (土を掘る)
파하다	処理	학교를 파하다 (学校がひける)
팔다	授与	물건을 팔다 (品物を売る)
퍼붓다	提示	키스를 퍼붓다 (キスを浴びせる)
퍼다	操作	통장을 퍼다 (通帳を開く)
평가하다	精神	됨됨이를 평가하다 (人となりを評価する)
포기하다	心理	생각을／꿈을 포기하다 (考えを／夢を諦める)
폭발시키다	表情	감정을 폭발시키다 (感情を爆発させる)
풀다	操作	넥타이를 풀다 (ネクタイを解く)
풀다	処理	울분을 풀다 (鬱憤を晴らす)
풀다	身体	코를 풀다 (はなをかむ)
품다	心理	증오를／양심을 품다 (憎惡を／恨みを抱く)
퐁기다	生理	냄새를 퐁기다 (匂いを発する)
피우다	飲食	담배를 피우다 (煙草を吸う)
하다	心理	고민을 하다 (悩む)
하다	心理	궁리를 하다 (思案する)
하다	心理	생각을 하다 (考える)
하다	從事	파출소에 신고를 하다 (交番に届出をする)
하다	從事	대학에 진학을 하다 (大学に進学をする)
하다	共同	연애를 하다 (恋愛をする)
하다	使役	섬을 보게 하다 (島を見させる)
하다	使役	시부모를 긴장케 하다 (義理の父母を緊張させる)
합치다	共同	힘을 합치다 (力を合わせる)
향하다	轉換	발길을 형님 댁으로 향하다 (足を兄の家へと向ける)
헤매다	經驗	반나절을 헤매다 (半日さまよう)
헤치다	往来	밀림을 헤치다 (密林をかき分ける)
훔치다	奪取	돈을 훔치다 (お金を盗む)
휩쓸다	処遇	마을을 휩쓸다 (村を襲う)
흔들다	操作	손에 손에 태극기를 흔들다 (手に手に太極旗を振る)
흘리다	生理	눈물을 흘리다 (涙を流す)
힐난하다	処遇	민수를 힐난하다 (ミンスを難詰する)

用言結合分類一覽

		-를格体言の主要なありか (で示す)			
共起格		主体内	身体など	客体的人間	客体的事物 場・時
7 - 1					
向格	-에				付与動詞
他動詞	-에				従事動詞
	-에게				授与動詞
与格	-에게				提示動詞
他動詞	-에게				事物使役動詞
	-에게				強制動詞
	-에게 ; -더러				言語動詞
	(-로)				加工動詞
					生産動詞
					操作動詞
					処理動詞
					變成動詞
					加減動詞
	-에게不可	対身動詞	対人動詞		
	-에게不可		行為動詞		
非与格	-에게不可		処遇動詞		
他動詞	-에게不可		指令動詞		
	-에게不可		人間使役動詞		
	-에게不可		束縛動詞		
	-에게不可		比較動詞		
	-에게不可 ; -하고				共同動詞
	-에게不可		養育動詞		
離格					
他動詞	-에서				奪取動詞
	-로				轉換動詞
	-라고 ; 처럼等				認定動詞
7 - 2					
非与格	-에게不可				飲食動詞
他動詞	-에게不可				知覚動詞
	-에게不可				精神動詞
		生理動詞			

共起格		-를格体言の主要なありか (で示す)			
7 - 3	主体内	身体など	客体的人間	客体的事物	場・時
	心理動詞 表情動詞				
非与格 他動詞	-에게不可 -에게不可 -에게不可 -에게不可 -에게不可 -에게不可	着用動詞 脱衣動詞 身体動詞 喪失動詞 出沒動詞		所有動詞	
7 - 4	-에게 与格 動詞 -에게 ; (-에게서)		人間受身動詞	事物受身動詞 享受動詞 受容動詞	
7 - 5	-에게不可 非与格 他動詞 -에게不可 -에게不可 -에게不可		外出動詞	移動動詞 離脱動詞 往來動詞 經驗動詞	

【図】用言別の対格の体言範疇分布

用言		抽象	現象	営為	活動	性質	事柄	体言	文	不完	事物	数量	時間	場代	位	置	場所	団体	物質	具体	身体	人間	親族	人称	動物	計	資料中高頻度の動詞結合の型	
	全用例	585	87	14	485	14	91	57	32	79	44	49	46	4		38	183	18	73	449	233	243	105	112	3	3044		
놓다	置く	3			1															5	4			1		14	놓다	付与
던지다	投げる											2								12	1					15	던지다	付与・操作
두다	置く	6			2					1			1				1			1		1			1	14	두다	付与・経験
걸다	掛ける	3			4															2				1		10	걸다	付与・提示
주다	与える・くれる	9			4							3							1							17	주다	授与
보내다	送る	4										1	7							2		1	2			17	보내다	授与・指令・経験
내다	出す	20	5		1							1					1		1	5						34	내다	授与・生理・心理
하다	する	15	4	5	209		9	2	4	5	2	2				1	3	1	2	1	8	6	3	2		287	하다	従事・心理・使役・共同
시키다	させる	1			6		1					2											1			11	시키다	使役
벗기다	脱がせる											1								9						10	벗기다	強制
끝내다	終える	2			9		1													1						13	끝내다	処理
부르다	呼ぶ	2					7													1	1	1	3	4		19	부르다	処理・処遇
짓다	作る	2	1		1	1	1					2	1							3	1	2	2	3		20	짓다	処理・表情・生理
쓰다	書く	2								1										10						13	쓰다	生産
타다	乗る	2	2														1		1	26					1	33	타다	操作
들다	挙げる・持つ	5					2													15	3					25	들다	操作・身体
열다	開く	2																		9	3					15	열다	操作・身体
치다	打つ	5	2		3							1								2	3	1				20	치다	操作・授与
내리다	下す	8			3															2						13	내리다	操作・処理
풀다	解く	5	1		1															4	1					12	풀다	操作・処理・身体
쓰다	使う	11			1																					12	쓰다	操作・提示
잡다	握る	4			1							1								4	11	2	1			27	잡다	対身・操作・身体
만나다	会う	1										1								1		18	1	3		25	만나다	対人
따르다	従う		1																			4	1	3		11	따르다	対人
부리다	使う	11			2															1						15	부리다	対人・提示
꺼내다	取り出す		1		7															6						14	꺼내다	奪取
들다	聞く	5	8		11		3	1	1											1						30	들다	知覚
보다	見る	16	2		6		3	1	1	9	2		1			3	5			12	3	14	6	8		92	보다	知覚・処理・経験
마시다	飲む	1										1							16							18	마시다	飲食
믿다	信じる	3			1			2		1	1							3						3		14	믿다	精神
알다	知る・わかる	10			1		4	7	5	10												1		1		39	알다	精神
좋아하다	好む									2										1		5	2			10	좋아하다	精神
바라다	望む	1						13																		14	바라다	精神
기다리다	待つ				1			3					1							3		2	2	2		14	기다리다	精神
찾다	探す・訪ねる	3					2		1								6			3		2	1			18	찾다	精神・対人

用言	抽象	現象	営為	活動	性質	事柄	体言	文	不完	事物	数量	時間	場代	位	置	場所	団体	物質	具体	身体	人間	親族	人称	動物	計		資料中高頻度の動詞結合の型	
생각하다	考える	4				1			1			1	1		1				1		2	1	3		16	생각하다	精神・認定	
쳐다보다	見つめる	1							1										1		3	3	5		19	쳐다보다	知覚	
갖다	持つ	6		1																1	2				10	갖다	所有	
가지다	持つ	9				2						1			2				4	2					20	가지다	所有	
포기하다	諦める	5		3					1						1						2				12	포기하다	心理	
느끼다	感じる	6		2	1		2		4																15	느끼다	心理	
떠올리다	思い起こす			3				1											1		1	5			11	떠올리다	心理	
잊다	忘れる	1		3		4						1			2								1		12	잊다	心理・喪失	
뜨다	開ける	1																	12						13	뜨다	身体	
벗다	脱ぐ	2									1									9					12	벗다	脱衣	
잃다	失う	6		1											2				1			2			12	잃다	喪失・心理	
받다	受ける	11	1	19						1									7		1				40	받다	受身・受容・享受	
얻다	得る	3				1	1		1						1		1				2				10	얻다	享受・受容	
먹다	食う	8	1	6		1												4	1						21	먹다	受容・飲食・心理	
사다	買う	2		2							1				4			4	15						28	사다	享受・受容・授与	
가다	行く		4	1											6										11	가다	移動・外出	
떠나다	発つ		1												3	9									13	떠나다	離脱	
나가다	出て行く		1			2									20										23	나가다	離脱・外出	
위하다	ためだ			4	2				4	1		1					1			1	8	5	10		37	위하다	後置詞	
향하다	向かう	2											1		2	1			2	1	7	2	2		20	향하다	後置詞・転換	
	用言なし	1		1		1	1	3	6	2		1			2						1				19			

それぞれの用言内で占める割合

凡
例



10%未満
10%以上～20%未満
20%以上～30%未満
30%以上～50%未満
50%以上

1. 主格か絶対格か —— 序に替えて

次の文では孰れも意味上の動作主が文頭の位置を占めていて、これら文頭の要素を一纏めにして「主語」という名前で呼ぶことができそうに見える。

- 1) Sudah saya baca buku itu.
- 2) Saya sudah membaca buku itu.
- 3) Saya berbasikal ke sekolah.
- 4) Ia sudah lama tinggal di bandar.
- 5) Saya tidak terbaca huruf yang sekecil itu..

しかし乍ら、1) の様な他動詞の語根と人称代名詞が組み合わされた所謂人称形と呼ばれる動詞の形は次の様に主語代名詞が接語の形で動詞に付加されることが可能であるのに対して、他の種類の動詞に於いては、この様な形は許されない。

- 6) Sudah kubaca buku itu.

他の M E - 形の動詞、B E R - 自動詞、語根動詞、T E R - 動詞は次の例が示すように、孰れもこの様な形を取ることができないという相違点がある。

- 6)* Sudah kumembaca buku itu.
- 7)* Kuberbasikal ke sekolah.
- 8)* Sudah lama ditinggalnya di bandar.
- 9)* Tidak kuterbaca huruf yang sekecil itu.

又、1) と 2) は共に S + V + O というパターンで、'buku itu' は両構文で目的語となっているように見える。しかし乍ら、M E - 形の動詞の場合には、目的格の代名詞を接語の形で動詞に接続させることが可能であるのに対して、所謂人称形の場合にはこの様な形を取ることができないという相違点が見られる。次の例を参照されたい。

- 10) Saya sudah membacanya.
- 11)* Sudah kubacanya,

目的格の接語代名詞としては、上の例に出てきた三人称の - N Y A の他に、一人称の - K U、二人称の - M U があり、このうち - N Y A は人にも、物にも用いる。M E - 動詞は、先に見た例と同様に、これらの目的格の接語代名詞を取ることが可能であるが、人称形の動詞の場合には、先の例の場合と同じく、それができない。次の例を参照されたい。

- 12) Rupanya dia mahu membunuhku/membunuhmu.
- 13)* Rupanya mahu dibunuh(-nya)ku/dibunuh(-nya)mu.

14)* Akan saya bunuhmu.

人称形の場合には、目的格の人称代名詞としては、次のように、接語形ではない形を用いなければならない。

15) Akan saya bunuh kamu.

16) Mahu dibunuhnya aku.

以上のことから、接語代名詞との結合可能性という面から見た場合、人称形では現れる主格接語代名詞が他の種類の動詞には現れないという点で人称形の主格代名詞の形は他の種類の動詞とは異なっていると言える。又、人称形の動詞は目的格の接語代名詞と結合することができず、接語形でない形を使わなければならないということを見てきた。非接語形を使うという点では、他の自動詞構文の主格との共通性を示している。このことから、人称形の構文は能格構文である可能性があると言える。これまで、ME-形の動詞が現れる構文は能動文で、その受動版が人称形であるという考えが支配的であった。確かにME-動詞と人称形の間の表面的な形の相違だけに注目すれば、前者が能動構文で後者が受動構文である様に見える。例えば、次の二つの文の表面上の形態の相違だけに着目すれば、この両文が態の変換という変形操作によって連関しているという考えも成り立ちそうである。

17) Dia membunuh Ah Meng.

18) Ah Meng dibunuh oleh dia.

しかし乍ら、もし18)の様な人称形が17)の様なME-形の受動版であると考えたと、英語等の受動構文とはかなり異なる性格を持った受動構文であることになる。例えば、英語では、次の様に被動者が受動形動詞の後の位置に留まる形は許されないが、これはこの位置では被動者である'Mary'が格を付与されないので、「有形の名詞句はS構造で必ず格を付与されていなくてはならない」という制約に抵触する為である。

19)* Was killed Mary by her fiance.

それに対して、マレーシア語の人称形動詞構文には次の様な形が現れる。

20) Dibunuhnya Ah Meng.

もし、目的格の格吸収が受動態の要件の一つであると考えた定義に従えば、この様なマレーシア語の例はそれから外れるものである。目的格の吸収は起こっているが、この位置で主格を与える何らかの方策を考えることもできる。例えば、英語の'arise'という自動詞は次の如く動詞の後の位置に主語が現れる形が可能である。

21) There arose a terrible storm.

22) There came a man.

これらの構文に於いては、動詞の後の名詞句は定名詞であってはならないという制約があると考えられている。この制約は「定性効果」(Definiteness Effect)と呼ばれるものである。Kenneth J. Safir (1985)によれば、このような「定性効果」の存在は、動詞の後の名詞句が冗語的代名詞の占めている文頭の主語の位置と θ 連鎖を構成し、そしてこの主語の位置から主格を譲渡されていることを示しているという。動詞の後の名詞句が、主語の位置を占めている冗語的代名詞と同一の指標を与えられるとすると、R表現は自由でなくてはならないとする「束縛条件のC」に抵触することになるが、この名詞句が不定名詞の場合にはこの「束縛条件のC」の制約を逃れることができるとしている。つまり、Safir (1985)によれば、「束縛条件のC」に対する次の様な不定名詞句の免責条項があるとしている。

23) The Indefinite NP Property

Indefinite NP's escape Principle (C) at S-structure.

Luigi Burzio (1986) はこれらの構文では動詞の取る唯一つの項は深層でも動詞の後の位置を占めていてこの位置で主格の譲渡を受けると考えている。そしてBurzio (1986) はこの様な特徴を有する動詞を能格動詞と呼んでいる。以上見てきたSafir (1985) やBurzio (1986) の考えを基にして、上記(20)のマレーシア語の文に於ける動詞句の後の名詞句が如何にして格を付与されるかを考えてみよう。仮に、(20)の様な文に於ける動詞の後の名詞句が空である主語の位置から主格を付与されると考えると、‘Ah Meng’ という定名詞句が先述の「定性効果」の制約を破っていることになる。又、人称形で現れる動詞は他動詞であり、Burzioが「能格動詞」と呼んでいる動詞が自動詞であるのとは違いがある。更に又、意味上の動作主は主語の接語代名詞によって現れることが可能であるところから考えても、主格はこの主語接辞が吸収していると考えられるから、仮に、動詞句の後の名詞句が何らかの方策により、格を得るとしても、それは主格以外の格である可能性が高いと言える。又、別の可能性として、受動構文の文頭の主語の位置にあったものが倒置により動詞の後の位置に移動したと考えることもできるが、そうなると、この移動は θ 位置から θ 位置への移動ということになり通常の θ 位置から θ 位置へという移動の経路に反するのでこの派生の方法は望ましくないと言える。もし、動詞の後の名詞句がこの位置で格を得ることができ、しかもその格はこれまでの考察からして、主格以外の格である可能性が高いということになると、残る可能性は絶対格をこの位置で付与されると考えるのが最も妥当であろう。能格は通常Vによって与えられるから、この動詞の

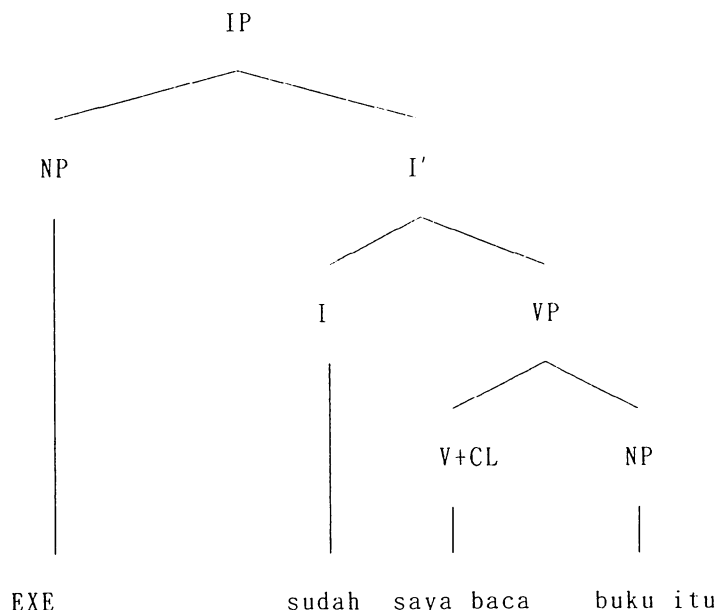
位置でVによって絶対格を与えられることになる。そうすると、次の様な形は、動詞の後の位置で格とθ役を得た名詞句が動詞の前の位置に移動したと考えてよいであろうか。

24) Ah Meng dibunuhnya.

もし、人称形の動詞の前の位置が $\bar{\theta}$ 位置であるとすれば、この様な移動は θ 位置から $\bar{\theta}$ 位置へという通常の移動の経路にに従っているのでこの点に関しては問題が生じない。それでは格付与の面からの衝突は起こらないであろうか。動詞に付加される人称接辞がINFLによって付与される能格を吸収したと考えれば、動詞の文頭の位置に他の要素が移動したとしても、格付与する能力はもうないから、格の衝突という問題も回避される。しかし、この解決法は色々な意味で問題が生じる派生方法である。仮に、24)の様な構文がNP移動変形によって動詞の後ろの位置にあった‘Ah Meng’が文頭の位置に移動したと考えたと、「基底構造の格付与されない位置から格付与される位置へ」という通常のNP移動のパターンから外れる経路による移動ということになり、望ましくない派生の方法と言える。この派生の方法は又、後で述べる「例外的格表示」を受ける構文の派生の面からも、望ましい方法とは言えない。そうすると、‘Ah Meng’はこの位置で格、即ち、絶対格を得ていると考えなくてはならない。次の25)の様に動詞の前の位置が有形名詞で埋まらなかった場合、正保勇(1988)で主張した様に冗語的無形の代名詞(EXE)が表層で充填されると考えれば、25)の構造は26)に示す様になると考えられる。

25) = 1) Sudah saya baca buku itu.

26)



マレーシア語には、上に述べた人称形の動詞と同じように、一部の自動詞にその唯一の項が動詞を中心としての前後に自由に位置を選ぶという現象が見られる。その様な特徴を持つ自動詞は、1) 主として出現、消失、生起、存在、往来、発着、運動を表す自動詞、2) T E R - 動詞の一部、3) K E - A N 動詞の一部である。次にその様な例を挙げる。

27)-1. Di belakang rumahnya terdapat juga pokok buah-buahan.

(kamus Pelajar B.M., P.137)

-2. Ramah-ramah itu tidak terdapat di Jepun.

28)-1. Banyak panglimanya mati terkerat kepala mereka.

(Kamus Dewan, P.600)

-2. Percakapan mereka terkerat oleh keriuhan di luar.

(Kamus Dewan, P.600)

29)-1. Oleh kerana tempat itu aman dan tenteram ,maka labah-labah itu terus tinggal di ladang itu (Kisah Permaisuri Laut ,P.19)

-2. Di pinggir sebuah hutan tinggal dua orang peladang.

(Kisah Permaisuri Laut ,P.17)

30)-1. Ia jatuh tangga ,terpelecek kaki kirinya.

-2. Kaki kirinya terpelecek.

31)-1. Wangnya hilang di tengah jalan. (Kamus Pelajar B.M., P.247)

-2. Ada yang mengadukan dia hilang barang-barang kemasnya.

(Hantu Raya ,P.22)

32)-1. Saya nampak seekor harimau.

(An Illustrated M-E Dictionary, P.322)

-2. Rumahnya tidak nampak dari sini.

(Kamus Dewan, P.855)

33)-1. Setelah lama tidak kedengaran suara-suara siapa lagi,akhirnya Izan bersuara. (Rahsia Sebuah Air Terjun, P.2)

-2. Ucapannya tidak kedengaran oleh orang di belakang.

(Write Malay, P.187)

34)-1. Keretanya kehabisan minyak dalam perjalanan.

(kamus Pelajar Lengkap, P.141)

-2. Lekas, 'intan kami' akan kehabisan. (Utusan Malaysia ,15/6/1990)

35)-1. Bayang Gunalan pun tidak kelihatan di seberang jalan raya itu.

(Impian Di Pinggir Kubur, P.9)

-2. Kelihatan di kiri Yang Dipertua Negeri Melaka ,Tun Syed Ahmad Shahbuddin. (Utusan Malaysia, 13/7/1990)

これらの構文に於いては、動詞の後に置かれた名詞句は不定名詞が、そして動詞の前に置かれた名詞句は定名詞が多いという傾向は認められるが、動詞の後の名詞句に定名詞が現れない訳ではないので、人称形の動詞の場合と同様、動詞の後ろに現れる名詞句が動詞の前の位置から格を譲渡されているとは考え難い。従って、これらの構文で、唯一の項である名詞句が動詞の後に置かれる時には、これらの名詞句はこの位置でVから格を付与されると考えられる。動詞の前後に名詞句が自由に移動するという点で、これらの構文は人称形の動詞との共通点が見られる。又、これら両構文とも次の様に、主題－題述文の題述部の一部を構成するという点でも共通性が見られる。

36) Rumah itu baru dibina rangkanya. (Kamus Ayat, P. 463)

37) Keretanya terus dilambatkan perjalanannya. (Hantu Punjut, P. 24)

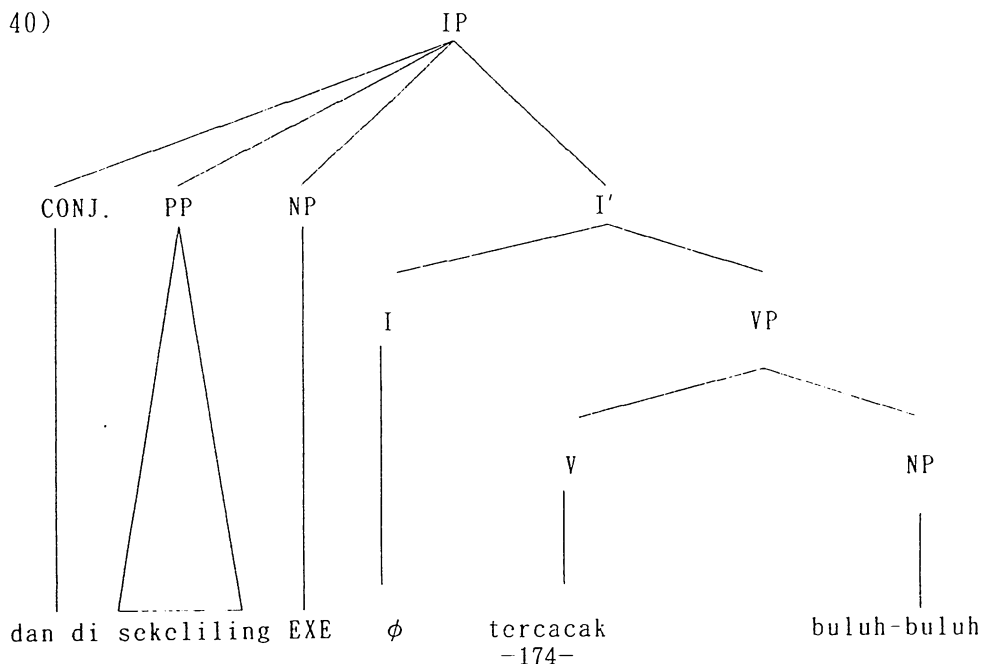
38) Keretapi itu terlewat perjalanannya. (Utusan Malaysia, 13/4/1990)

以上の様な両構文の間に見られる共通性から考えると、27)～35)の様な自動詞構文は、Burzio (1986)の言う能格構文であり、唯一の項である名詞句が付与される格は絶対格であると考えられる。そして、次の様に唯一の項である名詞句が動詞の後ろに置かれた場合、動詞の前の位置には、人称形の動詞の場合と同じく、冗語的無形の代名詞が充填されていると考えられる。

39) Dan di keliling rumah itu tercacak buluh-buluh runcing.

(Sungai Korok Wan Mat Saman, P. 26)

この文の構造を樹形図で示せば次の様になる。



これに対して、M E - 動詞の後にある名詞は動詞の前に置くことはできない。

41)* Buku dia sedang membaca.

又、補文子 untuk の中では M E - 動詞の意味上の動作主は現れることができないのに対して、人称形の動詞は意味上の動作主を表す代名詞と共に現れることが可能である。

42)* Dia membeli majalah Gila-Gila untuk dia menghadiahkan kepada anaknya.

43) Saya membeli majalah Gila-Gila untuk saya hadiahkan kepada Ahmad.

又、42) の場合と同様、次の文も untuk 補文の中に M E - 動詞の意味上の主語が現れている為に、非文法的となっている。

44)* Karangan ini sukar untuk saya memahami maksud tersembunyinya.

それに対して、次の様な文は認められる形である。

44) Karangan ini sukar untuk difahami maksud tersembunyinya.

45) Karangan ini sukar untuk maksud tersembunyinya difahami.

42) が非文法的であるのに対して 45) は認められる形であるところから、M E - 動詞の前の名詞句と 'difahami' の前の名詞句では付与される格が違うと考えられる。次の様な文が成り立たない所から考えて、untuk 補文子は非定形節であると言って差し支えないと思われる。

46)* Saya membeli patung ini untuk akan saya hadiahkan kepada Hamidah.

47)* Saya sedang belajar bahasa Perancis untuk boleh saya baca puisi pengarang ini.

そのような前提に立つと、非定形節で付与されない格は主格であるから、M E - 動詞の前の位置を占める名詞句は、定形節では主格を付与される名詞句であると言える。それに対して、能格は V によって付与されるから、45) の場合にも V の持っている能格格付与能力が I N F L を通して動詞の前の名詞句に作用したと考えられる。従って、この場合、I N F L は V の持っている格付与能力が動詞の前の名詞句に作用すべくその中継ぎの役を果たしているにすぎない。この点が、I N F L によって直接付与される主格の格付与のメカニズムとは異なっている。従って、45) の様な場合には、untuk 補文の I N F L は、主格付与能力は欠けていても、V による能格格付与能力の中継ぎをする機能は備えている為、動詞の前の名詞句には能格が付与されることが可能になると考えられる。

2. 移動変形と格

2.1. w h 疑問文と格

Ramli Haji Saleh (1992) に拠れば, percaya, fikir 等の架橋動詞は次の例に観られる如く, 補文内からの w h 句の取り出しを許す。これは, 境界接点である $\overline{S}$ を越境する移動であるから, 本来なれば許されない移動であるが, この種の動詞に於いては英語の場合と同様, $\overline{S} - to - S$ 規則が働いて, $\overline{S}$ が削除される為, 補文からの移動が許されると考えられる。

48)Siapakah awak percaya bahawa aminah tidak suka ?

又, 次の様な文が認められない形である所から, マレーシア語の場合にも英語の場合と同様, 複合名詞句制約, 及び w h - 島の制約に従うと Ramli Haji Saleh (1992) では主張されている。

49)* Siapakah tidak awak terangkan dakwaan bahawa dia pukul ?

50)* Apakah tidak awak percaya khabar angin bahawa Aminah beli ?

51)* Kepada siapakah awak agak apa saya beri ?

52)* Apakah mungkin dia bertanya di mana saya sorok ?

これも又, 英語の場合と同様, w h 句に束縛される要素が有形の代名詞であってはならず, その位置は空所となっていなければならない。従って, 例えば次の様な文は許されない。

53)* Siapakah Ali nampak dia ?

以上のことから, w h 句が文頭に立つマレーシア語の w h 疑問文も, 英語の場合と同様, w h 句の移動が関わっていると考えられる。それでは, 例えば次の様な w h 疑問文に於いては文頭の w h 句は補文中のどの位置から移動したと考えればよいのであろうか。

54)Siapakah awak percaya bahawa saya bunuh ?

先に主張した如く, 補文内の文は能格構文であるから, 意味上の目的語は動詞の前後の位置を自由に選択するという特徴を備えている。従って, 移動した w h 句即ち 'siapa' が深層で占めていた位置は動詞の前の位置か, 或いは動詞の後の位置かの孰れかということになる。ここで, マレーシア語に於いては所謂 "that - trace effect" が働くかどうかを, 観てみる。Ramli Haji Saleh (1992) に拠れば, マレーシア語でも英語と同様, 定形節を導く補文子の直後に移動の痕跡即ち空所ができる様な派生はブロックされるという。例えば, 次の様な文は認められないという。

55)* Siapakah awak kata bahawa akan datang ?

それに対して, 次の様に動詞の後の目的語の位置から出たと考えられるものは文

法的な文である。

56)Siapakah awak kata bahawa Ali jumpa ?

w h 句の長距離取り出しの場合には、次の様に、主語名詞句が関係する場合には依然としてその非文法性に変わりは観られないが、目的語名詞句が関係する場合には、その認容度が下がるという。

57)? Siapakah telah John dakwa bahawa awak kata bahawa awak nampak ?

このような事実はあるものの、目的語の位置からの長距離取り出しは、非文法的となる主語の位置からの長距離取り出しとは一線を画していると考えられる。以上のことより、英語に於いて認められる補文内の主語と目的語との間の取り出し可能性に関する非対称性はマレーシア語にも認められると言える。

以上のことを総合して考えると、54)のw h 句は動詞の後から移動したと考えなくてはならない。この位置は動詞‘bunuh’によって語彙統率される位置なので、移動後この位置に残される痕跡は適正統率される。従って、この位置から移動が行われたと仮定しても、そのことによって生じる問題はない。

人称形の動詞からw h 句が移動する際には、動詞の後の位置からそれが行われるという前提に立つと、次の様な文の非文法性をどの様に説明したらよいかという問題が残る。

58) * Apa yang John mempercayai dakwaan bahawa dilihat Tom ?

この文の補文には、54)の文と同様、人称形の動詞が現れている。それにも拘らず、両者の間に文法性の相違が観られるのは何故であろうか。正保勇(1991)で主張したが、起源的には両者共能格構文であっても、動詞の左側の領域では受動構文的傾向が強まり、動詞の左側に意味上の目的語が現れる三人称の人称形の動詞は受動態化したと考えられる。つまり、受動態化した為、空所がそこにあると考えられている動詞の前の位置は能格ではなく、主格が付与される位置となったと考えられる。そのため、補文子bahawaの直後に主語の空所が生じ、結果として‘that-trace effect’に抵触することになった。

2.2. 主題化構文と格

次の様な主題化構文が認められない所から考えると、目的語の位置からゼロ演算子が移動すると非文となると言える。

59)* Buku itu ,sudah saya membaca.

しかし乍ら、次の様に目的語の位置に再述代名詞が現れる形は文法的である。

60)Buku itu ,sudah saya membacanya.

このことから、他動詞の目的語の位置から主題と関連するゼロ演算子が移動する

ことはできないと言える。

それでは、次の様な文が文法的であるのは如何に説明をしたらよいのであろうか。

61)Perkara itu sudah saya tahu.

62)Kain bercorak itu saya tidak mahu.

63)Makna perkataan ini saya tidak faham.

64)Dia itu saya belum kenal.

65)Warna batik ini dia tidak suka.

66)Hal ini tentulah tuan sedia maklum.

これらの動詞は、M E - 形 of 他動詞とは異なり目的格の接語代名詞を取ることができないところから観て、自動詞であると考えられる。次の文は孰れも非文である。

67)* Saya tahunya.

68)* Saya tidak mahunya.

69)* Saya tidak fahamnya.

70)* Saya belum kenalnya.

71)* Saya tidak sukanya.

72)* Tuan maklumnya.

又、これらの動詞は次の様に、akanを動詞の後に取ることができるという事実も、この動詞が他動詞ではないことを示している。

73)Saya sudah tahu akan perkara itu.

74)Saya tidak mahu akan corak kain ini.

75)Saya tidak faham akan makna perkataan ini.

76)Saya belum kenal akan dia itu.

77)Saya tidak suka akan warna batik ini.

78)Tentulah tuan sedia maklum akan hal ini.

以上のことから、語根の形で使われる自動詞、即ち如何なる接辞も取らないで使われる自動詞で、斜格を表す前置詞のakanを省略できるような類いのものは、斜格のゼロ演算子をトピックの位置に移動させることが可能であると言える。

それに対して、turun,masuk,naikの様な動詞はakanを挿入することができないので、先に述べた動詞とは異なり、動詞の後の位置からゼロ演算子が移動することはできない。つまり、次に観られる様に、動詞の後の名詞が主題となった文は派生されないことになる。

79)* Bas itu saya turun di Ipoh.

80)* Pejabat dia terlewat masuk .

81)* Pokok itu buruk naik .

それに対して、前置詞のdenganに先行される斜格のゼロ演算子は、次の例に観られる如く、トピックの位置への移動が不可能である。

82)* Lelaki itu ,saya pergi bersama ke Mekah.

83)* Jenis kapalterbang itu, ayah saya pergi ke Malaysia.

84)* Budak itu ,saya selalu bermain.

85)* Lelaki itu ,saya berkawan sejak kecil.

場所を表す前置詞のdiに導かれる斜格のゼロ演算子は、次の様に、トピックの位置への移動が可能である。

86)Menurut penyata ini sekolah-sekolah rendah akan digunakan bahasa pengantarnya kedua-dua bahasa ,Melayu dan Inggeris ,tetapi kebanyakan mata-pelajaran dengan Bahasa Melayu.

(Pengajaran Bahasa, P. 44)

87)Kawasan itu akan dibangunkan sekolah.

88)Pulau kukup itu kerap berlaku kegiatan rompakan.

89)Tempat itu dibina rumah nombor 66.

次に、能格構文の左にある要素がトピックになることがあるのかどうかという問題に就いて考えてみることにする。言い換えれば、能格構文の深層で動詞の後の位置に生成されたゼロ演算子がCOMPを経由してトピックに一番近いCOMPまで移動するというプロセスを経て派生される主題－題述構文が存在するかどうかという問題に就いて考えてみる。

次の例では、人称形動詞の前後に名詞句が現れており、動詞の後ろの名詞句に-NYAが現れていて、この-NYAは動詞の前の名詞に束縛される変項としての再述代名詞と考えられるので、これらの構文は主題－題述構文であると考えられる。

90)Rumah itu baru dibina rangkanya. (Kamus Ayat, P. 463)

91)Kretanya terus dilambatkan perjalanannya. (Hantu Punjut, P. 24)

人称形動詞の所で触れたが、人称形動詞の被動者は動詞の前後の位置を自由に占めるが、深層ではその二つの出現可能な位置のどちらか一方に収まっていて、その両方の位置が埋められているとは考えられない。この動詞が先に主張した様に、Vによって唯一つの項に能格が付与される動詞であるとすれば、能格の付与は一度限りであるから、もし仮に深層で動詞の後の位置を占めている唯一の項である名詞句に能格が一度付与されれば、動詞の前の位置にはINFLを仲立ちにして

の能格の再度の付与ということはある得ないから、動詞の前の位置を別の名詞句が占めているようなことがあれば、この名詞句には如何なる格も与えられないことになり、「有形名詞句は表層で格を有していなければならない」とする格理論の制約に抵触し非文として排除されることになる。次の例も、人称形の動詞の両側に名詞句が現れているが、この構文も主題－題述文であり、動詞の前に位置している名詞句は、場所を表す前置詞のdiの後にあるゼロ演算子の痕跡を束縛していると考えられる。

92)“Tapi, dua resit ini ada dituliskan nombor pendaftaran kenderaan BBP 448 dan dan MT 747,” sela Yap Seng Hai. (Lelaki Misteri, P. 35)

次の構文は能格動詞が現れている構文であるが、この場合にも、二つの名詞句中、動詞の前の名詞句は主題となっている。

93)Emak dan ayah kamu tak nampak bayangan mereka.

(Rahsia Sebuah Dusun, PP. 5 - 6)

94)Album terbaru mereka ,Rampage turut terjejas jualannya walaupun ia berjaya mencatat kira-kira 160,000 unit tanpa promosi.

(Berita Harian, 15/10/1992)

95)Noor juga baru habis penggambaran filem terbarunya “Penghujung Malam.” (Panca /Mingguan Malaysia, 9/2/1992)

又、次の様に、人称形の動詞の被動者が左にあって、しかもその被動者に-punが付いている時には、この被動者は主題となっていて、動詞の直後にあるゼロ演算子の移動後の痕跡を束縛していると考えられる。Paul J. Hopper(1983)で述べられている様に、人称形動詞で始まる構文は能格構文であり、被動者で始まる構文は受動構文であるという。しかし、これには、但し書きがあって、被動者が動詞の左側にあって、被動者に-punが付いている場合や、被動者と人称形動詞との間にsemuanyaという語句が介在している様な時には、例外的に能格構文と見做すと述べている。

96)Maka Seri Dewa Raja menyeru anaknya katanya, ‘Umar, Umar, naik kuda itu .’ Maka kuda itu pun dinaiki oleh Tun Umar.

(Sejarah Melayu, P.149)

この-punが主題と関係があることは、次の様な例を観れば、明かとなる。

98)Maka pandai emas itu pun pergilah ia pada tempat itu lalu diambil-nyalah ditanamkan kepada tempat yang lain pula.

(Hikayat Bayan Budiman, P.34)

これらの両例に於いては、主題が下線の再述代名詞を束縛している。この例を参考にして考えると、96)も主題文であり、動詞の後の位置に残されたゼロ演算子の痕跡を束縛していると考えられる。96)は題述文であるが、主題の右側だけを独立させれば、人称形動詞の能格構文である。従って、動詞の左に位置している名詞句は、本来その位置を占めるべき名詞句ではない、即ち、動詞の左側の領域と直接関連する名詞句ではないと言える。この名詞句は動詞の左側に位置してはいるが、それは主題化によるものであって、本来の位置は動詞の右側の位置であることをPUNが示しているのである。この構文に於ける動詞の左側の名詞句、即ち、主題は次の例に於ける下線部内の名詞句が本来の資格で動詞の左側の位置を占めているのとは対照的である。

99)Secebis kain buruk disumbatnya ke dalam mulut lelaki tua itu.

(Impian Di Pinggir Kubur, P.25)

100)Lelaki tua itu ditinggalkannya di tepi semak itu.

(Impian Di Pinggir Kubur, P.25)

101)Ketika tombol pintu kupulas, Ku Izham menghabiskan lafaz doanya

yang terakhir kukira. Tangannya diraupkan ke wajah bujurnya, lalu

bangun menyangkutkan tikar ke kerusi. (Dewan Siswa, Ogos 1990, P.33)

99)と100)が同じ構造だとすれば、これらの名詞句が占めている位置は主題とは考えられない。それは、99)に於ける'secebis kain buruk'は旧情報となっていないことによって知られる。そうすると、これらが占めることができる唯一の場所は動詞の直前の位置と考えられる。つまり、これらは全て、能格構文であり動詞の前の名詞句はこの位置で能格を得ていると考えられる。これら全ての文は、背景化の機能、即ち物語や事件の背景的説明を担っている部分に現れている文であり、しかも全部の文を通じて、被動者が動詞の前に現れている。先程触れた96)の様な例を除けば、背景化の機能を担う文では、殆どの場合被動者が動詞の前に出るという特徴を有している。しかし乍ら、Paul J. Hopper(1983)が主張している様に、前景化と受動構文（即ち被動者が動詞の前に出る構文の）間、背景化と能格構文（即ち被動者が動詞の後に出る構文）の間に一対一の対応があると考えざるを得ない理由はないし、受動構文か能格構文かという問題はあくまでも統語上の問題に属するのであるから、両者の間にかなり高い率の相関関係が認められるのは事実であっても、両者は別個に考えるべきものであろう。前景化と背

化と背景化に深く関わってくるのは、被動者の位置のみであって、その区別が同時に構文の違いに通じると考える必要はないと思われる。従って、構文的には、同じ能格構文でありながら、被動者の位置によって、一方は前景化の機能を担い、もう一方は背景化の機能を担うということがあっても、不都合は生じない。

2.3. 関係節化と格

関係節化構文は主題化構文とかなりの共通点が見られる。次の主題文の題述部には主題に束縛される再述代名詞が現れている。

102) Botol ini, mulutnya sedikit serpih.

この様な再述代名詞は次の文中の関係節にも現われている。

103) "Alah sikit saja, tauke," kata Azrul apabila Tauke Lee menunjukkan botol yang mulutnya sedikit serpih. (Sahabat Razi, P. 19)

又、次の主題文に於いては、再述代名詞は動詞の後に置かれた名詞句内に生じている。

104) Masjid tua Kuala Jemapoh ini telah dirasmikan pembukaannya oleh Tuanku Besar Baharudin pada tahun 1935.

(Variasari November 1990, P. 12)

これと同じ形は、次例に於ける関係節中にも現われている。

105) Dari jauh masjid ini kelihatan menyeramkan akibat terbiar beberapa lama yang melahirkan bermacam-macam cerita berunsur misteri yang diragui kebenarannya, terpulanglah pada anda.

(Variasari November 1990, P. 15)

103), 105) の関係節中の-NYAを削除すると非文となる所から観て、この様な-NYAのある位置からの移動は許されないと考えられる。

又、次の106) は非文なのに対して、107), 108) は許される形である所から考えて、ME- が付加された他動詞の目的語を関係節化によって移動させることはできないと思われる。

106)* Binatang-binatang lain yang gemar saya melihat [e] ialah gajah dan zirafah.

107) Binatang -binatang lain yang gemar saya melihatnya ialah gajah dan zirafah. (Contoh-contoh Karangan Dwibahasa, P. 24)

108) Membuat kain songket memerlukan ketabahan dan ketekunan yang tidak ramai orang memilikinya. (Kebudayaan Rakyat Di Malaysia, P. 14)

次の例では、主語として機能する動名詞句の目的語に再述代名詞が現われているが、この場合も主文中のME- 動詞と同様再述代名詞は削除できない。

109)Mayat ini yang mengangcutnya dulu bukannya aku.(Hantu Punjut,P.20)

マレーシア語には、以上の様なME- 動詞の目的語の位置に再述代名詞を残す関係節化とは別に、次の様に所謂人称形が現われる形がある。

110)Seorang wanita yang saya temui di pinggir jalan di situ sedang menjual kelelawar. (Utusan Malaysia ,21/10/1991)

111)Katanya,tok-tok mudin perlu mengetahui garis-garis panduan yang dikeluarkan itu sebagai langkah berjaga-jaga dari mengelakkan penyakit berjangkit itu. (Utusan Malaysia ,21/10/1991)

再述代名詞がその位置からの移動が不可能であることを表しているとすれば、再述代名詞が現われていないこれらの形は、関係節化による移動が掛かったと考えられる。これらの文の派生にゼロ演算子のCOMPへの移動が関与しているとすれば、ゼロ演算子はどの位置から移動したのであろうか。「2.1. wh 疑問文と格」の所で述べた様に、wh 句の移動の際に所謂“that-trace effect”が働いていたことを考えると、関係節化によるゼロ演算子の移動も人称形動詞の後の位置からであると考えて差し支えないと思われる。逆に、もしゼロ演算子が動詞の前の位置から移動したと仮定すると、このゼロ演算子の痕跡は適正に統率されないことになる。今110)の文中の関係節を例に取ると、ゼロ演算子が動詞の前の位置から移動した後の状態は次の様である。

112) [_{NP} [_{NP} seorang wanita] [_{CP} [_C yang *Op_i*] [_{IP} *t_i* saya temui]]]

ここで*Op_i*は、*t*と同一の指標を有してはいるが、COMPの位置にはyang も入っているので、*Op_i*は*t*を構成素統御することができず、*Op_i*は*t*を束縛していないことになる。従って、*Op_i*は*t*を先行詞統御することができないので、ゼロ演算子の痕跡である*t*は適正に統率されないことになる。このことから、関係節化により移動するゼロ演算子は人称形動詞の後の位置から移動すると考えることができる。

関係節化の対象となるのは、名詞句に限られる訳ではなく、次の様に前置詞句もその対象となることがある。

113)Dia terus duduk di salah sebuah kerusi di meja makan yang sudah terhidang makanan tengahari. (Mencari Restu,P.3)

114)Sementara Rahmat dan Hisyam pagi-pagi sudah pergi ke kawasan yang akan dibangunkan sekolah. (Saga,P.56)

113)では‘di atas meja’が、114)では‘di kawasan’が関係節化の対象となっている。diによって導かれる前置詞句は次の様に主題化変形の対象にもなる。この点に関しても、関係節化と主題化との間に並行性が観られる。

115)Meja makan itu,sudah terhidang makanan tengahari.

116) Kawasan itu, akan dibangun sekolah.

もしこれらの主題構文の題述部の語順を入れ替えて、次の様になると、結果は非文となる。

117)* Meja makan itu, makanan tengahari sudah terhidang.

118)* Kawasan itu, sekolah akan dibangun.

同様に、113)と114)の関係節中の語順を入れ替えると、かなり容認度が低い語句となる。

119)? meja makan yang makanan tengahari sudah terhidang

120)? kawasan yang sekolah akan dibangun

又、手段を表す前置詞denganによって導かれる前置詞句は次の対になった例が示す様に、関係節化の対象にもならないし、主題化の対象にもならない。ここでも、関係節化と主題化との間に並行性が観られる。

121)* kapal terbang yang kakak saya berlepas ke Mekah

122)* Kapal terbang itu, kakak saya berlepas ke Mekah.

次の例では、随伴を表す前置詞denganが関係節化及び主題化の対象となっていると考えられるが、この場合には両構文の間に相違が観られる。即ち、denganが関係節化の対象となっている121)は許される形であるのに対して、122)の方は許容されない形である。

121) kawan yang saya bermain masa saya kecil

122)* Dia itu, saya bermain masa saya kecil.

次の例に於いては、'di atas batu'が関係節化と主題化の対象となっているが、この場合にも両構文の間に違いが観られる。

123) "Mungkin batu yang kamu duduk itu ialah tempat menyeksa orang salah!"
(Tangisan Di Seberang Sempadan, P. 5)

124)* Batu itu, dia duduk tadi.

以上を総合して考えると、関係節化と主題化との間にはその対象となる名詞句及び前置詞句に関してかなりの共通性が観られるが、幾つかの前置詞句に関しては相違も観られた。

3. 例外的格付与動詞と格

次の二文は、孰れも動詞の後の名詞句が目的格で現われているが、persuadeとは異なり、believe は、"him to be a fool"という命題全体が信じている内容でありhim はbelieve の同位(sister)要素であるとは考えられない。それにも拘らず、believe の後の名詞句がpersuadeの場合と同様に目的格になっているのは何故であろうか。

125) I believe him to be a fool.

126) I persuaded [him] to be a fool.

もし、125)の構造が次の様であるとすれば、 $\bar{S}$ はその外側からの統率を阻止する性質があるので、believe が補文中の主語であるheに目的格を付与することは不可能である。

126) I believe [_S [_S him to be a fool]]

Chomsky(1981)では、これを説明するのに、 S' 削除 (S' -deletion)という方式を提案した。即ち、believe, expect, consider 等の動詞は、その補文の S' が削除されると考えた。 S' が削除されると、believe とhim との間にはSのみが介在することになるが、Sは統率の阻止範疇にはならないので、believe は補文主語を統率でき、従って又、補文主語に目的格を付与することができる。しかし、現在では、この様な例外的な格付与を説明するのに S' 削除という方式を採らず、これらの動詞は、最初からSを補文に取ると説明される。

次に、この様な例外的格表示構文がマレーシア語にもあるかどうかについて考えてみる。

127) に於ける補文の主語は代名詞としてmembolehkan に接尾辞の形で付加して128)の様にすることができる。

127) "Jadual waktu khas itu membolehkan calon terbabit menduduki peperiksaan bagi kedua-dua kertas yang bertembung waktu pada hari sama tetapi waktu berlainan,"katanya. (Berita Pelajar/Berita Harian, 19/10/1992)

128) Jadual waktu khas itu membolehkannya menduduki peperiksaan.

又、127)のmembolehkan の補文中の文の構造を変えて、意味上の目的語を焦点とする文に変え、文頭に出た意味上の目的語を先程と同様に、代名詞の形で接尾辞としてmembolehkan に付加した129)の様な形も可能である。

129) Jadual waktu khas itu membolehkannya diduduki oleh calon terbabit.そして、128)と129)の間には意味の違いが無い。

次の英語の例によっても分かる様に、命題を目的語に取る動詞は、命題を表す補文中の構造を変えても意味に変更をきたさないという特徴を持っている。次の両文は同じ意味である。

130) I believe him to have been killed by Mary.

131) I believe Mary to have killed him.

このことから、membolehkan は命題を目的語として取る動詞であると言える。そして、補文中の主語は一見主格を得ている様に見えるが、128)や129)の

形が可能である所から, membolehkan によって目的格を得ていると考えられる。このことは又, membolehkan が補文として S ではなく, S を取ることを意味している。

次の文に於ける mendesak も補文として S を取り, 補文の主語に目的格を付与する動詞であると考えられる。

132)) “...Tapi Francis Seow (setiausaha jawatankuasa pertandingan), menghalang perkara diselesaikan begitu sahaja dan mendesak laporan rasmi dibuat.” (B. H., 24/9/1992)

それは, 次の様な形が可能であるからである。

133) Francis Seow mendesaknya dibuat.

格の付与は一度に限られるから, membolehkan や mendesak の S 補文中では文頭の要素に格付与はなされないと言える。即ち, この S 補文は非定形節であると考えられる。

これに対して, 次の様な例に於ける membantu, meminta, memaksa, mengajak は, 形の上では, mendesak や membolehkan と同様に, S 補文を従えている様に見える。

134) Dan kini, saya habiskan masa untuk membantu ibu menoreh, mencari kayu api dan membersihkan paya unuk dijadikan sawah,” tulis Ramli mencurahkan rasa rindu hatinya. (Anak Warisan Zaman, P. 12)

135) Pemain kelab Toulouse mencatat sejarah bolasepak Perancis apabila memaksa jurulatih, Viktor Zvunka, meletak jawatan selepas persembahan buruk pasukan itu. (H. S. / B. H., 24/9/1992)

136) ...kata Dr Mahathir dalam satu lagi usaha mengajak Jepun menyertai Perundingan Ekonomi Asia Timur (EAEC). (B. H., 20/10/1992)

137) Abas meminta orang ramai memberikan maklumat termasuk butir lengkap sesuatu kejadian supaya polis dapat bertindak segera. (B. H., 20/10/1992)

しかし乍ら, 次の様な文が非文である所から観て, これらの動詞は, 例外的格表示構文の動詞とは異なり, 動詞の後の構造は NP + S という構造を成していると考えられる。

135)* Saya membantu kayu api dicari oleh ibu.

136)* Pemain kelab Toulouse memaksa jawatan itu diletak oleh Viktor Zvunka.

137)* Dr Mahathir mengajak Perundingan Ekonomi Asia Timur disertai oleh Jepun.

138)* Abas meminta maklumat itu diberikan.

又、次の様な文は正しい文であるが、各動詞に付加されている接語代名詞は補文の文頭要素と関連するものではなく、動詞の直後にある目的語と関連するものである。

139) Saya membantunya mencari kayu api.

140) Pemain kelab Toulouse memaksanya meletak jawatan.

141) Dr Mahathir mengajaknya menyertai Perundingan Ekonomi Asia Timur.

142) Abas memintanya memberikan maklumat.

引用文献

- 1) Abdul Talib bin Mohd Hassan (1992). *Mencari Restu*. Selangor Darul Ehsan: Marwilis Publisher & Distributors Sdn. Bhd.
- 2) Ani Bin Awang (1987). *Rahsia Sebuah Dusun*. Kuala Lumpur: Arenabuku Sdn. Bhd.
- 3) Hamdan Raja Abdullah (1990). *Anak Warisan Zaman*. Selangor Darul Ehsan: Percetakan Dewan Bahasa Dan Pustaka.
- 4) Mat Noh Ismail (1980). *Hantu Punjut*. Kuala Lumpur: Penerbitan Pustaka Antara.
- 5) Othman Putih (1992). *Lelaki Misteri*. Kuala Lumpur: Dewan Bahasa Dan Pustaka.
- 6) Ruslan Ngah (1991). *Sahabat Razi*. Selangor Darul Ehsan: Percetakan Dewan Bahasa Dan Pustaka.
- 7) Shahidan Md. Noh (1984a). *Tangisan Di Seberang Sempadan*. Kuala Lumpur: Arenabuku Sdn. Bhd.
(1984b). *Impian Di Pinggir Kubur*. Kuala Lumpur: Arenabuku Sdn. Bhd.
- 8) Siti Rosnah Haji Ahmad (1986). *Kisah Permaisuri Laut*. Kuala Lumpur: Arenabuku Sdn. Bhd.
- 9) Winstedt, R. O. (1985). *Hikayat Bayan Budiman*. Petaling Jaya: Penerbit Fajar Bakti Sdn. Bhd.
- 10) Zakaria Bin Abdullah and Ahmad Bin Buyong (1990). *Kebudayaan Rakyat Di Malaysia*. Selangor: PAM Publishing (M) Sdn. Bhd.

参考文献

- 1) Asmah Haji Omar (1985). *Kamus Ayat* (first edition). Selangor: Eastview Productions Sdn. Bhd.
- 2) Burzio, Luigi (1986). *Italian Syntax*. Dordrecht/Boston/Lancaster/Tokyo: D. Reidel Publishing Company.
- 3) Chomsky, Noam (1981). *Lectures on Government and Binding*. Dordrecht: Foris.
- 4) Daud Baharum (1989). *An Illustrated Malay-English Dictionary*. Kuala Lumpur: Agensi Penerbitan Nusantara.
- 5) Hopper, Paul J. (1983). Ergative, Passive, and Active in Malay Narrative. in Flora Klein-Andreu (ed.), *Discourse Perspectives on Syntax*. New York: Academic Press.

- 6) King, Edward S. (1988). *Write Malay*. Selangor: Times Books International.
- 7) Mohd Salleh Daud (1989). *Kamus Pelajar Lengkap* (thirteenth edition).
Kuala Lumpur: Federal Publications.
- 8) Ramli Haji Salleh (1992). *Fronted Constituents in Malay: Base Structures
and Move Alpha in a Configurational Non-Indo-European Language*. Kuala Lumpur: Dewan Bahasa Dan Pustaka.
- 9) Safir, Kenneth J. (1985). *Syntactic Chains*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 10) Sheikh Othman bin Sheikh Salim (et al.) (1989). *Kamus Dewan* (new edition). Kuala Lumpur: Dewan Bahasa Dan Pustaka.
- 11) 正保 勇 (1991). 「マレーシア語の受動構文」『言語研究 I』 118-134.
東京外国語大学 語学研究所.
——— (1992). 「マレーシア語の語順」『言語研究 II』 76-97.
東京外国語大学 語学研究所.

東京外国語大学 語学研究所 刊行物

語学研究所所報	第1号	1960 (昭和35) 年3月
〃	第2号	1961 (昭和36) 年3月
〃	第3号	1962 (昭和37) 年3月
〃	第4号	1963 (昭和38) 年3月
〃	第5号	1964 (昭和39) 年3月
〃	第6号	1965 (昭和40) 年3月
〃	第7号	1966 (昭和41) 年3月
〃	第8号	1970 (昭和45) 年3月

語研資料1	Anfitrite fermosa neste caso nao quis que falecesse (Os Iussiadras, VI. 22)	池 上 岑 夫 1974
語研資料2	翻訳理論と一般言語学	磯 谷 孝 1975
文部省科学研究費による外国語教科書研究編纂についての報告		1970 (昭和45) 年3月
やさしいベンガル語 (その1) 山田和子編著		1971 (昭和46) 年3月
動詞の特別中心初等スペイン語 原 誠		1971 (昭和46) 年3月
スウェーデン語・デンマーク語・アイスランド語・ノルウェー語		
基礎モンゴル語教本		
基礎英語学		
語研資料3	関東・東北方言の地理的・年齢的分析 (S F グロットグラム)	1985 (昭和60) 年3月
語研資料4	「アディゲ語の音声と音韻」	1986 (昭和61) 年3月
語研資料5	ドイツ語の「状態受動」	1986 (昭和61) 年3月
語研資料6	ドイツ語の意味論的分析資料	1987 (昭和62) 年3月
語研資料7	現 実 分 析	1987 (昭和62) 年3月
語研資料8	スペイン語の語彙の頻度と広がり	1988 (昭和63) 年3月
語研資料9	ヒンディー語略語集	1989 (平成元) 年3月
語研資料10	ドイツ語の統語論的意味論的研究資料	1990 (平成2) 年3月
語研資料11	連続講演会 1990年	1991 (平成3) 年3月
語研資料12	受 動 態	1991 (平成3) 年3月
語研資料13	東海道沿線方言の地域差・年齢差	1991 (平成3) 年3月
語研資料14	語 順	1992 (平成4) 年3月

語研資料 15

言語研究 III

1993 (平成5) 年3月

編 者 渡瀬 嘉朗, 在間 進, 敦賀陽一郎
発行所 東京外国語大学 語学研究所
〒114 東京都北区西ヶ原4-51-21
電 話 03-3917-6111 内340